東方鏡蛟紀

雪代

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方鏡蛟紀

【Ｎコード】
Ｎ２７０７Ｓ

【作者名】
雪代

【あらすじ】
気づいたら知らない場所にいた。驚いてたら変な生物が襲ってきた。気づいたら変な生物になってた。って、何で！？
面倒ごとが嫌い、状況に流されやすい、好奇心旺盛、でも自分で決めたことだけは貫き通す。そんな主人公が東方世界で適当に生きて行くお話しです。
ご都合主義だろうが、設定おかしかろうが、更新気まぐれだろうが気にしない（最後一個変なの入った？）。そんな人だけが読むことを推奨します。

一話　人生山あり谷ありというけど、だからって時間遡行ってのは山なのだろうか

この小説（笑）は、『上海アリス幻樂団』様による弾幕ＳＴＧ『東方Ｐｒｏｊｅｃｔ』シリーズの二次創作です。

ご都合主義だろうが、設定おかしかろうが、更新気まぐれだろうが気にしない（最後一個変なの入った？）。そんな人だけが読むことを推奨します。

東方転々録の頭休めに書いていますので、更新は結構気まぐれです。連日投稿するかもしれませんし、何ヶ月も放置するかもしれません。そこはご了承くださるとありがたいです。

一話　人生山あり谷ありというけど、だからって時間遡行ってのは山なのだろうか

夢遊病。

睡眠中に発作的に起こる異常行動のこと。無意識の状態で起きだし、歩いたり何かをした後に再び就眠するが、その間の出来事を記憶していない状態を指す。（ｂｙ　ｗｉｋｉ）

睡眠時遊行症、夢中遊行症とか言う呼び方もあるみたいだよ。

実にどうでもいい！！！

ごめん、ちょっと話がずれましたね。

なんでいきなりこんな出だしなのかと言いますと。

「どこでしょうここ！！？！？！！！？？」

現在地、湖です。広いね～。琵琶湖まではいかないけど、それでも近所の用水ダムの五倍くらい広いですよ。

ピクニックとかだったら良かったのかもしれないんですが、実はボク気づいたここにいたんですよね。

うん、そう、ふと気づくといつの間にか湖にいたんです。

そこ、何言ってんだこいつみたいな目は止めてくれますか？ボク自身何が起こってんのか分かってないんですから。

そういえば、この敬語口調パニックになると出るらしいです。友達が教えてくれました。うん、実にどうでもいいですね。

それと、もう一つ問題がありまして。

じーーーーーーーーー

湖の中から何か視線を感じるんですよね。しかも水面に何かすごく大きな影が。

ぬぷ、ぽちゃ……

「っ！！！！！！！！！」

なななななななななんですかアレエエェェェェェェーーーー！！！！！！！！！

水面からなんか出てきましたよぉぉぉぉーーーーーーーー。

きょ、恐竜！？え、でも何か長細い……

ミズチ。本来の名称はミツチ。八岐大蛇（八岐大蛇は川の神とされることがある）に代表される日本の水神、蛇神、龍蛇神である。ミズチ（ミツチ）のミは水であり、ツ（転訛後にズとなる）は連体修飾をつくる上代の格助詞で現代の格助詞「の」に相当し、チは霊的存在・霊力の意であるとされる。すなわちミズチ（ミツチ）とは「水の霊的存在（霊力）」を意味する。

それを見た瞬間、頭の中にそんな情報が浮かび上がる。

え、何ですか今の、っていうかミズチ!?え、神様?これが?っていうか神様って実在するの!!?

ううううううう

……何か唸ってませんか…?え、何かヤバ気な感じが。

ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!!!!

「ぎゃあああああああ

そう叫んだ途端、体が熱くなるのを感じた。

そして。

気づいたら目の前にはミズチの死体があって、何故かボクは、ミズチとなっていましたとさ。

……。

「なんじゃそりゃあああああああああああああああああああああ！！！！！！！！」

敬語？この状況でそんな余裕があるかい！！！！！

一話　人生山あり谷ありというけど、だからって時間遡行ってのは山なのだろうか

転々録書いてたら色々浮かんできてしまったので、何となく纏めてみて、何となく投稿してみました。

二話　人生にハプニングはつきものである、って言うけど、これはないでしょう

タイトルの神様は自分なのか、っていうのは、今自分がミズチ（水神）だと思っているからです。

二話　人生にハプニングはつきものである、って言うけど、これはないでしょ

「ぜ～ん～か～い～の～、あ～ら～す～じ～」

気づくと湖にいた。

ミズチとか言うでっかい蛇に襲われた。

目の前にミズチの死体があって、気づけばボクもミズチになっていた。

「はいアウトオオォォォ！！！！まずここがおかしい！！！」

ホント、いつもいつもろくな目にあわないボクだけど、今回ばかりは言わせてもらいます。

どうしてこうなった……

「と、現実逃避に走ってみたけど、現実は変わらず」

手足の感覚が無い。ただ体の感覚はずっと続いている。最早どこから胴体でどこから首なのか分からないけど、とりあえずぐいっと

体を曲げて、自分の体を見る。

「さっきのミズチとか言うのと同じだ」

とりあえず、自分が人型でないのは確認した。次は体を動かしてみる。

ドバーーーーーン

あ、湖に浸かった尻尾を持ち上げたら水面が……

「動くね、思ったよりも」

人の感覚で生きていたから難しいのではないかと思ったのだが。

さて、とにかく動けることは分かった。ミズチとかいうのは目の前で死んでるし、安全は確保された……はず？

「そろそろ思い出そうか」

さっきの瞬間、何があったのかを。

以下、回想となりまーす。

「死んでたまるかあああああああああああああああああああああああああ」

そう叫んだ途端、何かが頭に浮かんだ。

鏡を司る程度の能力

何それ!?何ができるわけ!?ええい、何でもいいからとにかく生き延びる手段だ!!!!!

そう念じた瞬間、体が熱くなった。

「あああああああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!!」

燃えるように体が熱い。体の異常を無理矢理ねじ伏せ見てみると、目の前にはもうミズチが迫ってきていた。

どうにか、しないと。

そして気づく。

止まってる?

ミズチがどうしてか目の前で立ち止まっていた。

何かわかんないけど、チャンスだ。とにかく攻撃なり何なりしないと、って、え!?

手も足も動かない。どうしてか分からないが。

こここここここ、こんなときに～～～～～!!!!!

「く、首は動く、なら、こうだあああああぁぁぁ」

目の前にあるミズチの首らしき部位に、思いっきり噛み付く。

「むむむぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぅぅぅぅ!!!!!」

激しく暴れるミズチに、負けるかと、歯が砕けるかと思うほど全力で噛み付いていると、次第に動かなくなり。

そして。

「ひんは?あ……死んだの?ボク、助かった?」

あはは、と思わず笑いが出てしまう。そしてどっと力が抜けて。

ドスゥゥゥン

体が地面に落ちた衝撃で周囲が揺れた。

「……は?」

何で体が地面に転んだだけでそんな音?

手足が動かないのだが、体だけで這いずるように水面まで進む。

そこに映るのは、さきほどのミズチ。

おかしい、何でミズチが映っている？あいつはそこで死んでるじゃないか。

水面を覗き込んでいるのは誰だ？　ボクだね。

水面に映っているのは誰だ？　さっきのミズチ（神様）とかいうのだね。

つまりは？　ボク＝ミズチ（神様）……

「なんじゃそりゃあああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！」

その考えに達した瞬間、思わず叫んだボクは悪くないと思う。

以上回想終了。

「なんじゃそりゃあああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！」

思い出してみて、もう一度叫んでしまった。

二話　人生にハプニングはつきものである、って言うけど、これはないでしょ

東方転々録はサブタイが短いので、こっちは長くしてみました。っていっても長すぎる気もしますが。サブタイが１００字超えて一度エラーがｗｗｗ

三話　道端でひたすら『ニンゲンニンゲンニンゲン』って呟いてる怪しい人がいたら

はっきり言います。
この小説は、転々録では自粛していたはっちゃけを全て曝した結果と言えるのでしゅ、痛て、噛んじゃった。

失礼噛みました。違う、わざとだ。噛みまみた。わざとじゃないっ！

西尾先生大好きです。戯言シリーズ全部読破してます。全巻購入してます。紫木一姫ちゃんが可愛いと思う。化物語はアニメ全部見て、傷物語と偽物語上下と、猫物語（白）（黒）を読んだくらいでしょうか。まだ傾物語読んでないんですよね。

三話　道端でひたすら『ニンゲンニンゲンニンゲン』って呟いてる怪しい人がいる。

まとめてみるとこういうことだ。

？ボクは今知らない場所にいる。
？ボクはミズチという蛇の怪物になっている。
？ボクには鏡を司る程度の能力というものがある。

？、はまあいいか。あまりよくないけど、他と比べると優先度は低い。
？、かなりやばいな。どうしよう？
？、……ってあれ？

「程度の能力って、何かそんなの聞いたことあるよね？」

思い出せボク！！！これは重要な情報だぞおおぉぉ！！！！

「はっ！！！！東方だ！！！！！東方だよ！！！！」

そうだ、友人しきりに奨めてきたゲームの設定で～程度の能力ってのがあったじゃないか。

「で、東方ってどんなゲームだっけ？」

残念ながらまだ未プレイなんだ。今度奨めてきたらやろうと思ってたんだけど。

バカー！！ボクのバカーー！！どうしてやっておかないんだ。

とりあえず、知っている情報だけでもかき集める。

？妖怪とか神とか普通にいる
？～程度の能力っていう能力がある
？スペルカードとか言う必殺技みたいなのがある
？シューティングゲーム

とりあえず、？は役に立たなそうだから無視するとして。

？はもう見た。ミズチという命の危機にもあった。

っていうか、どれもこれも現状で役に立たないなあ。もっと話聞いておけば良かったなあ。

「まあでも一つ分かったよ」

東方の絵を見たけど、皆人間の姿をしてたよね。羽根生えてる人とか耳出てる人とかいたけど、少なくとも人型だった。

「つまり、頑張ればボクも人の形になれる？」

これは重要なことだ。正直、今の体で襲われたらもう逃げられない。

「人間になれ～～～！！！！神よ、ボクに奇跡をーーーーーーーー！！！！！」

目の前で死んでるのが【水神】だということも忘れてボクは天に叫んだ。

偉大なる先人の一人、武田信玄はこう言った。

『為せば成る、為さねば成らぬ。成る業を成らぬと捨つる人のはかなさ』

つまり、やればできるんだ（ん、何か意味違う？）！！！

それをボクは今日実感した。

つまり。

「人間だ～～～～～！！！！」

人型になれました～～。何と言うご都合主義展開。

いやね、確かに湖の畔でぶつぶつと「人間人間人間人間人ゲン人ゲンニンゲンニンゲンニンゲンにんげんにんげん」と繰り返すやつがいたら危ないと思うよ。けどその甲斐あってか、まる一日ほどで為れました。火事場の集中力って凄いよね。攻撃力１．３倍は伊達

じゃないよ。

と、ふと気づいたことを確かめるために、水面に映った自身を見てみる。

「な、な、なななな！！」

気になったこと。狐耳とか猫耳とか、鴉の羽根とかそういうの生えてたりするのかな？と思ってたんだけど。

顔。自分と同じ。これはいい。けど。

「か、髪が銀色ですよーーーーーー！！」

しかも目が真っ青。

遠くから見ると銀髪で蒼目って格好良いかも、とか一瞬思ったがこれは不味い。親になんて説明すればいいのだろう？いや、ミズチになった時点でもう何て説明するべきなのか知らないけど。

幸いというべきなのか、他は特におかしなことにはなってなかった。良かった、角とか無くて。

さて、この銀髪蒼目……どうするか……

「面倒になった。また今度考えよ」

あっさりと思考を放棄したボクでした。

三話　道端でひたすら『ニンゲンニンゲンニンゲン』って呟いてる怪しい人がいたら

実は作者、普段からこの主人公と同じようなテンションなんです。

……すみません、嘘です。でも、友人と話している時だんだんとテンションが上がってくると、これに近くなります。

書いてみて思ったけど、リアルにいたらやばいね、こいつ。そして、自分を振り返ってみて、自殺したくなった。

全部纏めて一時間で書き上げた即興の小説なんで、おかしなところがあれば指摘お願いします。

四話　とあるパクリ大国の一部地域では蛇を食べる文化があるらしいよ、日本には無いけど

本日投稿できるのはこれが最後です。
次からは気まぐれとなります。

一部修正しました。

四話　とあるパクリ大国の一部地域では蛇を食べる文化があるらしいよ、日本に

前回のあらすじ。

髪が銀色に、目が青くなった。

考えるのが面倒なので、そのうち考えよう。

「そのうちっていつだよ！！！」

どうも、怪しい電波を受信した村人Ａこと、水無月梗（みなづき きょう）です。

初めて名前が出たよ、さっちゃん！！

さっちゃんて誰？というツッコミは置いといて。さっきゅん、だと時代がおかしいよね。って何今の電波？さっきゅんって誰？村人ってておかしくね？

現在、とても重大な問題が発生しています。

ぐ～～～～～～～～

腹の虫が大合唱。もう動くのも嫌になるね。

周囲に木の実とか食べられそうなものは無い。湖には魚がいるかもしれないが、手ぶらじゃ捕まえられない。

そして目を背けていたものに視線を向ける。

ミズチ。

さっきまでボクを喰おうとしていた蛇の神様。人を食おうとしたんだ、自分も食われる覚悟をするべきだろう。

「って、いやいやいやいや、食べるの!?これを!?」

周囲には火も何も無い。つまり、食べるとしたら生だ。

「て、だから、火があっても食べないでしょ、普通」

この状態で普通とか言ってられないよなあ、と思う。

「ていうか、さっきから人がそう思ってるみたいにナレーションいれないでよ!!!」

……。

「いや、何か喋ろうよ。ボクが独り言呟いてる寂しい人みたいじゃない」

怒鳴ってたらお腹すいたなあ。もう目の前の蛇でもいいんじゃないかなあ。

「って、だから何でボクにこれを食べさせようとするの!!?何?この蛇かボクになんか恨みでもあるの!?」

閑話休題（ここまでの流れ全てをリセットする魔法の言葉）。

意外と美味い。

一口食べてそう思った。

「って、食べたあああああああぁぁぁぁぁぁ！！！！！？嘘だあああああぁぁぁぁぁぁ！！！こんなの嘘だああアアアあぁぁぁぁぁぁぁ～～～～！！！！」

閑話休題（リセットしきれなかったのでもう一度）。

気づいたら全部食べていた。お腹の部分が絶品だった。

「おかしいなあ、明らかに体積とつりあわないんだけど。もしかして、本体はあの蛇だからなのかな？」

え？さっきまでの流れ？何のことですか？普通に美味しかったですよ？

「あれ……お腹いっぱいになったら、何か眠く……」

まる一日飲まず食わずで人になる練習をしていたからか、それとも命賭けの戦いの疲れか、はたまた両方か。まるで泥沼に落ちたように、意識が沈んでいった。

なんで……？

どうしてなの……？

どうしてこんなことするの？

なんで、どうして。

答えてよ、ボク！！

答え……てよ。

大好きだったのに。

愛してたのに。

なんでなんだよ！！！

なんで、殺したんだ！？

えにし……

四話　とあるパクリ大国の一部地域では蛇を食べる文化があるらしいよ、日本には無いけど

すみません、もう厨二くさいシリアスつけてしまうのは、最早癖なんです。おかしいなあ、ついさっきまでこんなシリアスな設定無かったのに。

頭を空にして、指をキーボードの上に置くと、何故かこういうシリアス文章がいつのまにか出来上がる不思議。考えてないので、益体も無い、意味の分からない文になるのですが。

因みに、この最後の部分も、「夢」と一言考えてたら指が勝手に打ってました。

そしてようやく主人公の名前が出てきた。水無月梗くんです。

水神様の姿なのに、水無月とはこれ如何に？

五話　鏡って、中学生になると途端に何かカッコ良く（厨二用語の一つに）聞こ

なんかできちゃったので、投稿しておきます。

五話　鏡って、中学生になると途端に何かカッコ良く（厨二用語の一つに）聞こえる

目が覚めるとまた蛟（面倒なので以後漢字）になっていた。

「って、なんでやあああああぁぁぁぁぁ！！」

思わず関西弁が出てしまったのはご愛嬌。

また一日かけて人間になるのか、と思ったが、一旦人化したことでコツを掴んだのか、今度はものの数秒で人となれた。長い一日の成果というものだね、重畳重畳。

さて、そろそろ昨日の疑問？：ボクはミズチという蛇の怪物になっている。について考えるとしよう。

「まずいつなったか」

体が燃えるように熱かったあの時だと思われる。

「その時何があったか」

蛟に襲われそうになった。いや、自身の能力を自覚した。そして生き延びる手段を欲した。

「つまりそれが」

蛟になる、ということか？でも鏡を司る程度の能力で何で蛟になるんだ？

「鏡、かがみ……鏡写し？」

その考えに達した途端に、頭の中に知りたかった情報が浮かんでくる。

なるほど。つまりこの能力の使い方は主に二つ。《写し取る》こと《映し出す》こと。

つまりボクは、写し取ったのだ。蛟の姿、形、種族、力、その他何もかもを。そして、自身へと映し出した。

本来これに時間制限がつくようなのだが、ボクは生涯で一度しか使えないらしい、無期限の変化をしてしまったらしい。つまり、一生このままってこと。

「ああ、やっぱり」

ボクは、もうニンゲンではない。そしてニンゲンには戻れない。その考えが正しいと証明されてしまった。当たり前だと思っていた。これでニンゲンだなんて言われてもボク自身納得できない。

けれど。

「どこか、違えばいいって、思ってたのかな？やっぱり」

認めてしまうと、やはりショックがあった。

「……っ」

そしてボクは、久々の涙を流した。

「よし、切り替えろ。ここからは前向きに！！」
声を出して、心を切り替える。うん、大丈夫。あそこで死ぬよりは何倍もましだ。

「ふむ、つまり対象の情報を《写し取って》、その情報を持って任意の地点に《映し出す》ことができるっと。中々面白い能力だね」
何か似たようなのをゲームで見たことあるぞ？ふむ、ちょっと試してみようか。対象は……そこらに落ちてる石ころでいいか。

「投影開始」
イメージを明確にするため呟いた言葉と共に、目の前の石の情報を《写し取り》、そしてその隣に《映し出す》。

ふと気づくと、そこに石ころがあった。

「おお、できた。さすがだよ弓兵さん。将来弓兵さんの魔術も使えるように頑張ってみよう」
もしあの固有結界が真似できるのなら、妖怪とでも戦えるね。

などと暢気なことを考えていたボクは、重大な事実を見落としていることに、この時まだ気づいていなかった。

五話　鏡って、中学生になると途端に何かカッコ良く（厨二用語の一つに）聞こ

設定してから、弓兵さんの魔術使えるかも、と思ってしまい、思わず書いてしまった。反省はしていない、だが後悔はしている。
投影魔術で石ころ投影とかせこ過ぎる気もしますが、まだ森の中だし、梗くんは小市民なので、そんなものなんです。

個人的には「王の財宝」のほうが好きなんですけどね。
作者も黄金率のスキルが欲しいものです。黄金率Ａなら最高ですね。

ゲート・オブ・ゆかりん、って何で読んだんだろう?どっかの二次だと思うのだが。思い出せない。

六話　遠い過去？進みすぎて滅んだ未来？どちらにしろ、現代ではないみたいだ

原作キャラまだでないなあ。予定としては八話で出場予定。
七話は、未だ自身のことを何一つ分かっていない梗くんの自身のステータスを確認してもらいます。

六話　遠い過去？進みすぎて滅んだ未来？どちらにしろ、現代ではないみたいだ

「これはまた……」

当たって欲しくない予感ほど、よく当たるものだよね。

あれからさらに二時間。合計十時間の歩きの末、ようやく見つけました。人間です。

でもまあ。

「見事に縄文時代だね」

家が竪穴式だよ。貝塚があるよ。他にも色々あるけど、間違いなく現代じゃないね。アフリカの先住民族でもここまで古くは無いでしょ。村とか里っていうより集落だよね。

はい、回想入りま～す。

よし、じゃあ最後の疑問言ってみよう。？ボクは今知らない場所にいる。で、ここはどこだろう？

「とりあえず、ここから移動しようか」

今考えると、よくこんなところで一日以上いれたな～。寝てたのも、地面の上に直だし。服がところどころ汚れてるよ。

とまあそんなことを考えながら歩いていたわけですが。

「何にもないね」

森を抜けるとそこは、ただの野原でした。しんちゃんの家じゃないよ。

「っていうか、本当にここってどこ?」

というわけで、しばらく歩いてみたものの。

「いやさ。ボクとしては少し期待してたんだよ?今の日本の土地事情で、まさか三時間以上歩いて何も無いなんてことあり得ないでしょ?」

本当に、もう見事なくらい何も無いです。はい。

っていうか、三時間もぶっ通しで歩いたのに、全然疲れてないな。

「これってやっぱり、蛟になったから?」

というか、それしか考えられない。それに昨日とは違いお腹も空かなければ、咽も渇かない。

「まあ、便利だからいいか」

深く考えるのは面倒だからね。気楽と浅慮は人生を楽しむコツだと思うよ、ボクは。失敗するコツでもあるけどね。

それからさらに歩き続けること五時間、けれど。
「ホント、何もないね」

人どころか、建物一つ無い。合計八時間、それだけ歩き続けて人工物一つ見かけないというのはいくらなんでもおかしすぎる。ここは樹海の奥深くでも高山の頂上でもない、ただ広いだけの平原だ。だからこそその異常性が際立つ。

「さて、これはどういうことだろう？」
一つ心当たりが無いわけでもないだけど。だがそれはあまりに非現実的なんだよね。

以前、友人と話していた時に、少しだけ話題に出ていた言葉。

「タイムスリップ」

小説などでは時々見かける言葉。けれど、現実にそんなことがあるのかな？
「て言っても、蛟なんてものがいる時点でそんなこと言えないけどね」

そもそもここはボクのいた世界なのかな？

「少なくとも」
ボクのいた世界に蛟なんていうものはいなかった。ボクが知らないだけなのか、それとも。

「ま、考えたって仕様がないね」

面倒なことは考えない。今までも、そしてこれからもボクはそうして生きて行くんだから。

そう決めたんだから。

「これはまた……」

当たって欲しくない予感ほど、よく当たるものだよね。

あれからさらに二時間。合計十時間の歩きの末、ようやく見つけました。人間です。

でもまあ。

「見事に縄文時代だね」

家が竪穴式だよ。貝塚があるよ。他にも色々あるけど、間違いなく現代じゃないね。アフリカの先住民族でもここまで古くは無いでしょ。村とか里っていうより集落だよね。

さて、ここで選択肢。

？集落に行ってみる→あの人たちにとって、服装などを含めて自分は明らかに異常だ。最悪の場合言葉すら通じないかも。

？ここで様子を伺う↓いつまで待てばいいのか、目処が立たない。まさか弥生時代まで待つわけにもいかないし。

？すっぱり諦めて森かどっかで暮らす。

さあ、あなたの選択は！？

「とか思っても、誰も答えてくれないよね」

見事にタイムスリップっぽいし、とりあえず今すぐ帰れるってわけにも行かなくなったみたいだね。

だから、こそ今ここで必要なのは生き残る術だよ。いくら蚊になったからと言っても、いくらなんでも何時まで経っても何も食べないなんてことはあり得ないんだから。

「ふと気づいたけど、ボクもう人間じゃないんだから？はダメか。となると必然的に？も却下」

？しか残ってないことに気づくと、それはそれで気が楽になった。選択するのは気疲れしない？

「とりあえず、生活する場所でも探そうかな？」

深くは考えない。気楽に考えて、それから、前向きに生きる。そう決めたのだから、今は楽しもう、この非現実的な現象を、そして冒険染みた自身の人生を。

六話　遠い過去？進みすぎて滅んだ未来？どちらにしろ、現代ではないみたいだ

次回は一日以内にできると思います。

転々録がマジメなので、こっちはとことんノリと不真面目で書く予定。

七話　水は命の源。水を制すものは命を制す！！ごめん、適当言った。その当時

サブタイトルがまさかの嘘。まあ、どうでもいいけど。
長かった、今回は長かったなあ。
今回は能力説明と、戦闘力の上昇を図るものです。

七話　水は命の源。水を制すものは命を制す！！ごめん、適当言った。その当時

集落より少し離れた対して大きくも無い森に引き篭もって軽く五十年くらい。

毎日生きるのに必死で、そうしたらいつの間にかそのくらいの時間が経っていた。いやね、ボクもびっくりしてるんだよ？

最初の頃にやったのが、生活基盤の確保。これを完全にするのに五年くらいかかったね。

まずは何より食べ物と飲み物の確保を優先した。食べ物は主にその辺りの木になった実とか。

問題が飲み物で、この森なんと水場が無かった。それに気づいたのが二ヶ月くらいしてから。分かったことなのだが、一度満腹になるまで食べると一年くらいは飢えも渇きも来ない。なので楽観的に考えてたら気づくのが遅れた。

そこまでなら普通に別の場所へ水場を探しに行けばいいのだが、事の起こりは森の隠遁生活二年目のことだ。家を建てる技術が無いボクは森の中心にあったさして少し進んだだけで突き当たるような洞穴と言っていいような場所に住んでいたのだが、ある日起きると寝床としていた堀下がった床の中が水で埋まっていた。いや、ホントの話だよ？

その時になって初めて気づいたんだけど、湖にいたあの蛟、なんと能力を持っていたらしく、ボクの能力はそれすらをも写し取っていたらしい。そのことに窒息しかけて初めて気づいた。

水を司る程度の能力。それが蛟の持っていた能力。今はボクも使

えるけど。簡単に言うと、この能力、水を生み出したり、操ったりできる。この能力のおかげで水道事情が全て片付いた。なんて便利な能力。

これにより一気に全ての生活事情が解決したかと思われたが、隠遁生活六年目で思わぬ出来事が起こった。

妖怪（後に人の集落で聞いた）と呼ばれるものに出会ってしまったのだ。ていうか本当にいたよ、妖怪。

多少驚いたが、蛟ほど恐くはなかったので、パニックにはならなかった。どうも人間を食べるらしく、人の姿のボクに襲い掛かってきた。

結果だけで言うと、たった一発ボクの拳が当たっただけで死んだ。相手が弱かったというより、どうも蛟の体のスペックが高すぎるのだと気づいたがその少し後である。

さて、いくら負けなかったと言っても、いつまでも生き残れる保障があるわけでもないのだ。だから戦闘能力を高める努力をした。まずは自分の運動能力の確認。

いやね、ビックリしたよ、どうして今まで気づかなかったのかってくらいデタラメなスペックだったから。まず力、直径五メートルくらいありそうな大きな岩をワンパンチで砕けましたよ。そして走、本気で走ったら百メートル一秒という口裂け女もビックリな速力。これからは韋駄天の梗と名乗るかな、ってそんなわけは無いけど。後知力、多分能力の関係上だと思うけど、写し取った情報だけは一切忘れない。これ使って記憶の保持できないかなっと思ったら、できました。記憶を写し取った記録として取っておくと、記憶の劣化がなくなりました。おかげで五十年間の記憶のみならず、高校に通っていた頃の記憶も含めて全部あります。

まあ、確認してはみたものの、身体能力に関しては、普段の野生的生活で鍛えられているので、特にすることも無いかと思ったわけで、というわけで次行ってみよう。

それからボクが出会った明らかに人間じゃない、けど見たことも無いあの動物はなんだろうとこっそり人の集落に隠れて、人の会話を盗み聞きしに行ってました。バレないのか？森で何年も野生の暮らしをしてたら気配を殺すことくらいできるようになるよ？まさか現実に気配を殺すとかできるのか、と思ってしまったのは昔のことです。

盗み聞きで分かった情報はいくらかありましたが、その中でもボクの出合ったのは妖怪という人の恐怖から生まれた生物が存在することを知ったときは驚きました。なんと、現実にいたのか、妖怪。

まあ、蛟がいる時点で何がいてもおかしくないんだけどね。

それから分かったことと言えば、この世界にはボクや蛟以外にも能力を持った人がいるってこと。妖怪とか神様とか～程度の能力とかいよいよ本当に東方の世界なんじゃないかと思ってきたよ、ボクは。何度か出合ったけどこの能力というのを使って戦うやつは結構強い。なので、ボクも自分の能力で戦う術を作ってみることにした。

以前やった弓兵さんの真似事をしようとしてとんでも無い欠点に気づかされた。前回複製したのが小石だった。今回はそれなりに大きな剣っぽい石だ。なんとできませんでした。いや、正確にはできても一瞬で消えてしまうというものだったんだよ。どういうことだろうと思ったけど、今までの能力持ちの情報を統合するに訓練不足？ということになる。どうも大きさとか質量とかが関係してるらし

い（正確には物質の構成情報の多さ）。ならば訓練だ、と次の日から能力を使う練習をすることにして、もう一つの水を司る程度の能力、これがまた中々に反則的な技を作ることができた。ウォーターカッターって知ってる？圧力の高まった水流で物体を極小単位で削って行くというボクのいた時代の技術なんだけど、例えるなら砂の山をホースの口を潰して出てくる水流で押し流す感じだね。だから分子結合の固い金属とかには切れ味が悪いんだけど、肉体みたいな柔らかいものには凄く有効なんだよね。で、なんでそんな話したかと言うと、できました。水を司る程度の能力は、水回りのこと全部に使ってるからもう一つのほうよりも使い慣れてるんだよね。いわば熟練度が高い。なのでイメージしたら結構簡単にできました。弓兵さんの真似はできなかったけど、これはこれで格好良いからありかなと思いながら剣の形をした水で試し切り。大きさを変え、形を変え、気づいたら森の木が百本近く犠牲になってたよ。森林保護団体に怒られちゃうね。

朝起きて溜め込んだ飯を食べて（食べなくてもお腹は空かないけど、人だった頃のくせでなんとなく食べたくなるんだよね）、森の中を食べ物探して練り歩く。妖怪に会ったら適当に思案していた能力での戦い方の実験台になってもらい、夜になったら能力の試行錯誤をする。

そんな風に四十年ほど生活していると、一匹の妖怪が森を纏めているとの集落からの情報（盗み聞きの結果とも言うが）。何でも見た目は人間と同じらしく、髪は銀色、目は蒼い、だが一度戦いとなれば無双の強力と風のごとき速さで敵を屠ると言う、ってボクのことかよ！？って思ってしまった。まあ、実際最近言葉を話せる程度に知能のある妖怪と一緒に話していることもあるので、人から見るとそんな風に見えるのか、と思ってしまった。

で、気づくと五十年経ってましたとさ。

それと、蛟になった影響がここにもあったよ。

現在６８歳。人間だったら立派な爺だけど、未だボクの姿は高校時代と変わっていない。

そんなボクの身長は１５６ｃｍ、笑うなよ！！低いのは自分でも分かってるんだよ。

いつまで生きれるのか分からないけど、定規ができる時代まで生き残ったら、絶対にまた身長を測ってやる。

七話　水は命の源。水を制すものは命を制す！！ごめん、適当言った。その当時

簡単に言って梗くんの行動原理は二つ。
面倒なことは考えない。
自分の決めたことだけは守る。
これだけです。
他の生き物を殺すことに関しても、その罪悪感は面倒なものなので、考えないようにしています。ずっとそうやって生きてきたので、心には微塵の影響も与えません。こうして見ると彼もやっぱり人格破綻者ですねえ。

八話　険しき峡谷を越えた森の向こうに幻の未来都市を見た！！まあ、実際歩い

前回と比べると短いけど、これがスタンダート。だいたい１２００
～１８００字くらいで纏るようにやってます。

それにしては話の内容が薄すぎた。教訓にしてしまわねば。

最後にも言いますが、最初にも言っておきます。
あらすじはただの冗談です！！
本気にしないように（する人がいるわけないが）。

八話　険しき峡谷を越えた森の向こうに幻の未来都市を見た！！まあ、実際歩い

前回までのあらすじ。

知らぬ間に異世界へと転移した梗。そこに待ち受けるのは、異世界の魔王ユカーリ＝ヤクーモとその四天王たちだった！！

梗は始まりの町で四天王の一人、紅＝うー☆とその従者さっきゅんを倒した。だが四天王はまだ三人もいる。さらにその上には魔王ユカーリも。果たして梗は異世界の魔王ユカーリを倒し、無事に元の世界へ帰ることができるのだろうか！！？

そして今日も、巫女レーム＝ハクレーと魔砲師マリサ＝キリサーメと共に魔王ユカーリの城マヨイガを目指し、旅路へとつく一行だったが、突如その前に立ちはだかるのは、四天王が一人、闇黒医師エーリンとエーリンの介護を受けるニート女神グーヤ、そして彼女たちの城エイエン亭の全ての苦労を引き受けていると噂の月兎レーセン、その部下テイだった。

はい、冗談です。こっから本編です。

「あれ？何か変な電波を受信した気がする？」

さっきの電波はなんだったんだろう？

「まあ、気にしないでおこっと。面倒だし」

面倒ごとは考えない。

現在一人旅の身空です。
あ、唐突だった？
簡単に言うと、森から出て、また広い平原を歩いています。

え、まだ分からない？じゃなくて、理由？

ああ、言ってなかったっけ？
うん、じゃあちょっと回想行ってみよう。

かいそ～う、すたーと！！

はい、こちら回想です。って違う！！なんか最近電波の受信が多いな？

「精神病？」
んなバカな、とは言えないよね。だって、普通に暮らしてたら一生お目にかかれないような不思議体験てんこ盛りで現在進行形で体験中だからね。

とまあ、バカなことばかりやってないで、話を進めると、今までふと気を抜くと時々いきなり人化が解けて元の蛟の姿になってたんだけど、それがここ五十年の頑張りのおかげかそんなこともなくなったから、最近になって人に混じって生き始めたんだよ。正確には、別の集落の人間の振りをして普通に人と話すようになった。これに

よって盗み聞きよりも正確な情報が手に入るようになりましたよ。時には、森で見つけた果物と集落の人の狩った肉を物々交換したりしてるよ。

それで近頃は集落からグレードアップして村になったんだけど、聞くところによるとここから一週間くらい歩いたところにある村が今どんどん発展してるらしい。それはもう凄い勢いで、聞いた感じだとすでに平安時代くらいの文化があるとか無いとか。

いやいやいや、あり得ないでしょ？そこだけ時間の流れが違うんじゃん、とか思ったけど、よく考えたらそういう能力の人がいるのかもとか思って納得した。

納得したら、今度はそれを見たくなってしまった。ボクは人一倍好奇心が強いからね。その割に楽観的で浅慮だからいつも面倒なことに遇ってたけど、気にしないことにしよう、そうしよう（反省も教訓も無し）。

「と、いうことがあったわけなんだよ」
誰に向かって言ってるんだろうね？

まあ、気にしないことにしよう。面倒ごとは考えない。
「んー？そろそろ着くころだと思うんだけどな」

歩いて一週間と言ったが、ボクの場合は二十四時間歩けるので実際にはその半分以下の日程でつくはず。
現在三日目。今日中に見えてきてもおかしくは無いはず。

そんなことを考えながら平原を歩くことしばらく。時間は正午く

らいだね。
「あった」
恐らく、話の集落であろう場所についた。確証できないのは、聞いた話しと食い違っているから。

「江戸時代？」
聞いた話を総合すると平安時代くらいの文明だと聞いていたはずなんだけど、あれもう江戸時代入ってない？
「いよいよ時間の流れが違う説有力になってきたね」

いくらなんでも早すぎる。話を聞いたのがだいたい十日前（一週間くらい旅支度とかあった）。別の村の人間の話だから、実際その人が見たのが仮に一ヶ月ほど前だったとしても、たかが四十日でここまで変わるのか？ましてや他の村はまだ弥生時代の文明にも入ってないのに。

「取り合えず、入ってみようか？」

何であれ、まずそれからだよね？

八話　険しき峡谷を越えた森の向こうに幻の未来都市を見た！！まあ、実際歩い

すみません、最初のあらすじは冗談です。本当にノリだけで書いたら、変な物語が出来上がってしまい、あくどい顔した人頭に並べてみると、意外とすらすら書けてしまい、いつの間にか三百字を超えるあらすじが……。因みに、漢字表記の人は西洋風に、カタカナ表記の人は東洋風にしてみました。レミリアは苗字のスカーレット（赤）と違って意味があるのか無いのか分からないので、取り合えずうー☆にしてしまった。あまり関係ないですが☆も名前の一つなんですよ？

そして何気にマリサの名前の改良が難しい。難しいのでけっこう適当になってしまった。何気に今回一番力を入れてしまったのが、このあらすじ。全くの無意味なのになぜか無駄な力を入れてしまう作者の悪い癖が爆発したあらすじとなってますね。さらに言うと、このあらすじ結構気に入ったので、おまけみたいに続けてしまうかも……。

ちなみに、どうでもいい話ですが、中学上がるまで、作者は藤岡隊長の探検隊見てましたよｗｗ

あれいつも良い所で終わりますよね。

それに比べ、うちの梗くんはきっちり蛟とか出会ってるし。まあ、遇いたくて遇ったわけでもないけど。

あ、一つ付け加えておくと、タイトルの未来都市の言葉に、出てきてないじゃないかと言う人がいた時のためにこれ説明しておきます。梗くんのいる時代から見ると、文明のレベルが２０世代近く違うので未来都市という言い方にしました。

現代から見た未来の都市ではなく、過去から見た現代の都市も立派な未来都市だと思うので。そういう風な解釈をしてもらえるとあり

がたいです。ですが、次の話で皆さんの想像通りの未来都市になると思いますので。

（藤岡隊長の名をサブタイとは言え冠する以上は、ということで多少誇張表現になったことは素直に謝罪（ぺこり））

次回原作キャラが出る予定です。

九話　寿司ネタって何が好きですか？ちなみにボクはタマゴとサーモン、それと

原作キャラ永琳登場です。
口調が違うな、と思うかもしれませんが、まだ小学校入る前くらいの歳の女の子（頭は良い）が高校生くらいのお兄さんと話すなら、こんな口調になるんじゃないか、と想像しながら書きました。成長して、普通に十代くらいになれば、原作どおりの口調にするつもりです。

九話　寿司ネタって何が好きですか？ちなみにボクはタマゴとサーモン、それとトロ

あれから五年が経ちました。
はい？話が飛んでる？

え、だって、あの後街に入ったはいいけど、寿司屋見つけてしまったからひたすら食べてただけだよ？

金？ああ、あれなら能力で作ったよ。一、その辺で金を払っている様子を見る。二、金の情報を写し取る。三、支払いの時に袋に手を突っ込み、さも今出したかのように作り出した金を出す。四、皆万々歳。

え？犯罪？違うよ、ボクは蛟だから、ほら。人の作った法律には縛られないのだよ。ハハハ！！
え？罪悪感？ナニソレ、おしいの？そんな面倒なものはボクは考えないのだよ。フフフ。

あ、因みに。今都市の概観から察するに、もう未来都市一歩手前だよ。少なくとも、もうボクのいた時代よりも発展してるよ？

中に入って分かったんだけど、やっぱり時間の流れが他よりも遅いね。聞いた話だとそういう能力を持った人がいるらしいよ。

「いやー、最近のこの都市の発展は目覚しいね」
「そうだな、あの子が生まれてからさらに早くなった。果たして良いことなのか、悪いことなのか」
隣でお茶の飲む男性、近隣では八意先生と呼ばれているその人の

言葉にボクは曖昧に笑う。

八意先生との出会いは五年前。たまたま見つけた寿司屋で意気投合し、共に大食いした仲だ。

「×××ちゃんにとってどうかは分からないけど、この都市に生きる人たちにとっては良いことだと思うよ」

×××ちゃん。八意先生の娘さん。現在五歳の銀髪の女の子。同じ銀髪ということでボクとも仲が良い。補足すると、すごく頭が良い。まさか三歳で大学レベルの学力を持っているとは。今ではこの都市の発展にかなり貢献している。

「ああ、今あの娘は永琳と名乗っているから、そう呼んでやってくれ」

「八意永琳……ちゃん？」

「ふ、やはりちゃんづけか」

「いやあ、呼び捨ては敷居が高いよ。それもお父さんの前で娘さんの名前を、だなんて」

「誰がお父さんだ！！！」

「いきなり切れてんじゃない！この親バカ！！！」

「キサマに娘はやらんぞ！！」

「五歳児相手にそんな気持ち抱くか！！」

「うちの娘に魅力がないとでも言うのか！！！？」

「ちっとは落ち着け！！！」

うん、まあ、何と言うか。いつものことだよ。この後×××ちゃん、じゃなくて永琳ちゃんがやってきて、それから。

「落ち着いてください、父さん」
ごん、ってすごい音がする。音源は永琳ちゃんの振り下ろしたお盆だね。

「～～～～～～っ、何をする娘よ」
「何をするじゃありませんよ。外まで声が聞こえてきましたよ、少しは静かにしてください」
娘に怒られてしゅんとする先生。娘には弱いなあ、ホント。

「お久しぶりですね、梗さん」
「お久しぶりだね、永琳ちゃん」
ボクがそう呼ぶと、永琳ちゃんが驚いたような顔をする。

「父さんに聞いたんですね。でも、梗さんなら×××って呼んでくれてもいいんですよ？」
「あはは、×××って発音しにくいからね、呼べるなら永琳ちゃんって呼ばせてもらうよ」
そういうと、永琳ちゃんがそうですか、と少し残念そうな顔をする。呼んで欲しかったのかな？

「それはそうと、大きくなったね。前はこんなだったのに」

手で適当な大きさを示しながらそう言うと、永琳ちゃんが苦笑する。

「それじゃあ小人ですよ、梗さん。ここは外とは時間の流れが違いますからね。外に暮らしている梗さんがそう思うのも仕方ないですよ」

「便利そうな能力だよね。でも変な代償とかありそうで恐いから、いらないけどね」

昔見たアニメとかだと、操作した時間の分、自身の時間が戻って行くみたいなのあったよね。

「聞いた話だとそういうのは無いらしいですけどね。私自身も能力を持っていますけど、そういうものは特に確認してませんよ？」

「そういえば、ボクも無いね」

「梗さんは人じゃないですからね、どうなのかは分かりませんが」

「永琳ちゃんでも分からないか、ところで、キミのお父さんがさっきから空気と同化してるけど」

「静かでいいじゃないですか。もうしばらくそうしていてもらいましょう」

「それは先生が可哀相だよ。はあ、永琳ちゃんこの後時間ある？」

「そうですね、今日の予定はもうありませんから、大丈夫です」

「じゃあ、先生と三人で御寿司でも食べに行こうか。先生の奢りで」

「ふふ、じゃあ、そうしましょうか。いいでよね、父さん？」

空気だった先生がこくこくと懸命に頷き、それを見て二人で顔を

見合わせ、思わず笑った。

さて、一連の会話で分かったかもしれないけど、先生と永琳ちゃんはボクが蛟であることを知ってる。割と最初のほうに話したけど、それでもこの二人は受け入れてくれた。だからなのかは知らないけど、ボクは二人が大好きだ。

だからこそ、事実から目を背けたくなる。

前から考えていたことがある。

永琳という名前を今日聞いて確信したことがある。

八意×××、いや、八意永琳。彼女は東方のキャラクターの一人だ。

そして、そんな彼女が生きるここは東方の世界なんだって。

類似（パラレルワールド）した世界にやって来たのか、それとも物語の中に入り込んだのかは知らないけど。

ここはボクの知る世界ではなく。

そして、ボクに世界を渡る手段など持たない。

つまり。

もうボクは帰れないのだと、希望すら否定された。

さて、どうしようかな、ホントに。

考えないわけにもいかなくなってきたよ、ホント。

九話　寿司ネタって何が好きですか?ちなみにボクはタマゴとサーモン、それと

あとがきと見せかけたおまけ

四天王エーリンの部下テイの狡猾な罠に嵌まり、絶体絶命の梗たち一行。そんな梗たちを救ったのはあまりにも意外な人物だった!!

「ランしゃまの命により、お助けします」

何故ランは梗たちを助けたのか!?謎が謎を呼ぶ怒涛の展開!!

東方異世界譚、乞うご期待!!

あれ?CMになった。ていうか、こんな話、設定すらないのに。

そういえば、この小説ヒロインが決まってないんですが、誰が良いと思いますか?梗の性格と併せて考えてみて、意見あれば下さい。因みに、オリキャラ（女）がいるのでそっちでもいいですが、近親相姦ギリギリになるのであまりオススメはしません。

時を操る能力者と言われると、アンバーが出てくるのが作者です。今回ちょっとだけそれっぽいこと書きましたし。

原作を知らない梗くんがどうして永琳知っているか、一々そういうことを言って聞かせるお友達がいるんです。回想にしか出てきませんけど。

まあ、そんなわけで梗くんは原作キャラの顔と名前だけならある程度は知っています。

十話　教えて、えーりん！！八意先生のドキドキ（主に恐怖的な意味で）個人授業

最初に言っておきますが、今回の話はこの小説の設定みたいなものです。色々理由があって転々録とはまた設定が違うので、こういう話を書いてみました。梗くん自身の設定もいくつか入ってます。出てくる設定は、かなり独自解釈が入ったオリジナルなものとなっておりますので、ご注意ください。

十話　教えて、えーりん！！八意先生のドキドキ（主に恐怖的な意味で）個人授業

「3」

「2」

「1」

「「ドッカーーン！！」」

「「わーーーーい」」

「なぜなに！」

「えーりん先生！！」

……？

.....?
.....?
.....?
.....?
.....?

……え、何今の？何かすごい電波が流れてた気がするけど。気のせいかな……？

「と、いうわけで、えーりん先生のなぜなにのコーナーです」

「あ、気のせいじゃなかったんだね。豊ちゃん、依ちゃん」

この都市のお偉いさんの家系綿月家の娘さんがた、綿月豊姫ちゃんと依姫ちゃん。この間永琳ちゃん繋がりでお友達になりました。

昔は小さかった永琳ちゃんももう十代後半。え、また時間が跳んでる？以前、友達がキンクリとか言ってたよ。何のことかは知らないけど。

「えっと、取り合えず、なんでそんなネタ知ってるの？というのと、これから何が始まるの？というのどっちを聞けばいいんだろ？」

「固いことは言いっこなしです。梗さん」

「依ちゃん、なんか今日はやたら軽いノリだね。豊ちゃんに毒された？」

「あら、どういう意味かしら？」

「さて、どういう意味だろうね」

二人で顔を見合わせ、ふふ、と笑う。依ちゃんが少し引いてたけど、気にしてはダメだよ？

「えーっと、結局、これってどういう趣旨の企画なのかな？」

言い忘れてましたが、現在地八意宅。その中でも永琳ちゃんの元勉強部屋。なんで元なのかと言うと、五歳になるころに拠点が研究室に移ったから。八意先生が掃除してるので、汚くはないけど誰も使う人もいない、はずだった部屋。

暇だったので、お邪魔したら何故かいた綿月姉妹に連れてこられましたよ。

「つ・ま・り。八意様をえーりん先生と呼びつつ、色々教えてもらおうという趣旨のコーナーです☆」

ほ、本当にどうしたんだろ、依ちゃん。いつものクールキャラどこにいったんだろ。何でこんなにテンション高いの？

と、豊ちゃん、依ちゃんてば何でこんなにハイなの？

こっそりと豊ちゃんに耳打ちすると、豊ちゃんがボクの耳元でそっと囁いた。

八意様の秘密のお薬です☆

……キミもなの？豊ちゃん。あれ、元からこんなのだった気もするけど、っていうか永琳ちゃんは一体何をしているんだよ。

閑話休題（あらゆる引きを無視し、状況を進める魔法の言葉）

「というわけで、始まりましたえーりん先生のなぜなにのコーナー。解説はえーりん先生こと、私、八意永琳が務めさせてもらうわ」
「いやはや、とうとう始まりましたねえーりん先生」
「そうね、司会のよっちゃんさん」

「この企画を通すために、一体何人の上層部の人が闇に消えたことか」
「この企画にそんな危険な経緯があったの！？ていうか、こんなことのために犠牲になった人がいるの！！？」
「そうね、父さんを筆頭に、何人もの男性の頭頂部が犠牲になったわ」
「……八意先生なんで室内で帽子被ってたんだろうって思ってたら……まさかそんなことが」

いや、もう考えないでおこう。面倒になりそうだ。

「それで、結局なぜなにで何を教えてくれるの？」
「おっとそうでした。解説のえーりん先生」
「はい、今回の議題はこれ、『力について』よ」

？？？力について？

「えーりん先生、これはどういった議題なのでしょう？」

「そうね、よっちゃんさん。人間の中には銃器を使わずに妖怪と戦うことのできる人たちがいるわよね、その中にはあなたも入ってる。そんなあなたたちは何の力を持って妖怪と戦っているのかしら？」
「えっと、霊力……でしょうか？」
「正解よ。霊力は人間に宿る力よ。人間だけなのか、それとも別のモノにも宿っているのかは未だ分かっていないけれどね。少なくとも、今、宿しているのが分かっているのは人間だけよ」
「なるほど、ということは、力について、とは」

「今この世界には大雑把に分けて四つの力が確認されているわ。一つが霊力、人に宿る力。一つは妖力、妖怪が持つ畏れの力。一つは神力、信仰されることによって増える強大な力を秘めた神の持つ力。最後の魔力、けれどこれについては未だ詳しいことは分かっていないわ。ただ他三つとは異なる力ではあることは確認されている。これを私たちは魔力と呼んでいるわ。今回の議題はこの四種類の力の講義よ」

そういえば、東方の設定にそんなのあったような気がするね。友人の言ってたことをちらっと聞いただけだからうろ覚えだけど、その四つの力は何となく覚えてる。特に霊力妖力魔力の三つは他の漫画やアニメでもあったからなあ。それに神力ね、聞いたような覚えはあるから、多分この辺は東方の設定に準拠してるんだろうね。

「あれ？えーりん先生、よろしいでしょうか？」
「何かしら、よっちゃんさん？」
「綿月家の資料には、魔力というのが載っていなかったと記憶していますが？」
「ああ、だってまだ研究中だもの。完全未公開よ？」

「って、永琳ちゃん、そんな重要そうなのこんな軽いノリで公開し

ちゃってるの！！！？」
「問題ないでしょう。梗さんだし」
「そうね、問題ないわね、梗さんですし」
「はい、問題ないです、梗さんですから」

何この連帯感。ていうかそれはどういう意味なんだろうね。聞きようによっては信頼しているとも、バカにしているとも取れるんだけど。

「さて、講義を続けるわよ。霊力についてはさっきやったわね。次は妖力について、ざっくり言うと妖怪の持つ力よ。一応人間も持てるみたいね、これは実証されてるわ。霊力の適性がない人間が持つことがあるみたいよ、稀ではあるのだけど。ついでだから妖怪についても触れておきましょうか。妖怪は人間の恐怖から生まれた存在よ。当然人間なしでは生きていけないわね。また人間が恐怖を忘れるたびに、妖怪は弱体化するわ。逆に恐怖が増すたびに妖怪は妖力を増し、より強力になっていく。このことから妖力が高いと妖怪も強くなる、と考えられているわ」
「はい、えーりん先生、質問です」
「何かしらよっちゃんさん？」
「一人一種族という妖怪がいるらしいですが、これについて説明してもらますか？」

「そうね、少し説明しておこうかしら。呼んで字のごとくよ。妖怪にも種族があるわ。例えば、鬼、天狗などが有名なところね。だいたいの妖怪は多少の差はあれ同じ種族が複数いるわ。けれど、時々たった一体だけしかいない種族があるのよ。突然変異のようなものなのじゃないかと思っているのだけど、詳しくはわかっていないわ。ただ、一人一種族の妖怪はだいたい強力な力を持つ個体が多いわね。けれど長く生き残ることができる個体も少ないわ」

「はい、えーりん先生。強いのにどうしてでしょう？」
「単純よ、数の暴力に勝てないのよ。その大半がまだ力が弱い生後百年以内に人間か他の妖怪にころされるわ。数の暴力を覆すほどの強大な力を持つか、能力か何かで逃げ隠れできる個体だけが生き延びるのよ。一人一種族の妖怪は大抵能力持ちというのも興味深い点ではあるわ。その能力で何の恐怖から生まれたのか分かるから、だいたい能力から種族名をつけられることが多いわね。梗さんの種族からもそれは分かるわ。水の霊が転じてミズチ、という風にね」

「はい、永琳ちゃん、質問」
「えーりん先生と呼んでちょうだい。取り合えず、梗さん。何かしら？」
「ボクって妖怪だったの？」
ミズチって妖怪なのかな？それとも神様なのかな？そしてそれを【映】したボクは何なんだろうね。実は結構前から気になってはいたんだよね。

「以前こっそり取った実験データによると、梗さんは妖怪兼神みたいね」
「ちょっと待った。実験って、そんな覚えないんだけど、何時の間にそんなの取ったの！？」
「こういうパターンは意外と多いわ。恐れが時間と共に畏れへと変わって行くの。そうすると妖怪も神格を得るわ。そうすることによって妖怪自身も神へと変化してしまうのよ。こうなると最早全くの別物よね」
「って、聞いてよ！？」
「えーりん先生。そろそろ時間です」
「あら、そうなの。じゃあ、講義はここまでよ。続きは次回ね」

次回って何!?ねえ、何でみんな無視なの!?ちょっと、聞いてる?て、あれ……なんか……フェー…アウ……る?（梗くんさんはログアウトしました）

おまけ

「はい、えーりん先生、質問です」

「あら、何かしら梗さん?」

「その残念な服、いい加減なんとかなりませんか?」

「無理ね」

ばっさり断られました。

十話　教えて、えーりん！！八意先生のドキドキ（主に恐怖的な意味で）個人授業

今作初の前編後編。今回の話は梗くんに自分が神様でもあるってことを自覚してもらうための話でもあります。
後、五話くらいで皆さんは月に行っちゃう予定です。そしたら順番的にケロちゃんかな～？
人妖大戦、梗くん参加するの？作者自身が疑問系。面倒だからパスしそうな気がする。でも参加しないと話にならないんですよね。

今回はまだドキドキじゃなかったですけど、次回はあなたにドキドキ（実験動物の恐怖的な）を。

十一話　教えて、えーりん（＞ω＜）八意先生のドキドキ（主に恐怖的な意味で）

色々と批判が恐い。依姫と永琳のキャラ崩壊しまくり。

前の話でも言いましたが、設定は独自解釈が大きく入ったほとんどオリジナルです。

タイトルに顔文字使っておいてなんだけど、作者顔文字すごく苦手。

ＰＣでバイオ４始めたら恐い、めちゃくちゃ恐い。以前友達に借りて、ＰＳ２で一度クリアしたのに、それでも恐い。チェーンソーの音がトラウマだわ。

夜に夢で丸腰でエルヒガンテとチェーンソー男に追われる夢を見た…ｏｒｚ

十一話　教えて、えーりん（＞ω＜）八意先生のドキドキ（主に恐怖的な意味で）

梗くんさんがログインしました。

「は？ログインって何のこと？」
今のなんだろう？あれ、さっきまで何してたっけ？

「講義中ですよ、無駄話は控えてください」
「え、あ、はい」
え、講義って、あれ？あ、そうか、永琳ちゃんを先生役にして、何か色々解説してもらってたんだっけ？

「妖力までは説明したわね。次は神力についてよ。よっちゃんさん、神力とは何か、説明してもらえるかしら？」
「はい、えーりん先生。神力とは神様の持つ力です」

「0点。よっちゃんさんは後でお仕置きが必要ね。ちょうど昨日開発した薬があるからその実験台にでもなってもらいましょう」

「ちょ、永琳ちゃん、依ちゃん、仮にも綿月の人だよ！？」
「まあ、大丈夫でしょ。多分」
「多分って何！多分て！？」

「気にしないのよ。さて、講義を続けるわ。神力とは、人の畏れのエネルギーよ。神の持つ力じゃなく、神力を持つ者が神格を得る。つまり、順序が反対なのよ」

「恐れって、妖力になるんじゃなかった？」

「畏れの字が違うわ。おそらく、梗さんの言っている恐れは恐怖の意味。神力は畏怖の意味よ。つまり、恐怖しつつ尊敬もしている、転じて信仰から得られるというわけよ」

どういう転じかたなのかがよく分からないけど、永琳ちゃんの頭の中ではきちんと転じているんだろうね。ボクなんかとじゃ比べれらないくらいに頭の回転が違うからね、永琳ちゃん。

「梗さんにも関係ある話よ。しっかり聞いておきなさい」

「え？ボクにも関係あるの？」

「梗さんは、妖怪兼神と言ったでしょ。つまり、梗さんにも神力があるのよ、気づいていなかったのかしら？」

「いや、実は神力どころか妖力すら分からないんだよね」

「それはおかしいわね。妖怪なら普通にできるはずよ？」

「まあ、そのうち分かるようになるよ、きっと。話の腰折ってごめん。続けて？」

驚愕の事実があったけど、まあそのうち練習しておこう。きっと何とかなるよ。

「まあいいわ。続けるわよ。神力は霊力や妖力のように、放置しておけば回復する、というわけでもないわ。減ってしまえば、供給するのに信仰が必要とされるわ。この信仰というのが非常に曖昧で、信心深いほど効果が高い、という説があるけれど、把握はできていないわ。実験もできないし」

「はい、えーりん先生。質問です」

「何かしら？よっちゃんさん」
「そもそも神様って何ですか？」

「よっちゃんさん、仮にも神霊を宿して戦うのだから、そのくらいは知っておきなさい、いい？神というのは主に二つに分かれるわ。一つは、人間や妖怪、その他が信仰されるようになって、神格を得たもののことよ。この神は、本来妖怪などの人間の敵が多いわね」

「はい、えーりん先生。質問です」
「何かしら？よっちゃんさん」
「妖怪なのに、神様として信仰されるんですか？」

「いいところに目をつけたわね。そう本来は、妖怪が人を守るはずがないわ。けれど、そこで重要になってくるのが、神格よ。これを得たものは、神となるわ。つまり、妖怪でなくなるわけだから、人を襲う理由もなくなるのよ。そんな状態で、自分を崇めてくれる人たちを無碍にはしないでしょ？それに何より、信仰を失えば、神力も消えていくわ。神格を得たものにとって、神力は自身の存在意義とでも言うものなんでしょうね。神力が消えれば元の種族に戻るのよ。神力は強大な力よ。それを失わないためにも、神は必死になって信仰を得ようとするのよ」

なるほどな、あれ？
「はい、えーりん先生。質問です」
「何かしら？梗さん」
「ボク特に信仰されるようなことしてないよ？」

「……そもそも梗さんは、いえ、後で言うことにしましょう。その辺は梗さんの普段の生活を知らないから良く分からないけど、ミズチは名前の通り水神よ。だったら、水に関連するもの、それこそ

雨や川や海と言ったものへの信仰も梗さんに流れてくるのではないかしら？」

「そういわれると、ありそうだよね」

「実際、神同士の戦いの決着の一つとしてあるらしいわよ。信仰を誤魔化して複数の神に信仰を得させる、というのは。この時は、だいたい両方の特徴を持った架空の神をたてるらしいわね」

「よくそんなこと知ってるね、永琳ちゃん」

「まあ、月夜見がちょっと、ね」

「？」

「そんなことはいいのよ。続けるわよ。どこまで言ったかしら」

「信仰によって神様になったものたちのとこまでです」

「そう、なら次ね。もう一つは、物に宿る名の無き存在としての神が名前を付けられたものよ」

「「「？？？」」」

三者三様。けれど分からないのは皆同じ。疑問符を頭に浮かべている。

「そうね、まあ簡単には分からないでしょうね。例えば、九十九神って知ってるかしら？」

「それって、長い間使われてきた道具に意思が宿る、っとかいうやつ？」

「８０点ね、意思ではなく魂よ。でもだいたいは合ってるわ。あれも一種の神よ。弱弱しくはあるけどね。多分、難しいことを言っても梗さんには理解しきれないでしょうから、こっちの例えのほうが分かりやすいと思うわ」

「そうだね。何となく想像図（イメージ）が掴めるね」

「この物に宿る神は、もう一つのほうと違って上と下の力の差が非常に大きいわ、何故か分かるかしら、よっちゃんさん？」

「えっと、分かりません」

「よっちゃんさん補習決定ね。注射器を用意して待ってるわ」

「おかしいよね！？なんで注射器！！？それなんて補習！？実験の間違いでしょ！！！」

「正解は、信仰よ。この物に宿る神は簡単に言えば存在の化身よ。つまり先ほどの九十九神の例で言えば、神の宿った物が存在している限り、生きていられるのよ。つまり存在を支えてくれる依代がある、妖精や精霊のような存在なのよ。神としてのミズチはこれに限りなく近いわね。水の化身だもの、自然の化身たる妖精とほぼ同じ存在よ。けれど信仰を得たことにより神となっているのよ。そう考えると梗さんは不思議な存在よね」

「どういうこと？」

「梗さんはね。妖怪でもあり、神でもある。ミズチが本来神霊であることを考えれば妖力があるなんてあり得ないのよ」

「でもあるんでしょ？」

「そうね、だから不思議。実験でもすれば分かるかもしれないけど、さすがに神を相手に実験するほど、私も恐れ多いことはしないわ」

「……？あれ、どっかで実験されたという言葉を聴いた気がするんだけど？」

「私のログにはそんな記録ないわ」

「私のログにもありませんね。姉さんは？」

「私のログにもないわよ～」

く、これが数の暴力。完全になかったことにされている！！

閑話休題（場転に困った時にはこの一言）

「これは私の仮説だけど、さっき信仰の流れを誤魔化し統合する話をしたわよね。梗さんはこれに近いんじゃないのかしら？つまり妖怪としての蛟と神霊としてのミズチが統合されて、今の梗さんがある。という仮説よ」

因みに、ボクが元人間で、異世界人であることは話してないよ。今更？っと思ったかもだけど。

話してどうなるわけでもないしね。あくまで今のボクについて話しただけだよ。

「はっきり言っていい？永琳ちゃん」

「ええ、何かしら？それとえーりん先生と呼ぶように」

「そんな面倒なことは考えたくない」

二話分の話、全て無駄にするようで悪いけど、面倒なことは考えたくないんだ。

閑話休題（場転に困ったときにはこの一言！！）。

「はい、というわけで長らく続きました、なぜなにえーりん先生。

これにて終りとなります」
「もう最初以外なぜなにじゃないよなあ、とかそういうツッコミはお母さんにしてくださいね」
「なんでお母さん!?すごい迷惑だよ!!」

「じゃあ、近所の猛犬にでも」
「危ないよ!?」

「うちの近所にクランの猛犬が鎖でつながれてますよ?」
「槍兵さーーーーーーーーん!!!!」

「あら、うちのペットに一匹もらえないかしら?」
「と、豊ちゃん、飼うつもりなの!?」
「ちょうきょ、げふん、しっかり躾して番犬にでもなってもらいましょう」
「調教!?今調教って言ったよね!!?」

「「「ま、冗談ですけどね☆」」」

「最後までそのノリかよーーーーーーーーー!!!!」

おまけ

「はい、えーりん先生、質問です」
「何かしらよっちゃんさん？」
「魔力について教えてください」
「まだ調査中よ。以上」

簡潔で実によろしいね。

今回一番分かりやすかったかも。

NGシーン

「はい、えーりん先生。質問です」
「何かしら？よっちゃんさん」
「妖怪なのに、神様として信仰されるんですか？」
「いい質問ですね」
「池〇さん！？」
思わず叫んでしまった。
「実は今話から私、池上永琳になったんです」
「！！！？」

ただの冗談です。

十一話　教えて、えーりん（＞ω＜）八意先生のドキドキ（主に恐怖的な意味で）

池上さんのフレーズなんかで見たからふと使いたくなった。パクリとか言わんといてーな、インスパイアなんや！！

今回梗くん完全にツッコミ役ですね。

そして豊姉ー！！最後以外ほとんど空気だよ。実は議事録を取ると言う重大な使命があったのだが、書いてないから誰も知らないよ。読者様だけは知っていてあげて。彼女には使命があったんだ！！

修行風景とか書かないので、次は月へ行く話になる予定。

しっかし、梗くん二話にも渡る講義を、面倒くさいの一言で片付けたな。しかし実際面倒だと思うんですよね。梗くんの性格は作者をモチーフにしてるから。

梗くんが面倒だからって人妖大戦参加してくれない気がする。どうしよ？

次回から東方異世界譚、おまけとして書こう！なんか最近浮かばなかったから書かなかったけど。

以前聞いたこの小説のヒロイン。まだ募集中なのでよければご意見ください。

え？ドキドキ？ナニソレ？おいしいの？（作者のノリですから気にしちゃいけません）

十二話　兎さん、兎さん、どうして月を見て泣いているの？兎さんは言いました

本編がいよいよシリアス突入。タイトルはふざけてるのになあ。
面倒になったので、幻想郷入る前にやろうと思ってた過去編、この次にやっちゃいます、レベルアップも兼ねて。

しかし、オマケがはっちゃけ過ぎた。正直依姫様が哀れすぎる。そして、永琳がドS過ぎる。

十二話　兎さん、兎さん、どうして月を見て泣いているの？兎さんは言いました

「月？」
「そう、月よ。前々から計画案があったのだけれども、いよいよそれが具体化して、半年後月に行くことが決定したわ」

ある日ある時、八意家にて。永琳ちゃんに頂いたお茶を飲みながらのほほんと過ごす、そんな一日になるはずだった。そんな一時のこと。

「なんでまたそんなところに？」
「理由は二つ。一つは地上に穢れが満ちているから」

「穢れ？」
「神で妖怪の梗さんも持っているものよ」

永琳ちゃんの説明によると、人の寿命の原因のようなものらしい。

「月に行くとそれがないの？」
「そうね、少なくとも地上とは比べるまでもないわ。都市のお偉いさん方がこぞって行きたがっているのよ」
「それで永琳ちゃんに宇宙船作れって？最近忙しい理由はそれね」

「そしてもう一つ理由が、一つ目とやや被るのだけれど、妖怪が増えてきたことよ」
「妖怪か、確かに最近よく見かけるようになったね。けど一つ目の理由と被るって？」

「穢れの象徴が妖怪、と言われているのよ。妖怪は存在するだけで

穢れを撒き散らす」
「ん？じゃあボクやばくない？」
「そうね、ただ梗さんの場合、神でもあるから大丈夫だとは思うわ」

確かに神様って清浄なイメージあるよね。
「とにかくそんな理由もあって、都市の上層部が決定を下したわ。半年後、都市の人間のを連れて月に行くわ」

「この都市の人間全員って、すごい人数だね」
「……全員じゃないわ。一般人の半数や下の兵士たちの半数はここに残るのよ、妖怪の襲撃に備えて」

ぞくり、と背筋が冷たくなる。無意識的に目が細められる。

鏡を司る程度の能力。今ボクが持っている能力の一つ。情報を写し取り、映し出すことのできる能力。この写し取る能力のせいか、五感で感じた情報を全て脳に入ってくるまでに解析する。初めて蛟を見た時、その情報を知ったあの時のように。最近は熟練度も上がり、だいぶ使いこなせてきたと言って良いだろう。相手の表情や口調、仕草や心音などから嘘を見分けたりもできるようになった。

そして、その能力が囁く、言葉の裏に隠された真意をボクに示す。

「それって見捨てるってこと？捨て駒にするってこと？」
「一応、建前は月まで到達した船が戻ってきて回収することになっているわ。けれど、本心は違う。月まで行けたらもう地上と接触す

るような真似はしない。そこにいる人たちもろとも都市は妖怪に乗っ取られた、故にやむを得ず爆撃した。そんな風に言って見捨てるつもりなのよ」

「永琳ちゃん、それに賛成したの？」

「するわけないでしょ。ふざけているわ、残す人たちの中には父さんまでいるのよ！？」

「冗談でしょ！？」

仮にも八意永琳の、この都市随一の頭脳、ＶＩＰの父親だよ！？それを見捨てるつもりなのか？

見ると永琳ちゃんが震えていた。それは怒りからか恐さからか。つまり、さっきまでの冷静さはやせ我慢だったんだって気づいた途端、永琳ちゃんが酷く弱々しく見えた。

「梗さん……どうすればいいの！？このままじゃ、父さんが」

「上層部の人に直訴できないの？」

「ダメよ、上層部の人間は私がこの計画を知っていることを知らないわ。言ったら私の記憶を消してそれでお終い」

「記憶って、そんなことまでできるの！？」

「……私が作った技術よ。まさに自業自得ね」

自嘲気味に呟く永琳ちゃん。それを見たボクの中で糸が切れた。

「ふざけるな！！！！永琳ちゃんは都市の人のために今まで開発してきたんだよ！？それを、こんな恩を仇で返すような真似！！！」

怒ったボク、というのがよほど意外だったのか、永琳ちゃんが驚

いていた。けど、今は怒りが湧き上がってそんなことを気にしている余裕はなかった。

「決めた、ボクが守ってあげる。八意先生だけは何があっても守る。人からも妖怪からも！！」

「え……梗…さん？」

「ボクがそう決めた、だったら世界はそうあればいい。変わらないのならボクが変える。いいかい？永琳ちゃん。これは約束だよ？」

そう言って右手の小指を差し出す。永琳ちゃんはじっとその指を見て、決心してように頷くと、小指を絡ませる。

「「指切った」」

約束だよ？

分かったわ。

それだけ言って、ボクは八意家を後に……しようとした。

「……水無月梗。妖怪が都市内に侵入したという知らせがありました。一緒に来てもらいます」

「……依ちゃん」

そこに武装した兵士を引き連れた、綿月依姫の姿があった。

おまけ　教えて、えーりん！！八意先生のドキドキ個人授業！？　補習です☆

「さて、補習の時間よ。よっちゃんさんには注射器三本を用意しているわ」
「ほ、ホントに用意してるよ……依ちゃん、ごめんね。こうなったらボクには止められないよ」
「さて、まずはこれから言ってみましょう、そーれ、プスっと」
「ふぎゃピ」
「え、何今の悲鳴……よ、依ちゃーん？だ、大丈夫？」
「アぃ。ダぃジョーブですぅ、よぉーオ」
「うわあああぁぁぁ！！え、永琳ちゃん、これ何打ったの！？」
「変声薬ね。しかし汚い声ねえ、潰れたヒキガエルじゃないんだから。もっと綺麗な声は出せないのかしら」
「アぃ。すいマセん。エーリぃん、セんセぃ」
「ひど！？自分で打っておいてその言い草は酷すぎる」

「仕方ないわね、次言ってみましょう、そーれ、プスっと」

「コケーコッコッコ、コケーッコッコッココ」

「に、鶏の鳴き声が、依ちゃんの口から!?」

「声を全て鳥の鳴き声に変える変声薬だったのだけれど、まさか鶏とわねえ」

「あらゆる薬を作る程度の能力ってそんなのまで作れるの!?」

「コケーコッコッコ、コケーッコッコッココ!!!」

「しかしうるさいわね、ちょっと静かにできないのかしら?」

「いくらなんでも非道すぎるよ、それは」

「では最後の薬言ってみましょう。そーれ、プスっと」

「……」

「あ、あれ?何も喋らなくなったよ?」

「声を出せなくする薬よ。よっちゃんさん、声が出せるかしら?」

「……(ふるふる)」

「本当かしらね、試して見ましょう。とよちゃんさん、よっちゃんさんを後ろでに縛りなさい」

「いえっさー!!」

「と、豊ちゃん!?何で当然のごとくロープなんて持ってるの!!?」

「気にしてはいけないわ、梗さん。それじゃあ、しっかりとよっちゃんさんも縛られたことだし実験してみるわよ」

「でも声を出せないか確かめる実験ってどうやるの?」

「ふふ、こうするのよ（ニヤリ）」
「な、何その嫌な笑みは？」

「綿月依姫の恥ずかしい秘密、その壱！！！三年前のある日の朝、起きると布団に染みができていた、それはなんと依姫のおね……」

「～～～～～っ！！！！！！！！（ジタバタ）」

「ストップストップストオオオオオオオオオオオップ！！！！依ちゃん涙目で暴れてるよ、いくらなんでも可哀相過ぎる。止めてあげて」

豊ちゃん、どうしてカメラを構えて涙目の依ちゃんを撮影してるの……？

ちゃんちゃん♪（終りの音）

「で、おね……ってなんだったの？まさか本当に・・・」
「おね……ぼうさんしたときについた涎よ」
「……それって恥ずかしいの？」
「女の子にしか分からない恥ずかしさってのもあるのよ」
「ふーん（女の子にしか、ねえ）」

十二話　兎さん、兎さん、どうして月を見て泣いているの？兎さんは言いました

なんか書いてたらよっちゃんが可愛く思えてきた。豊姫様が何か咲夜さんっぽいことに……。まあいいか。これはこれでアリだ（ねーよ）。

秘密の小部屋は４月２２日付け足しました。色々とやばいので。よっちゃんは大人だよ。クールキャラはおねしょなんてしない！！

さて、次回「基本流されてばかりですが、ボクにだって譲れないものくらいあります。」です。お楽しみに。

十三話　基本流されてばかりですが、ボクにだって譲れないものくらいあります

十三話書きあがった～～～！！！
この辺からシリアス展開入っていきます。
六話くらい書いたらまた元のノリ展開に戻しますが。

だいたいこの辺から続ける人と止める人が分かれるだろうな、と作者予想してます。こういうのが趣味じゃない、というのは結構あるので、仕方ないよなあ。

十三話　基本流されてばかりですが、ボクにだって譲れないものくらいあります

前回までのあらすじ（今回珍しくマジメです）

都市の上層部が決定した計画、それは月へと行くというものだった。

だが、それは地上に残した人々を犠牲にする非道な計画だった。

はっきり言えば、ボクにとってはどうでもいいことである。その置いて行く人の中に、八意先生の名前さえなければ。

犠牲になんてさせない、絶対に守り抜く。そう決めたボクだったが、八意家を出たボクを待ち構える影。

「……水無月梗。妖怪が都市内に侵入したという知らせがありました。一緒に来てもらいます」

「……依ちゃん」

そこに、武装した兵士を引き連れた、綿月依姫の姿があった。

「……本気なの？」

嘘すら見破るボクの能力で、それが本気だと分かっているのに、それでも聞く。聞いてしまう。

縋っている、依ちゃんとの記憶に、その思い出に、そして、絆に。

「はい、この都市に侵入した妖怪蛟。あなたを捕らえさせてもらいます」

ふーん。捕らえる……ね。

「いいよ、降参」

両手を後ろでに組み、頭の上に乗せる。それと同時に依ちゃんの周りの兵士たちがボクに銃を突きつける。

そしてボクは大人しく連行された。

Ｄｅａｄ　Ｅｎｄ

「って、死ぬかーーーーーーーー！！！」

今恐ろしい電波があった気がする。

現在地、独房ナウ。

扉越しに依ちゃんが立っている。警戒する意味だろう、表向きは。

「ねえ、依ちゃん、聞きたいことがあるんだけど？」

「何でしょうか？」

「どうして都市は八意先生を見捨てるような真似を？」

「……聞いたんですね」

「分かってたはずでしょ？多分、依ちゃんでしょ、永琳ちゃんに教えたの。まあ、永琳ちゃんなら自力で見つけてたかもしれないけど」

「そうですね、だから私のほうから話しました」

「嫌われるんじゃないか、とか思わなかったの？」
「……嫌われても仕方ありませんよ。直接的に関係なくても。それでも私は綿月の人間ですから。その責任くらいは負わなければいけません」

「マジメだね。でも永琳ちゃんはそうじゃなかったんでしょ？」
「……はい。そうですね。あなたが決めたのではないのでしょ、ならばあなたを責めても仕方ないじゃない、と」

「ふふ、永琳ちゃんらしいと言えばらしいね。だからさ、依ちゃん」
「はい」

「ボクは助けることにしたよ。八意先生を」
「……そうですか」

「だからこそ聞きたいんだ。何で八意先生は捨てられたの？永琳ちゃんの父親だよ。永琳ちゃんの心象を悪くしてまであの人を捨てたい理由ってなに？」

それは、と言って、彼女がその先を続けた。

「ところで、依ちゃん」
「何でしょうか？」
「どうやって逃げればいいの？」
そう尋ねると、依ちゃんが驚いたような顔をしていた。
「だって、これ。永琳ちゃんの差し金でしょ？」
「な、何でそれを……」
「うん、多分本当はボクを殺せって命令だったんだろうね。だいたいこの都市の人間にとって、妖怪であるボクを生かす理由はない。なのに命令は捕らえろ、だったよね。この時点でおかしい。じゃあ、こんな命令ができる人物は誰だろう？そんなの永琳ちゃんだけだよ。大方妖怪を捕らえて実験～とかなんとか言って誤魔化したんでしょ」
ちょっとイラっとする。何がって、依ちゃんがあんぐりと口開けて、驚愕という言葉すら生温いほど呆けているからだよ。
「うん、その『こいつちゃんと考えてたんだ、あまりに意外！！』みたいな顔止めてくれる？ちょっと殺意すら沸くから」
「いや、だって、え？でも、梗さんて、え！？」
「何かな？その、え？って。？だとでも思ってた？バカだとでも思ってた？」
実際面倒ごとが嫌いなだけで、面倒なことを考えるのが嫌いなだけで、頭の回転事態は悪くないボクだったりするのだ。わはは……はあ、これきっと豊ちゃんにも思われてるんだろうなあ。もしかして永琳ちゃんにまで？いや、こういう言い方をしたってことは永琳ちゃんは分かってたっていうことかな？

「依ちゃんたちなら、あの場で全員昏倒させてボクを逃がすとかするだろうからね」

自分で思ってるより、依ちゃんたちは結構分かりやすいよ？

「う、そう言われると、そのくらいしか思いつかないですけど」

「きっと豊ちゃんだろうね、永琳ちゃんに聞こうって言ったの。依ちゃんは自分でどうにかしようとするタイプだし」

「っぐ、図星過ぎて何も言い返せません」

「キミはそれでいいんだよ。そのままで良いんだ。それがキミなんだから」

……え……？

今の……何……？

無意識に出た言葉に、ボク自身が戸惑う。

今のは、誰の言葉？ボクじゃない、ボクはきっとそんなこと言えない。

え……し……して……

なに？今、何て言った？

い……よ……ボクを……いない……なんかに……いかないで……

「……さん、梗さん！！」

はっとする。気づけば体が震えていた。
目の前には心配そうにこちらを覗き込む依ちゃん。

「だ、大丈夫。何でもないから。それより、この後どうすればいいの？」

「どうもこうも、私と他の警備が交代するタイミングで普通にこの牢を破ればいいらしいですよ。人間ならまだしも、梗さんなら簡単に破れるでしょうから」
「永琳ちゃんの指令にしては簡単だね」
「無事外に出るための面倒な仕掛けは全部してくれたらしいです」
「うわ、やっぱり永琳ちゃんの作戦だね。すごいというか何と言うか」

というわけで、あの後、依ちゃんと他の警備が代わるタイミングになって、何故か近くの警報が誤報。慌てて対処に向かった二人を余所に、普通に独房の扉を吹き飛ばし、近くの窓から飛び出すと、そのまま都市の外まで何事もなく出れました。ホント凄いよね、永琳ちゃん。

「しかし、困ったね。これは」
さきほど、依ちゃんから聞いた八意先生を見捨てる理由。いや、八意先生に死んでもらわなければならない理由。
それを考えると、どう考えても面倒が待っている。

面倒ごとは嫌いなんだけどね。

「けど、守るって決めた。なら、そうも言ってられないよ」

一人呟き、都市を見る。

もし助けることのできるタイミングがあるとすれば。

「ロケットの発射直後かな」

彼を見捨てた上層部の人間のいなくなる瞬間。そして、月に着くまで彼らは何も出来ない。ならば彼らが出発してから月に着くまでの時間で、八意先生の安全を守る。月のからの爆撃さえ過ぎれば、もう彼を狙う人間はいなくなるのだから。

制限時間は半年。その間が勝負だ。

十三話　基本流されてばかりですが、ボクにだって譲れないものくらいあります

依姫様が語った内容は、次回ですね。人妖大戦、どっちにつくか、何となく分かりましたか？
作者的には、前回の流れで、介入にはこの流れしか思いつかなかったんですよ。

過去の伏線二回目出ました。一回目は四話の夢ですね。十七、十八話で回収予定。

改めて読み直してみると、けっこうオリジナル要素強かったかな、と思いますが、どうですかねえ。作者は割りとこういうのアリだと思うんですが。

因みに、次回はまだ書いてません。なぜか１６、１７、１８話は書いてるという不思議。ドシリアスすぎて、自分でも引いた。

十四話　修行編で散々なのに、本番でいきなり覚醒するご都合主義なジャンプの

シリアス続きます。
他の二次であっさり進む月編。なぜか無駄に凝った設定をつけてしまったことに今更後悔。

十四話　修行編で散々なのに、本番でいきなり覚醒するご都合主義なジャンプの

記憶の回帰。あの日、あの時、あの場所で。

「だからこそ聞きたいんだ。何で八意先生は捨てられたの？永琳ちゃんの父親だよ。永琳ちゃんの心象を悪くしてまであの人を切り捨てたい理由ってなに？」

「それは……勢力争い、それと、嫉妬……そんなところです」

依ちゃんの話をまとめると、月へ行くのを賛成したのが都市の上層部の半数。反対したのが八意先生含む半数。つまりは真っ二つに別れていた。それがこれまでの都市の情勢。

そして、そこに一石投じたのが八意先生の娘、永琳ちゃん。次々と新たな開発を続け、本当に月に行くだけの技術を都市に手に入れさせてしまった。それだけに、この都市での永琳ちゃんの立場は揺ぎ無いものとなった。けれど、それが気に入らない人間たちがいる。今まで必死にやってきた自分たちを嘲笑うかのように、いとも簡単に確固たる地位を手に入れた少女。けれど、彼女を排除しては都市の住人からもう反発を生むだろう。

だから、その矛先に選ばれたのが。

「八意先生ってわけか……」

反対派の理由の半数以上が月に行く技術がないから。それを反対派の筆頭たる八意先生の娘がクリアしてしまったのだから、皮肉としか言えない。

だが反対派の筆頭たる八意先生を残しておけば、これから先も何

かと面倒になることは目に見えている。そう考えた人間がいた。そして、そいつらと嫉妬に駆られ永琳ちゃんに一矢報いたい連中が一緒になってこの計画を立てた。

「最低すぎる」

「綿月が気づいた時にはもう……一度決定されてしまえば、もう覆すことはできません」

「……ねえ、依ちゃんと豊ちゃんにお願いがあるんだけど」

「姉さんは分かりませんが、私にできることなら」

気づけば、それを口にしていた。

「二人でさ、都市を乗っ取ってくれないかな？」

あの日からボクの始めたことは主に三つ。

一つは、妖力と神力の使い方を知ること。

一つは、周囲の妖怪に呼びかけること。

実は依ちゃんから聞いた話なのだが、月へ行く一週間前に大規模な妖怪の掃討戦があるらしい。上層部の人間が月へ行くのに妖怪に邪魔されたくないからだろう。どこまでも理由が透けて見えるやつらだね。吐き気すら覚える。

あの都市の技術で監修された兵士と正面切って戦えば、妖怪ですら全滅しかねない。

だから呼びかける。因みに、聞かないやつには暴力と言う名の話し合いが行われる。蛟のチートパワーに勝てるやつは未だ現れていない。強大な力を持ったボクが言っているので、一度戦えばだいたいの妖怪がマジメに聞いてくれる。主な呼びかけの内容は、銃火器への注意。これさえ何とかなれば人間と妖怪だ、負けはしないだろう。

そして、最後の一つは、信仰を得ること。

最初の妖力と神力の使い方を知ること、というので、分かったのだが、神力というのが他と比べ強大な力を持っていることが分かった。一番得辛いだけに、その力は随一だ。

だから、情報収集に使っていた村で、水神として活動し始めた。

水を司る程度の能力で水蒸気である雲が操れるので、天気もある程度操れるし、並の妖怪など簡単に倒せることもあって、それなりに信仰されるようになった。

何がやりたいのかと言われれば簡単で、強くなりたい。守ると決めた、けれど今のままではまだ足りない。あの都市の技術は異常だ。正直、今程度の自分では兵士が十人程度で武装していたら負けるだろう。だから強くなる。誰よりも、何よりも。思いを通すために、力は必要なのだから。

「本当に今日来るのか？」

「来るらしいよ。彼らの使う武器は妖怪ですら簡単に殺せるからね。それだけ注意しておいて。そうすれば妖怪と人間なんだ、簡単に勝てるさ」

森の中、集まった妖怪たちを見ながら隣に立つ鬼にそう言う。この鬼がこの周囲の妖怪を纏めているリーダーのようなやつらしい。初対面で力比べとか言ってタイマンさせられたけど、それ以来は一番友好的なやつだ。

「らしい、とはまたいい加減だな」

「情報伝達の速度が違い過ぎるからね、向こうは計画から一周間で実行に移せる。けどこっちは集めるだけで一ヶ月、準備に半月。そうしてようやく実行。六倍以上の時間の差があるんだ、前持って準備しておかないと、後手に回る」

「人間とは面倒な生き物だな。それと、梗。お前もな」

「分かってはいるよ。鬼にこんな面倒なことをさせて悪いとも思ってる。でも、負けてもらうわけにはいかないんだよ」

「ふん、俺を下したお前がそこまで言うんだ。少しは注意もする」

ぶっきらぼうな言い方だけど、けれど邪険ではない。付き合いかたさえ分かっていれば、鬼よりも付き合いやすいやつもいないと思う。

「前にも言ったと思うけど、周りの村は襲っちゃダメだよ。あの都市は後一週間でなくなるんだ。他の村まで全滅させたら、人間がいなくなって、妖怪も共倒れになる」

「聞かせはしたがな。果たしてどれほどの妖怪が守るか」

それも分かっている。人を襲うのは妖怪の本能だ。それを止めろと言ってもそうそう簡単には出来ないだろう。

と、そこまで考えた時。

キュイーン

音消し（サイレンサー）を嵌めた銃の音。

「来たよ……あれがボクたちの……敵だ」

隣に立つ鬼に、そう告げて、ボクは森を駆けた。

十四話　修行編で散々なのに、本番でいきなり覚醒するご都合主義なジャンプの

そんな簡単に神様として祭られるのか？いえいえ、ご都合主義だからいいんです。実際、自分たち守ってくれるなら神も悪魔も同じようなもんですよ。とそんな思考から走った水神として祭られるフラグ。

そして疑問なのは、月の技術で創られた銃が火器なのかレーザーなのか。まあ、この頃はまだ火器だったことにしておこう。

言ってませんし、書いてませんけど、何となく分かったと思いますが、八意先生はそれなりの地位の人ですよ。永琳の父親ということもあるし、本人が医学方面で一角の人物、という設定。永琳の薬学知識は、父親の影響、という二次設定。

早くあの軽いノリに戻りたい……。

十五話　地球最後の日。あなたなら何をしますか？ちなみにボクはゲームかな？

十五話が長かったので、二つに分けて先に投稿しました。
後半分も十七話を添えて本日中に投稿できるかと。
後半を考えてつけたタイトルだったので、半分に分けたことより、
意味の分からないことになりましたｗｗ

十五話　地球最後の日。あなたなら何をしますか？ちなみにボクはゲームかな？

戦争。

言葉にすればそれが一番分かりやすい。

後の人たちもこの一週間の出来事をそう呼んでいるのだから。

大戦、と。

銃を使い次々と妖怪を殺していく人間を横目に、誰にも認識できないほどの早さでその横を駆け抜けて行く。

元々デタラメだった蛟の身体能力だが、神力を使うことによってさらに跳ね上げることができるようになった。

今ではもうただ走っているだけなのに、音よりも速い。

「さあ、終わろうか？」

目の前にいるのはこの部隊の指揮を執っている人間。こういうのは大抵後ろにいる。それはどこの世でも変わらないみたいだよ。

音もなく、右手に集めた水が目の前の人間を切り殺す。一切の抵抗もない。どさり、と人間が崩れ落ちる。

思ったよりも殺すことに抵抗はなかったな。口にはしないがそう思っていた。

「さて、これでいいかな？」

妖怪たちにもとより統率なんて言葉はない。けれど人間にはある。それは知恵の違い。弱さの違い。価値観の違い。言い方は色々あるけれど、自己完結している妖怪と、群れることでしか生きられない人間の違い。

「さて、問題。人間一人と妖怪一匹ではどちらが強いでしょう？」

答えは妖怪。なら頭を失くして慌てた今の人間と、最初から頭のない妖怪なら。

「こうなるよね」

追われる人間。追う妖怪。後はどうにでもなってくれていい。

「これでまず一石。後はボクの一石と彼女の一石、それで約束は守られる」

そう呟くと、ボクは森へと引き返した。

「本当にやるのですか？」
「あら？梗さんにそう言われたのでしょう？」

それは、そうなのだが。
私にできることなら、そう言ったのも確かに私だが。

「本当にこんなことが……」
「八意様が考えてくれたことよ？なら大丈夫でしょ」

「そうですが、八意様もよくこんなことを押し通せましたね」
「梗さんがやるって言ってるのよ？なら私だって、やらないといけないでしょう？賭かっているものには父さんだって入ってるのだから」

だから自身の手で、せめてというわけですか……けれどそれでは。

「それでは、八意様が反逆者に……」
「逆よ。相手を反逆者に仕立てるのよ」

「ど、どうやってですか？」
「梗さんが上手くやってくれるでしょ。そして後は迅速さで押し通

すのよ」

本当に大丈夫なのだろうか？
だいたい、梗さんとはこの半年何の連絡も取っていないのに。

「二人でさ、都市を乗っ取ってくれないかな？」

それはあの日、梗さんが私に言ったこと。

「の、乗っ取るって、どういうことですか！？」
「上層部の腐ったやつら全部排除して綿月が政権取ってくれないってこと」

「たしかに今の上から二、三人いなくなれば綿月が政権奪取することはできますけど」
「詳しいことは永琳ちゃんにでも相談してみて。こっちは妖怪を動かしてみるから」

たった、それだけの会話だった。
けれど、八意様にはそれで通じたらしい。

「本当に大丈夫なんでしょうか……？」
正直言えば政権奪取、賛成だったりする。今の上は行き過ぎている、簡単に言えばやりすぎだ。街を歩くと不満を述べる人たちもいる。現政権がいなくれば多少の混乱はあるものの、少なくとも今のこんな状況よりは万倍マシだ。

本当に成功するのなら、の話だが。私たちのやることは早い話クーデター。そんなことが可能なのか、八意様ほど頭の良くない私に

は、やはり不安な話なのだった。

「時は来たれり、ってね」

一週間後。まさか負けるとは思っていなかったらしい都市の上層部は上から下まで大騒ぎ。数が違えば武器も違う。本来なら負ける要素なんてなかったからね。

だからこそ、この一週間は都市に潜り込む隙が出来た。これまでは警戒心を強めた都市に潜り込むのは容易ではなかったが、今だけはそれができる。つまり、永琳ちゃんたちともう話し合った。

「問題は依ちゃんと豊ちゃんがのってくるか、だったんだけど」

それも意外なほど簡単にのってくれた。依ちゃんたちも今の都市に思うところがあったらしいね。

「で？本当に攻め込むの？」

「ああ、この前の戦いで、人間が妖怪を殺す力を持っていること、そして妖怪を排除しようとしてることが分かったからな。ならやられる前にこっちからやるべきだ」

先手必勝。その考えは正しい。ま、為せるかどうかは別だけどね。

「そう、ボクは理由があっていけないけど、頑張って、鬼さん？」

「梗は何度名前を教えても俺を鬼と呼ぶんだな」

「いつ死んでもおかしくないこの状況でおかしなことを気にするんだね」
「ふん、戦って死ねるなら本望だ。だが、その前に一度お前に名前を呼ばせてみたいものだな」
「ふふ、感動的な死に際でも演出したら、呼んであげるかもね」
互いに戯言を交わしながら、その時を待つ。

鬼の性格から言って、全員揃うまで待つなんてやらないだろうと思っていたのだけれど、この鬼は意外にも配下の妖怪が全て揃うのを待った。前回の戦いから教訓を得たのかもしれない。

そして、全てが揃ったところで、ボクはひっそりと気配を殺し、その場から離れる。
「ふふ……これで二石目も完了だね。後は永琳ちゃんたちが上手く一石投じてくれれば」

そうすれば、後はボクが動くだけだ。

十五話　地球最後の日。あなたなら何をしますか？ちなみにボクはゲームかな？

一つの話として書いてたのを急に二本立てにしたからどうにも違和感があるなぁ。
まあ、後二話で一章終りですね。転々録と違って鏡蛟紀は章が多いと思いますけど、今回けっこう長かったなあ。
十七話は出来てるので、なぜか。十六話書きあがり次第上げときます。

しっかし、もう完全にオリジナルだなあ。原作の欠片もないなあ。

あ、以前ヒロイン募集してた気がしますけど、作者がオチを考えたのでなしにしておきます、結局一人も意見なかったけど（涙）
興味ないのか、それともあとがき見てないのか……作者としては後者であってほしいなあ。

十六話　終り良ければ全てよし。つまり結果ってのは過程の意味を消すほど大事

この次で一章は終りです。
とてもとてもオリジナリティ溢れる小説になってしまったが、広げまくった伏線の収集をつけるのが一番困った。
書いてみて、最初にご都合主義と書いておいてよかったと安堵した。

十六話　終り良ければ全てよし。つまり結果ってのは過程の意味を消すほど大事

「こちらの準備はもう終わった」
「後は梗さんが一石投じれるか、どうか」
先週に行われた妖怪の掃討作戦。まさかの敗走という結果に上層部も驚愕した。まさかあの時逃した梗さんが一枚咬んでいるとは誰も予想だにしないだろう。あの時逃した件については、警報の誤報もあり、私も、あの時交替するはずだった人も大した責任は取られなかった。この時、私が逃したと疑われなかったということが、私たちと梗さんが知り合いだということを上層部の人間が知らなかったという証拠。つまり、妖怪がいたから排除しただけ、ということ。私たちの知り合いだから狙われた、とかそういうことではないことに安堵した。

「一週間前の掃討戦では妖怪側が予想よりも遥かに集中しており、さらには銃器に対する警戒も強かったため予想外に攻撃に効果が上げられないところを、最奥を真っ直ぐ狙ってきた人型の妖怪によって指揮官が殺され、軍が瓦解、とありますね。この人型の妖怪というのは、おそらく梗さんでしょうから、最初の一石は成功したということになりますね」
「続いて私たちのほうの一石も成功したわ。後は最後の一石を梗さんが投じることができたか、つまり」
「妖怪が、この都市向かって攻めてくるかどうか……」
「ええ、そのためにも、この一週間は梗さんが誰にも気づかれないように煽っているはず」

「そんなことできるんですか」
「暗示みたいなものだけれど、出来る人には簡単にできるけれど、出来ない人には相当難しいはずよ」

さてはて、どうなったんでしょうかね。と言っていると、突然警報が鳴り響く。

「そう、成功したみたいね」
「そうみたいですね」
「さて、忙しくなるわね。依姫」
「そうですね、姉さん」

さて、これで全ての石は投げられた。後は広がった波紋に対処していくだけだ。

都市の外で妖怪と人間が激しい戦闘を行っている。
内部では大きな混乱が起きており、光を《反射》して姿を消しているボクに気づく人間はいない。
鏡を司る程度の能力で《反射》ができるようになったのは実は結構最近のことだが。

「今日この日に間に合って良かった」
素直にそう思う。反射しているのは光だけではない。熱、電磁波、音など全てが漏れないように、自身の周囲の空間で反射させている。監視用の機械はだいたいこれで誤魔化せるはずだ。

後は混乱する都市内部を歩いていき。

「ここか……」

そして、宇宙船の発着点に辿り着く。

そこには、守るべき民衆を見捨てて、我先にと宇宙船に乗り込もうとする人たち。」

こいつらが上層部の人間か……。

「外はまだ混乱してるよ。いいの？放っておいて」

全ての反射を止めたボクの声に、人々が驚く。

「な、何者だ！？」

「そんなことより、都市内部でも妖怪の襲撃に混乱が起きてるよ？」

「ふ、ふん。そんなこと、我らには関係ないことだ」

まさかいきなりそんなセリフが出るとはねえ。どこまで腐ってるんだろう。

「見捨てるの？民衆を。たしか、この宇宙船月に行くんでしょ？その後、ちゃんとボクたちも回収してくれんだろうね？」

「う、うむ、当たり前だろ。当然ではないか」

「へえ。じゃあ、自分たちだけ月に行って、この都市は残った人ごと爆撃するって話は嘘？」

「な、なぜそれを！！？」

……こいつバカ？

「なるほど、その様子だと本当みたいだね。へえ、見捨てるんだ、ボクたち民衆を。兵士さんたちも可哀相だね、こんなやつら守るために命かけるだなんて」

「ふ、ふん、兵など所詮捨て駒よ」

うわお、そこまで言っちゃうんだ。ここまで行くと凄いの一言に尽きるね。

「だ、誰か！こいつを殺せ」

「勝手に自爆しておいて、口封じか。ホント腐ってるね……ねえ、みんな、聞いた？」

「貴様、誰に向かって言っている？」

「え？誰って、この都市のみんなだよ？あ、言ってなかったっけ。この辺に集音マイクがあってね。今の会話ぜーんぶ、都市の内外に筒抜け」

「な、なななな」

ありゃ。目の前のオッサンだけじゃなくて、周りのオッサンまでフリーズしちゃったよ。

そんな都合よくマイクがあるわけないよね。つまり、これが一石。

永琳ちゃんたちが極秘裏に仕掛けたもの。八意印の特性集音マイク。
それをここに仕掛けて、さらには都市の内外全ての場所で聞けるようにしてもらった。これを上層部にバレずにやるには都市の権力者である綿月姉妹の協力は必要不可欠だった。
上手くやってくれたみたいだね。そこら中から怒声がするよ？

そして全ての反射を再びかけてボクは姿を晦ます、それと同時に依ちゃん率いる部隊が突入してくる。

「チェックメイト」

笑いながら、外に聞こえるはずがない呟きを漏らす。

「まさか、ここまで上手くいくなんてね」
次々と連行されていくかつての上層部の人間を見ながら思わず呟く。
あれだけ長らく皆を苦しめてきた連中も、終わるときはあっさりだった。

「それじゃあ姉さん。後は任せましたよ？」
「分かったわ。いってらっしゃい、依姫」
内部の問題はこれで終わった。けれど都市の外には妖怪の群れがいるのだ。

「残った兵士は全員都市外の妖怪の殲滅を行う！！」

「だいたいは終わったね」
都市の城壁から外を見ながら呟く。
前回とは違い、遮蔽物の何もない都市外では銃器はその性能を遺憾なく発揮する。
「あれは森の中で、しかも電撃作戦だったから何とかなっただけだよ。これが本来の戦力の差だよ」
誰にともなく呟く。人の持つ銃が火を噴くたびに倒れて行く妖怪。
前回とは正反対の状況。

これ以上は見る必要もないみたいだね。

「先生、これが最後の宇宙船ですよ」
永琳ちゃん設計の宇宙船を見ながら、そう言うと、八意先生は笑いながら、宇宙船へと向かっていく。

妖怪はその大半が殲滅され、後顧の憂いの無くなった人々は宇宙船を幾度と無く往復させながら、月へと向かっていた。
そしてこれが最終便というわけで、ボクのためなのか、知らないが、八意先生は最後まで残っていた。

逆に綿月姉妹や永琳ちゃんは、これからの月の指導者と、そのサポートという立場にあるので、真っ先に月に向かった。

「それでは、さようならですね」

「ああ、あの娘からも色々聞いたが、迷惑かけたみたいだね」
「いえいえ。けれどこれが最後と思うと名残惜しいものがありますね」
「そうだな、俺の場合はこの都市の風景も名残惜しい」
そう、だからなのかもしれない。
ボクがそれに気づかなかったのは。
そう、だからなのかもしれない。
彼がそれに気づいたのは。
最後だから先生の顔を見て話していたボクは気づけなかったんだ。
逆に最後だから都市を見ていた先生は気づいた。いや、気づいてしまったんだろう。
「危ない!!!」
先生がそう叫んで、ボクを押し倒した。
あまりにも突然のことに、何が?とか、どうして?とか、そんなことを聞く余裕も無く。
そして、半身を起すと、八意先生の体から血が流れていた。
「外したか、まあいい。それよりも、なぜ貴様がここにいる、禍津

鏡！！！！！」

そこに見知らぬ女性がいた。何となく月を連想させるような静かな服を着ていた。

「あ……あぁ……！！！！！」

崩れ落ちる。八意先生がボクのほうを見る。そして、先生を撃ったやつを見た。

「貴様は私たちが地獄の最下層にまで叩き落したというのに！！！！」

「月…夜見……様……？」

「……すまなかったな、男。せめて死後は安らかにな」

「なんだそれ……お前が……殺したんだろ……」

意味が分からない。この月夜見とかいう神の言ってることが理解できない。

「お前を殺そうとして撃ったんだがな、まさかこの男が庇い立てするとはな」

「梗……くん……ここまで……ありがとう…」

「ダメだよ、なんでお終いみたいに言うんだよ。永琳ちゃんはどうするんだよ！！」

「あの娘なら……きっと…」

言葉が途切れる、それが、終りなんだって気づいた瞬間、世界から音が消えた。

十六話　終り良ければ全てよし。つまり結果ってのは過程の意味を消すほど大事

これだけあくどい位置を取った月夜見さん、実は次回が出番最後の一発キャラなんだぜ？ひょっとすると、回想の中で名前だけ出てくるかもしれないけど。そしてさらりと張られた新たな伏線。正直これ以上張ってどうするんだ、と自分でも思うが、しかし微妙に必要なんですよ。ホント微妙ではあるけど。

しかし、これが青春時代の男女だったら感動ものだけど、見た目子供とオッサンだからなあ。正直萎えるわ。自分で書いておいてなんだが。

今回の一連の騒動の解説いりますか？

意味分からんというのなら、書きますが。

一応、複数回読めば分かると思うのですが、説明足りないというのなら感想か何かで言ってください。

次回、梗くんの過去が弾け飛ぶ。

十七話　今はもう逃げ惑う人々の悲鳴もない……しかし……私はまだ生き延びてる

ちなみに、タイトルはバイオハザード3の最初の辺りから。
あれって、最初にアサルトライフル撃つのがすごくもったいなく感じるので、作者はわざと一番最初のゾンビに咬まれてよろめかした後、ゾンビ無視して逃げます。
非常にどうでもいい話なんですけどね。

今回、書いてて作者はあまりの厨二思考に悶え苦しみ、三回くらい推敲してようやく投稿に至りましたよ……。これでギリギリのラインですね。

十七話　今はもう逃げ惑う人々の悲鳴もない……しかし……私はまだ生き延びて

誰も救えない。

誰も救われない。

悲劇的で、喜劇的で、楽観的で、客観的に。

認めることなどできるはずもなく。

けれど認識しなければならない現実はすぐ傍まで迫っていて。

だから、せめて。

死別でその罪を濯がせて。

悪夢でその罰を払って。

忘却で全てなかったことにしてしまえばいい。

結局、それだけの話なんだから。

八意先生を守る。そう自分で決めた。だったら、ボクはそうしなければならない。

ならない……はずだった。

自分で決めたことは守る。そう最初に約束したのだから……。

けれど……守れなかった。

……約束……した？

……誰と？

ジジ……ジジジ……

頭の中にノイズが走る。目の前のカミサマとやらが何か言ってる。けど、ノイズがうるさくて何も聴こえない。

じゃあさ……これが最後なら……約束しよ？

梗……キミが自分で決めたことだけは……絶対に守って。

でないときっと、後悔するから。

キミはボクで、ボクはキミなんだよ。ボクなら後悔する、いや、したんだ。だからきっとキミも後悔してしまう。

そうならないための予防線。何もかもでなくてもいい、キミが譲れないと思ったことだけは絶対に押し通して。

……約束だよ？

ドクンッ

胸が強く鼓動を打つ。今まで塞き止めていた何かがはじけとぶ。

「あ、あ……あああああああああぁぁぁっ！！！！！！！！！！！！！」

映し出せ！！！！！あの地獄を！！！！！

照らし出せ！！！！！あの悪夢を！！！！

大丈夫、ボクならできる。だってキミはボクなんだから。

……そうだろ……えにし…。

ごめんね……守れなかったよ……ホントに後悔したよ……心の底から……魂に届くくらいまで。

……でもさ……代償くらい……払わせてやるから……先生への、せめてもの償いになれば、そう思うから。

その時、ふと頭の中に言葉が浮かぶ。

鏡界を操る程度の能力。

これは……えにしの力だ……忘れて、蓋をしていたはずの、ボクの本当の力。

ホントに、良い時に出てきてくれるね。

きっと思い出してしまったからだろうけどね。

でもこれで、本当にやれる。

だから、思い出せ。

彼女は何て言っていた？

何て言ってあの地獄を作り出した？

思い出せ、彼女の記憶の底にあるその言葉を。

「擬(なぞら)えろ……移し代え、映し変えろ……鏡の向こうは夢幻にして無限なる地獄の世界……鏡に映すは我が身に在りし永劫なる記憶の無間(むげん)……その名《鏡獄無間》」

たしか、これが最後の一言。世界を塗り替える、悪夢の引き金。

「『そして世界は変わりゆく』」

空が染まる。銀色に。まるで鏡のように。

そして、そこから黒い光が溢れ空が黒く染まる。対照的に地は赤く燃え盛り、朱に染まる。

鏡からこぼれだした悪夢が、そして蠢き出した。

月夜見とか言う神様が目を見開いている。

もう、遅いよ。

……。

……。

……。

……。

ほんの一瞬の出来事。

気づけば、そこに生はなかった。

あったのは死だけ。

人間も妖怪も等しく死に。草木の一本すらも焼け落ちた、どんな戦場よりも地獄の光景が。

そして、命の安らぎのない、死の世界だけがそこにあった。

「逃げる人の悲鳴もない……けれど、私は生きている……何かそ

んなの昔のゲームであったなあ」

下らない、他愛もない呟き。けれど、それに言葉を返してくれる人はいない。

「兎と梗くんは寂しいと死んじゃうんだよ？」

ふざけてみてもただ後には沈黙しかない。当たり前だ、ボクが全部殺したんだから。

「結局、ボクたちはこういう風にしかなれないのかな……？」

狂って狂って、そして壊す。いつもそうなってしまうのだから。

せっかく彼女（えにし）がボクに望みを託したのに、ボクは結局壊してしまった。

だったら、こんなボクは永遠に眠ってしまったほうがいいのかもしれない。

荒廃した都市内で鏡を見つける。そこに足を入れ、体を潜らせると、そこは一番最初にいた湖だった。

「はぁ、疲れたよ、もう」

眠ろう。それがきっと、一番良いことなのだから。

だから。

誰もいないとしても。

最後に。

こう、言わせて。

「おやすみ……えにし」

そして、全てが始まった、あの湖へと身を投げ出した。

十七話　今はもう逃げ惑う人々の悲鳴もない……しかし……私はまだ生き延びてる

梗くん入水自殺の回。

というか、ここに来てまで能力が強化されます。鏡界を操る程度の能力って音だけ聞くと、紫と同じですよね。いつかネタとしてやってみようと思ってる作者だったり。

一章終りです。ここが一つの節目です。お付き合い下さりありがとうございました。次回から二話ほど過去編を挟んで、そして一気に時代を飛ばします。

名前だけは四話で出てきて、ここに来ていきなり存在感を増したえにし、なる人物は次で出ます。

厨二的嬉し恥ずかし技能解説

鏡獄無間↓かつて鏡の神が味わった永劫とも言える地獄の苦しみの顕現。鏡の向こう側から溢れ出す死の世界に、死ぬことのない死者でしか耐えることはできない、極限の地獄。

剣樹と刀山に貫かれ、灼熱の炎で焼かれ続ける。それを1中劫（例えの一例としては、一辺が１０ｋｍ以上の巨大な正方形の石を、１００年に一度柔らかな綿で軽く払い、その繰り返しで石が磨耗、消滅するよりもさらに長い時間）続けられる。鏡界に時間の概念はなく、刹那も永遠も同じものなので、見た目にはほとんど一瞬で何もかも終わる。

元ネタは仏教（多分）の概念の一つ、八大地獄の最下層、無間地獄から。詳しくはｗｉｋｉでも見てください。

十八話　ゲームで回想とかの映像シーンの部分でボタン押しすぎて間違ってスキ

此度と次話は過去編。

もーいくつーねーるとー。すーわーたーいーせーん。

タイトルは作者の後悔の塊です。

おおう、ポイントが転々録に追いついたよ……。

十八話　ゲームで回想とかの映像シーンの部分でボタン押しすぎて間違ってスキップしちゃうやつ

後悔と離別に苛まれて。

けれど、終わったはずの過去を見続けて。

後ろばかり向いていた。

終わらないものなどないのに。

それでも過ぎ去った時間がまだ終わってないのだと。

そう信じて、裏切られて、傷つく。

そうして。

終わった世界で。

終わらない夢を見続けた。

ごめんね。

心の中はその言葉でいっぱいだった。

ごめんね、永琳ちゃん、先生、それと、えにし。

守れなくて、ごめんなさい。

だから、言ったのに。

え？

守れないと、後悔するよって。でも、今回はキミの責任じゃないよ。

えに…し？

ふふん、まだボクは消えてない。って、言えたら良かったんだけど、残念ながらそうは言えないんだよね。今のボクはかつてのボク、雪代縁（ゆきしろえにし）の幻影でしかない。けれど、彼女と同じ記憶を持ち、同じ思考をする、彼女そのものとも言える存在。キミが無意識に溶かすことを拒否した、雪代縁（ゆきしろえにし）の名残だよ。

えにし、なの？

違うよ。でもボクの言葉は雪代縁（ゆきしろえにし）の言葉でもある。だから、よく聞いて。

……。

梗、キミ、ボクが最後の日、キミに言った言葉、忘れたの？

えにしの……最後の日に、言った言葉？

忘れてるみたいだね、もう一度思い出すと良いよ。それと、もう一つ。ボクの教えた、キミの名前の意味、覚えてる？

ボクの名前の……意味？

これも忘れてるのか、いや、ボクが持ってるのかもね。だからボクが消えればキミは完全に思い出すのかも。ふふん、今日も冴えてるね、ボク。そういうことだから、梗？しっかり思い出すんだよ？

えにし？

ホントはボクだってもっとキミといたかった。キミを愛してあげたかった。キミと一緒に生きたかった。でもね、ダメなんだよ。キミが生きるならボクは死ななければならない。ボクを生かすなら、キミは死ななければならない。でもさ、そんなこと言ったら、キミ迷うことなく死ぬでしょ？それじゃあ意味がないんだよ。

だからさ、梗。ボクはキミに託したんだよ。この力を、この記憶を。大丈夫、まだやり直せるから。前を向いて？最初にそういう風に決めたんでしょう？だったらほら、そうあるべきでないと。

えにし！！えにし！？

これが本当にホントの最後だよ。

梗……キミが自分で決めたことだけは……絶対に守って。

でないときっと、後悔するから。

キミはボクで、ボクはキミなんだよ。ボクなら後悔する、いや、したんだ。だからきっとキミも後悔してしまう。

そうならないための予防線。何もかもでなくてもいい、キミが譲れないと思ったことだけは絶対に押し通して。

……約束だよ？

えにし！！えにし！？えにし！！！！

……。

……。

最後の日に言ったこと……ボクの名前の、意味……？

彼女が言った。思い出せと、ならばボクは思い出すべきなんだろう。だってボクは彼女の物なのだから。

そう、一番最初の記憶は、小さな公園だった。

夕暮れの公園。

そこで、ボク、水無月梗（みなづききょう）は、雪代縁（ゆきしろえにし）によって創られた。

「こんにちわ。いや、もうこんばんわかな？」

「……」

「聞こえてる？ボクは雪代縁（ゆきしろえにし）。キミの名前は、水無月梗（みなづききょう）だよ」

「……きょう？」

「そう、梗。キミはボクの家族ってことにしておこう。そっくりだしね。まあ、背の低いところまで似ちゃったらご愛嬌ってことにしておいてね？」

「えにし？」

「そうだよ。キミのお姉ちゃん、雪代縁（ゆきしろえにし）だよ？」

それが彼女、雪代縁（ゆきしろえにし）との始まりだった。

雪代縁（ゆきしろえにし）は孤児だった。親の顔どころか名前すら知らない。そして彼女を引き取り、十五年間育ててくれた孤児院も一週間前に潰れてしまった。だからこそ、このタイミングで全てを行ったんだと、今になってようやく分かる。

彼女には不思議な力があった。鏡に触れると体が鏡の中へと入って行く。鏡の向こうはもうひとつの世界があって、そこでは望んだことは何でも叶った。その世界でだけは、世界は彼女に優しい夢を見せてくれた。

それは誰も知らない秘密だった。

やがて、少しずつ大人びていった彼女は、この力の異常性に気づく。けれど、それを恐れはしなかった。なぜならそれは彼女自身の力だから。

けれど、十歳の誕生日から彼女は夢を見始める。遥か昔の、彼女自身も知らないような風景がそこにはあった。

夢の中で少女は鏡に宿った神様だった。神様の宿った鏡は長い間色々な人に使われ続ける。そして、ある日、とても強い力を持った人間の少女の手へと渡る。不思議なことに、少女は鏡に宿る神へと気づき、話しかけてきた。

「鏡さん鏡さん。どうか私とお友達になってくれませんか？」

とても強い力を持った少女は、だからこそ人間の中で独りぼっちだった。それを哀れに思った神は少女と友人となった。とても幸せな時間を過ごすうちに、やがて神様と少女は互いに愛し合った。幸せだった時間はもっと幸せになった。

そして、ある日、少女が死んだ。集団の中の異物に耐えられなかった一人の男が少女を殺してしまったのだ。

神様が怒った。本来ちっぽけな力しかなかった神だったが、少女に触れるうちにその力を増し、その力は現実に鏡の世界を映し出せるほどとなった。けれど、その力で男を殺そうとした神様だったが、その地にいた他の神様によって止められ、その身は地獄の最下層、無間地獄へと落とされた。

そして、長き苦しみの中、神様はひたすら世界への呪いを呟き続けた。

そんな、悲しくも恐ろしい夢を見た。彼女は少しずつその力が恐くなった。そして自身の異常に耐え切れなくなったその時、自身の中から溢れてくる力に気づく。

鏡に映った世界がこちらにまで溢れ出そうとしていることに気づいたのは、すぐだった。

このままではダメだと思い、彼女は必死になって力を抑えようとしたがけれどそれも無駄だった。

そして十五歳の誕生日、世界に地獄が溢れた。それは、夢の中の神様が苦しんでいた無間地獄そのものだった。

彼女の力の暴走に巻き込まれ、彼女のたった一つの居場所である孤児院も消え去った。

そう、自身の力で、自分の居場所を消してしまったのだ。

その一週間後のこと。

夕暮れの公園で。

彼女は、自身の写し身を生み出した。

そしてその十日後。

雪代縁（ゆきしろえんにし）は、水無月梗（みなづききょう）によって、殺された……。

ボクが彼女に創られて九日が経った。

あの後ボクは、彼女の能力によって形作られた彼女のいた孤児院に連れて行かれた。

そして誰もいない孤児院に二人で生活を始めた。

彼女は自身を姉と称したが、むしろ母親のような態度でボクに接した。

幸せ、と言うのだろうか？少なくとも、嫌な気はしない。

彼女自身を映してボクを創ったのだとしたら、ボクのこの気持ちは彼女も感じているのかもしれない。そう思うとどうしてか嬉しくなった。

だからこそ、この胸の不安が分からなかった。

その日、どうしても気になっていたことがあって、朝食の時に彼

女に聞いた。
「ねえ、縁（えにし）」
「なあに？梗」
「どうしてボクを創ったの？」
瞬間、彼女の表情を凍りつき、その手に持っていた箸を落とした。
「何で……知って…」
「ボクは縁（えにし）を元に創られた。だったら、これまでの情報から縁のやったことくらい分かるよ」
一つ目、双子と言っても過言ではないほどにそっくりな姿。顔が似ているならまだしも、背丈や体重まで同じというのはいくらなんでもおかしすぎる。
二つ目、あの公園より前の記憶がないこと。縁（えにし）が色々教えてくれたのも、あの公園にいた時よりも前の記憶を失ったのではなく、そもそも最初から持っていなかった、と考えれば符号するものがある。
「何より、縁（えにし）が名前をくれたあの時、ボクははっきり縁（えにし）のものだと確信したよ」
あの瞬間が間違いなく初対面だった。だからこそ、あの感覚がボクがまともな人間じゃないことを教えた。
固まったままの縁（えにし）を余所に朝食を取り終えたボクはもう一度尋ねる。
「どうしてボクを創ったの？縁（えにし）だって知ってるはずだ。今日が最後だと」
縁（えにし）の能力で創ったものは、どんなに長くても十日で消える。それは彼女自身が分かっていることだ。だからこそ、この十日間、ただ漫然と過ごしていたことを不審に思っていた。

結局、縁は何も答えなかった。

そして、最後の日の夜。

後一時間もしないうちに、ボクは消える。

結局、縁は何がしたかったんだろう？

そう思っていたその時、後ろに人の立つ気配がする。

「縁？」

そこにいたのは縁だった。

「……ねえ、梗」

「どうしたの？縁」

いつもみたいに、下らない冗談でも言うのだろう。この九日間がそうだった。

だから、その後、縁が言った言葉が信じられなかった。

「梗……私を…殺して？」

十八話　ゲームで回想とかの映像シーンの部分でボタン押しすぎて間違ってスキ

最初は縁に振り仮名は無かったはずなのだけれど、縁が縁（えにし　ゆかり）に見えてしまうので、振りました。
まず性別からして違うのに、どうにもスキマ妖怪の息子が脳裏にチラついた。

この頃の梗くんは、ちょっとクールな印象。生まれたばかりで割りと感情が安定しないので、キャラが崩れやすいです。

以前逆お気に入りユーザーが１０人超えた記念で特別編やってた作者さんがいたので、そういうのもありかなと思ってたんですよ。で、９人だったしまだかな、と思ってたらいきなり１２人に増えてた！？というわけで、過去編終わったら何かやるかも。

十九話　冬眠から目覚めた生き物は、眠る前と様変わりした景色を見て、何を思うのか

ヤックデカルチャーーーーーーーーー！！！

……すいません、眠気と五話連投で作者も疲れてるんです。
きっとそうに違いない。これが素だったら、作者今頃ムショ暮らし…。

さて、作者個人としては主人公よりも好きになってしまった雪代縁との過去編最終回です。

今更思うけど、完全オリジナルで、作者が一から考えた話のはずなのに、どこかで同じような話を見たような気がするのはなぜだろう。

十九話　冬眠から目覚めた生き物は、眠る前と様変わりした景色を見て、何を思うのか

「何を、言ってるの……縁（えにし）？」

ただただ信じられない。いや、信じたくなかった。

「ボクはね、もう疲れたんだ、いや、耐え切れなかった。この力の重さにね。だから、キミを創り出したんだ。ボクの全てを継いで、そして、ボクを終わらせるために」

それがボクの。

「それがキミの……存在理由だよ」

全身が震える。立っていられくなるほど足が揺れる。痙攣してるのではないかと思うほど手が震える。

止めて。止めろ。ヤメロ！！！

ボクはゆっくりと縁（えにし）に近づく。けれどそれはボクの意思ではなかった。

ピタリと、縁（えにし）の目の前で停止する。そして、その腹部に手を伸ばす。

「止めて、止めてよ。ヤメロ！！！止めさせてよ、縁（えにし）！！」

「そうだよ、そのままボクを殺して。そうすれば、キミは水無月梗になれる」

腹部にゆったりと置いた手がぐっと突き出され。

「あああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！」

「く、あ……」

そして、縁（えにし）の腹部を貫いた。その手には一本の刃物が握られていた。それは縁（えにし）の力の残滓。鏡界が世界を侵し、そして顕現した、一本の刃物だった。

「ふふ……これで、ようやく終われる」

「やだよ、縁（えにし）。ボクを、置いて行かないで、縁（えにし）のいない世界なんかに、ボクを捨てないで！！」

「ダメだよ。これからキミは、水無月梗として生きて行くんだ。この世界にキミは存在しないから、別の世界になるけどね」

「別の世界……？」

「そうだよ。想像世界。誰かが想像し、それを複数の人間が観測することによって形作られる可能性の世界。ボクたちみたいなのが生きるには……くふっ、ちょうど良さそうな世界だよ」

言葉の途中で、縁（えにし）が吐血する。それを治療するような行動が、今のボクには取れない。縁（えにし）がそれをさせない。縁（えにし）に創られたボクは、未だ自身の存在を持たないボクにはそれに抗う術がない。

世界にも許容量というものがある。ならばありもしないものを創りだす縁（えにし）の能力はその許容量を無視して顕現してしまう。だからこそ十日間だ。それが世界に消されないための限界時間。

そしてだからこそ、一つだけ映し出されたモノの時間制限を失くす裏技が存在する。それは元となったものを消すこと。物ならば破壊し、者ならば殺す。存在が同じ鏡映しだけに、世界は生き残ったほうをオリジナルと認識する。そうしてようやく、映し出されたモノは、その世界での存在を得る。

つまり、ボクが生き残るには、縁（えにし）を殺さなければならない、そういうことだ。

だからこそ、彼女はボクをこういう風に創ったんだろう。この瞬間に、躊躇わないように、確実に殺せるように。

「キミと話すのもこれが最後だと思うと寂しいね。うん、最後か」

「最後だなんて、嫌だよ……縁（えにし）」

「じゃあさ……これが最後なら……約束しよ？梗……キミが自分で決めたことだけは……絶対に守って。でないときっと、後悔するから。キミはボクで、ボクはキミなんだよ。ボクなら後悔する、いや、したんだ。だからきっとキミも後悔してしまう。そうならないための予防線。何もかもでなくてもいい、キミが譲れないと思ったことだけは絶対に押し通して。……約束だよ？」

「……分かった。約束する、だから、だから……」

だから、どうするのだろう？

今からどうやって治療しても、もう縁（えにし）は。

「それから、ボクの願いを聞いてくれる？」

震える声で、うん、と発する。

「キミは誰かを幸せにできる。少なくとも、ボクはキミといた九日間幸せだったよ。だから、傷ついて、失敗して、迷っても、それでも最後は真っ直ぐ前を向く、芯の強さ。それが梗っていう名前に込めた意味。その名の通り、キミは何があっても前を向いて生きて。そして、その力で誰かを幸せにしてあげて」

「分かったから。だから……もう」

「けどね、最後にはキミも幸せにならないとダメだよ？それがボクの望みで、ボクのキミに込めた希望なんだから」

だからね、梗。

大切な、私の子供。

幸せにね。

その言葉を最後に、ボクは気を失った。

そして、気づいたら、あの湖にいた。

あの部屋にあった鏡で、縁（えにし）が最後の力でボクを送ったんだろうね。

そして、鏡すらないあの時代にあった鏡。つまり、水鏡を通して、あの湖に出てきたんだろう。

何でそれより前を全部忘れてたのか知らないけど、多分縁（えにし）の仕業だろう。きっとボクは、あのままなら冷静になれず、自殺していただろうから。

そして、だからこそボクの能力はあの頃のままだったんだろう。鏡を司る程度の能力。この世界に来ることによってあてはめられたボクの能力。でも今は違う、鏡界を操る程度の能力へと変わった。この世界に来た当事のボクなら縁みたいに暴走させたかも知れない、けれど蛟となった、妖怪で神となった今のボクなら暴走させるようなことはないだろう。人間だったころとは違うんだから。

もし、縁(えにし)が記憶を忘れさせることがなければ、ボクは自殺するか、鏡界を操る程度の能力を暴走させて死んでいただろう。

もし、あの時ミズチと出会わず、またミズチを殺さなければボクは、そもそも何もかも忘れたまま垂れ死んでいただろう

もし、妖怪であり神であるミズチ以外、例えばその辺の妖怪になっていても、きっとボクはこの能力を暴走させて死んでいただろう。ミズチだからこそ、この強大な力を使え得るのだ。

奇跡的だと思った。偶然の一致。どれか一つでも違っていたなら、ボクはもうこの世にいないだろう。

震える。体の感覚すらない、夢の中のようなこの世界で、それでも体が震えたような気がした。

「そう……だね。ボクは生きなくちゃならないんだね。そして、幸せにならなくちゃ」

それが、縁(えにし)の。ボクの母さんの言葉なのだから。

目を開こう。最後に湖の中に沈んだけど。多分、蛟だから大丈夫だろう。

ごぼごぼ、という音が聞こえる。

それが口の中から出た気泡だと気づいた途端、体の感覚がストンと戻った。

ゆっくりと体が水中を上昇していく。水面に顔が出た時、ふと目を開けた。

「あれ？」

視点が何か違う。

ふと自分を見下ろすと、白い竜のようなものがそこにいた。

「うわ、いきなり敵！？」

思わず身構えそうになったが、それが自身の体だと気づいた瞬間。

「えええええええぇぇぇぇ！？」

驚きの声を上げていた。

「何で、何でボク変わってんの！？能力が変わったから！？」

と、そんなことを言っていると、ふと頭の中にいつもの情報が。

竜。神話の生物。古来より神秘的な存在として位置づけられてきた。竜は神獣・霊獣であり、水中か地中に棲むとされることが多い。その啼き声によって雷雲や嵐を呼び、また竜巻となって天空に昇り自在に飛翔すると言われる。

「りゅ、竜！？ドラゴン！？キターーーーーって、何でやねん！！！！」

何で！？ミズチだったはずでしょ？なんで竜になってんの！？あ、また何か浮かんできた。

「泥水で育った蝮（まむし）は五百年にして蛟（雨竜）となり、蛟は千年にして竜（成竜）となり、竜は五百年にして角竜（かくりゅう）となり、角竜は千年にして応竜になり、年老いた応竜は黄竜と呼ばれる」

「し、しし、し、進化だーーーーーーーーー！！！って、ポケモンかよ！！」

ていうか、今いつだろう?あれからどのくらい経ってるんだろう?いや、待てよ。蛟が竜になったってことは千年も経っての!?

「うーむ、てことは都市残ってないかもなあ、無人だし。でもきっと月の人は生きてるだろうなあ。永琳ちゃんが言うには不老長寿に近いらしいし」

って、永琳ちゃんか。やっぱり一度は謝らないとな。約束、破っちゃったし。

「まあ、取り合えず」

湖を出て、一旦周囲の探索かな?

ぐーーーーー

それと、現金なボクのお腹も満たすことにしよう。

十九話　冬眠から目覚めた生き物は、眠る前と様変わりした景色を見て、何を思うのだろうか。

以前から作者自身も思ってたんですが、梗くんの能力って、なんか鏡っぽくないですよね。答えがこれです。元は別世界の能力であって、それを無理矢理東方世界の能力に当てはめたから能力の名称と内容に多少の差異が出るわけです（と、いう言い訳を思いついた）。

実はこの過去編、八話辺りを書いてる時に思いついた後付の設定なんだぜ？って言ったらどうでしょう。ちょっとは驚きますか？

四話書いてる時点で名前が出てきた縁。あの時点では名前以外何も決まってなかったりして……。

次回から元のノリに戻します。シリアスはここで終りだ！！！

究極の笑いと至高のノリを学ぶため、水無月梗は明日を駆ける！！

ま、嘘ですが。

あ、ところで。梗くん蛟から竜に進化しました。幻想郷にどんな風に絡むか、この時点ですでに予想できるかもしれませんね。

梗くんと縁の丸秘設定。見るなよ？絶対に見るなよ？（前書き）

タイトル変更しました。フリですね、分かります。
読み直して、本編との相違点があったので、修正しました。

梗くんと縁の丸秘設定。見るなよ？絶対に見るなよ？

名前：水無月　梗（みなづき＝きょう）
種族：妖怪兼神（最近神力の割合のほうが多いので、２割妖怪、８割神くらい）
年齢：多分１００歳前後（湖で眠る前）→一億歳くらい（目が覚めてから）
容姿：身長１５６ｃｍ　体重４２ｋｇ　黒髪短髪銀目→銀髪短髪蒼目（蛟になった時）
性格：諦観主義。面倒ごとは諦めて流される。けれど、自身が決めた選択だけは絶対に曲げない。こんな性格なのに、好奇心が強いので面倒ごとばかりに巻き込まれる。あまり思慮深く無い。というか思考することを面倒がっている。本気の時だけはマジメに考える。その時は意外と思慮深い。頭の回転自体は悪くない。
口調：一人称「ボク」。パニくると敬語になってしまう。普段は縁を真似した口調。本来はもうちょっとクールな口調。
所属：とある村の祭神《水月》
能力：鏡を司る程度の能力（元から持っていた能力）
　→鏡界を操る程度の能力（縁を殺したことを思い出したとき）
　水を司る程度の能力（ミズチを写し取った時に入手）
　→坎を創造する程度の能力（竜になったとき）

備考
いつの間にかタイムスリップしてしまった人間。能力に目覚めた時に、目の前にいたミズチを写し取ったことで、ミズチとなる。
実は、自身の低い背のことをかなり気にしている。そして、妖怪化

してしまったので、もう伸びないと、最早諦めに達している。だが、チビといわれるとブチギレる。

東方シリーズについては、詳しく知らない。～程度の能力、というのがあること。スペルカードというものがあること、シューティングだということ。それくらい。二次創作は読んだ事はないが、友人からこんなのがあると聞かされたことはある。

目覚めたとときに蛟という妖怪兼神様を能力で写し取ったことで蛟と同じ存在になり、それを殺したことで存在が確立された（詳しくは後述の能力のところに記載）。

何故か月夜見に『禍津鏡（まがつかがみ）』と呼ばれる。

実は、雪代縁が自身を写し取った鏡写しの存在。その縁を殺し、鏡界を操る程度の能力を得る。

名前：雪代　縁（ゆきしろ－えにし）

種族：人間

年齢：故１５歳

容姿：身長１５６ｃｍ　体重４２ｋｇ　銀髪セミロング黒目

性格：お茶目な性格。ただ普段は猫被りなので、あまり知られてはいない。梗以外に自分を見せることがない。猫被っているときの性格はクール。鏡写しにした時、この辺りが梗と反転したと思われる。

因みに、人を驚かすのが趣味。
口調：一人称「ボク」。優し気な口調（～だねえ、だよね～、～なんだよ？）普段はクール口調（猫被り用）。
所属：？？？？
能力：鏡界を操る程度の能力

備考
水無月梗の双子の姉にして創造主。正確には、雪代縁を写し取り、映し出した存在が水無月梗。
鏡界を操る程度の能力の所有者。因みに、この能力の劣化版が鏡を司る程度の能力。
実は、彼女だけが知る、能力の秘密がある。生物を鏡映しにした時、本来なら時間の経過と共に消えてしまうその存在を繋ぎとめる方法がある。それは複製（コピー）が、本人（オリジナル）を殺すことである。梗が蛟となった本当の理由は、これである。一生に一度とか、そういうものは、植え付けられた偽物の情報に過ぎない。本来、複製は、本人よりも幾段か劣った存在となるのだが、その存在を繋ぎ止めた時、本人と同等の力を得ることとなる。
本編開始の直前の十日間で梗に殺されている。

梗くんと縁の丸秘設定。見るなよ？絶対に見るなよ？（後書き）

次回ケロちゃん登場。口調難しくて、辟易してます。

どうにも鏡界を操る程度の能力の詳細が分かり難いようなのでそのうち能力解説出します。

二十話　ゲテモノ喰いは止めよう、そう思う日でした。何のことか分からない？

前になんか番外編やろうかな、とか言ってたけど、自分の小説読み直してみると、まだ月終わったばかりなのに、すでに２０話という現実に、早く話し進めろよ、と思ったので無しにしておきます。てわけで、今回はケロちゃん登場の回。

ケロちゃんの口調が難しかったので、違和感感じたかたは教えてください。

久しぶりの東方異世界譚だ！

二十話　ゲテモノ喰いは止めよう、そう思う日でした。何のことか分からない？

前回までのあらすじ

激戦の末、橙の助けもあって暗黒医師エーリンたち一行を撃退した梗たち。そして梗たち一行が進む先にあったのは、エーリンが支配するゲッコー都市。そして立ちふさがるのはエーリンの弟子ヨッちゃんとトヨねぇだった！！

自身に神を降ろし戦う強敵ヨッちゃんの前に、苦戦する梗たち一行。この事態を打開するための一手を考える梗。そしてその時、貧乏巫女レイムが動いた！！

久々の電波終了。

さて、現実逃避はいい加減止めよう。

目の前で倒れているのは気絶したカエル……カエル？……カエル？？……の帽子を被った幼女。

「どどど、どうしよ？」

事の起こりはそのちょっと前。

「お腹空いた」

空腹に耐えかねていたボクが森の中を歩いていた時のこと。

ピョン

目の前に見たこともないような巨大なカエル。

「でか!?」

その時、ボクの頭によぎったのは縁の知識。

カエルって、焼くと鶏肉みたいらしい。

……え、これ食べるの?ボク?食べようって言うの!?

前もよりもよって蛟なんて蛇食べたし、大丈夫じゃね?

食べたんじゃない!!食べさせられたんだ!!!

お腹空いてる、もうこうなったら四の五の言ってられなくないかなあ?

え!?またこのパターンなの!!!!??

と、そんなことを考えていると、ビッグなカエルがこちらに気づく。

「ごわあああ～～～、ぶはっ」

いきなり発した声に驚き、思わず本気で殴ってしまった。

やば、進化した竜の身体能力がどれくらいかは分からないが、前より弱くなっているわけないだろう。カエル潰れたかな？とかそんなことを思ったあら。

「きゅ～～」

そして冒頭に戻る。

「どどどどど、どうしよう！？」

困った困った、どうしよう。↑外見子供には滅法弱い。

「う、うーん」

は、幼女が起きた！！

「だだだ大丈夫！？」

「はっ、何かすごい衝撃があったよーな。って、ああ！！」

ボクを指差し驚く幼女。

「誰が幼女だ!!」

地の文は読まないで欲しい。

「それより、あんた何者だい？妖力は感じないけど、人間じゃないよね。でないと私がたったの一撃で伸びるわけがない」

「ということはキミは人間じゃないんだ。妖怪？それとも神様？」

神といえば、あの月夜見とか言う神どうなったんだろう？多分、死んでない気がする。

死体は見なかったし。神様に死体があるのかどうかは知らないけど。

「私を知らないのかい？ふふん、聞いて驚け、私は洩矢神だ!!」

ふーん。洩矢神ね。ところで。

「洩矢神って何？」

あ、ショック受けて固まったよ、この幼女。

「だから幼女って言うな!!」

だから地の文は読まないで欲しい。ていうか、結構簡単に立ち直ったね。

彼女、洩矢神から聞いた話だと、土着の神の頂点にいるのが彼女、洩矢神らしい。

「ふーん。そんな洩矢神様がなんでこんなところにいるの？」
「あんた、人の話聞いてた？私、土着の神様の頂点」
「うんうん、偉い偉い」

そう言って頭を撫でてやると、一瞬うっとりとし掛けて、はっとなり飛び退ってこちらを威嚇してくる。
何と言うか、小動物みたいな神様だね。

「バカにするのもいい加減にしな」
「してないよ。それで、さっきの質問だけど、なんでこんなところにいるの？少なくとも、ここは洩矢神様の土地じゃないでしょ？」
この辺り一帯は実はボクの土地だったりする。正確には神様としてのシマ、という意味で、だが。

「まあいいけど、実はこの辺にある村は私を信仰しなくてね、何でも《水月》とか言う水神を信仰してるらしいからそいつを倒して私を信仰させようかと思ってね」
水月ね……そっか。

「あのさ、洩矢神様」
「なんだい？」
「それ、多分ボクだよ」
「……はい？」

たっぷり四拍置いて、疑問系の答えが返ってきた。

「うん、昔水月って名乗って、この辺で水神やってたことあるから、この辺の人で水神で水月って名前ならそれきっとボクだよ」

そっか、眠る前と比べものにならないくらい神力増えてたから不思議だったんだ。まだ信仰してくれたんだね。まあ、あの大戦で妖怪もほぼ全滅しかけたから、襲われることが無くなってより一層強まったのかな？

縁の時代の人間なら、逆に忘れて行くんだろうけど、ここの人たちは平和が維持されているのは神様のおかげ、とか思ったのかもね。信心深いことだよ。

「そうか」

意外なところで目的の人物（つまりボクのことだね）に出会えたことに、呆けていた洩矢神様だったが、ゆっくりとこちらを見つめて。

「なら、あんたを倒してしまえばいいのか」

言葉と共に、大地が鳴動し、錐のように突き上げてくる。

「わおっ」

驚きの言葉と共に、ウォーターカッターで切ろうとして。

「あれ？」

予想よりも遥かに大量に出てきた水が突き上げてきた土の錐だけでなく、その下の大地まで切裂い、いや抉り取った。

何か前よりも強くなってる？

ふと疑問に思っていると、頭の中に言葉が浮かび上がってくる。

坎を創造する程度の能力。

何のこと？

いつの間にか、水を司る程度の能力が、意味の分からない能力に変わってたのだが、とりあえず感覚的に同じようなことができることはわかるので、とりあえず使ってみる。

「押し潰せ」

言葉と共に、右手をかざすと、川一本分はあるのではないかというほどの大量の水がどこからとも無く噴出した。

「なっ！」

洩矢神が驚きの声をあげ、そして水流に飲まれる。

「わお」

そしてボク自身も驚きの声を上げる。ボク自身は大きな水球を出すくらいのつもりだったのだが。まさか川一本分くらいの水が出てくるとはねえ。やっぱり、この能力って以前の能力の上位互換なのかな？

まあ、いいか。とりあえず。

走り出す。水が暴れた結果、森の一角が抉れる。ぬかるんだ土の上を疾走し、水に押し流された洩矢神を追う。

音よりも速く走り抜け、数秒もしないうちに洩矢神の元に辿り着く。水浸しになりながらもこちらを探していた洩矢神を。

「光になれ～～～～！！！」

とか、言いながら思いっきり蹴り飛ばした。

二十話　ゲテモノ喰いは止めよう、そう思う日でした。何のことか分からない？

なんかなあ。結局最後は思いっきり蹴ってるんじゃん。と思った作者。

見知らぬ幼女には弱いけど、神様でしかも自分の敵には容赦ないですよ？梗くんは。

設定でも書いてた『水月』という名前。今言っておくと、洩矢神、とかあるようにだいたい神様の名前は苗字なので、水無月神、にしようとしたんだけど、水神なのに水無月ってないよな～、と思って無を抜いて、水月にしました。と、梗くんが考えたことにします。

最後のは……まあハンマーじゃないけど。いいですよねｗｗ

二十一話　おかしいな、ボクのはただの正当防衛だったはずなのに。なんでこんなことに？

更新できた……ちょっとケロちゃんの口調に自身がないので、色々言ってくれるとありがたいです。

二十一話　おかしいな、ボクのはただの正当防衛だったはずなのに。なんでこんなことに？

「ぐすっ、ひっく。負けたよ～。どちくしょー。うわーーーん」

目の前で、自棄酒しながら泣き喚く幼女。しかも絡み酒なので、ボクまで付き合わされる。でも原因はボクなのでその度に怒り出す。そして負けた事実に泣き、また絡む。

何この悪循環……？

今、この瞬間、猛烈に言いたい。

「どうしてこうなった……」

探すこと五分。ようやく飛んで言った洩矢神を見つけた。

いや、まさか蹴りだけで森の端まで吹っ飛ぶとは。

「だ、大丈夫？」

いや、正当防衛だから、聞く必要もないんだけど、でも何となくあの外見だと聞いてしまう。

幼女を虐待する中学生（外見縁そっくりなので）。

うん、お縄を頂戴しちゃいそうな構図だよね。

「ぷはっ、ぐっ」

目の前でぷるぷるしながらそれでも頑張る洩矢神。
傍目から見れば、どう考えてもボクが悪者だよ。

「えっと、もう止めにしない？」
「バカにするな、私はまだやれるよ！！」

どうしよ？これ続けても、ボクにとっては何の得も無いんだよね。

ああ、面倒だ。考えないように……しちゃダメか。さすがにこの状況で流されると、本当に悪者になる。

うーん。どう考えても負けはしないけど、これ倒しちゃうと不味いし。ていうか、土着の神様の頂点ってことは、洩矢神倒すと、もれなく他の神様から逆襲される？あれ、いよいよ不味いことになってきたな。ボクだけならまだしもボクの土地の人はずっとボクを祭ってくれた人たちだし、うーん。

「よし、こうしよう。洩矢神」
「……なんだい」

「服従なんて出来ないから、不干渉か同盟ということで」
「……は？」

「今のまま勝てる？そんなわけないよね。ここまで圧倒的にやったんだ。それくらい分かるでしょ？」

さすがにそれくらいは分かるのか、悔しそうに口を結ぶ。
「うんうん、分かってくれるならそれでいい。こっちとしても、洩矢神を倒してそっちを敵にするのは、ボクはともかくこの土地の人にとって好ましくない。だから、互いに妥協して不干渉か同盟をしよう。つまり、ここは手打ちにしよ？」

「そんなことできるわけない！」
「じゃあここで消える？」
手を掲げる。集まれ、と念じると、空を覆うほどの巨大な水球が出来上がる。それを見た洩矢神が青ざめる。

ただの水、と思うかもしれないけど、これが意外と馬鹿に出来ない。例えるなら津波。あれだって結局はただの水だ。洪水。これもただの水。けれど実際に人は死ぬし、物は壊れる。エネルギーを得ると水というのは凶器になる。

この場合は位置エネルギー。空に漂う大量の水が自らの重さに引かれ、落ちてくる。
飛び込みで、十メートルを超えると、水はコンクリートと同じくらいの硬さになるらしいよ、まあこの場合の力は抗力だけど。
まあ、つまり。数百メートル近く上空にある数百トンもの水の破壊力は、きっとボク自身の想像を絶する。
しかも、これ自由に動かせるみたいだし、下向きに加圧すればこの辺一帯を消し飛ばすくらいはできる。
ボクはともかく、手負いの洩矢神が生き残れるかどうか。

まあ、最後はまるっきり脅迫だったけど、それで一応の決着をついた。

あれ？なんかボク悪人みたいじゃなかった？おかしいな。洩矢神は殺さなかったし、最後は話し合いで決着をつけたのに。しかも、ボク得るものないんだよ？なのに何でこんな悪者っぽいんだろうなあ？

くそ、これが幼女というものなのか？ずるいぞ幼女。

で、とりあえず色々話合おうということで、どっかその辺でも良かったのだけど、お腹減ったのを思い出して神社に行ってみることにした。一応言っておくとボクのだよ？半年程度とは言え、ちゃんと水神様として働いてたし、半ば神力を得るためだけの行動だったんだけど、村の人たちが神社を作るって言ってくれた時は嬉しかったな。

などと言っていると、ありました。以前にボクを祭っていた村のちょっと外れに、意外と立派な神社が。実はボク、自分の神社がどこにあるのか知らなかったんだよね。いやさ、だって作ることが決定してから数ヵ月後には戦争があってボクその直後に寝たし。その後に作られたんだからボクが知ってるはずないんだよね。

「水月神社……うん、これだね」

石段を登り、境内に入る。一応これが初めましてなんだけど。

やっぱり、こう言うべきなのかもしれない。

「ただいま」

神社。神の社（やしろ）。本来の役割は神を奉るための祭場、祭壇。洩矢神が言うには、人型の神は割りと神社に住んでることが多いらしい。

「洩矢ちゃんは自分の神社に住んでるの？」

「ちゃん付けするな」

「いいでしょ？ボク勝ったんだし」

「ぐっ」

負けたこと結構気にしてるらしい。どうにも土着神の頂点としての矜持があったらしいね。まあ、ボクには関係ないけど。

境内を歩いていると、本殿のほうから巫女さんらしき人が出てくる。

「参拝ですか？」

「違うよ？なんだろう？強いて言うなら、家に帰ったってとこかな？」

「はい？」

まあ、いきなり言っても分かんないかもね。

「水月神……神力隠してちゃ分かるものの分かんないよ」

後ろでぼそっと教えてくれた洩矢神改め洩矢ちゃん。なるほど、

そういうことか、と神力を少し出す。

「!?」

巫女さんが驚いてる。まあ、そんなことはどうでもいいんだけど。

「ここって水月神社でしょ?祭神は水神の水月であってる?」

こくこく、と頷く巫女さん。対称的にボクは満足気に頷くと。

「えっと、ボクがその水月神だよ」

取り合えず。

巫女さんがえらい剣幕だった、とだけ言っておく。

正直言って、いきなり来た知らないやつが自分は神様です、とか言って信じてもらえるのかな、とか思ってたんだけど、案外あっさり信じてもらえた。

「そりゃ、神力出せば人間なんだから疑えないよ」

神力は信仰さてたモノしか持てない力だからね。

「というより、神力を感じると人間ってのはどうしても萎縮するんだよ」

「そうなの？威光ってやつだね」

「私はあんたみたいなのに神力の量で負けてるのが何よりも悔しいよ」

「年季の違いだよ」

そうそう、さっき巫女さんからボクが寝ている間の出来事（古すぎて伝承になってるらしい）を聞かせてもらったんだけど、とんでもない事実が判明。

あの都市の人間と妖怪との間で起こった全面戦争から、なんと一億年くらい経っているらしい。

うそーん。

とか誰か言ってた気がするけど、無視して。

一億年って……。ていうか、蛟が竜になるのは千年じゃなかったの！？蛟（偽）だからか？

と思って洩矢神に聞いてみた。

「知らないよそんなこと。けど、その話がまず正しいのかい？」

なるほど、と思った。今まで能力の伝えてくる情報を盲目的に信じてたけど、ボクの能力なんだから、あくまでもボクの主観的な情

報なのかもね。誰かが教えてくれてるわけじゃないんだから。
目から鱗の話だったよ。これからは能力の過信は止めようと思ったくらいには。

「しかし、一億年経ってもこの辺はあまり変わらないんだね。そりゃ町並みは成長してるけど」
話は戻って、現在洩矢ちゃんと神社の本殿にいます。普通なら恐れ多いのかもしれないけど、祭神がはボクなんだからいいよね、別に。

「一億か……未だ千にも満たない私には想像もできない年数だね」
「て言っても、百年くらい後はずっと寝てたけどね」

「一億年近くも神の仕事放棄してたのかい！？」
「うーん。多分、無意識的に何かしてたんじゃない？実際、ボクが寝てからもずっとこの村は襲われてないらしいし」

「そんなことってあるのかな～？」
うんうん唸ってる洩矢神（やっぱり語呂が悪いので戻した）。

「失礼します」
巫女さんが本殿にやって来る。お腹減ったと言ったら、すぐに食事をお持ちしますとか言って、どこかに行ったんだよね。

「あの、空腹だとのことなので、これを」
そう言って巫女さんが差し出したのは、おにぎり。三角おにぎりってなんか美味しいよね。ただ塩振ってるだけなのに、一味違った味わいがあるんだよねえ。

「水月神様にこのようなもので申し訳ありませんが」

ていうか、この巫女さん、何でかさっきから異様に恐縮してるよね。

「神と巫女なんてどこもそんなもんだよ。後は神力出しっぱなしだからじゃないかい？」

そうなのかな？というか、また地の文読まれた……。

「まあ、いいや。お腹空いたし、おにぎり食べよっと」

と、お腹を満たすためににおにぎり食べたところまでは良かったんだよ。

「あの、これをどうぞ」

そう言われて差し出されたのは御神酒。神様にお供えする酒だったよね。

「あ、うん。ありがと」

そう言ったのは、たしか一時間くらい前だっけ？

その間に。

うーん、洩矢神も飲む？ボクはこんなに飲まないし。

じゃあ、ちょっとだけね。

というやり取りがあって。

「ぐすっ、ひっく。負けたよ～。どちくしょー。うわーーーん」

冒頭に至る。

「だいたい、一億年も何で信仰が続いてるんだよ～。この辺の人間たちはそんなに信心深いのか」
「みたいだね。ボクもまさかそんなに時間が経ってて、しかもまだ信仰してくれてるとは思わなかったよ」
「どちくしょー。自慢かい？自分の信仰の自慢かよ～～～！！！」
「そっちから振ったんでしょ！？ていうか、ウザイなこの絡み酒。しかも泣き上戸で怒り上戸ってどんだけはた迷惑だよ」
「私だって、私だって、精一杯やってるのに。うわー、負けたよ～。負けちゃったよ～」
「しかもループするって、もう誰か何とかしてくれこの酔っ払い」

ていうか、そもそもなんで神社に来たんだっけ？

もうそれすら思い出せないほど、頭がぼうっとする。

ボクなんてあんまり飲まないのに……。↑過去に八意宅で飲むだけは飲んだことがある

あっついし、くらくらするし、だんだん眠くなってくるし。

起きてからまだ一日目だって言うのに。

ハードだな～。

あ～～うん。

おやすみ～～♪

二十一話　おかしいな、ボクのはただの正当防衛だったはずなのに。なんでこんなことに？

最後は寝オチですｗｗ

ま、色々いいたいけど。取り合えず、ポイントが２００超えました。
このような稚拙な文を評価していただきありがとうございます。

次は洩矢神社に行く話しです。
因みに、三章は後三話くらいで終わらせる予定。
あんまり長くすると、作者が飽きますからｗｗ

二十二話　マンネリ化したタイトルと現状を打破するためにも、何か思いつかな

最近読んでて面白かった東方小説を紹介してみようかと。けして書くことがなくなったとか、そういうことではないんですよ！？ホントだよ！？

東方究極獣↓連載開始から十日で４０話更新という、恐ろしい速度で書かれている小説。一日平均４話。主人公だけじゃなく作者までチート使用なのか！？と常々思っていたり……。

東方空想夢　～Ｄｒｅａｍｓ　ｏｆ　ｓｋｙ　ｆａｎｔａｓｉａ～↓同作者の前作Ｔｅａｒｓ　ｏｆ　Ｍｅｍｏｒｉｅｓでファンになりました。

幻想の運び屋↓なんか面白い。阿求が可愛い小説です。近々新キャラ出るらしいです。

東方百人一首↓つい最近百首達成しました。すごいですね。百人一首を題材にした小説。短いけどついつい次が読みたくなります。

東方傀儡異聞↓最近シリーズ３が完結しました。続編がかなり気になっている小説。

全部の小説読んでるわけではないので、これ以外にも面白い小説があるのかもしれませんが、最近読んだのはこの辺ですかね。

二十二話　マンネリ化したタイトルと現状を打破するためにも、何か思いつかな

ここどこ？

いつの間にか、見知らぬ場所にいた。

「……鏡界？」

見知らぬ風景。たしか昨日は酔っ払って神社で寝たはずだ。巫女さんか洩矢神がボクをここに捨てたんじゃないなら、鏡界という可能性が一番高い。

「何より、ビルが立ち並ぶ都市って、もうないはずだし」

ビルが立ち並ぶ都市の人たちはみんな月に行ってしまった。だから、あの世界でビルなんてもの後二千年はないはず。

「でも……こんな場所初めて来たかも」

ビルがある。車もある。マンションやコンビニ、商店も、縁のいた時代のものなら何でもある。

たった一つ……人を除いては。

「っ！！！」

はっとして目が覚めた。

「……夢？」

か、どうかは分からないが、少なくとも鏡界の中で、あんな場所は知らない。

「と、いうか。そもそも鏡界って何なんだろうね？」

自身の能力だが、不明な部分が多すぎる。もしまた暴走した時のために、きっちりと調べておいたほうがいいのかもしれない。

「永琳ちゃんでもいれば楽なのかもしれないけどね」

けれど彼女は今月だ。

「ままならないなあ」

と、そんなことを呟いた時にふと気づく。

ここは……うん、昨日来たボクの神社だね。じゃあ、洩矢神どこに行ったんだろ？

散々人に絡んで、泣いて、怒鳴っていたあの幼女神はどこに行ったんだろう。

というか、寝込み襲われたらやばかったかも……これからは注意しないとね。

「巫女さーん。巫女さーん？」

本殿を出て、巫女さんを探す。あ、いた。朝からご苦労にも境内掃除してるね。

「あ、水月神様。おはようございます」

「うん、おはよう巫女さん。ところでさ、昨日一緒にいた子知らない？」

「あの方なら朝早くに慌てて飛び出していきましたよ？」

飛び出していった？うーん、何故だろう。

「そっか。ありがとう」

「いえ、朝食お作りしましょうか？」

「いや、いいよ。ボク一度食べると、一年くらいはお腹空かないし」

おう、ちょっとビックリしてるね。知らないとびっくりするよね、この便利体質。

ていうか、この設定覚えてた人いるの？（メタ禁止で）

さて、取り合えず、洩矢神を探しますか。だって、結局何の話もしてないからね。昨日は酒のせいで全部忘れてたし。もう酒はやめ

ておこうと思う程度には後悔した。

「は～～るばる～きたぜ、はっこだて～～～～」

しぶい！！！？と思う選曲。

だって縁の記憶の中にあったんだからしようがないじゃないか。縁ってこういうの趣味だったのかな？とか思ったけど、単にインパクト強すぎて覚えてただけみたいだね。

現在地。洩矢神社なう。

どうも洩矢神は自分の神社に帰ったらしいと、昨日戦ったときに覚えた水気（すいき）で分かった。

水気（すいき）だよ？水気（みずけ）じゃないよ。意味が全然違うからね。

ん？水気って何か？五行思想って知ってる？あれの水のことだね。水の気配とでも言うのかな。能力の関係上、そういうのが分かるんだよ。操るときは主にそれを頼りにしてるからね。

で、この水気、同じものって実は無かったりする。形というか、感じ方というか。まあイントネーションで分からなくてもイマジネーションで分かってくれると嬉しい（分からねえよ）。考えるんじゃない！感じるんだ！！って感じ？ボクも実感はあっても、知識がないから言葉じゃ説明できないよ。

まあ、とにかくＤＮＡみたいにそれぞれ違っていて、ボクにはその違いが分かるから、だいたいどこにいるか、とか知覚の範囲内なら分かったりするんだよ。それも指紋みたいに、移動するたびにかすかに気配が残るからそれを追って洩矢神の行方を捜したんだよ。ご都合的？気にしちゃいけない。今に始まったことじゃないでしょ。

ま、そんなわけで、けっこうな距離があった洩矢神の神社も、進化して竜になったボクの足なら半日でついた。

「ふーむ。でもこのまま直球に尋ねるのもなあ」

何で急に帰ったのか、その理由も知りたいし。

「ふふ、スニーキングミッション、開始だね」

「あーうー、あーうー」

気配を殺して、神力も限界まで抑えて、こっそり本殿を覗くと、なんか唸っている。

「酔った勢いとは言え、あんな……あんな……あーうー」

なるほど、アレは確かに翌日思い出すと死にたくなるだろうなあ。絡み酒で、泣き上戸で、怒り上戸だからね。

とは言っても、このまま放っておくわけにも行かないので、本殿に潜入。足音を殺し、ゆっくりと洩矢神の背後に回る。

そしてそのまま洩矢神の首元辺りを指差し。

能力で水滴を垂らした。

ぼたっ。

「ひゃあぁぁ！！」

あ、なんか可愛い悲鳴が。

「なななななな！！！！！！！」

驚きすぎだって。洩矢ちゃん。↑ちょっと加虐心が芽生えてきた。

「驚くに決まってるだろ！！というか、ちゃんづけするな！！」

「いや、だから地の文を読まないように」

「そっか、昨日のあれが恥ずかしくて、帰っちゃったんだ（ニヤニヤ）たしかにあれは凄かったね（ニヤニヤ）」

「あーうー」

真っ赤になって、帽子を深く被り、顔を隠そうとする洩矢神。

「とまあ、冗談は置いておいて、結局昨日何も話し合わずに帰っちゃったでしょ？だから今日来たんだよ」

「話って、……ああ……はぁ」

ようやく思い出したらしい。多分、負けたことも。最後の溜息は

それだろう。
「ボクの信者に無理強いはしたくないから、示せる選択は二つ。不干渉か、同盟か。ボクとしては後者が都合がいいかな？」
「……何でだい？」
「お互いに無視しあうより、お互い仲良くしたほうが得るものがあるでしょ？」
よくやく照れが抜けて、マジメな顔をする洩矢神。ああ、そんなマジメな顔されたら。
「それに、洩矢神みたいに可愛い子と仲良くしたいし」
「ぶふっ！！」
思わず弄りたくなっちゃうじゃないか、こんな気にさせて、どうしてくれるんだ！？
「知るかあああああああぁぁぁぁぁ！！！！！！！！」

また地の文を読まれた。

あれ？良く考えたら交渉に来たのにこれって不味い？

二十二話　マンネリ化したタイトルと現状を打破するためにも、何か思いつかな

梗くん、Sに目覚めるの巻き。
なんか話が進まないなあ。
まあ、次は諏訪大戦に行きます。
後二話で三章終了。そしたら、次は……竹取物語かなあ。

二十三話　一対一の戦いなのに、大戦っていうのもすごいよね。まあ、ボクがやるんだけど

どうにも上手い具合に話が浮かばないなあ。スランプなのかな？

今回、チートの影が薄れてきてる気がするので、戦闘で梗くんに暴れてもらいましょう。

二十三話　一対一の戦いなのに、大戦っていうのもすごいよね。まあ、ボクがやるんだけど

「大和、大和ね。その大和の神様が諏訪子ちゃんに宣戦布告してきたって？」
「そうだよ。八坂神とか言うのが近々攻め込んでくるらしい。後ちゃんづけするんじゃないよ、梗」

あの日の話合いは結局、不干渉よりは仲良くしようということで同盟ってことになった。ただ、立場的には諏訪子ちゃんのほうが上ということにして、他の神様への示しもつけておいた。
そんな経緯があってからだいたい数年くらい？うん、またちょっと時間が跳んでるけど、まあ気にしない。

洩矢神の下の名前、諏訪子っていうらしいけど、それを呼ぶ許可をもらえるくらいには仲良くなった。
未だにちゃんづけすると怒るけど。

で、互いの神社で飲んだり飲まれたり（酒に……懲りてないと言われるけど、どうにも常習性がついちゃった。麻薬みたいだよ、お酒って……）していた、そんなある日の会話だよ。

諏訪子ちゃんの神社、諏訪大社は非常に大きい。大社というぐらいだから、当然なのかもしれないけど。うちの神社の何倍あるんだろうってくらい大きい。信者も多いよ、信心深さだけなら負けてないと思ってるけど。
で、何が言いたいかというと。

「いや、こっちの神社の食べ物は美味しいねえ」
お賽銭というか、お布施というか、この時代（大和の国っていう

から、多分古墳時代くらい）だから貨幣はまだマイナーなんだよね。だから米とかを直接奉納してる。神様にお供えするだけあって、これが美味しいんだよね。

「酒の味だけはどうしても勝てないけどね」

水神様の力で美味しい水で作ってますから。能力の無駄遣い？戦闘で使うよりも有意義でしょ。

「で？」

「で？って何がだい？」

「いや、だから、勝てるの？大和の神に」

「勝つさ」

そう言って不敵に笑う諏訪子ちゃん。男前だねえ～。見た目幼女なのに。

「幼女って言うな！！」

だから、地の文は読まないでよ……（汗）。

「洩矢神。この地から消えてもらうよ！」

そう言って前に出てきたのが八坂神。派手な服着てるけど、特徴的なのが背中の注連縄。

「ほざけ、八坂神。あんたこそ、この地から出て行ってもらおうか！！」

と挑発的に言い返すのが、我らがケロちゃん（最初に会ったときはカエルだったけどまさか本当にカエルだとは……）こと諏訪子ちゃん。

だ・れ・が・ケ・ロ・ちゃ・ん・だ！！！！

すごい顔に睨んでくる。ついでに、ミシャグジという蛇の姿をした神様を放って呪ってくる。って、うわ。これ本当にやばい呪いじゃん！？

思わず鏡返ししちゃったじゃないか。あ、ちょっと顔色が悪くなった。まあ、自分の呪いだし、自分で解けるでしょ。多分。

というか、何で諏訪子ちゃんってボクの心が読めるんだろ。顔に出てるのかな？

時は流れてさらに一年後くらい。大和の神々が諏訪子ちゃんの治める洩矢の王国に攻めてきた。

戦力差はすごいことに、大和と洩矢で１０：９くらいかな。諏訪子ちゃんやっぱすごいねえ。中央大国の大和の神様と同等の戦力を揃えれるんだから。因みに、一応立場的に諏訪子ちゃん側のボクも、水神として諏訪子ちゃんの側につくことになった。

と、言っても、結局、戦争してもあの二人次第なんだよね。八坂神が負ければ洩矢の勝ちだし、諏訪子ちゃんが負ければ大和の勝ち。って、あ。呪い返しちゃまずかったかな。ていうか、不味かったよなあ。

ま、いっか。ボクとしてはどっちが勝ってもいいし。

諏訪子ちゃんの信仰はボクのところと同じくらい根強い。諏訪子

ちゃんのミシャグジ信仰は、民衆に非常に畏れられている。恐れられているなら不味いけど、畏れられているのなら、それは諏訪子ちゃんの舵取りの上手さとでも言えるだろう。

神様というのは難儀な商売だとつくづく思う。鞭が行き過ぎれば、恐がって誰も信仰してくれないし、飴が行き過ぎれば、親しまれても信仰はしれくれない。適度に緩めながら、締めるところを締める。そうやってようやく信仰を得ることが出来る。ボクの場合は、当時は周囲が妖怪だらけだったからね。神様にでも縋らないと、やばいくらいだったからねえ。時期が良かったと言えるのかもね。

と、そんなことを考えている間に、両者の勢力が前進し始める。大和の勢力は人型の神が多いね。あれだけの数どこから来たんだろってくらい一杯いる。これ千を超えるんじゃない？ってくらい。逆に諏訪子ちゃんの勢力は、動物の形した神が多いね。土着の神って基本的にこんなものらしいよ。

あ、戦闘が始まった。

さて、ボクもそろそろ行きますか。

走る。武器も持たず、素手の人型の神なんてボクくらいしかいないな、とか思いつつ。

素で音速移動（ソニックムーブ）できるボクだから、特別なことをしなくても、ただ走って体当たりする。

それだけで。

ボオオォォン

何の音？音速の壁を越えた衝撃波が大和の神にぶつかった音だよ。ちなみに、こっちに跳ね返ってくる力は全部《反射》しておいたので、衝撃波＋体当たり＋反動というとんでもない衝撃に一撃で戦闘不能になる大和の神。

まだ消えてはないのは、さすがに神だけはあるね。普通に妖怪なら十匹くらい纏めて消し飛ばせるくらいの威力あるのに。

見事に乱戦状態の戦場で、次の標的を定める。走ってその間を一瞬で詰めて、ウォーターカッターを創り、切る。

ただの水ではない、能力で作って神力を注いだ水だ。神だろうがなんだろうが、一刀の元に崩れ落ちる。

ふと諏訪子ちゃんを見ると、八坂神と激戦を繰り広げていた。お～、呪いの影響はなさそうだね。良かった良かった。あれが原因で負けたとか、洩矢側の神全員から怒られるところだったよ（笑）。

↑いや、笑えないって。

と、一瞬目を放した隙に、大和の神々に囲まれていた。

「おや」

こちらを危険分子だと判断したらしい。というか、洩矢の神たちは？とか思ったら結構遠くにほうで戦ってるね。どうも突っ込み過ぎたみたい。周り的（誤字じゃないよ？）しかいないや。

じゃ、こちらもそれなりに楽しませてもらおうかな。

「噴出せ」

最短の命令。言葉と共に、ボクの周囲の地面から水が噴出す。驚

く大和の神たちを余所に、吹き出た水を全て空に集める。
こういうのって、名前とか付けたほうがいいのかな？
ふと下らないことを思う。だけど、技名叫ぶと格好良く聞こえる気がする。

「じゃあ、取り合えず、蛟からダブらせて……」

種族名とダブるってなんかいいかも、とか思いながら空に浮かぶ水球を真下に加圧しながら落とす。

まるで、鉄槌を落とすように。

「《水槌（みづち）》」

そして轟音と共に、周囲一帯が爆ぜた。

二十三話　一対一の戦いなのに、大戦っていうのもすごいよね。まあ、ボクがやるんだけど。

正直言って。少数ならウォーターカッターで鱠切り。
大勢だと、空から水の塊がすごい勢いで落ちてくる。
大和の神々不意打ちくらいでしか梗くんが倒せないぞ!?
ただの水じゃなく、神力で神霊にもダメが通るようにした特殊な水という設定。ほら、ＮＡＲＵＴＯでも、我亜羅の背負ってる砂はただの砂じゃないじゃないですか。あんな感じで。
因みに、純粋に神力で戦うと。
洩矢の信仰がだいたい５００年くらい？梗くん一億。２０万倍。
人数的な比率で言えば、洩矢の千分の一くらいを想像してるんで、諏訪子様と神力の差を比べると、約２００倍ですね。
全盛期ケロちゃんの２００倍って……梗くんはれっきとしたチートですよ？そう見えないかもしれないけど。作者に似て貧乏性なので、あまり神力を大々的には使いませんが。

なんかイメージしやすいので、技名をつけることにしました。
ウォーターカッターはって一々つけるのも面倒だし、多分《蛟牙（こうが）》って名前にすると思う。
今回出てきたのは、以前ケロちゃんを脅すときに使った超巨大な水球を下向きに加圧（重力を操ってるわけじゃないので、加圧です）して撃ち出す技、《水槌（みづち）》と名づけました。音が同じだし、アリかなと思って。
以後、戦闘シーンで使う技は、多分この二つがメインになるかと。
今回、以前出てきた鏡の技使わないのは、使うと洩矢の王国が消えるからです。あれ範囲が底なしに広いんですよ。設定的に。そう簡単に使えるもんじゃありません。梗くん自身、鏡から溢れ出す地獄を忌避してるのもあります。縁が死ぬことになった原因の一端ですから。

二十四話　脅し？交渉だよ。こういうのもあれば、あれも交渉らしいよ。たとえ

書ききれなかったので、もう一話つけることにします。ただ、次への繋ぎなので、すごく短いですが。

梗くん無双、まだまだ続く。

二十四話　脅し？交渉だよ。こういうのもあれば、あれも交渉らしいよ。たとえ

ただの一撃で大地が抉れた。そこにいた大和の神は皆瀕死だ。
その様を見た他の神々が、梗を見て恐怖する。

嗤っていた。

とてもとても、楽しそうに。

自身の力に溺れたわけでもなく、殺傷行為に快感を覚えたわけでもなく。

ただ、ただ、倒れ伏す神々を見て。

嗤っていた。

その瞳は、いつもよりも獰猛に光って見えた。

ほんの一瞬、意識が飛んでいた。何故なのか分からない。けれど、水槌を使った直後からおそらく数秒、意識が無かったのは分かる。

……分からないことを考えても、時間の無駄か。

切り替える。何時までも余計なものを引き摺ってはいられない。

「さて、退場願いましょうか？大和の神様たち？」

パチン、と指を弾く。沸き上がれ、と念じながら。

ズザアアァァァ

ボクの背後に数十メートルを超える水の壁ができる。やがて、それがピタリと止まると、それで出来上がったのは巨大な水鏡。

「吹っ飛べ」

洩矢で見せてもらい写し取った大陸製の剣を、鏡界から射出する。能力のレベルアップにより、最近いよいよ弓兵さんみたいなことできるようになってきたよ。この光景はどっちかというと赤い人じゃなくて、金ぴかさんのほうだけど。ゲートオブミラーとか？意外と格好良いかも。

ザクリ、ザクリと一本、また一本、後退を始めた大和の神々へ突き刺さる剣の雨。神とは相性の悪そうな割合の少なくなってきた妖気を込めておく。実際に相性の良し悪しなど分からないが、実際、神に通じるなら何でもいい。神力は戻らないのだから、もったいないしね。

写し取った情報がある限り、弾数はほぼ無限。次々と神々が倒れ伏していく。

後一手、決め技みたいなの欲しいね。王手を駆けれるような、詰めができるような一手が。

《鏡獄無間》……あれはたしかに決めてに、切り札にすらなりえる。けれど、あれを使うとこの辺一帯が吹っ飛ぶし、何よりアレは縁が疎んだ力だ。出来れば使いたくない。

なら、もう一つの水気の操作で何か……ドーンと一気にいけるような……ドーン？

「どーん、どーん、ドーンか……うーん、これ行って見ようか」

もうこれもいいだろう。地面に数万という数の剣が突き刺さっているが、水鏡を消すと同時にそれらも消滅する。

「潜って」

言葉にして、念じる。

なんて名前にしよう？

水……潜る……。うん、これでいいや。いかにも強そうだし。

「爆ぜろ！！《水雷（すいらい）》」

爆ぜる。地面が。噴出した凄まじい勢いの水によって、半径五十メートル近い円上が爆発した。

水雷っていうのは、水中で使う爆弾のこと。魚雷とか言うと分かりやすいかもね。魚雷は水雷の一つだよ。

生み出した水を地面に大量に潜らせる。そして、土に含まれた水分を辺り構わず吸収していき、水槌に負けないほど大量の水を溜め込んだら、後は一気に上に向かってどんどん加圧。結果的に地面が爆発を起す。そういう仕組み。勢いの凄まじい間欠泉を思い浮かべたら、分かりやすいんじゃないかな？あれだって、いきなり噴出すよね。

上や真正面ばかり見ていた大和の神たちも、下からの攻撃は予想できてなかったらしく、ボクのいるほうはそれで全滅した。

中心ではまだ諏訪子ちゃんと、八坂神が戦っている。

ボクは、ボクの仕事は果たしたし、のんびり見せてもらいますか。

邪魔はしない。だって、これは八坂神が諏訪子ちゃんに売った喧嘩なのだから。

ボクの側に割り当てらた神たちも同意見らしい。ことの推移をじっと見ていた。ボクと距離が離れているのが気になるけど。↑動物ベースが多いので、本能的に危険だと感じて避けている。

ケロちゃんの攻撃は基本的にミシャグジを飛ばした呪いだね。って、うわ、危な！！流れ弾！？

もし狙ったのなら、とんでもない地獄耳……いや、ボク言葉にしてないよ、何で分かるんだろ？

こほん、気を取り直して、諏訪子ちゃんは呪い得意だよね。ミシャグジって祟り神らしいし。

でも、八坂神も対策練って来てるね。戦闘得意な神らしいし、仕掛ける側なんだから当然と言えば当然なんだけどね。あの背中の注連縄もその一環かな？諏訪子ちゃんはカエルだし、あれは蛇の象徴なのかも。昔の人にとっては蛇は再生の象徴だったらしいし。祟りっていう陰を、再生っていう陽で打ち消す。陰陽道なんかでありそうな考え方だよね。蛇はカエルを食べるし、立ち居地を優位にしてる意味合いもあるのかも。

……あれ？

なんでボク、こんなこと知ってるんだ？いや、正しいかどうかはともかくとして、こんな考えかたボクにはできないはず。縁ですら陰陽道なんて知らないのに。

おかしい。何かおかしい。

自分が思い出したことが自分の全てではないのではないか？

その考えに気づいた時、愕然とした。

じゃあ、さっき意識が無かったのは、そのせい？

もしそうだとしたら、何が原因だ？

単純に能力を使いすぎた？それとも他に何か原因があるのか？

分からない。でも考えないわけにはいかない。縁に託されたものがあるのだから。こんなわけの分からないことで立ち止まれない。

そんなことを考えていると、轟音がした。

はっとなって目を上げると、そこに錆びた鉄の輪を落とし、倒れ

た諏訪子ちゃんとかなり疲弊はしているが立ったままの八坂神がいた。

終わったか。諏訪子ちゃん、負けちゃったね。けしてボクが返した呪いのせいなどじゃないよね？

「くっ、かなりやれらたね、けど、これで私の勝ちだよ」

八坂神が巨大な御柱を取り出し、振りかぶって。諏訪子ちゃんに向かって振り下ろす。

「はい、待った」

それをボクが止める、片手で。

「なっ！！」

諏訪子ちゃんよりも遥かに多い神力を持っているボクなんだから、それくらいできるよ。とか言って、実は《反射》使って、半分くらい衝撃を跳ね返したんだけどね。全部跳ね返すと弾いてちゃうからねえ、加減が難しいよ。

「ここでストップ。諏訪子ちゃんを殺させるわけにはいかないからね」

「何であんたみたいなのがいる！？」

どういう意味？

「洩矢の王国の頂点はこの洩矢神のはずだよ。どうして洩矢神より強力な神がいる」

「あ、そういうこと。ボクは服従してないから。同盟したんだよ。

仲良くしよって」

「甘いね」

「辛いのよりは好きだよ」

そう言って笑うと、八坂神が拳を突き出す。それを《反射》する。

「ぐっ」

拳が跳ねる、肩が外れそうな衝撃がいったと思うよ。

「さて、こっちにいた大和の神たちはあらかた片付けたよ。それでもまだやるの？」

「……く」

さて、ここで止めるというなら良し。

「止めないなら」

水槌の準備をする。さて、諏訪子ちゃんはここで素直になったよ？

「殺すだけだよ？」

時間は跳んで。

「うわ～～～、また負けた～～～～～！！！」

またもや始まった絡み酒&泣き上戸に怒り上戸。さすがの神奈子も戸惑ってるね。

そうそう、結局ケロちゃん、負けちゃったんだよね。

「キョー！！！あんたが呪い返したりするから～！！！！あと、ケロちゃんとか言うな！！！」

あ、こっちにまで飛び火してきた。しかも的確にこっちの心まで読まれてる。

「えっと、梗。何だい、これ？」
「絡み酒の泣き上戸の怒り上戸な諏訪子ちゃん」
「……」
絶句してるね。まあ、分からなくもないけど。見た目幼女だし。
「幼女っていうなーーーーーーーー！！！！」
「いい加減言うけど、なんで人が考えてることずばりで当てれるんだよ！！！！！」
いい加減さ、ボクも突っ込むよ！？
「うるひゃい！！いいひゃら、きょーものめー」
うわ、酒臭！？呂律回ってないよ！酔ってるな諏訪子ちゃん。
うん、前も言ったかもしれないけどさ。
どうしてこうなった？

時間を戻して。
戦闘中止を合図した八坂神を見て、水槌を消す。その頃には、諏訪子ちゃんも何とか起き上がれるようになっていた。
「それで？勝敗だけなら、一応こっちの負けだけど、どうすんの？」
結果は分かっているけど、一応聞く。

「この辺りの信仰を手に入れさせてもらうだけだよ」
「なら、諏訪子ちゃん殺しちゃダメだよ？後で取り返しがつかなくなるから」

「どういう意味だ？」
「ま、すぐに分かるよ。八坂神さん」

「……神奈子だ。八坂神奈子。そう呼んでくれ」
「そう。まあ、信者に聞いてみればいいよ。信仰するかどうか」

無駄だとは思うけどね。

そういい残して、その日はボク帰ったんだよ。

次の日諏訪大社に行ったら。
「あーうー、また負けたよ。ぐす」
「いや、まあ、その、なんだ。気を落とさないようにさ。いや、ホント強かったよ、あんたも」

「なぐさめるなーーーー！！！！」

朝から酒盛りですか……。

さすが、神。朝から酒とか、普通の人がやれば白い目で見られることを平然とやってのけるとは！！！そこに痺れる、憧れるうぅぅぅ！！！

「キョー！！わけ分かんないこと言ってないで、あんたもさっさと来い！！！」
「はあ？キョーって、昨日の水神か？どこに、っていた！？」
おう！？なんで？諏訪子ちゃん、ここにボクがいることなんて知らないはずなのに、なんで思ってること分かったの！？ホントに読心術でも使えるの！！？
「いやー、朝かから酒盛りとはやるねえ、お二人さん」
「いや、単に酒盛りしてるんじゃなく、これでもマジメに話し合ってたんだよ？」
どう見ても、酒盛りの光景です、はい。
「話し合うって、ミシャグジ信仰がここの人の根に張り付いてること？」
「……昨日の口ぶりから、予想してたね、あんた」
「まあね、戦った神奈子が一番分かってると思うけど、諏訪子ちゃん強かったでしょ？」
「……そうだね。今まで戦ったやつの中で二番目に強かったよ」
「一番は？」
あんたさ。と指差され、ああ、そういや昨日ちょっとだけ戦ったなと、思い出した。

そんなことを言ってたら、諏訪子ちゃんの絡み酒発動。
そして。

「うるひゃい！！いいひゃら、きょーものめー」
今に至る。

「しゃっしゃとのめ～」
ぐびぐびと杯に酒を注ぐ諏訪子ちゃん。いい加減この絡み酒うざったいし、何とかしよう。

「じゃ、諏訪子ちゃんもお返しにどうぞ」
と言って、注ぐ。その際、一滴ほど能力で作った水を混ぜておく。

ぐびぐび、と杯を煽る諏訪子ちゃん。豪快、というか親父臭いというか。
信者が見たら、泣きそうな光景だよ。

「ありぇ……ぐりゅぐりゅしゅりゅ～？（訳：あれ……ぐるぐるする？）」
うん、さっきからずっと諏訪子ちゃんが飲んだ酒の回りを良くしてるからね。酔いが回るのも早いよ。

「ふわぁ……ねみゅい……おやしゅみ～（訳：ふわぁ……ねむい……おやすみ～）」
眠気に耐えれず、倒れ伏せる諏訪子ちゃん。

計画通り（ニヤリ）。

「あんた、今かなりあくどい顔してるよ……」

なぜか呆れた様子の神奈子がそこにいた。

二十四話　脅し？交渉だよ。こういうのもあれば、あれも交渉らしいよ。たとえ

最初にも言いましたが、もう一話書くことにします。

色々とおかしい気がしますが、徹夜ですごく眠いんです。
もうこれから寝ようとする直前に書いてるので、色々おかしい部分
あると思います。起きてから修正するので、おかしい部分教えてい
ただけるとありがたいです。

二十五話　鳥の雛だっていつかは巣立つんです。停滞ばかりもしてられませんよ

今回本当に短いです。ていうか、最後グダグダです。

旅立ちます。理由は本編を見てください。今回は取り合えず、諏訪大戦が終わったことと、旅立つことの二点さえ分かっていただければＯＫ。

後は作者の趣味というか、妄想というか、欲望で構成されてます。

不快感を覚えた方は回れ右。

二十五話　鳥の雛だっていつかは巣立つんです。停滞ばかりもしてられませんよ

洩矢と大和の神との戦いは、後に諏訪大戦と呼ばれた。

そして、その諏訪大戦は大和の神の勝ちで終わった。

だが、ミシャグジ信仰の強く根付く洩矢の地で大和の神が受け入れられることはなかった。

そこで、表面上は大和の神が立ち、裏で洩矢の神を信仰させる。という方法が取られた。

信仰の流れを誤魔化すとでも言うのか、大和の神八坂神奈子と洩矢の神洩矢諏訪子を混同した神、守矢神を作り出し、両者で信仰を分け合った。

そうして諏訪大戦は決着がついた。

「という流れになってるらしいね」

どうも～、みんなのアイドル梗くんだよ～。あ、ごめ、ちょ、蹴らないないで。ごめんごめん。冗談だって。

諏訪子ちゃんと神奈子から聞いた話を纏めるとそういうことらしい。

「ふーん」

って感じだよね。実際、ボクには微塵も関係ないし。

で、そんなボクだけど、旅することに決めました。

なんで？諏訪子ちゃんにそう聞かれた。

ボクは自分のことが分かっていない。いや、分かっていた、知っていたつもりだった。

けれど、今回のことで、よく分からなくなった。ボクはボクであるはずだ、それを証明したい。

縁に全てを託されたボクは、今のボクである。本当はそれが証明したいのだけれど。

「マザコンとでもいうのかな？縁曰く姉らしいしシスコンかな？」

「何わけわかんないこと言ってんだい？」

「いや、何でもないよ。それよりも見送りなんていいのに、別にこれが今生の別れってわけでもないのに」

「まあ、梗には色々世話になったからね。その分、色々酷い目にも合ったけど」

「あはは、ごめんごめん」

「まあ、それでもあの大戦の最後で助けてもらったしね。感謝はしてるよ」

……っ！！！！！！！！！！

「チャンスとーーーーーーーらい！！！！」

「うわ、な、なんだい？」

「諏訪子ちゃん、最後に一つだけお願い良い？」

「まあ、私にできることなら」

きたあぁぁぁぁーーー！！！！！

その言葉を待っていたよ！！！

じゃあ。

「はい、まず目をつぶって、後ろ向いて」

訝しげにしながら、言うとおりにする諏訪子ちゃん。

その背にそっと近づき。

ぎゅ～～～～

ぎゅっと抱きしめる。

「はふぅぅぅ～」

いかん、癒されすぎる。あ～、昇天しちゃいそ～～。

「なななななななな！！！！」

「はふ～～、素晴らしき抱き心地。最初に見た時から、この一瞬を狙ってたよ～」

「そんなもの狙うな～～～～～！！！！！」

守矢神社に諏訪子ちゃんの声が響き渡った。

二十五話　鳥の雛だっていつかは巣立つんです。停滞ばかりもしてられませんよ

ゴメンナサイ！！！！！！！！（土下座）

どうしてもやりたかったんです。ケロちゃん抱っこで膝の上に置くとかでも悩んだんですが、ケロちゃんぎゅっとしてみたかったんです！！！！

しかし共感できる人がいると信じて！！！

お気に入り登録１００件越しました。ありがとうございます。

まあ、一応話も進んだことですし、ちょっと番外編というか、次回作の予告やりたいと思います。
まだ二つとも３０話にも言ってないのに早すぎる？
仕方ないじゃないか！思いついてしまったんだから。
思いついたのが二つあって、片方まだ考え中ですが、一つはもう話しもだいたいできてるんで、ここで試しに置いてみようと。
片方、設定が難しすぎてどう収集つけるのか分からなくなって困ってますが。

二十六話　人生に迷い、辿り着いた先は、秘密の花園でした。なんか淫靡な響き

まず最初に、予告章削除させてもらいました。
まあ、色々と理由があるのですが、とりあえず、このことを最初に言わせてもらいます。

～～が気に入ったという意見もいただいたので、申し訳ないな、とか思ったんですが。まあいつかは書く小説なので、お許しいただければ。

はい、次に、四章の間は更新ペース落ちると思います。
ちょっとこの章は後半重要にするつもりなので、熟考しながら書いてるんです。
ある程度までは決まりましたので、一日一話くらいのペースで書けると思いますが。

二十六話　人生に迷い、辿り着いた先は、秘密の花園でした。なんか淫靡な響き

旅に出てからもう数百年くらい経つ。

けれど、当初の目的は何一つとして達成されていない。

ただただ時間だけが過ぎていく。

そしてボクは、とある噂を聞く。

噂に導かれた先で……ボクは過去に出合った。

けれどこれは、そのちょっと前のこと。

太陽の花が咲き誇る地で出会った、一人の妖怪との話だよ。

「都で一番美しいお姫様？」

「そうそう、なんでもなよ竹の……なんだっけな？」

「なよ竹……輝夜姫？」

「おお、それだそれ。なんだ、お前さん知ってるんじゃないか」

「ふふ、前も似たような話してる人がいたからね」

旅の途中に寄った食事処の主人と歓談していると、また出たのがその話題。

なよ竹の輝夜姫。

美しき月の姫の話。

今ボクはその輝夜姫に会うために都へ向かっている。

旅の目的を諦めたわけではないが、けれど一端中断してでも向かわないといけない理由があるから。

かぐや姫というのは、縁の時代にもあった最古の古典だ。

竹取翁というお爺さんが、光る竹の中から赤子を見つける。

夫婦で育てたその赤子は、都で一番の美しい少女へと成長する。

あらゆる男に求婚され、当事位の高かった男たちもいたが、それら全てをばっさりと断る。

そして最終的に月へと帰る。というお話。

そう、帰るんだよ、月に。

「永琳ちゃん。依ちゃん、豊ちゃん」

あの三人のことを思い出す。

ずっと気になってた。心に引っかかっていた。

だから、月との接触を持てる最初で最後の機会かもしれないから。

「行かなきゃね」

呟き、ぎゅっと拳を握った。

しっかりと、決意を固く固くするために。

基本的に、ボクは食べる必要性も寝る必要性も無い。昔はそれでも一年に一度くらいは食べていたし、よく寝ていたが、最近になって神力さえあれば、疲れることも飢えることも無くなった。ますます人外になってきているけれど今更だし、気にもしない。

けれど、体はともかくとしても、心というものは休息というものを欲しがる。

ずっと歩き続けだったボクがちょっと休みたくなるように。

「ふぅ、疲れ……てはないか。でも一息つくと、ほっとするね」

夏場の暑さから逃れるように森の中を歩いていると、川を見つけたので、そこで一息つく。水なら能力を使えば出せるのだが、自然の中にあるこの憩いの空気はボクの能力では作れないからね。マイナスイオンとか出てるかも。

履物を脱いで、川に足を浸す。冷たい水が足を冷やす。体から熱が抜けていく。

「あ〜、気持ちいい〜」

一心地つくまでここで休もう、そう決めた。

「何あれ？」

ふと、森の中を見ていると、木々の間に黄色に何かが見える。

「ちょっとだけ、寄り道してみようか」

そんなに遠くは無いし、気分転換にでもいいかもしれない。

履物を履いて、遠くに見える黄色に向かって歩いていく。

森を抜けると、そこは花畑だった。

「うわ～。すごいね」

ボクの見た黄色はこの向日葵の色だったんだね。

あれ？向日葵？この時代に？向日葵が日本に伝来したのって１７世紀だったはずだよね。

「……は？」

思わず惚(とぼ)けた声を出す。向日葵の伝来した時期なんてどこで知った？縁の記憶にそんなものは無い。なのに、何で知っている？

まただ。知らないはずのことを知っている。なんで？

考えていると、真正面の向日葵畑から一人の少女が歩いきてので、思考を切り替える。このままずるずると考えこむよりはいっそのこと切り替えてしまって良かったのかもしれない。

「こんにちは」

「うん、こんにちは」

日傘を差した少女がにっこりと笑って会釈するので、ボクも返す。
「こんなところに一体何の用かしら？」
「そこの川で休んでたんだけど、綺麗な花畑が見えたから。ちょっと見せてもらいに」
そう、と頷く少女に、ボクはさきほどから気になっていたことを尋ねる。
「これらの花はキミが一人で世話してるの？」
「ええ、そうよ。私がこの子たちの世話をしてるわ」
「そう。すごいんだね。だったら一つだけ良い？」
「何かしら」
「そこの森の川の水を充てにしないほうがいいよ」
そう言うと、少女が訝しげな顔をした。まあ、いきなりそう言ってもそんな反応だろうね。
「後一年くらいで枯れるよ。あの川」
「本当？」
「うん。水に関することなら間違えたことは無いよ」
さっき川を見て思ったこと。地形が歪んでいるのか、川の水が湧き出る水と地下水として流れる水に分かれてしまっている。地下を流れる水はともかく、地表を流れる川は蒸発して一年もすれば枯れてしまう。
「その代わり、地下を流れる水がいくつか合流して、ここよりちょっと遠くに新しく湧きあがるから、来年からはそっちを使うといい

よ」

ボクの言葉を信じたのか、そう、と少女は呟き。

「教えてくれてありがとう」

そう言って微笑んだ。

「へ～、幽香の家ってお洒落だね」

「あら、そう？梗の家はどんなのかしら？」

「あー、神社だよ。あんまり大きくないけどね」

「神社？」

「うん。ボク神様だから」

「……神が自分の神社を放っておいていいのかしら？」

「大丈夫、ちゃんと救済措置はとってあるから」

少女は風見幽香と言うらしい。ボクが水無月梗と名乗ると、よろしく梗。と言ってボクを家に連れてきた。

「ねえ、もしかして、梗って洩矢と大和の神々の戦争に参加したのかしら？」

「うん、したね。洩矢の神は一応ボクと同盟してたし」

「そう、ならあの戦争で大和の神の半数以上を倒した水神って」

「あ～、うん、ボクだねえ」

「そう、そうなの」

その時、幽香の口元が吊り上がったのには、気づいた。

「幽香、もしかしてボクに自分の相手しろとか言おうとしてる？」
「あら、よく分かるじゃない」
「口元吊りあがってるよ。まあ、いいよ。けど、この紅茶飲み終わったらね」
「そう、なら早くしてね」

血気盛んだなあ。もっとゆとりを持とうよ。ボクも、あまり人こと言えないけどね。
ここに寄って良かったかも知れない。少し心にゆとりを持てたから。焦ってばかりじゃ、見えるものも見えなくなる。それを思い出すことが出来たから。

ゆったりとした時間はあっさりと過ぎて、紅茶を飲み終えたボクは立ち上がる。

「ここでやると家が壊れるし、外でやったら花が巻き込まれるから、移動するよ？」
「こっちとしてはそちらのほうが都合が良いわね」
「じゃあ、発動《明鏡止水》」

突然現れた水が宙を渦巻き、ボクの目の前でピタリと停止する。水は光を反射して、大きな大きな鏡となる。

あの大戦でも一度使った、水鏡を作り出す技。《明鏡止水》と名づけてみた。
この方法で創った鏡には二つ利点がある。
一つは、水はどこででも出せるので、場所を選ばないこと。
そして、もう一つが、この鏡を通して何かすると、他の鏡よりも反応が良い。

上手く説明はできないのだが、スムーズに能力が使用できるようになる。
例えば、鏡界から写し取ったものを映し出すのもいつもより簡単にできるようになるのだ。
どうしてか、というのはボクにも分からないけど、便利だから気に入っている。

「じゃ、行こうか」
「行くってどこによ？」
「ふふ、入ってみれば分かるよ」
そう言って、鏡に手を入れると、手首から先が消える。驚く幽香に微笑んで、今度は全身を潜らせる。

そして。

「ただいま」

ボクの神社。水月神社へと帰ってきた。

二十六話　人生に迷い、辿り着いた先は、秘密の花園でした。なんか淫靡な響き

中途半端で終わってすみません。
３０００字くらいで書かないと、推敲するのに読み直すのが大変なんです。作者の都合です。ご理解いただけると嬉しい。

最初ら辺の書き方をちょっと変えてみました。些細な違いすぎて気づかないかもしれませんが。

最初はいきなり輝夜の話にしようかと思ったんですが、幽香を入れるタイミングが難しいのであえてここで投入してみることにします。

後、作中に幽香を少女、としてますが、まだ年若いので、少女でいいかな?と思って書きました。

二十七話　鏡とは、映し出すもの。そして、そこに映るのはそこにあって、そ

タイトルに関してはもう気にしないでください。どういうものだよ！？という突っ込みは無しで。

というか、今回はすみません。素直に謝っておきます。
鏡界を操る程度の能力の説明、いつかしようと思って、今回その機会があったので、書いてみたら想像以上に文字数取られて、幽香との戦闘シーンを書くと文字数が５，６０００字くらいになりそうだったので、やめてさせてもらいました。
今回こそ、いけると思ったのに。

ＰＶ１０万、ユニーク１万突破しました。いつもお読みいただきありがとうございます。

二十七話　鏡とは、映し出すもの。そして、そこに映るのはそこにあって、そ

「どこかしら、ここ」

ついてきたらしい幽香が周囲を見回しながら、そう言う。

「ボクの神社。ここにはね。鏡界への入り口を作ってあるんだよ」

「鏡界？」

「そう、ボクの能力で形作られた世界。そこならいくら暴れても何も壊れない。いや、正確には壊れるものが何も無いんだよ」

鏡界というものについて、実はボク自身でもあまり詳しいことは分かっていない。自身の能力ではあるが、縁がそうだったように、感覚的に使っているので、それがどんなものなのか、分かっていない。

ただ、ボクは鏡を通して、鏡界という世界に行くことができる。どんな鏡でも鏡界に繋がっており、また鏡界はあらゆる世界の鏡に繋がっている。鏡界にはモノが溢れているが、それは実体があるのに存在は無い不思議なあり方をしている。

例えば、いつかやったように剣を鏡界から持ってきたとしよう。

その剣は、この世界で実体を持っているので、木の枝でも叩けば当然折れてしまう。

では、ボクが思い切り力を込めればこの剣が折れるのか、と言わ

れると、不可能だ。だって剣はこの世界に存在しないのだから。存在しないものを壊すことは出来ない。あらゆるものに干渉するのに、あらゆるものから干渉されない。それが鏡界にあるモノたち。ただし、存在が無いので、そこにあることを《否定》されると鏡界へと帰ってしまう。世界の抑止がこれに当たる。

それは分かっている。何となくの感覚でそれだけは分かっている。けれど、じゃあ鏡界とは何なのか、と言われてもボクに答える術は無い。

ただもう二つだけ分かっていることがある。

鏡界とは、同じ法則によって成り立っている複数の世界を纏めたものだということだ。

この言い方が正しいのかどうかは知らないが。例えるなら、《家》だ。

同じ家、というくくりにしても、中はそれぞれ《部屋》ごとに違った様相を見せる。

この時、部屋から部屋へと行くことはできない。だって出入り口は扉と窓にしかないのだから。

もし繋げるのなら、そういう風な《扉》を作る必要があるが、わざわざそんなことをする人はいない。だって、廊下を経由すれば良い、それだけの話なのだから。

これが最後の一つだが、全ての鏡界に通じている、起点のような鏡界が存在する。

そして、この起点にはボク、正確には鏡界を操る程度の能力を持つ者以外は侵入することができない。

言わば、この起点は《廊下》だ。部屋は全て外から鍵が掛けられていて、ボクはその鍵を外すことができる。と言うと想像しやすいだろうか。

先の言葉から分かる通り、実はこの部屋に当たる鏡界には、他人も入れたりする。勿論、普通の人には入り口が分からないので、ボクが色々しなければならないのだが。言わば、《窓》だ。鏡界の外から窓を通して部屋へと入ることができる。因みに、この窓は、残念ながら《明鏡止水》では作れない。どういうわけか、位置を固定された鏡でないと作れず、手鏡などでは作れない。この理由は分かっていない。

そして、その《窓》一つが、この水月神社の本殿に置かれている鏡。ボクが神社を放っておいてあちこち旅ができる理由もここにあったりする。

この《窓》は位置が固定されている。だから、《部屋》を間違えさえしなければ《窓》から出る限り、どこから鏡界に入っても同じ場所に出ることができる。

そうやって、有事の際には、巫女さんからのＳＯＳを受け取って戻ってきたりしていた。そして、移動する前に作っておいた鏡に分かりやすいように《目印》でもつけておけば、終わったら戻れるしね。

この《目印》というのもよく分からないけど、つけておくと、どの鏡から入ったか分かる。

さきほど鏡界を家と例えたけど、ただの家じゃなくて広い広い家

だと思ってみて、しかも部屋ごとの様相は違っていても、廊下自体は全部同じ景色なんだよ?迷うよね。自分がどの部屋から出てきたのかさえ分からなくなる、だから必要なときには目印をつけておく。そうすると、鏡界を操る程度の能力を使うと、そこまでナビゲートがついたようにどこに行けばいいか分かるようになる。《窓》も同じような理屈。

こうやって考えてみても、これがどれだけ複雑で面倒な能力か、ありありと分かる。

やっぱり、ボクの知らないことがあるのかもしれない。

正直言って、この《部屋》と例えた鏡界の一つ一つ全てを把握できているわけじゃない。それはつまり、まだこの能力を使いこなしていないとも言えるのかもしれない。

「この鏡を潜るだけだよ」

そう言ってボクは先の鏡を潜る。

そこは、普通の世界だ。大地があって、森があって、山があって、川があって、海があって、空がある。いつも見るような有り触れた世界。けれど人はいない、動物もいない。あらゆる生命は存在しない。木も草も何もかもそこに実在するだけの鏡映しの偽物だ。

能力で、ある程度《模様替え》とでも言うのだろうか、世界を変容させることができる。

だから、何をしても何にも影響しない世界を作った。閉鎖された世界とでも言うのだろうか。閉じてしまっているから、何をしても

何も変化はしない。だって、そこに世界は存在しないのだから。

「死んだような世界ね」

やってきた幽香もそう思ったのか、不機嫌そうに吐き捨てた。

「半分正解。でも違う。ここは最初から生きてなんていない。だってここは存在しないのだから」

笑って、手を突き出す。

「始めようか。遠慮は無用だよ。ここには何も無い。何をしようが、何も変わらない世界なんだから」

ふふ、と幽香が笑う。

「遠慮？最初からそんなものは無いわよ。でもそうね、花が傷つくことが無いのなら、気にすることも無いわね」

そして、互いに微笑んで……同時に飛び出した。

二十七話　鏡とは、映し出すもの。そして、そこに映るのはそこにあって、そこ

ええ、まだ戦わないんです。前回で期待した人すみません。

そういえば、最終的にどのくらい強くなるか、能力とあわせながら考えてみると、某刀神（邪神？）様に《負けない》程度に強くなってた。

多分、鬼巫女に勝てるくらい反則的になる。とりあえず、即死系は一切聞かないんで。その他一切の攻撃も通らなくなるし。概念「絶対干渉」すら無効化できるってすごくないですか？あ、これ以上は言わないけど、ネタバレになるし。

ただそれでも刀神様には勝てる気しないなあ。《負けない》ようには戦えると思うけど。あの神様倒せるってどんな状況だろう？

次週。いよいよ戦闘です。幽香も梗くんも基本的にガチ殴りの戦闘スタイルなんで、ドロ臭い戦いになる気がする。

あのドSっぷりを表現しきれるだろうか？

以下ネタばれを含むので、いやな人は見ないほうがいいです。

・鏡界について

鏡界とは何か。それは、存在しないが実在はするモノたちが世界。鏡に映った花も水に映った月も、そこに見えはするが存在はしない。例えばりんごの絵を描いて百人の人間に「コレはなんですか？」と尋ねる。人々はきっとこう言うだろう、「りんごだ」と。誰も「線と色で出来た絵だ」などとは言わない。そこにあるのはただの色彩。りんごなどは存在もしない。けれど人はそれを見て「りんごだ」と言う。つまり、その絵を見た人の中ではそれはりんごに見えるというわけだ。世界が観測によって成り立っているのならば、りんごは確かにその絵の中に実在することになる。けれども、現実にそこにりんごは存在しない。つまりこれが鏡界。この時、りんごは鏡界に存在していると言える。これを能力にし、能力の所有者の見た光景を記録し、世界を形作っていく。この形作られた所有者の中には実在しながらも、世界のどこにも存在しない鏡の向こうの世界を鏡界と呼ぶ。

この世界は、他のあらゆる世界と鏡を通して繋がっており、全ての世界の中継点とも言える。また、この世界のモノを余所の世界に持っていくことも可能であるが、どの世界に持って行っても、十日間で抑止によって消される。

以下重要文につき、削除。

二十八話　3年ドS組、ゆーかりーんセンセーイ。あ、ゆ、幽香。やめて、殴らないで

幽香編終了。次こそ輝夜姫編に入るはずです。輝夜姫編で、放浪してる話は半分終了かな？
幻想入りするまで、後何十話書かないとダメなんだろ……？

ゲームやアニメの技をそのままの表記で出すよりも、伏字にしたほうが面白く見える気がする。気のせいですか？

二十八話　3年ドS組、ゆーかりーんセンセーイ。あ、ゆ、幽香。やめて、殴らないで

ドォォン、とトラック同士が衝突したような音と共に、互いの拳が弾ける。
これがいく度目かな。戦況は互角言っても良い、互いに身体能力だけなら本気だった。

幽香ってあれだね、見た目に似合わず、殴ったり蹴ったりのガチンコ勝負好きみたいだね。

まあ、ボクは身体能力を神力で強化した接近戦もできるんだけど、どちらかと言えば、水槌のような大質量で敵を押し潰す、物量で戦うようなやり方のほうが好きなんだけどよね。
まあ、だからってここでそんなもの使うほど無粋なことはしないけどね。

「というか、恐いよ!!!なんで、そんな笑顔なんだよ!!?しかもどんどん笑みが深くなってくんだよ!!」

はっきり言おう。乱打戦してる相手が、どんどん楽しそうな笑顔になっていく。意外と恐い!!
しかも笑えるって意味での楽しそうじゃなくて、猛禽類が獲物を見つけた時のような笑顔だよ!?
恐いよ。ボク獲物かよ……。
しかも時間が経つほどにどんどん笑顔が深くなっていって、それと共に攻撃の威力と速度が上がって来るんだよ。

「楽しいじゃない。こんなに楽しいのは初めてかもしれないわね」
「ボクは楽しくないなぁ。こんなに疲れるのは初めてかも」

「あら、少しずつ威力を上げているのに、簡単に防いでるじゃないの」
「いや～、けっこういっぱいいっぱいだよ」
ちなみに、この間にも当たり一帯が抉れるほどの凄い威力の打撃の応酬してるよ。
「というか、何で神力で強化してるのに、そんなに簡単についてこれるのかな……」
ありえねーって。神奈子でもついて来れないくらいには強化してるよ？
一端離れる。仕切りなおさないと、膠着してたからね。
「幽香って能力持ち？」
「そうね、花を操る程度の能力を持っているわ」
うーん。この上能力まで使われたらどうしようかと思ったけど、それなら大丈夫そうだね。
「この世界に草も花も木も無いから、それは大丈夫か」
「ふふ、能力がなければ私に勝てるのかしら？」
「さてね」
再び飛び出す。先は互いが同時。だが、今度はボクのほうが圧倒的に速かった。
「なっ」

初めて笑顔を崩し、驚きの表情を浮かべる幽香の元に一瞬で辿り着き、肘打ちで腹を突く。

「ぐっ……どうして」

一瞬の判断で幽香が手を腹に当て、威力を軽減すると、そのまま下がった。

今のは慣れだね。戦闘慣れとでも言うのかな。どうにも戦闘はこれが一回目や二回目じゃなさそうだ。

「どうしてって、何が？」

「さっきは同時だった、なのにどうして」

行くと決めた瞬間は実は同じだった。けれどボクの体のほうが早く動いた。

身体能力は同じくらい。それはさっきで証明されてる。

だから、どうしてか幽香には分からないんだろうね。

縁に記憶の中にある、とある漫画の知識だ。

血流を圧力によって加速させ、一時的にドーピングのような効果を得る。

これを、水を司る程度の能力で再現した。

実際に一度だけ使ったことがあったけど、身体能力が爆発的に上昇した。その代わりに消耗も激しかった。自身の限界を超えてた動

きが出来る分、傷つき方も激しいというわけだけど。

それを今は坎を創造する程度の能力で行った。

諏訪子ちゃんに教えてもらったことだが、《坎》とは八卦の一つで、水を象徴するらしい。

以前考えたとおり、水を司る程度の能力の強化版みたいな考えでいいらしいよ。

そういう諏訪子ちゃんは坤を創造する程度の能力というのを持っており、神奈子は乾を創造する程度の能力という能力を持っており、それぞれ地と天を象徴するらしい。だから、諏訪子ちゃんは地面操れるんだなあ、とか思った覚えがある。

話を戻すけど、以前やったよりも強烈に血流が加速したらしい。実は全身が痛い。服の下から血が滲んでたりする。確かに人間には使えないよね。自爆技過ぎる。

でも、ボクは《竜》だ。最近では神力さえあれば、傷なんてすぐに治る便利な体になってる。いくら使おうと、自爆する心配は無い。

「まあ、能力使ったと思ってくれて良いよ」

「あら、酷いわね。私には能力を使わせてくれないのに」

「ここに来たのは、花を傷つけないためじゃないの？」

「そうよ。でもこれはちょっと不味いわね」

そんなに嬉しそうに言われてもねえ。

戯言だよね。

ふと笑い、そして幽香が傘を取り出す。

「あれ？どこから取り出したの？」
「ふふ、どこからかしらね？」

ホント、戯言だよ。

「私もマジメにやらせてもらうわ」
「あれ、今までマジメにやってなかったの？それは困ったねえ」

ボク負けちゃうじゃないか。なんて、ひどく下らない戯言だよ。

「ふふ、これでも私感謝してるのよ？」
「何にかな？川の件？」
「ああ、それもあったわね。けれど、何よりこれほど楽しませてもらったことよ」
「幽香って、戦闘狂って言われない？」
「ふふ」

笑って誤魔化された。

「でも、そろそろお終いにしましょうか」

そう言って、ボクのほうへと傘を突き出してくる。
うん、なんか集まってるよ。妖力みたいなのが、ぐんぐんと集まってる。

「いや、なんかやばそうだね。ならボクは」

ここはあれを使ってみよう。

両手を開き。縦にして並べる。かめ〇め波、の構えって言ったら

分かる（縁の知識参照）？

溜める。力を、水気を集めて行く。この世界に生命は無い。けれど源たる水は大量にある。水神の世界なんだから。あって当然でしょ？

「あら、そっちも十分危なそうじゃないの」

「いやいや、こっちも押し切られないように精一杯なんだよ？」

戯言だけどね。ってこの言葉結構気に入ったかも。

どうやらお互い溜めた時間は同じらしい。ほとんど同時に撃ち出していた。

「マスタースパーク！！！」

「ハイド〇ポンプ！！！」

うん。ごめん。ここまでシリアスにやっておいてなんだけど、ポ〇モンです。

縁が意外と好きだったらしい。ポ〇モンの知識は結構あった。道

具の七番目セレクトＢＢってなんのことやら。

けど馬鹿にしちゃいけない。なんたって威力１２０の、みずタイプの必殺技なんだから。

幽香のどでかいビームと、ボクの水流が激突し、そのまま拮抗する。

「くっ、まさかただの水で私の全力と拮抗するなんて」

「ただの水じゃない。神力を通した、神すら殺せる水だよ！」

多分、人間が飲んだら病とか治るんじゃない？こんど超神水とかいって売り出そうか？カリン様のところのみたいに黒くもないし、不味くもないけど。

ああ、戯言はこれくらいにしておこう。そろそろ、準備も終わったし。

「詰みだよ（チェックメイト）、幽香」

発動……《水雷》。

瞬間。幽香の足元から水が溢れ始め。

そして、地面が大爆発を起した。

「うーん。これは……」

幽香気絶しちゃったね。まあいいや。背負って帰ろうか。てな感じに帰ろうと思ったわけなんだけど。

「艶かしいというか、色っぽいというか」

水雷の爆発で、服が色々破けてるね。ちらちら見える肌がなんとも色っぽい。

「ん～……巫女さんにでも頼んでみるか」

そう呟き、幽香を背負って鏡界から跳んだ。

「ここはどこかしら？」

「あ。目覚めたんだ。幽香。ここは神社だよ」

そう、と呟き辺りを見回す。来たときと同じように。

「一つ聞きたいのだけれど」

「何かな？」

「私妖怪よ？」

「そうだね。妖力で溢れてるし、最初から分かってたよ？」

「なら妖怪が神社の本殿にいていいのかしら？」

あれ？そう言われると、そうかも。まあいっか。

「祭神が良いって言ってるんだから、いいんじゃない？それに、幽香程度の妖力で穢れるほど、ボクの力は低くないよ」

ぎしり、と空気が軋む。

「程度……ですって」

くすくすと笑う。そして、隠していた神力の半分を放出すると、高圧的だった空気が霧散し、幽香が驚愕した。

「何よそれ。つまりさっきのは」

「そうだね、幽香に合わせてたんだよ。ちなみに、これで半分くらい」

バケモノね。と幽香が吐き捨てる。千年も生きてない妖怪があそこまでやれたんだ。幽香にこそそれは相応しいと思うけどね。

「ふふ、幽香が後十万年ほど生きたなら、届くかもね」

あくまで、可能性だけれどね。

「戯言ね、後百万年生きても、届く気がしないわ」

ホント、戯言だよね。

そして、二人で笑いあった。

ちょっとしたオマケ劇場

「そういえば、服が変わっているのだけれど。どうしてかしら？」
「ああ、幽香の服、ボロボロになっちゃったから、巫女さんに頼んで直してもらってるよ」
「それで、どうして私が巫女服を着なきゃならないのかしら？」
「え、だって、この神社それ以外に服無いよ。巫女さんの服は……
…アレだしね」
「アレ？」
「いや、その（胸がね、ほら。巫女さんちょっとささやかというか）
」
「ああ、その巫女が胸無しってこと」
「誰が胸無しですかーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！
！」
「あ、いや。巫女さん、いたの？」

「せっかく服直してたのに、水月様～、一体なんのお話をしてらっしゃるので～？」
「いや、そのね。あの。み、巫女さん。笑顔が恐いよ」
「ふふふふふふふふふフフフフフフフフフフフフフフフふふふふふフフフふふふ」
「あ、いや。その」
「あなたが胸無しってことよ」
「ゆ、幽香！？」
「ふ、ふふ。ちょっと胸が大きいからって、調子に乗るなよ、ドちくしょおおぉぉぉぉぉ～～～～～～～！！！！！」
「ゆ、幽香、なんでそんな生き生きした顔してるの」
「ふふ、ああいう娘を見ると、つい虐めたくなるのよね。ふふふ」
「マジこわいっす、誰か助けて」
「ところで」
「な、なに？」
「あの巫女、私の服を持ったまま逃走していったのだけれど」
「幽香が虐めるからでしょ！？」
「そんなことどうでもいいわ。それより他に服はないの？」
「このドS……いや、もういいや。ちょっと巫女さんの借りてくるよ」

ドS様の恍惚とした表情を想像しながら、少々お待ちください。

「これ、一応巫女さんの服」
「うーん。胸回りがきついわね」
「だから最初からそう言ってるよ」

神社から離れた某所にて。

「自慢かよーーーーー！！！！うわーーーーーーーーーーーーーーーん！！！！」

泣きながら疾走する巫女の姿を周囲の住人が見たという。

二十八話　3年ドS組、ゆーかりーんセンセーイ。あ、ゆ、幽香。やめて、殴らないで。

巫女さん哀れ。幽香のドSっぷりが、本編でないなあ、と思って、おまけで書けないかなあ?と思ってたら、こんな話になってしまった。

実際、幽香は大きいのか?二次元ではちょっと分かり辛いですよね。作者も、紅魔郷から始めて、シューティングだけでなく、格ゲーのほうもやりましたが、咲夜さんのＰＡＤ疑惑がどの辺りがそうなのか全然分からなかった。違いなんて分からんよ。弾幕に必死で。これ女性の人が見ると、怒られるかな～。うーん。とりあえず謝っておきます。ごめんなさい。

ちなみに、縁の時代はまだ金、銀までしか出てなかったという設定にしておいてください。ルビーサファイアからしおふき?だっけ。威力２００（ぐらいだったはず）のホエルオーの必殺技があるから。

作者的に古い話ですが、道具の七番目セレクトＢＢ、って知ってます?

初代ポケモンですが。最初から出来るので便利ですが、たまに技が全部消えるのが難点。なぜか作者のカイロスは８３という微妙なレベルになっていたが。

因みに、金銀だとボックスを使った増殖ですね。一回に5匹しか増殖できないのに、二時間かけてカイリューを増殖しまくって、ふしぎなあめ４００以上マスターボールを１００近く増殖させたのは良い思い出。

全く関係ないのですが、作者の口癖というか、書き癖というか、「～だよねえ」「～かなあ」って語尾を少し伸ばす書き方をするんで

すが、メール打ってたら、友達のその口癖ウザイって言われてちょっと涙目……。

作中にもこういう表記ありますけど、無いほうがいいですかねえ？

↑今ほとんど無意識に使ってました。

二十九話　美的感覚なんて人それぞれなのに、一番美しいと言われる人がいる。

今回ちょっと短いです。いつのまにかポイントが４００超えていた。
感謝感謝です。

二十九話　美的感覚なんて人それぞれなのに、一番美しいと言われる人がいる。

ボクの《明鏡止水》の効果時間はだいたい最長で一日。だから、幽香には悪いけど、怪我を押してでも、ボクたちは幽香の家に戻った。鏡界の窓と窓を直接繋げることで、《廊下》に中る部分を跳ばせる。そうすれば他人でも連れて行ったときのように、鏡界内を移動し、別の鏡へと出ることができる。そうやってボクたちは帰ってきた（正確には帰ってきたのは幽香だけだけで、ボクはむしろ家から出て行ったことになるんだけどね）。

「中々面白い経験だったわ。妙な能力を持っているのね」
「うん、それはいいけど、巫女さんが可哀相過ぎるから、もうちょっと優しい言い方をして欲しかったよ、ボクは」
見つけた時は、鎮守の森でさめざめと泣いてたよ……。なだめるのに苦労した。

そして、帰ってきた巫女さんがぱっつんぱっつんになった自身の服を着た幽香を見て、また落ち込むし。
「祭神に慰められる巫女ってどうなんだろう」

本気でそう思った。

「けど、ボクも気分転換にはなったし、そろそろ出発するよ」
「あら、泊まっていけばいいのに」
「いや、今行かないと、何時までも引き伸ばしちゃいそうだから」

あ、でも。

「もし、良かったら、向日葵の種くれない？」
「ヒマワリって何かしら？」

あれ……？うん、あ、そういうことか。

「えっと、外に咲いてるあの花のこと。前にボクがいたところでは日の動きを追うように花が回るから、向日葵って呼ばれてたんだよ」

つまり、花はあるけど、知識は無いわけだ。幽香って基本的にこの子とか、あの子たちとか言って名前で呼ばないし、気にしてなかったのかも。

「そう、向日葵ね。気に入ったわ。今度からそう呼びましょう。それと種だったわね、いいわよ」

そう言って、幽香が笑った。気のせいか、それはひどく柔らかで、優しい笑顔だった。

そんなことがあって、再び旅路についてから、三日くらい。飲まず食わずの不眠不休で歩いたおかげか、思ったより早く都に着くことができた。

「ふーん。やっぱり国の中心だけあって、他よりずっと栄えているね」

街中を歩いていると、やはりどことなく活気があるね。

と、その時。

「どけい、どけい」
街の中を牛車が通る。牛車なんて乗れるってことは。
「貴族か……」
だとすると、これについて行けば、案外簡単にかぐや姫のところまで行けるかもね。
《反射》発動。
光、音の二つを内側に反射する。これで、ボクの姿は誰にも見えないし、ボクの立てた音は誰も気づかない。
それから、神力を限界まで消し、牛車の後ろをついて歩く。
というか、あれだよね。昔の都市と違って、光と音さえなんとかすれば、もう誰も気づけないよね。
「一億年たって、世界は退化したのかな？」
というより、あの都市だけが異常に発展しすぎていただけなのだけれど。
遅い遅い、正に牛の歩みの牛車を歩いて追って行くと、街から出たところにある一軒の屋敷に辿り着く。
これは、当たりみたいだね。

「案内ご苦労様」

聞こえないと分かっていても、そう呟き、ボクは屋敷の中へと入っていく。

貴族の後をついていく。ボクにはかぐや姫がどこにいるかなんて知らないからね。

そして、一つの部屋に貴族が通され、障子が閉まる前に部屋へよ滑り込む。

そして、そこに彼女はいた。

真っ黒な髪が印象的だった。そして、なるほど、これはたしかに綺麗だと思った。

だからこそ、その目が気になった。

退屈そうな、面倒そうな。

そんな目を、かぐや姫はしていた。

「キミがかぐや姫？」
貴族が帰って、一人になった時を見計らって、《反射》を切って突然現れたボクに、少女は驚いた様子でボクを見た。

「あなた、誰かしら？」
警戒されてるね。まあ、無理も無いけど。

「ボク？水無月梗。ただの竜だよ」
と、そう言うと、少女が驚いた顔をした。
「あなたが梗さん？永琳の言ってた」

今度はボクが驚く番だった。

「永琳ちゃんのこと知ってるの？てことは、本当に月の出身！？」

ちょっとヒートアップしたので、互いに落ち着き、再度話し合う。

「そう、永琳ちゃんが言ってたんだ」
「ええ、昔お世話になった、妖怪兼神様の家族みたいな人って言ってたわよ」

そっか。そんな風にして覚えててくれたんだね。お互いにひどく昔の話なのに。

「聞きたいことがあるんだけど」

だったら、余計にボクは……。

「いつか月に帰るって本当？」

そして、目を見開いたかぐや姫を見つめた。

輝夜姫の屋敷からの帰り。

ふとボクは月を見上げる。

とても綺麗で。

とても妖艶で。

とても神々しかった。

「《鏡花水月》」

呟くと、ボクの世界から月が消える。

鏡に映った花のように。水に映った月のように。

そこにないものをあるように見せる。

それが《鏡花水月》。

世界に幻を貼り付けてしまうのだ。たとえ、偽物の夜空でも。

「綺麗だし、艶かしいし、神々しいけど」

今だけは、見ていたくない。

「だから、消えて」

ボクの視界に入らないで。

空から月が消えると、ボクは再び歩き出す。

そして、都への道を歩いていった。

二十九話　美的感覚なんて人それぞれなのに、一番美しいと言われる人がいる。

ちょっとだけセンチな気分の梗くん。今回話しが上手く伝わらなかったと思いますが、かぐや姫導入編みたいなもんなんで。詳しいことはもうちょっと考えながら次とかに書くと思います。
次は、前半にかぐや姫との会話を少し書いたら、後半でもこたんが出てくるかと。

今回初登場の技《鏡花水月》。簡単に言うと、鏡界にあるものを実在も存在もさせずに映し出す。《幻影》を見せる技ですね。今回は月の無い夜空を映しました。
この技の良い点は、鏡界が《模様替え》と称した世界変容ができるので、好きな幻が見せれることですかね。
基本的に鏡界を操る程度の能力の技には《鏡》の字を、坎を創造する程度の能力には《水》の字を入れることを原則としています。

三十話　怪奇！口裂け女の怪！？路上で私キレイ？と聞いてきたお姉さんには注

注意しておきます。今回後半が清々しいほどカオスです。
元ネタ分からないって人。ＦＦ８とドラクエをやっておけばだいたいは大丈夫。

三十話　怪奇！口裂け女の怪！？路上で私キレイ？と聞いてきたお姉さんには注意

本当にここで正しいのか。

暗闇に沈む糸は、手繰り寄せるまで何が付いているのか分からない。

「聞きたいことがあるんだけど……いつか月に帰るって本当？」

そして、目を見開いたかぐや姫を見つめた。

「どうしてそのことを」

「なるほど、本当なわけか」

だったら。

「どうして知ってるのかしら？」
「色々あるんだよ、ボクにもね」

答えにはなってなかった。けれど、はぐらかすという意味ではこれで良い。

「ところでさ、なんでかぐや姫は月から地上に来たの？」

先の答えが得られたのだから、これ以上この話を続ける意味もないと思い、ボクは話題を変える。

「話をはぐらかされた気が……まあいいわ」

かぐや姫の話によると、永琳ちゃんの作った蓬莱の薬というものを飲んだ罪で、地上に流されたらしい。しかも、それが自身で分かっていて招いた状況であると言う。

「なんでそんなこと。そんなに蓬莱の薬ってのが欲しかったの？」
「そんなものどうでもいいのよ。ただ地上に行きたかっただけ。月の退屈な生活から逃げ出したかっただけよ」

そんな理由かよ。

「けど、地上に来たけどやっぱり退屈ね。今さら月に帰る気もないけれど」
「あれ？帰る気無いの？」
「地上で穢れたこの体じゃ、月に帰ってもロクな生活もできないじゃない。だったら、まだ地上のほうがマシじゃない」

そんな当たり前、みたいな顔されても、月の人たちの考え方なんて知らないよ。

「というかさ、永琳ちゃんと親しげみたいだけど、かぐや姫は「輝夜。蓬莱山輝夜よ」じゃあ、輝夜で。輝夜はどういう関係?後ボクのことは梗でいいよ」

「月にいた頃の私の教育係だったのよ」

へえ、永琳ちゃんがね……きょ、教育!?

「ね、ねえ。輝夜」

「あら?どうしたのかしら、そんなに震えて」

「まさか、また依ちゃんと豊ちゃんと一緒になって、なぜなに、なんて言ってるんじゃ……」

「なぜなに?なんのことかしら」

良かった。どうやらアレは月では行われていないらしい。あんな空間が月でまで展開されてるんじゃないかと、一瞬思ってしまったけど。

「あはは、何でもないよ~。はは。そう言えば、月に帰らないって、でも月から向かえが来るんじゃないの?」

冷や汗をかきながら誤魔化す。輝夜は訝しげな顔をしていたが、やがてふっと空を見て答えた。

「逃げるのよ。多分、永琳も来るでしょうから一緒に」

ドクン

心臓が、一つ大きく鼓動を打つ。

「え……来る……？永琳ちゃんが……？」

「ええ、きっと来るわよ」

永琳ちゃんが来る。その言葉がぐるぐると頭の中で回る。

「それ、いつ？」

「……？……次の満月。一月後ね」

「そう……悪いけど、今日はもう帰るよ。また来るかも」

「そう、退屈だから、いつでも来て頂戴」

その言葉にボクは、曖昧に笑って返した。

夜の都はまるで死んでいるようだった。
都と言っても、夜になれば妖怪が跋扈し始める魔都となる。
そんな中で出歩く者がいるとすれば、自殺志願者か……もしくわ、同じ妖怪だけだろう。

「大丈夫？」

目の前で、妖怪に食われかかっていた少女にそう尋ねる。

「あ、ああ、あぁ……」

狛犬をもっと醜悪にして巨大にしたような妖怪が目の前で口を開けて自分を丸呑みにしようとしたらこんなにも硬直してしまうのかもね（説明的口調ありがとう。って誰に言ってるんだろう）。

しょうがないなあ。と、指先に一滴水を生み出し、そっと少女の首筋に落とす。

「うひゃぁぁぁ!?」

ケロちゃんもそうだったけど、これってみんな良い反応するよね……え？

「うわぁぁぁ!?」

なんか、いきなりすっごいドス黒いのが体に……た、祟り!?は!!まさか!?

同時刻。守矢神社。

「誰がケロちゃんだあああぁぁぁぁ!!!（↑ケロちゃ、ぐは、す、諏訪子様です）」

「す、諏訪子!?（↑神奈子さんです）」

しまった!?祟られる速度が速すぎて《反射》が間に合わない。

「ちょ、ちょっと!?いきなりどうしたんですか、だ、大丈夫ですか!?」

あ、い、意識が……。

「か……」

「か？」

「かえる……おそる……べし……（バタッ）」

「ちょ、ちょっと！？大丈夫ですか、ていうか最後のなんなんですかーーーーーーーーーーー！！！！」

本日の教訓：人の嫌がることは止めましょう。

攻略のヒント：あまり諏訪子様を弄っていると、思わぬ反撃を食らいます。戦闘中にＰＴ全員が暗闇、沈黙、混乱、バーサク、毒状態に加えＨＰＭＰ１になるなど危険なものもあるので、注意しましょう。神奈子様を弄りすぎると、空からオン〇シラーが落ちてきて、ＰＴが全滅した上で、強制的に全ての冒険の書も削除されるのでもっと止めましょう。

Ｄｅａｄ　Ｅｎｄ

《セーブ画面に戻る》

《タイトルに戻る》

《ゲームを終了する》

→《人生を終了する》

「って、終わるかあああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

あ、危なかった。何か、凄まじい電波を見ていた気がする。

「って、あ……えっと」

ボクの目前には、帰り際に助けた少女が。

「あ、あの。私、何も見てませんし、何も聞いてませんから！！」

そう言って、少女が障子を開けて出て行った。

「待って！！誤解だ！！誤解なんだあああぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

カーームバーーーック！！！！！

三十話　怪奇！口裂け女の怪！？路上で私キレイ？と聞いてきたお姉さんには注意

恐るべしカエル！！！！！！
まさか、とうとう距離すら越えて聴き取るとは。最早第六感と言っても過言では無い。

と、言うわけで、前半のシリアスを全て吹き飛ばすような後半でした。
なんでこうなったんだろう？ちなみに、後半の女の子はもこたんです。

ふと、二つほど新設定の小説思いついてしまった。東方はなんか良く思い浮かぶなあ。一つはまあ完全オリジナルなんですが。もう一つが、この鏡蛟紀で、もし過去で梗くんが死んで、縁が生き残ったら、という仮定の話を思いついてしまったんですよね。鏡蛟紀終わったら、番外編みたいにして書いてみようかな？

次回、ついにえーりんとの再開が！！『約一億年ぶりの再開、最初の言葉は誰だっけ？でも仕方ないと思う』活目して待て！！（↑なんかこんな予告あったよなあ、と思い出しながら書いてます）

三十一話　約一億年ぶりの再開、最初の言葉は誰だっけ？でも仕方ないと思う

うーむ。シリアス抑え目にしようと思ったのに、「紅魔の小悪魔さん」という動画見てたら、シリアス全開すげーな、と思い、ついついこんな話になってしまった。

十六夜咲夜の御使いが笑えすぎて、頭に纏めていた内容全部吹っ飛んだ。もう咲夜さんが変態すぎるｗｗ　五話のチルノの哀れさに、涙が出そうだった。

紅魔の小悪魔さんで、小悪魔がマジでカッコイイ。主人公補正が掛かったら、小悪魔さんすげえっす。

三十一話　約一億年ぶりの再開、最初の言葉は誰だっけ？でも仕方ないと思う

出て行った少女を引き止めて事情説明中。

「えっと、すみませんでした」

色々と誤解を解いた妹紅ちゃん（互いに自己紹介くらいはしたよ）の最初の一声がそれだった。

「いや、別に謝れって言ってるんじゃなくて、ただ誤解してほしくなかっただけで」

「けど、それ梗さんが悪くないですか？」

「あはは」

笑って誤魔化す。

「それで、ここって妹紅ちゃんの家？」

「あ、はい」

「へえ、立派なお屋敷だね」

名前が藤原妹紅。藤原ってことは、かなり身分高いってことだろうけど。

「貴族って、思ってたより気さくなんだね。かぐや姫もそうだったけど」

そう言った途端に妹紅ちゃんの顔が歪む。

「かぐや姫？」

「あれ？知らない……わけないか」

「かぐや姫に会ったんですか……？」

「まあね」

「どうして、って求婚に決まってますよね」

勝手に自己完結した妹紅ちゃんに、違うよ？と声をかけるとびっくりしたような顔になった。

「違うんですか？」

「うん。かぐや姫の知り合いが昔別れたまま会ってないボクの知り合いでね。その人のことを何か知ってるかと思って聞きに行っただけだよ」

間違ってはない。ただそれが月だとかどれくらい昔だとか言わなかっただけの話。

「それに求婚なんてするわけないよ、だって……」

「妹紅！！！」

ボクの言葉を遮って、一人の男の人が部屋へと入ってくる。

「妖怪に襲われたと聞いたぞ！！大丈夫だったか、怪我してないか！？」

「あ、あの。父様、落ち着いてください」

お父さんか。娘の怪我が心配で来ちゃったんだね。

そして、男の人がボクを見て。

「キサマが娘を襲った妖怪かーーーーーーーー！！！！！」

「んなわけあるかあああああぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！」

ただのボケたオッサンだった。

「いやあ、すまんすまん。娘の命の恩人にとんだ失礼を」

「いや、ボクも、妹紅ちゃんには助けられましたから」

実はまだ諏訪子ちゃんの祟りのせいで体が少し不自由だったりする。

「ところで、お名前を伺っても？あ、申し送れましたが、自分は水無月梗と言います」

「む、梗か。良い名ではないか。自分は藤原不比等と言う」

「藤原……不比等……様ですか」

「娘の命の恩人に様づけなどいらんよ」

「では、不比等さんと」

うむ、と尊大に頷く不比等さんを見て、ボクはやや複雑な心境だった。

かぐや姫に出てくる登場人物の一人、車持皇子。それが藤原不比等だという。

だとするなら、この人は……。

そしたら、妹紅ちゃんは……。

「では以上のものを持ってきてください」

そう言って、輝夜は部屋へと帰っていった。

かぐや姫の逸話で有名な一説が目の前で行われていた。

石作皇子には「仏の御石の鉢」、車持皇子には「蓬莱の玉の枝」、右大臣阿倍御主人には「火鼠の裘」、大納言大伴御行には「龍の首の珠」、中納言石上麻呂には「燕の産んだ子安貝」。

五つの難題。

空想とでも言う、御伽噺の中のものを探せと言う。

案外、この世界だと実在しているのかもしれないが。

ただの人間でしか彼らにはまず探せないだろうもの。

不比等さんと一緒にまたこの屋敷にやってきたボクは、ちょうどその場面に遭遇していた。

「断っても切りがないから、こういう形にしたの？」
「ええ、これで諦めてもらえるでしょ？」
「そうかもしれないけどさ」

部屋へと戻っていった輝夜を追いかけ、尋ねると、あっさりと認める。

理解はできるが、あんまり性格の良いやり方じゃないとは思う。
結婚するわけにもいかないのだから断るしかない。
けれど、理由も無くただ結婚しないじゃこの時代の人間には通じない。

「だからこういう方法くらいしかないのは分かるけど」

それでも、やっぱり、あまり良いやり方だとは言えないよね。

ちょっとオマケ（本編はまだ終わらないよ）

「ところでさ」
「なにかしら？」
「竜の首の珠ってボク《竜》だけど、そんなのないよ？」
「そう言われても、私にも分からないわよ」
「どんな竜が持ってるんだろうね。ていうか、そもそもボク以外の竜を見たことが無いけど。いるのかなあ？」

「さあ？」

それからしばらく、特に何もない日々が続いた。
難題の挑戦した人々は誰一人としてこの難題を解くことができず、去っていった。

勿論。妹紅ちゃんの父親、不比等さんも。

「この世をば　わが世とぞ思ふ　望月の　欠けたることも　なしと思へば」
「随分と傲慢な歌ね」
「ボクが読んだわけじゃないしね」

ただ、満月を見ていて、ふとそんな歌を思い出した。

「高慢ちき……ふふ、さてさて、誰の歌だったかな？」
「そんな高慢ちきな歌を詠む人なんて、帝くらいでしょう」

「帝と言えば、帝にまで求婚されたんだって？」
「ええ。けど断ったわ。代わりに、私がいなくなった後に、蓬莱の薬を送ってもらうように頼んだわ」

不老不死の薬そんな簡単に渡していいのかな？

「ボクは、こんな世界なんていらないけどね」
「あら、どうして？世界を手に入れれば何でもできるわよ？」
「輝夜なら欲しいの？」

さてね。と答えをはぐらかす。

「それで、あなたは？」

それでいて、ボクには聞くか。別にはぐらかしてもいいんだけど。

「ボクの本当に欲しいものは、例え世界を手に入れたって手に入らないからだよ」

何でかな。ふと口から零れてしまった。

それからずっと、輝夜は黙ったままだった。

満月の夜。

今日、輝夜へと月から向かえがやって来る。

多分、永琳ちゃんも一緒に。

「腹くくるかあ。もうどうしようもないんだし」

ぐだぐだ考えるのは止めよう。

「面倒なことは考えない」

最初にそう決めてたんだから。

「会って、それからは」

場に任せればいい。

そう、思った。

真夜中のかぐや姫の屋敷には、大勢の兵士が詰めていた。

輝夜が月に帰ると言ったので、帝が送ってきた十把一絡げの兵士たちだ。まあ数だけはいるけど。

月の武装が、あの頃と同じなら十人いれば全滅できるだろうなあ。
それほどまでの技術力の差。まあ、ボクは最初から分かっていたけれど。
目の前の倒れ付す兵士たちを見て、それでも溜息しか出てこない。
「雑魚過ぎるよ」
悪態をついても仕方ないと思う。数千人の兵士が何もできず倒れてるだけなんて。最早、足場の邪魔になる分マイナスでしかない。
一番最初に誰かが叫んだ。
その声に反応して、皆が空を見た。
そこに光があった。
気づけば、兵士たちは皆倒れていた。
役に立たないにもほどがある！！！
障害物（↑兵士）を押しのけながら、ゆっくりと進むと、屋敷の入り口にいる、昔みた覚えのある格好の人間が数人いた。
月の兵士だ。

そして、その先頭に立つ少女を見た時、ボクの中でまた心臓が跳ねた。

ドクン

少女が輝夜と何かを話した後、月の兵士たちへと向き直り、何か言うと、兵士たちが少女に銃を向ける。

ドクン

一際強く、心臓が跳ねる。

右腕と両足に神力が凝縮されていく。

「あああああああぁぁぁぁぁ！！！！！」

大地を蹴り、轟音と共に、一瞬でそこに辿り着く。

「「「「なっ！！！」」」」

誰もが驚いたその瞬間に、右腕の神力を全て解放。

「傷つけるな！！その娘だけは、絶対に、傷つけるな！！！！」

右腕に圧縮した神力が爆発的勢いで月の兵士たちを攫う。

爆音。

そして静寂。

「梗……さん？」

ピクリ、と体が反応する。

ゆっくりと振り返り、確認してふいに泣きそうになる。

「お久しぶり……永琳ちゃん」

そして、ボクは、実に一億年ぶりに彼女、八意永琳と再会した。

三十一話　約一億年ぶりの再開、最初の言葉は誰だっけ?でも仕方ないと思う

結構飛ばし飛ばしでしたが、一応再開までは漕ぎ着けた。

梗が永琳を大事にしてるのは、生まれた時から一億年前分かれるまでずっとその成長を見てきた家族みたいに思っているのと、後は父親を守れなかった負い目みたいなものですね。

まあ、いつまでも引き摺ってると暗い話になるので、次回でキッパリ決着つけてもらいます。
それと、出番の少なかったもこたんは、次々回に出てきます。

それで四章は終りです。そしたら、また放浪開始。五章は妖怪によく会う章です。西行寺で五章終了で、六章で命連寺と他をやったら、ようやく幻想入り。ふ～、ようやく旅終了が見えてきた。

では、最後に。
誰かメイプルで、アシュラ倒しに行きましょうｗｗ

三十二話　親の心、子知らず。ねえ、縁。キミは何を思ってボクと十日間を過ごす

最初に。活動報告にて、テーマソングバトンと自己紹介バトンの二つを書かせてもらいました。ネタバレに注意してください。嫌な人はどっちも読まないほうがいいと思います。どっちも伏せ気味には書きましたが名前に関してはどうしても隠し切れないよなあ。特にテーマソングは。

今回から少しずつ文字数を増やしていきます。今回が４７００字ちょいだから次は５０００字くらい目指すか。

今回のテーマは「家族の愛」です。三つの家族の愛情を上手く書けたかなあ？けっこう難産だった。一番難産だったのは、テーマソングだったですがねｗｗ

三十二話　親の心、子知らず。ねえ、縁。キミは何を思ってボクと十日間を過ご

「えっと、その……お久しぶり。永琳ちゃん」

戸惑う。直前まで会ってから決めようと考えていたくせに、いざ出会ってみると、ありきたりな言葉しか出てこない。

トクン、トクン、トクン

心臓が鼓動を打つ。強く、強く。

「ええ、お久しぶり。梗さん」

そう言って、笑う永琳ちゃんを見ていると、罪悪感が溢れてくる。

ボクは、守れなかった。彼女の……大切なものを。

約束したのに。

必ず、守ると。

そう、約束したのに。

「二人とも、今は逃げるのが先よ」

輝夜のその言葉にハッとする。

「月の兵士は！？」

「大丈夫。さっきの梗さんの一撃で全員死んでいるわ」

「じゃあ、今の内に逃げましょう」

「途中までボクも行くよ。話したいこと、いっぱいあるから」

「そう、なら一緒に行きましょう、梗」

そして三人で屋敷を後にした。

輝夜は育ててくれた祖父母に何も言わなかった。

それがどうしてかなんて。ボクには分からないし、分かる必要も無いだろう。

ただ、輝夜は屋敷のほうを一度振り返り、そっと笑った。

そして、窓からこっそりと様子を見ていた二人は笑っていた。

これ以上、ボクが関わることではないだろうし、関わってもいけないのだろう。

だからきっと、これは三人だけで分かっていれば良い話しで。

ボクにはきっと、分かる必要なんて無いのだろう。

明け方、都からやや離れたところで、ボクたちは休んでいた。

ちょっと明日を探してくる、とかわけの分からないことを輝夜が良いながら、どこかに消えて。

そして、ボクと永琳ちゃんの二人が残された。

「輝夜には、気を使わせたみたいだね」

「そうね」

短いやり取り。けれど、永琳ちゃんと話しているんだと、実感できた。

だから、嫌われる覚悟すら決めて、言いたかったことだけは、全部言おう。

「ごめんなさい！！」

そう言って頭を下げた。

「えっと、何のこと……」

「八意先生のこと」

そう言うと、永琳ちゃんの言葉がピタリと止まる。

「そう、やっぱりそのこと」

「うん。ずっと謝りたかった。約束までしたのに、ボクは、八意先生を守れなかったから」

「……取り敢えず、顔を上げてちょうだい」

その言葉に顔を上げると、すっと永琳ちゃんの手が差し出される。その手には一通の便箋があった。

「これは？」

「父さんから……梗さん充てに」

え？

「私たちが計画を実行する前日に突然渡されたのよ。もし自分に何かあればこれを梗さんにって」

震える手を押さえながら、そっと便箋を開く。昔見た覚えのある、八意先生の直筆で、そこに文字が綴られていた。

「梗くんへ……」

そして、その一文から先生の言葉が始まった。

「つまりさ。先生は分かってたの？自分が狙われていたこと」

「そうなるわね……だからこそ、こんな手紙を書いたんでしょう」

書かれていたことは簡単に言って、一つだけ。

自分が都市の上層部に命を狙われていたのは知っていた。もし自分が死んだのだとしても、それはキミたちの責任ではないのだから、自分の死をキミたちが背負うようなことがあってはならない。

「梗さん……父さんは、最後はどんな顔だった？」

ふいに聞かれた永琳ちゃんの問いに、記憶を引っくり返して思い出す。

そう、たしか。

「笑顔だった。満足そうで、安心したような顔」

ボクが無事だと知って安心していた。永琳ちゃんなら大丈夫だと、自分の生は満足だったと、そんな顔をしていた。

「そう……なら父さんの代わりに言わせてもらうわ。梗さん、父さんが死んだのはあなたのせいではないし、あなたがそのことを気に病むのは、父さんも心配してしまうわ」

「……永琳ちゃんは、それでいいの？ボクのこと……恨んでるんじゃないの？」

ボクの言葉に、ふときょとんとした顔をした後、永琳ちゃんが笑

う。

「恨んだりしてないわ。だって、私にとって梗さんは」

家族のようなものだもの。

不覚にも、泣きそうになった。

家族、家族か。

ボクの家族は、縁だけだった。

そして、あの都市で先生と仲良くなって、永琳ちゃんや依ちゃん、豊ちゃんと出会って。

「そっか……家族か。ボクも家族だと思ってたんだ」

だからこんなに嬉しいんだ。

だからこんなに胸が苦しいんだ。

そっか。

朝焼けに染まる空を見上げ、そう呟いた。

自分の中で、また一つ。鎖が外れた気がした。

「二人はこれからどうするの？まさかずっと逃げ続けるわけ？」

戻ってきた輝夜と永琳ちゃんに三人で、歩きながら話す。

「そうね、どうするの？永琳」

他力本願に輝夜が永琳ちゃんに尋ねると、しばしの間考えた永琳

ちゃんがふと漏らす。

「どこかに、隠れるしかないわね。それまでは逃げるしかないわ」

「どこかに逃げる充ては？」

両者が首を振るのを見て、ボクは一つ提案をする。

「そう、なら一度ボクの神社行ってみる？」

「梗さんの神社？」

「そうそう、水神信仰の神社。そんなに大きいわけじゃないけど、充てもないならしばらくは匿ってもらえると思うよ？」

その間に隠れる場所を探してしまえば良い。その辺は大丈夫だろう、だって永琳ちゃんがいるんだから。

「どうする？」

そう尋ねた二人の答えは是だった。

解かれた鎖はもう戻らない。

それはタマゴのようなものじゃないけれど。

彼、それとも彼女は、鏡と共に目覚めて行く。

ハンプティダンプティなんて洒落たものじゃないけれど。

砕けた鏡は元には戻らない。

そんな当たり前のこと。

ゆっくりと、けれど確実に。

それは目覚めて行く。

さて、それに気づいた時。

もう手遅れなんだって。

そう気づくんだ。

「さてと」

水鏡を通して、二人を神社へと送ったボクは、一つ気になっていることを調べるため、都へと向かうことにした。

気になってるいること。それは不比等さんと妹紅ちゃんのことだ。

車持皇子、藤原不比等は確かに《蓬莱の玉の枝》と思えるような品を持ってきた。けれど、それが騙されて買った偽物だと気づかされ、大恥をかかされた。別に輝夜が何かしたわけではない。けれど、他の貴族も共にいたことが不味かった。

強いて言うなら、状況が悪かった。

きっと、不比等さんと輝夜の二人だけだったなら、こんなことにはならなかったのだろう。

輝夜の屋敷に職人たちが、製作した蓬莱の玉の枝の代金求めてきた。

そこで初めて不比等さんはそれが偽物なのだと気づき。
そして、他の貴族たちに笑い者にされた。

そして彼にはそれ以降、一度も会っていない。
そのことが酷く気になっている。

「……あれは」

都に入ると、すでに昼前だった。いつも通り、賑やかな町が今日はいっそう賑やかだった。
その原因はおそらく、あの兵士の集団。

「今日はいつにもまして賑やかですけど、どうかしたんですか？」
「そりゃあ、あのかぐや姫がいなくなっちまったっていうじゃねえか。それに加えて藤原のお貴族様まで死んじまったらしい」
「藤原の貴族様がですか？なんというお方で？」
「あれだよ、車持皇子様とかいう……」

最後まで聞くことも無く、ボクは走りだす。
人ごみのせいで上手く速度を上げられないけれど、それでも出来る限りの速さで走る。

目指すのはたった一度だけ言った妹紅ちゃんの屋敷。
あそこは不比等さんの本邸では無いらしいけど、それでも妹紅ち

ゃんなら何か知ってるだろうから。

妹紅ちゃんの屋敷に忍び込み、一度だけ来た妹紅ちゃんの部屋へとそっと入る。

「……」

そこに、じっと黙り込んで、座る妹紅ちゃんと、眠ったように静かに横たわる不比等さんがいた。

「こんにちは……かな」

声をかけると、ゆっくりと妹紅ちゃんがこちらを向く。

「こんにちは……」

ボクがいることに驚くことも無く、そう返す。

「お久しぶりです。不比等さん」

床で眠る不比等さんにそう告げる。

答えが返ってくるはずも無い。

それでも、告げた。

「ねえ、妹紅ちゃん。不比等さん、どうして？」

どうして、死んだの？

彼女にこんなことを聞くのは酷かもしれない。けれど知っておきたかった。

原因はきっと、輝夜の屋敷でのことだろうから。

「かぐや姫の屋敷で他の貴族に笑い者にされたんです。父様は騙されて。けど、本物だって、これでかぐや姫と結婚できるって、でも。違った……その日から段々憔悴していって、昨日の晩に……自殺したんです」

支離滅裂。けれど、それが妹紅ちゃんの失ったものの大きさを、不比等さんへの愛情の大きさを示していた。

そんな中で、やはり、とボクは思う。

ああ、やっぱり。貴族というのは、矜持の高い人たちだ。それがあんな笑い者にされて、大丈夫なのだろうか、と思ってはいたが。

現実を目の当たりにすると、辛いね。

例え、話した時間は短くても、ボクはこの人が気さくな人だって知っている。娘の妹紅ちゃんが大好きな親バカだって知ってる。ボクを恩人として自身と対等に扱ってくれる度量の広い人だって知っている。

たった一度、話してしまうだけで、それは縁(えん)だ。縁(えにし)だ。

繋がってしまえば、失ったとき痛い。

けれど、繋がなければ、空虚にしか生きられない。

ああ。

ホント、生きるって……厄介だよねえ。

ねえ……縁（えにし）。

「ねえ……梗さん。家族ってなんでしょう？」

ふと、妹紅ちゃんがそんなことを呟く。

ボクが来てからすでに一時間近く経っていて、その間ずっと妹紅ちゃんは黙って不比等さんを見ていた。

そんな妹紅ちゃんが初めて向こうから話しかけてきた。

「家族……ね。血縁とかそういう意味で聞いてるわけじゃないよね？」

ボクの質問には答えず、いや、それが答えなのかもしれない言葉を妹紅ちゃんが紡ぐ。

「父様には私と母様以外にもたくさんの妻や子供がいます。けど、父様が最後に来たのは、私のところで。昨晩からずっと文で父様のことを他の家族にも知らせているはずなのに、ここに来て父様の顔を見に来た人は誰もいないんです」

だから、分からなくなったんです。

「父様はこの屋敷以外でどんな生活をしているのか、私は分かりません。けど、もし父様を愛してくれている人が他にいなかったから、だから私たちのところに来ていたんだとすれば」

私は、父様の心を救えなかった。父様の家族にはなれなかった。

「かぐや姫のことも、周りがそうだったから……だったら私は、いえ、私が」

父様を殺したんじゃないんですか？

「……」

さて、どう声をかけようか。

そんなことないよ、妹紅ちゃんのせいなんかじゃないよって？

そうだよ、キミが不比等さんの心を救えなかったからだよって？

前者は気休めにしか聞こえないし、後者はただ責めているだけだ。

「その問いには答えられないかな」

結局結論はそれしかなかった。

「だって、ボクは、キミの家族を語れるほど不比等さんと関係が深かったわけじゃないから」

妹紅ちゃんが落胆したように顔を下げる。それを見ながらボクは、でもね、と続ける。

「ボクと不比等さんが話したのは、この屋敷でたった一度だけのことだ。けれど、あの時、妹紅ちゃんを心配していた不比等さんの表情は真剣だったし、妹紅ちゃんと一緒に笑っていた不比等さんの笑顔も本物だった」

その表情が本物か偽物か。人間相手ならだいたい分かる、歳の功ってやつだよ。

「だったら、妹紅ちゃんはちゃんと不比等さんを救っているよ。だってちゃんと笑顔にしてたじゃないか。だから、質問には答えられないけど、これだけは言って上げられるよ。ボクには家族の定義なんて分からない。けど、妹紅ちゃんと不比等さんは、たしかに……」

……家族だったよ。

ねえ、縁。

ボクとキミは、どうだったのかな？

周りには人なんて誰もいなかった。

ボクとキミだけの世界だったあそこで。

ボクとキミは……ちゃんと家族だったのかな？

三十二話　親の心、子知らず。ねえ、縁。キミは何を思ってボクと十日間を過ごす

うーん。なんだこの泣きゲーのシナリオみたいなの。自分で書くと客観的に見れないから、泣けるか泣けないかは知らないが。

ニコ動にて「紅魔の小悪魔さん」全部見た！！
あれは素晴らしい作品だった。完結するのが何年何ヵ月後かは知らないけど早く続編が見たい。
タイミングの取り方がやばいくらい上手い。思わず叫んでしまう「おおおおおお！！！」って。そして泣き所がまた泣かせるシナリオ書くんだ。これがまた。
そして「十六夜咲夜の御使い」を見て、爆笑で気分転換するｗｗ

三十三話　燃える山の山頂で、伝説のアレを見た！？久々の藤岡隊長タイトルに

すみません、文字数増やすといっておきながら今回三千字未満です。
四章のエピローグ的な話だったので、これ以上書くことがなかったんです。

お知らせ：今日五月三日火曜日から五日木曜日まで更新を停止します。ちょっと東京まで行かにゃならんので、ＰＣができないのです。携帯で更新はちょっとできませんが、色々考えておきますので、木曜日に帰ったらまた始めると思いますので、よろしくお願いします。

三十三話　燃える山の山頂で、伝説のアレを見た!?久々の藤岡隊長タイトルに

前の話から一週間後だよ。

ところで、突然だけど。

かぐや姫が帰るのと代わりに、蓬莱の薬を帝に送ったって話覚えてるかな?

覚えてない人は二つ前の話を参照してね。

あの蓬莱の薬、かぐや姫が帰ってしまったことに嘆き悲しんだ帝の命によって岩傘という人が、蓬莱の薬を焼くために駿河にある天に最も近い山というところに行くことになったらしい。

先週のたくさんの兵士はそれだったわけだ。

「あれ?今何か説明的な電波があったような?」

前の話ってなんだろう?それに二つ前の話っていうのも。

まあ、気を取り直して、現在地未来の富士山なう。

「いやあ、正直不味いかなとは思ったんだよ。この山にいる神様って、火の神らしいし、ボク水の神だから、向こうにしてみれば相性最悪だからねえ」

山頂付近からひどく威圧的な神力が漂ってきてるね。岩傘率いる一行はその神力にひるんで、山頂へ向かえずにいた。

「まあ、ボクにしてみれば、空気より軽いけど」

水剋火。水は火を消し止めるもんなんだよ。火気が強いこの神力じゃあ、ボクの水気は突破できないよ。

人間にしてみれば、萎縮してしまうだろうけどね。まあ、あの人間たちがどうなったところでどうでもいいんだけど。

「ただ、問題は、あそこになぜか妹紅ちゃんがいることだよね」

何でいるんだろう、本当に。

あ、山の神が出てきた。岩傘さんたちに何か言ってる。
岩傘さんたちが山を降りようとしているね。妹紅ちゃんも付いていくみたいだ。

「というか、なんで妹紅ちゃん平気そうなんだろうね」
ボクは問題外だとしても、普通の人間なら間違いなく畏怖するほどの神力だよ?妹紅ちゃんはなんであんなに普通な顔してるんだろ

う？

「火気が強いのかな？」

それなら一応説明が付くけど。

ひどく簡単に説明すると、ＲＰＧとかでよくある個人の得意属性とでも言うものだね。

ボクは元はどうなのか知らないけど、今は水気。まあ水だね。

ゲームとかでもそうであるように、自分の得意な属性には、特に耐性が強い。

もし妹紅ちゃんが火気に特に強いのなら、この神力の威圧感を感じないのも納得だよね。

「まあ、妹紅ちゃんは貴族の娘だし、関係ないだろうけど」

きっと、ね。

じとーっとこちらを睨む火の神を刺激しないように、そろっと山を降っていく。

うーん。気づかれてはいたか、やっぱり。

まあ、こちらが神力を出さなければ、それでお互いノータッチでいけるでしょ。多分ね。

その途中で、妹紅ちゃんたちを見つけたので、そっと後ろをついていく。

そして一行が休憩をするために、腰を下ろす。そこは、崖だった。

ここから会話を聞いた限りだと、吊り橋を渡って、さらに別の山を

目指すらしいね。連れてきた兵士たちは、崖下に水を汲みに行ってる。

「あれ……？」

と、そこで、妹紅ちゃんの様子がおかしいことに気づく。なんか、そわそわしてる？

兵士たちがいなくなったので、今ここにいるのは岩傘とか言う人と妹紅ちゃん、そして誰にも気づかれていないボク。

それを確認したらしい、妹紅ちゃん、ゆっくりと崖のほうに近寄る。

「危ないですよ」

岩傘がそう声をかける。

「あの、ちょっと来てもらえませんか？あれって」

妹紅ちゃんが崖のほうで岩傘を呼ぶ。

「どうかしましたか？」

そして、やってきた岩傘を。

「ごめんなさい」

崖下へ突き飛ばした。

「っ～～～～～～！！！！！！！！！」

悲鳴が山に木霊する。

「あ……っ！！」

妹紅ちゃんも最初は呆然自失していたが、すぐにはっとなって、岩傘が座っていた場所にあった不死の薬の壺を持つと、急いで走り出す。

「……なんかの映画のシーンみたい」
なんて、くだらないこと言ってる場合じゃなかったね。
急いで妹紅ちゃんの後を追い、捕まえる。
「きゃあ、だ、だれ……きょ、梗さん!?」
「やっほう。妹紅ちゃん」
「どうしてここに」
「それはこっちのセリフかな?」
「わ、私は」
俯く妹紅ちゃんの手からするりと壷を抜き取る。
「あ!!」
「これ、何の薬か知ってる?」
「不死の薬ですよね……かぐや姫が帝に渡した」
「うん、ならこれどうするつもり?」
「……」
「まあ、別に妹紅ちゃんが飲むなら別にそれはそれでいいんだけどね」
「……え?」
「月人の薬がどういう行方を辿るのか、それが知りたかっただけだから。焼かれたならそれはそれでいいし、妹紅ちゃんが飲むならそれはそれで別にいい」
そう言って、妹紅ちゃんに壷を渡す。
「でもね、不老不死の先にあるのは、ただの虚無感だよ。最終的に生きる希望すら無くしてしまいかねない」
「そんなもの、もうないですよ。だって、父様は……もういないんですから」
ふむ、どうすべきか。やっぱり教えるべきかな、かぐや姫は月に帰ってないって。逆恨みでも何でも生きる気力になるなら。それは

それでいいのかもしれない。だって妹紅ちゃんはこの先、死ぬことが無くなるのだから。

「ねえ、かぐや姫のこと、どう思ってる？」

「嫌いです。むしろ恨んでます……逆恨みなのは分かってますけど。それでもあの人が父上が死ぬきっかけになったようなものだから」

「じゃあ、かぐや姫は、まだこの地上にいるって言ったら？」

「……え？」

「帰ってないよ。かぐや姫は。自分の従者と一緒にこの地上で月から逃げてるよ」

「うそ……」

「キミがそれを飲むというなら、ボクが戦いかたを教えてあげる。この先を生きていくだけの術（すべ）を教えてあげるよ」

輝夜のことだから、多分暇つぶしにでもするんじゃないのかな？

それに、永琳ちゃんがいるし、いざという時でも大丈夫だろう。

ボクの言葉に、妹紅ちゃんは逡巡することなく頷き。

そして妹紅ちゃんは、それを飲んだ。

それから一日後。ボクは妹紅ちゃんを連れて妹紅ちゃんの屋敷忍び込んでいた。

「もう持っていく物はない？」
「はい。もう……何もありません」

「遣り残したことは？」
「この容姿じゃ、何もできませんよ」

その言葉の通り、妹紅ちゃんの姿は大きく変わっていた。背格好や顔は同じだが、黒かった髪が真っ白になり、その瞳は赤く染まっていた。月の薬だからねえ、地上の人には合わなかったのかな？少なくとも同じ薬を飲んだだろう輝夜は髪が黒かったし。多分飲んでるだろう永琳ちゃんも特に変わってはいなかった。

「そう。じゃあ、本当に行くよ。いいね？」

「……はい」

逡巡、目を瞑り。そして開いて、しっかりと頷いた。

「そう、じゃあ。行こうか」

そうして、ボクたちは都を離れた。

三十三話　燃える山の山頂で、伝説のアレを見た！？久々の藤岡隊長タイトルに

五章は妖怪に出会う章。ノリと勢いだけのシリアスなしを目指し頑張ります。まあ、最後が西行寺だからどうしてもシリアス入るんですけどね。

さすがにゆゆ様をノリっぽく書くことはできないや。

紫をどのタイミングで入れるかなあ。ゆゆ様と同時でも良いんだけど。

うーん。因みに、六章で旅は終りです。予定ですがね。もうこれは増えないと思います。ほとんど決定済み。

新規小説「紅い月夜に、紅茶で乾杯」始めました。ホント、なんで始めてしまったんだろう。本編シリアス、日常編ギャグでやってます。本編はこの鏡蛟紀が終わるまでやらないと思うので、まあ物笑いのネタにでも見てみてください。

妹様可愛いよ～。フランが可愛い過ぎて生きるのが辛いくらいだ。

番外一話　ポケ○ンカードＧＢで、伝説の○ァイヤー出したけど、三連続ゴッ○ー

五月五日午後十一時に編集しました。いくらか内容や表現も変えさせてもらいました。

本編更新は無理だけど、番外編ならと、初めて携帯で投稿しました。やっぱり携帯だと文字数が少なくなっちゃいますねえ。

けっこうオリ設定が激しいので苦手な人がいるかもなあ、とも思うが、これから先のことを考えると、あったほうがいいんですよねえ。

まあ、最悪飛ばしても問題はない、とは思います。

Ｐｔ６００突破しました。毎度見ていただきありがとうございます。

番外一話　ポケ〇ンカードＧＢで、伝説の〇ァイヤー出したけど、三連続ゴッ〇

「死ぬぅぅ～！！本気で死ぬぅぅぅ～！！？」
「あ～、大丈夫だよ。もこたん不死だから」
「言葉の綾だけど、これはひど過ぎる～！！」

あ、どうも。水無月梗です。

え、今？もこたんを火山の火口辺りに突き落としてるだけだけど？

「頑張ってもこたん。妖力はあげたから後は火に慣れちゃえば多分妖術も使えるよ」
「火って、これ溶岩だろおぉぉが！？死ぬ……」

お？声が途切れた。落ちちゃったかな？

おっと、回収回収。

「お～、さすが蓬莱人。すごい再生能力だね」

溶岩が固まるまで水をかけてから再生を始めたもこたんを回収。

焼け石に水をかけたって無駄だけど、溶岩に海を落とせばそれは冷えるよね。

まあ、海は良い過ぎでもかなりの量の水を落としたのは事実。

鏡界なんで、何してもすぐに元通りにできるし。ホント、便利だよね、鏡界。

蓬莱の薬を飲んだ時、妹紅ちゃんは一つ能力に目覚めた。

《老いる事も死ぬ事も無い程度の能力》と言い、能力としてはっきりしている分、輝夜や永琳ちゃんより強い不死性を持っているんじゃないか、と思ってる。

だからちょっと、人間じゃあ百回死んでも飽き足りないくらいの訓練をしたりしてるけど（笑）。

ホント、火山に落として生き返るなんて、とんでも無いよね。不死性なら妖怪でも最大レベルの吸血鬼でもここまでの不死性は持ってないよ。

とまあ、そんなわけで、火口手前に回収したもこたんを放置すると、五分もしないうちに復活した。

「殺す気かーーー！？」

「大丈夫。死んでないでしょ？」

「いつもいつも梗さんにボコボコにされてなかったら痛みで発狂するところだったわ！？というか、こんなんで何になるんだよ！？」

「まあ、火山に近付くこと自体には意味なんてないよ？」
「殺す。絶対に殺してやる」
「まあまあ、ちゃんと説明するから、落ち着いて」

別にボクは遊び半分でこんなことやったわけじゃないよ？面白半分だったことは認めるけど。

妹紅ちゃんは、火気に異様に強い。人間でボクの知る限りピカイチと言えるほどだ。
なので、妖術で火を教えることにしたんだよ。
なんで妖術かというと霊力持ってないんだよね、ボク。もこたんは神格がないので神力は持てないし。だから唯一分ける妖力で使える妖術となったんだよ。ホント、もこたんに妖力の適性あって良かったよ。なければ改造手j……いや、何でもないよ。
ただ、残り少ない妖力を妹紅ちゃんにあげたら、すぐに妖術が使える、ってわけじゃないんだよね。
簡単に言うと、火気が無い。才能と耐性はあっても、属性的に言うと人間は土、土気にあたるんだよね。漁師みたいに普段から水気に触れてると、そっちになることもあるみたいだけど。
だから、あげた妖力ごと火気を帯びさせる必要があった。
火気を帯びるには、火とかに触れる必要があるんだけど。

「どうせやるなら、一回で済んで、しかも強力な火気が使えるようなのがいいかなって」

溶岩は高熱の岩など。つまり火気を大量に帯びた土気だから、人間が触れれば僅かでも大量の火気を帯びれる。ただ問題は人間が触

れたら死ぬことなんだけど、妹紅ちゃんは不死だから大丈夫だかな？って思ったんだよ。

「つまり、最初から溶岩に落とすつもりだったのかよ！？」
「まあ、そういうことかなあ？落ちるまで止めない予定だったし」
「うぅ、本当にこの人について来て良かったのか？鬼だぞこの人」
「失礼な、竜だよ。それにこんなのもうやらないよ。今のもこたんの火気はその辺の火の妖怪よりも強いから」

やっぱりこんな無茶妖怪でもやらないよね。ていうか、やれないよね。
不死の蓬莱人たるもこたんだから出来る芸当だよ。

「これ以上があったらもう不死とか関係なく死ぬに決まってんだろ！？」
「不死なのに死ぬか。もこたん面白いこと言うねえ。まあとりあえず妖術使えるかやってみようか？ボクと違って火気が見えないもこたんはまず火気を感じることから始めようか」

そう言って水を創りだしもこたんの周囲に巡らせる。

「どんな気分？」
「なんか嫌な感じがする」

「水剋火、火気は水気が苦手だからね。まずは、自分の中にある妖力を感じてみて？」
「なんか疼くように流れてるこれか？」

「それだよ。もこたんの妖力は火気を帯びてる、周囲の水気に反応してるんだよ。次にそれを操作するよ。大事なのは想像することだ。

その体に溶岩のように巡り流れる灼熱の妖力を、全身を循環するように想像する」

もこたんが目を閉じ、集中すると、やがてもこたんの周囲の水気が反応を始める。回りだした妖力とそこにある火気が、水気を押し出し始めたみたいだね、後一歩だ。

それにしても、すごい才能だよね。水気に弱いはずの火気で、加減してるとは言え、ボクの水気が押されてるよ。

「最後だ。自身の思う炎の形を思い描いて。明確に想起し、流れる妖力にそうあれと命じるんだ」

瞬間。ボクの張った水気の壁が消し飛んだ。

そしてそこに、燃える翼をはためかす鳳凰がいた。

「なるほどね、生と死を繰り返す死出の鳥か、妹紅ちゃんにこれ以上似合うものも無いかもね」

これで完成。とボクは呟いた。

「後十年。それで妹紅ちゃんとはお別れかな?」

一人喜ぶもこたんを余所に、その言葉は誰の耳にも届くことは無く。

そして、ボクは哂った。

番外一話　ポケ〇ンカードＧＢで、伝説の〇ァイヤー出したけど、三連続ゴッ〇

鳳凰と書いて、ふとポケモンが出て来た。そしたらタイトルがあんなことに。ちなみにタイトルは作者の苦い経験です。
グリーンジムにハルナさんを倒しに行った時の話しです。分かる人がいるか知りませんが。
さらにちなみに、作者はサンダーＬｖ．６８を二枚だけで後は全部エネルギーとトレーナーカードという超特攻デッキを作ったことがあります。

もう一話番外編を作ってます。そのうち投稿予定。

番外二話　もこたん危機一発!?そしてもこたんは鳥になる。タイトルで内容と

なんでこんな話になったんだろう?
飛ばしてもかまいませんが、後半、特に最後ら辺りは梗くんの心境があるので、読んでみるといいかも。
まあ、黒○危機一髪をネタになんか書いてみたかっただけなんだけど。
最後のシリアスはただのアドリブ。

番外二話　もこたん危機一発!?そしてもこたんは鳥になる。タイトルで内容と

「はい、じゃあ、正直火はボクの専門外なので、そっちは自分で頑張ってね。というわけで、次はいつもとは違う戦闘訓練やってみようか」

今日も元気にもこたん弄ｒ、ではなく修業だね。

「では特設装置カモン」

「鏡？しかもたくさんある」

ボクの言葉とともに、もこたんを囲むように鏡が現れる。ちなみに空中は水で浮かして設置。

「はい、やり方は簡単。この鏡の中に一つだけ本物があります。後は全部能力で作った偽物だね。今から水弾を撃つから、水弾が本物の鏡に当たったらもこたんの負けね。時間いっぱい本物の鏡を守りきったらもこたんの勝ち」

ちなみに、本物の鏡は鏡界を通してもこたんの真下に隠された鏡と繋がっている。

もし一発でも水弾が通るとそれを合図に水雷が発動。もこたんは一時鳥になれる。

題して「もこたん危機一発!?」あの海賊のおっさんを飛ばすゲームに似てたのでこの名前。

「もこたんは、基本的にその場で飛来する水弾を炎で撃ち落とす。まあ動いても良いけど鏡が守りにくくなるよ。それと、ハズレの鏡に当たっても負けにはならないけど良くないことになるから気をつけてね」

ハズレの鏡に入った水弾は上空に溜まる。水雷で飛んだ場合に、水槌となってもこたんを地上に返してくれる便利な設定だよ。鬼畜設定とも言うかもしれないけど。

「よし、じゃあ始めよっか」

そう言って、周囲に水弾を展開する。

「行け」

言葉と共に、十を超える水弾が一斉に飛び出した。

ドパアアアアアアアァァァ

「うわあああああああああああああああああああ！！！！！」

そして誰もいなくなっｔ……じゃなかった。そしてもこたんは鳥になった。

「所要時間二分二十三秒。いや、さすがにこれはダメでしょ。もこたん」

そして止めのお仕置きと言う名の水槌が落ちる。

「ぐはっ」

「お～、見事に当たったね。避けても良かったのに。空中で避けれるかは別としても」

「……」

「おーい？もこたん？」

「……」

「へんじがない。ただのしかばねのようだ」

と、言うわけで、渇を入れるために久々のウォーターカッター。命名《水刃（みずは）》でも。

「って、殺す気かーーーーー！！！」

「あ、起きた」

「あ、起きた、っじゃねえええぇぇぇぇ！！！なんで上からも来るんだよ！？聞いてないぞ」

「言ったよ。ハズレの鏡に当たっても負けにはならないけど良くないことになるから気をつけてね、って」

「あれのことだったのか……」

……ｏｒｚ、って感じだね。意味よく分かんないけど。

「さあ、もこたん、復活したところで第二ラウンド行ってみようか」

「鬼か！！！！」

「竜だよ」

「うっさい」

最近、このやり取りが定番になってきたな、と思う。

この後十四度に渡りこの訓練したよ。因みに、もこたんは全部鳥になったけどね。

十回超えた辺りから、最後の水槌の後、バウンドしたところに上下に《水刃》を振り下ろしてぶつ切りにする虐ｍ……お仕置ｋ……死の罰ゲームｍ……もう虐めでいっか、を追加した。

「おーい。大丈夫かい？もこたん」

俎板（そじょう）の鯉（こい）のようにピクピクと痙攣したまま動かないもこたんを見て、さすがにやりすぎたかと思ったよ。まあ、遅すぎるという意見もあるけど。

では、もこたんの目を呼び覚ます魔法の言葉をば。

「実は今回の訓練。単なるボクの遊びだったんだ！！！」

「ふざけるなあああああああああああぁぁぁぁぁ～～～～～～！！！！」

とまあこのように、怒らせるようなことを言うと、もこたんはどんな状態からでも復活します。すごいよね、怒りが自身の限界をあっさりと超えさせるんだ。

「まあ嘘だけどね。今回のは、大量の水弾を捌くのと把握による予測の訓練だったのだよ」

前半の意味は分かったようだけど、後半の意味が分からない風なもこたんに説明する。

「今回、鏡という守るべき対象がありました。一撃でも当てられたらダメって状態で、もこたんはまずどうした？」

「えっ、まず？ひたすら打ち落としてただけだな」

「はい、それでいけるのは、人外の身体能力を持ったやつだけだよ。人間並みの身体能力しか無いもこたんじゃそれじゃあ対処が追いつかない。じゃあ、この場合、どうすればいいと思う？人間はこういう場合、どうやって切り抜けるべきだと思う？」

「うーん、分かんねえ」

「じゃあ、人間が自分よりも強い敵を倒すために生み出したものって何？」

「武器？」

「三十点かな。まあ、当たらずとも遠からず。答えの一つではあるけど、それじゃあ満点にはならない。答えは技術だよ」

「技術？」

「そう、たとえば、体術。これは他と比べて低い人間の身体能力を効率的に動かすことで、動物や妖怪と戦うための技術の一つ。次は退魔術、ただしこれは霊力をもった人間のみだけどね。妖怪を倒すための最適な攻撃方法を突き詰めていった技術の一つだよね。そしてもっと狭い意味での技術。さっき言った武器と、要するに道具だね」

「それが今回のこれと何の関係があるんだ？」

「今回の場合は、体術だね。まあ多少意味合いが違うけど。兵士が弓兵で狙われたときの対処法の一つだよ。例えばもこたん。ボクがもこたんに向かって弓を向けていたら、どうする？」

「避ける」

「そう、だって射線上にもこたんがいるって分かるからね。だったらもこたんは弓の射線上から逃げるよね。じゃあボクが上に弓を向けてたら、動かないんじゃない？」

「まあ、確かに」

「でも山なりになって、矢はもこたんに当たることだってある。じゃあ、同じ当たる可能性を持った行動なのに、どうして対処法を変えたんだと思う？」

「……もしかしてさっき言ってた把握による予測ってやつか？」

「大正解。直接向けられた弓を見て、もこたんは矢が当たると予測した。だから射線から避けた。でも上に向けられた弓を見て、もこたんはそれが自分に当たるとは予測できなかった。どうして？それはもこたんが把握してないからだよ。例えば風向き。これ一つで全く射線が変わってくる。そして矢の状態。弓のしなり。確認しようと思ったらいくらでも出てくるよね。それこそ風の強さなんてのも重要だ。何となく言いたいこと分かってきた？」

こくりと頷くもこたんを見て、続きを話す。

「今回気づいて欲しかったのは、水弾が直線的にしか動かなかったこと。常に同じ場所から出し続けてたこと、実は完全な球形じゃな

くて、形である程度向きが分かるようになっていたこと。この三つだよ」

わざわざ総計十五回もやったのだから、覚えがあるのか、もこたんがそう言えば、という顔をしていた。

「つまり、出すところが分かってる、しかも向きもある程度分かっていて、直線的にしか動かないことも分かってる。だったら、後は鏡の位置を確認しながら、射線を予測して打ち落としていくだけで良かったんだよ。それだけでいつまでだって出来たんだ」

「なるほど……でも難しいよな、それって」

「だから十五回もやったんじゃないか。今回もこたんに一番知っていて欲しかったことはね、『相手を良く観察してみること』だよ。不死だから忘れやすいかもしれないけど、キミはあくまで肉体的には人間なんだから」

じゃあ、ラスト一回行ってみようか。ということで、再び鏡を展開。

「じゃあ、行くよ」

そう言って、水弾を撃ち出した。

飲み込みは割りと良いよね、もこたん。天才、とかそういうのではなくて、素直に聞くから後は自分の体をどこまで想像通りに動かせるか、なんだよね。余計な考え持つと、動きが雑になるから良く分かる。

「十八分四十八秒。まあ、一回でここまで伸びたなら上出来かな？」

半分冗談みたいな考案だったけど、思いの他成果がありそうで結構だね。

次は何をさせようかな？ロッククライミングとか面白そうかも、グランドキャニオンみたいな鏡界を作っておかなきゃね。後はバンジージャンプとかどうだろう？常に妖力を放出させて、妖術の制御の訓練みたいなことをしてみようかな？紐が焼き切れたらそのままグシャリだけど。

楽しくなってきたね。

「どうして……ね」

それはいつか、妹紅ちゃんがボクに聞いたこと。

どうして梗さんは、私を助けてくれるんですか？

「どうして……ね」

そんなもの決まっている。

私は、父様の心を救えなかった。父様の家族にはなれなかった。

「かぐや姫のことも、周りがそうだったから……だったら私は、いえ、私が」

父様を殺したんじゃないんですか？

あの時の言葉が耳について離れない、何故か、なんて分かりきっている。

「親を殺した、子供……か」

つまり、自分は妹紅ちゃんに自身を重ねているだけなんだろう。

それは勿論、妹紅ちゃん自身を気にいったという部分もあるのだろ

うが、一番強い思いの根底。そこにあるのは、きっと縁を殺した自身への後悔と怒り。そして、見事なくらい同じ気持ちを抱いていた妹紅ちゃんに、きっとボクは憐憫を抱いた。

「そんな資格……あるはずもないのにね」

ねえ、縁。

縁は十五年生きてきて、こんな思いをしたことがあるの？

ボクは何百倍、何千倍という時間を過ごしたけど。

やっぱり、キミを忘れるなんて、出来ないよ。

郷愁。

つまりホームシック。

たった十日だった。

けれど、やっぱりボクの本当の居場所は。

あそこにしか無いんだって。

そう思うんだ。

番外二話　もこたん危機一発!?そしてもこたんは鳥になる。タイトルで内容と

次回から五章入ります。
色々と時代設定のおかしさに気づいたので、話の順番がこれまでに予定していたものと変わってしまいました。面倒ですよね、時代設定。

とりあえず、次は鬼、それだけは決まってます。
すいか～。萃香可愛いよなあ。姉御はあのキャラが好きだ。そして鬼神どうしよ?オリキャラで出してしまうつもりだが、もう名前面倒だから鬼神でいいかな?

三十四話　鬼は外。福は内。でもボクの福っていうのはどこにあるのだろう？

いつもと違う梗くんが見れますよ。
色々あるんです、梗くんにも。
今回はちょっとクールかも。冷酷って言ったほうがいいか？
ＰＶ２０万超えました。いつもご読了ありがとうございます。

以下、意味も無い木霊。
ぎゃーてーぎゃーてーぎゃーてーぎゃーてーぎゃーてー
ぎゃーてーぎゃーてーぎゃーてーぎゃーてー。

三十四話　鬼は外。福は内。でもボクの福っていうのはどこにあるのだろう？

本編始まってすらいないのに、いきなりオマケ（いつかのポケモンカードの影響あり）

「空飛ぶもこたん！！！」
「うおおおっしゃあああああああああ」
「しかし風船だから熱に弱い！？」
「ぎゃあああああああああああ」
「も、もこたあああああああん！！！！」

「と、いう夢を見たんだよ」
「って、夢かい！？」

ＯＰ後に本編始まるよ～～～～。

あれ？また電波きた？ここ最近は来てないから安心してたけど、また来た？
まあいいや。それより今は急がないと。

「もこたん、支度して、すぐに出るよ」
のんびり道中旅の宿。ってわけにも行かないよね。もこたん髪真っ白、目は真っ赤だし。街中は歩き辛いものがある。しかも、妖術なんて覚えさせたせいで、妖気まで持っている。その筋に人が見たら妖怪と間違えられてもおかしくない。
「どうしたんだ？珍しく急いでるな、梗さん」
「まあね、仕事しないといけなくなったからね」
「仕事？」
「ボクの職業は？」
「え、無職のニートじゃなかったか！？」
「失礼な！？ていうか、ニートなんて言葉どこで覚えたの？」
「梗さんがこの前教えてくれた」
「それをボクに使うのか……もこたん、今度の修行は三倍濃い内容にしとこうね」
「しまった！？」

というようなやりとりがあって、支度完了。だらだら荷物纏めてるとこなんて面白くもなんともないからね。

「で、どこに行くんだ？」

「ま、鏡界通じて帰れるから一瞬だよ」

発動《明鏡止水》。それじゃあ、久々の帰郷、行きますか。

「神社なう」

「何言ってんだ？梗さん」

「気にしちゃだめだよ」

というわけで、ボクの神社、水月神社の本殿です。

ちょうど巫女さんが居て、驚いてるけど。

「やっほー、巫女さん」

「や、やっｈ」

「いや、そのノリはどうだろう、神様」

「お久しぶりです。水月様。ようこそお帰りになられました」

「今朝鏡にお祈りしたでしょ。助けてって、だから来たよ」

ま、つまりそういうこと。

鏡界を通るものは、姿形を選ばない、音や感情なんて目に見えないものまで届けてくれる。

それを利用して、困った時は鏡にお祈りするようにしてもらったんだけど、初めてじゃないかな？実際に使われたのって。

この神社が他と違う約束みたいなのがあるんだよね。

一つ、神に頼むときは、本殿の鏡に祈ること。

ま、さっき言ったあれだね。割とダイレクトに伝わってきて、ボクも今朝驚いたけど。

一つ、神社の中から出てきたのなら、神であろうが妖怪であろうが、手出し無用。

これはあれだね。神社には外からは妖怪とかが入れないように結界が張ってあるので、中には入れない。それにも関わらず中に居るということは、鏡を通って本殿に入った、つまりボクのお客さんなんだよね。

まあ、ついでに紹介したボクの神社のシステム？だよ。だからか、この辺りの人って、妖怪に結構寛容だったりするんだよね。中から出てくるのは、ボクが大丈夫だと思った割と人付き合いの良い妖怪だからね。

と、話が反れた。

とりあえず、巫女さんに話を聞かないとね。

「それで、どうしたの？ボクに祈るほど、切羽詰ってるの？」

そう言うと、巫女さんが暗い顔をした。

「はい、それが」

要約すると簡単。

近くの山に鬼が来て、里の人を三人攫われた。また来るとも言われたので、どうにかしてほしい。

「それって、攫われた人も助けろってこと？」
「お助けくださるならば、どのようなものでも献げるつもりです」
「ああ、別にいいよ。だいたいのものは持ってるし」

鏡界とか鏡界とかにね。

「ねえ、攫われた人たちって、神社の御守り持ってる？」
神社だから御守りでしょ、とか言って一回作ったことあるんだよね。

昔の神社って御守り売ってないんだよ？今となっては、ここが御守りの発祥地。まあ、似たようなのは他の土地でもあるんだけどね。

「たしか持っていたかと」
「その人たちはいつ攫われたの？」
「昨日です」
「それで今日には、ボクに祈ったのか。中々迅速だね。でもなんで昨日の晩に祈らなかったの？」
「す、すみません。今朝になるまで鬼との戦いの傷で身動きもできず」

よく見ると、まだあちこちに傷があるね。
「ていうか、鬼相手に戦ったの！？巫女さん」
「はい、水月様に里を任された神社の巫女として当然です」

わお、信心深い人たちだとは思ってたけど、記録にしか無いようなボクの言葉だけでまさか鬼相手に挑むほどとは。
ていうか、幽香を連れてきたときと同じ巫女さんなんだから、もうそろそろ年のはずなんだよね。そんなので鬼に挑んでよく生きてるね。

「巫女さんもあんまり若くないんだから。無茶しちゃダメだよ」
「は、はい」

ふむ、しかし鬼か。なんでこっちのほうにいるんだろ。いや、それよりも、攫われたか。それは不味いな。攫われたら食べられちゃうよ。まあ、御守り持ってるってことだし、多分まだ大丈夫だろうけど。

ボクの神社の御守りは、縁の時代にあったような、ただの気休めなんかじゃない。ボクがわずかに神力を込めて作った対妖怪結界だ。小妖怪では触れたら弾かれる。中妖怪でもその人を害することはできない。大妖怪なんかだと一撃逸らすのが限界かなあ。普通こういう便利なもの作ると信仰減るんだけど、ボクが自分で作っただけあって、結構増えたんだよね。まさか村二つ分ほどの人が加護求めてくるとは。最近のどこの神様も厳しいらしいけど、ボクのところだけはどれだけやっても減ることがないね。ちょっと自慢。

鬼は割りとピンからキリまでだけど、うちの巫女さんが敵わなかったというなら、中妖怪以上かな。
「割とやばいかも」
と言ってたら。

「み、巫女様!?」
あ、里の人だ。
「どうしました?」
「お、鬼だ。鬼がまたきた!!!」

「ふーん。またか。こんなに短い間隔で鬼って来るのかな？いや、何はともあれボクの出番かな。巫女さん、先に行ってるよ。もこたんも来ること。思ってたより面倒なことになりそうだから」

さてさて、鬼と戦うのは初めてじゃないけど、面倒だよねえ。里の外から感じる大きな妖気に、どうあっても面倒になりそうだと。

そう、嘆息した。

神霊というのは、霊という名の通り、形を持たないが故に、姿形が変わることが無い。

諏訪子ちゃんなんてもろにあれだしね。おっと、具体的には言わないよ。こんなときに呪われたらたまったものじゃないからね。

けれど、ボクの場合神霊ミズチ＋妖怪蛟を合成したような存在なんだよね。まあ良くあるわけじゃないけど、珍しいというほどのことでもないみたい。人間から見れば神も妖怪もどっちも強大な力を持っているわけだし。

だからなのか、ボクって実は竜の体が成長してるんだよね。ちょっとずつだけど。

まあ、何が言いたいかと言うと、当初二十メートル弱だった、巨体は現在百メートル以上の超巨体へと変貌してしまったのです！！！！

というわけで、スタントマンよろしく、人化を解いて空から落ちてみました。うん？飛べるよ、ボク。当たり前だよ。何言ってるの？人間だって霊力で浮き上がるこの世界だよ？神様のボクが飛べないわけないじゃないか。

でも。

うん、もうやらないって思ったよ。

里の外に向かって来ていた鬼の集団の上に落ちたんだよ。

地面にぶつける直前で格好良く着地しようとしたら。

久々の竜の体に動かし方一瞬忘れてて、思い出したときには地面に激突。

そしたらクレーターできた。

ぎゃーてーぎゃーてー（↑混乱気味）。

いや、ホント。どうしよ、クレーターなんて作って、里の人たちになんて言おう。

まあ、いっか。後のことは後で考えよう。面倒ごとだし。

「で、キミが鬼の大将？」
四散した鬼たちが集まってきている中、その中で一番強い妖力を感じる幼女に聞く。
また幼女だ。この世界って、人外の幼女率高いよね。諏訪神社のあの神様と言い（↑直接名前を出すと祟られそうなので間接的に言う）。

「鬼の大将は母様だけど、ここでの大将はあたしだね。あたしは鬼の伊吹萃香だ。あんたは？」
「この里の守り神。水神水月だよ」

言葉と共に神力を一割ほど開放。それだけで伊吹と名乗った幼女以外の鬼が崩れ落ちる。

「これは……凄まじいね。こんな里にあんたみたいな強者がいるとはね」
「さて……一つ質問だ。昨日キミたちが攫った人間はどうした？」

萃香と名乗った鬼がにやりと笑って。

「ああ、あれか。もう食ったよ」

刹那。ボクの体がぶれる。

「ぐふっ」
瞬き一度の間に、ボクはその拳を萃香とか言う鬼の腹に突き立てていた。
同じように、にや、っと笑って、耳元で囁く。
「嘘吐き」

発動《水雷》。
そして次の瞬間、辺り一帯が爆発し、鬼たちが吹っ飛ぶ。
「嘘つきにはお仕置きだよ」

発動《水槌》。
空から落ちてきた巨大な水の槌が鬼たちを地面に押し込む。

発動《明鏡止水》。
地面に出来た巨大な水鏡が光り、その場にいた全ての鬼を鏡界へと落とす。

「お掃除完了、ってね」

そしてボク以外には、誰もいなくなった。

三十四話　鬼は外。福は内。でもボクの福っていうのはどこにあるのだろう？

最後急転回で、ついていけなかったかもしれないですね。最後まで読めば梗くんがいつもとはまた違ってる理由が分かる、はず？

因みに、萃香以外は最初のダイブでほとんどノックアウト。萃香も一撃入れられてダウンしたので、最後の《水雷》と《水槌》は完全にオーバーキルです、もうやめて、鬼たちのライフはゼロよ！？さらに言うと、鏡界って梗くんが思うがままの世界なので、鬼はオーバーキルにさらにオーバーキルを重ねられる予感。

ところで、幽谷響子可愛いと思う。ぎゃーてーぎゃーてー、今ニコ動で良く見かけるし。

次回、聞屋で出るかも。鬼編は後二話かな。

『週間ユニークアクセスが多い順』でいつの間にか『東方鏡蛟紀』7位になってた。作者目が飛び出るほど驚きましたよ。一つ上を見たら『東方虚刀典』だったので、順位上げるとか恐れ多くて言えないや。

一位は『東方究極獣』。なるほど、と納得してしまった。

三十五話　見た目は明らかに鳥類なのに、天【狗】とはこれ如何に？（前書き）

面倒になって、ここで投稿。なので、次が長くなる。
面倒だ。ひたすら面倒だ。

三十五話　見た目は明らかに鳥類なのに、天【狗】とはこれ如何に？

「さて、全部片付いたね」

鬼たちの入った鏡界はすごいよ。洗濯機みたいに、星が回転して重力が変動し続けるすごい設定の世界だから。

一日くらいして出せば、みんな良い感じに酔ってることだろうね。

「さてと、巫女さんともこたんも追いついてきたか」

ふと里のほうを見ると、二人がこちらに来ていた。

「これは、水月様が？」

「そうだよ」

「あの大量の鬼の集団もこうもあっさりと」

「まあ、キミたちが何千、何万、何億と信じられないほど長い間信仰してきてくれたおかげだね」

そう言うと、巫女さんがすごく嬉しそうな顔をした。

まあ、自分たちの信仰する神に、自分たちの信仰のおかげだと言われたのだから、それは嬉しいのかも、と想像してみる。

「もこたんは将来的にあれの半分くらいは一人でも倒せるようにね」

「いや、無理だろ、普通に」

「大丈夫。もこたんなら出来る」

なんて戯言を交わしながら、里に戻る、すると。

「なんでみんなして土下座？」

「いや、平伏だろ」

すごいね、水戸の黄門様が活躍する時代劇のラストみたいだよ。

「この○籠が目に入らぬか！！」

「何言ってんだ？梗さん」

「ごめん、何となく言ってみたくなっただけ。それで、巫女さん、これなんで？」

「皆さん、水月様に初めて会った方々です。その強さに畏れているんです」

まあ、人から見れば鬼なんて災害レベルのバケモノだろうからねえ。でも、洪水だって津波だって、災害レベル、つまりボクも十分バケモノだよねえ。

「ただ、これで終りじゃないよね。攫われた人を助けてに行かないとね」

離れたところにある山から感じる、さきほどの萃香とか言う鬼よりもさらに強大な妖力に、ボクは目を細めた。

「……ふざけるなよ」

山にいる妖怪の強さから考えて、巫女さんともこたん以外は役に立たないだろうから、三人で行くこととなった。
「それで、梗さん、本当にここなのか？」
「うん。ここだよ。こんな強大な妖力間違えるはずも無いよ……行くよ、巫女さん、もこたん」
「はい」
「ああ」

そして、入ってすぐに。
「止まりなさい」
背中から翼を生やした少女と出合った。

「天狗？いつから、鬼の使い走りになったの？」

嘲るように、そう嗤うと、天狗の少女が怒ったような顔になる。

「今すぐこの山から出て行きなさい。さもなければ、この射命丸文が相手になりますよ」

天狗の団扇をこちらに突きつけて、そういう天狗に、有無も言わずにパチンと指を弾く。

発動《水刃》。

その手に水の刃を作り出すと同時に、一足（いっそく）で踏み込み、一閃する。

けれど。

「当たりません！」

その瞬間には、少女はボクの真後ろにいて、ボクに蹴りを叩き込む。

「っ、なるほど。さすが天狗かな、早いねえ」

でも、邪魔なんだよ、キミ。

発動《水槌》。

空から大質量の水が落ちて来る。

けれど。

「それなら、その水の範囲外まで逃げてしまえば、当たりませんよ」

「……」

こいつは、少し厄介だよ。

発動《水雷》、発動《水槌》。

上を小さくする代わりに、下からも出す。あの天狗は下から攻撃できることを知らない。だったら、奇襲的な意味もかねて当たるはず。

けれどやはり。

「少し驚きましたかね。けれど私の速さについてこれるほどでも無

いですね」

さすがに驚いた。上からの攻撃を避ける途中に、下からの攻撃に気づいた天狗は、超高速で上の水槌を天狗の団扇を使い、風で逸らしてそのまま上昇。そうやって下の攻撃も避けた。

「天狗ってだけじゃ説明がつかない速さなんだけど、ボクの水を逸らしたことから考えて、風を操る能力かな？」

「おや、ご名答。風を操る程度の能力です」

教えてくれるとはね。なるほど、しかしそれは厄介だね。

マジメな話あの速さをなんとかしないと勝ち目が無いなあ。

速さを落とす……重力の上昇？でもそれじゃあ僕まで遅くなる。

それに重力の上昇であの加速がなんとかなるとは思えない。

だとするなら。

「そうか、別に速さを落とす＝当たるじゃないよな。だったら」

囲んでしまえばいい。

逃げ道を塞いでしまえば速かろうとなんだろうと当たるだろうし。

ボクの手持ちの技の中に、そういうものは無い。

だったら作ってしまえばいい。

「発動《水檻（みずおり）》」

地面から円を描くように水が飛び出す。ボクを中心として真上に向かって伸びていき、そして互いを結ぶように中心へと向かう。

「残念ですが、それでも私は捉えられませんよ」

次の瞬間には、天狗が円の外へと消える。

「それでも捉えて見せるさ」

笑い、哂い、哂って、そう答える。

「発動《明鏡止水》」

水檻と名づけた文字通りのものが一瞬で、水鏡のように周囲を映しだす。勿論、天狗も。

「反転〈映し鏡〉」

そして刹那の時を置き、気づけばボクと天狗の位置が入れ替わる。

映し鏡を使って入れ替える、ボクと天狗の位置を。鏡を司る程度の能力でも多分使えたんだろう力。鏡界を操る程度の能力を持つボクには、いとも簡単に実行できることだ。

「さあ、結べ」

そして、天狗が驚きのあまり硬直した一瞬で《水檻》が完成する。

「な、しまっ」

「邪魔なんだよ。キミ」

だから、さようなら。

発動《水雷》。発動《水槌》。

そして次の瞬間。

山の麓が大爆発を起した。

三十五話　見た目は明らかに鳥類なのに、天【狗】とはこれ如何に？（後書き）

ポイントの制度のこと知らなかった作者は、今まで他の作者さんが更新されるたびに、評価をつけていた……今考えるとなんて間抜けな。

そして自身の作品の評価点が２ｐずつ増えるたびに、最低点か……と嘆いていた。なんて間抜けな。

次の話で、定番オリキャラ鬼神出ます。

そして、梗くんチート化計画にさらなる飛躍が！！

三十六話　カ〇ロットオォォ！！！というわけで、純粋な心を持ちながら、激し

鬼編完結。どうにも最後らへんが苦しい気がするので、ご意見くださるとありがたい。

三十六話　カ〇ロットオォォ！！！というわけで、純粋な心を持ちながら、激しい

山の途中には、天狗が何人も出てきたが、あの射命丸とかいう天狗ほど速くはなく、どれもこれも出てきた端から消し飛ばしていく。幾人かは、巫女さんと妹紅ちゃんに任せてみて、二人の実力を確認しながら進む。

そして山の頂上、そこに鬼の集落があった。

「兵は拙速を尚ぶ。巧遅を貴ばず、って言葉あるよね」

多少雑でも、迅速なほうが良いってこと。

「だから名乗りとか面倒なことはせずに、さっさと潰そうか」

発動《水槌》。

今のボクはかつてないほど調子が良いかもね。超巨大な水の塊が数秒もしないうちに出来上がる。

「押し潰されろ」

妹紅ちゃんは不死だし、巫女さんは符を持ってる。ならばこれに巻き込まれるのは、鬼だけだ。

水槌の威力に、山の頂上が抉れ、そこにいた鬼の大半が行動不能となる。

けれど、それでも確かに平気な顔をした鬼が数人いることが分かる。

「出てきてよ、この程度で倒れるわけないって分かってるから」

ボクがそう言うと、三人の鬼がボクの前に現れる。

「主はなんだ？わえのねぐらを荒らしおってからに」

「キミのねぐら、ってことはキミが鬼の大将？」

「そうじゃの。わえが鬼神。全ての鬼の頂点じゃ」

「じゃあ、言わせてもらうけど、今すぐボクの里から攫った人たちを帰せ」

ボクの要求に、鬼神の後ろにいた鬼の一人が怒り出す。

「なんだいあんた、いきなり人の住処荒らしておいて、攫った人間を帰せ？ふざけるんじゃないよ」

「キミだれ？」

「あたしは、鬼の四天王が一人、星熊勇儀だ！！」

そう、と呟き、星熊とかいう鬼を見据える。

「っ！！？」

ボクの視線に何かを感じたのか、一瞬ビクリと体を震わせていた。

「ふざけるなって？」

ふざけるな、だってさ。

まったく。

「こっちのセリフだ！！！！！お前らこそふざけるな！！！！人の領分に手を出しておいて……ただで済むと思うなよ！！！！！」

ボクさ、これでも怒ってるんだよ。こんなに怒るのは、八意先生が死んだときくらい、ってくらいに怒ってるんだよ。

ボクの中で大切と分類されるものは大きく分けて三つある。

一つが、家族。縁だけじゃなくて、永琳ちゃんや依ちゃん、豊ちゃんも入っている。

一つが、旅の途中で出会った人たち。諏訪子ちゃんとか妹紅ちゃんとか。

最後の一つが、ボクを信じ、奉ってくれる信者の人たち。

この三つがボクの大切。ボクの領分。

だから、ここに手を出されたら、ボクだって怒るんだよ。

「もういいよ。全員手っ取り早く、この地から叩き出すから」

だから。

「覚悟しとけ、この野郎」

久々の神力の半数開放。

まだ全力の半分、ただそれだけで、鬼神以外は足が震えるほどの威圧を感じていた。

妖怪というのは一度大戦で全滅しかけている。いや、本当に全滅してしまったのかもしれない。巫女さんの話によれば、新しく確認された妖怪というのは、ここ数千年の話らしい。

つまり、この鬼たちはどんなに長寿でもたかだが数千年。

一億年のボクの神力に威圧を感じるのは当たり前と言えば当たり前だった。

「く、ふはははははは!!!すさまじいのう、わえ以外でここまでのツワモノは初めてじゃわ」

その威圧の中でも笑っていられる鬼神を、見据える。

「そう、じゃあこれで最後だよ」

「ほう?どうしてそう言える?これから先にもまだまだ新しいツワモノが生まれるやもｓ「……違うよ」……なに?」

「だってキミ、ここで死ぬんだから、ボクが最後に決まってるじゃ

ないか」

嗤って、そして残りの神力も開放。さしもの鬼神もその表情は驚愕に染まっていた。鬼神以外は鬼も人も立っていられないほどの威圧だった。

ボクは自身の神力にストッパーのようなものを掛けて、普段でも五割以上は出ないようにしている。けれど今はそれを外している。だからこれが、正真正銘の全力だ。

そしてその時。

カチリ、と何かがはまる音が聞こえた。

同時に、体が変わっていくような感覚を覚える。

龍神。神の精とも呼ばれ、絶大な力を持つ、全ての龍たちの頂点。聲は天を割り、地上に雷雨をもたらす。体をくねらすと山が崩れ、

地震が起きる。かのような破壊を司る一方、創造神でもあり、雨が降るのも、川が流れるのも、豊かな緑に包まれるのも、龍神のおかげだと言われる。

ああ、ホント。ここでこうなったか。

なんて、都合が良い。

竜から龍神となったことで能力も《坎を創造する程度の能力》が《八卦を司る程度の能力》へと変わった。

「ーーーーーーーーーーーー！！！！！」

ボクの人化が解け、数百メートルへと成長した巨体が山を覆う。

「これはさすがに、まずいかのう」

さすが鬼神の顔にも焦りが見える。

でも、ボクには関係ない。

お前たちはボクの領分に手を出したんだ。

最初に言ったでしょ……ただで済むと思うなよ。

「ーーーーーーーーー！！！」

集束、集束、集束、集束、集束、集束、集束、集束、集束。

これまでの数十倍はあろうかという量の水が空を覆う。その中でバチバチと雷が帯電を続ける。

同時に、山を覆うように炎が燃え盛る。風が吹き盛り、その炎を増徴させる。

大地が鼓動し、山全体を揺らす。

「――――――――――――――――――――！！！！！！！！！！」

轟くような叫びと共に、炎が鬼を焼く。

大地からいくつもの岩槍が伸びて、鬼たちを突き上げる。

時を置かずして、空を覆う水が上へと浮かび、そして急降下する。

そして。

「くふっ……」

立っていた。鬼神だけは、全身ボロボロになろうとも。

人化して、その目の前に降り立つ。

「まだ生きてるんだ？」

「ふ、ふふ、ははは。まさか、これほどまでにやられるとはな」

「まだやる気なの？無駄なのに……ね……？」

ふと見ると、鬼神の傷が治っていた。

「ふふふ、わえは《再生を操る程度の能力》というものを持っておってな。この程度の傷ならすぐに治るんじゃよ」

「そう、じゃあもう一回死んでみようか」

パチン、と指を鳴らす。そして鬼神の体が弾け飛んだ。

そして、徐々に鬼神の体が戻っていく。

「おいおい、なんやそりゃ。おまんさんは、今なにしたんかの……」

「簡単だよ、さっきボクの水被ったでしょ。その時大量に飲んだんだろうね。ボクの操る水と混じったキミの体の中の水分は全部ボクが掌握してる。だから全身の血を逆流させるだけで、簡単に全身が破裂するんだよ」

教えてやると、鬼神がぺたりと座り込む。

「わーった、わーった。わえの負けじゃ。こげなバケモン、いくら再生しても勝てるきがせんわ。殺すなら殺せばええ……けんど、

わえ以外の生き残った鬼たちは生かしてやってくれ。わえの最後の頼みじゃ」

そう言って、鬼神が頭を下げてくる。

「ふふ」

ボクは悠然と笑って。

「発動《明鏡止水》」

そう呟いた。

瞬間。

「「「「「「「「「うわあああぁぁ～～～～～～～！！！！！」」」」」」」」」

「「「「「「「「「ぎゃあああ～～～～～～！！！！！」」」」」」」」」

大量の鬼や天狗＋巫女さんともこたん＋αが水鏡から落ちて来る。

「こげんは、うちの鬼ども……萃香たちまでおるやないか」

「ふふ、これだけ山をボロボロにするのに、ボクが大切な攫われた

人たちのことを忘れるわけないよね。だから、さっきまでボクとキミ以外の山にいたやつみんな鏡界っていう場所に落としておいたんだよ」

「一応聞くが、いつじゃ？」

「最初の一撃で伸びた鬼は全部回収。残った鬼、たしか星熊？とか言ったっけ、あの子たちもボクが人化解いた時点ではもう鏡界にいたよ」

ホントは鬼たち全員殺しても良かったんだけどね。攫われた人たちが無事だったし、今回だけは許してあげたんだよ。

「いてて、ていうか梗さんいつの間に、攫われた人たち助けたんだ？」

「え、そんなの一番最初だよ。天狗と戦ったときにはもう鏡界で保護してたよ？」

おや、もこたん、どうしてそんなに驚き顔？

「じゃあ、何のためにここまで来たんだよ？」

「そりゃ、ボクの領域に踏み入った愚か者どもに制裁を加えるためだよ」

なぜか溜息をつくもこたんを余所に、巫女さんが大丈夫そうなのを確認してから、萃香とかいう鬼の角を掴んで持ち上げる。

「痛い、痛いって、角はダメだよ。ああ、揺らすんじゃないよ、目が回る。それに吐き気もするんだよ」

「それはあの変な世界にいたから、酔っただけだよ。ていうか、うるさいな、負けたんだから黙ってて」
と言うと、途端にしゅんとなった。

「さて、鬼神殿。こっちは人を帰してもらったからね、そっちにもこいつらを返そう」
「今、あたしを物扱いしなかったかい？」
「気のせいでしょ、幼女鬼（すいかちゃん）」
「今、あたしのことをすごい失礼な呼び方しなかったかい？」
「気のせいでしょ、ようJ、じゃなかった。萃香ちゃん」
「今幼女って言ったよね！！！」
「うるさい、角折るぞ？」
またしゅんとなった。

「か、はははは、あはははははは！！！」
それを見ていた鬼神が突然笑い出す。あー、痴呆が始まったのかな。
「たわけ、誰が痴呆じゃ。まったく、完敗じゃ。まさか倒した者と倒された者がかように仲良うしとるとはな。わえらの負けじゃよ、まったく」
「母様……」
「ええんじゃよ、萃香。この地に多少の未練はあるが、良き者と出会えたでな。お主、名はなんと言ったか？」
「水神水月。でも今日から龍神水無月かな」
「そうか、水無月か。では、水無月の。わえらはこの地から出て行くこととしよう」
「あ、別にいいよ」

ボクがそう言った途端、その場にいた全員の時間が止まった。

「はあああああああ!?何言ってるんだよ、梗さん!!!それじゃ私ら結局何しに来たか分からないじゃねえかよ!!!!?」
「そうですよ、水月様。私たちが何のためにここまで来たんだですか?」
「まあまあ、二人とも落ち着く。それでね、鬼たちは二つのことを守ってくれるなら、ここにいてもいいよ」

「二つのこと?」

「一つは、ボクの里の人間を襲わないこと。二つ目は、この辺り一帯の妖怪を纏めること」

ボクの言葉に、鬼神がほお、と言って目を細める。

「つまり、おまんさんの守っていない土地の人間ならどうしようと構わんと?」
「まったく。これっぽっちも構わないよ」
「おまんさん。中々の外道じゃな」
「ボクは別に他の里の人を襲えと言ってるわけじゃないよ?ボクの里を襲うなと言ってるだけじゃないか。何もおかしいことはないでしょ?」
「くくく、なるほど、そりゃあ確かにのう」

「それから二つ目は、まあ分かるよね」
「おまんさんの里を襲わんわえらが纏めれば、その下の妖怪どももおまんさんの里は襲わんというか?そげに上手くことが運ぶんか?」
「別にそこまで期待はしてないよ。うちには優秀な巫女さんがいるから、多少でも少なくなればきっと大丈夫だよ」

それに。

「ボクもいるしね」

「くく、そりゃあ安心じゃのう」

さて。

「この条件、飲む？飲まない？」

嗤って、ボクはそう聞いた。

「ところで梗さん」
「なに？」
「なんであの時、都合良く龍神になれたんだ？」
「あ～、あれだよ、純粋な心を持ちながら、激しい怒りによって目覚めた伝説のスーパーｓ、ブッ。痛いなあ、なんでいきなり蹴るんだよ、もこたん？」
「いや、なんか分からないけど、それ以上は危ないって、天の声が」
「あ～、それは上の偉い人の意向だね。ボクが妹紅ちゃんのこともこたんって呼ぶのもそのせいだし」
「そうなのか！？初めて聞いたんだが、その話」
「いや、ある朝、突然ボクの脳裏に《妹紅をもこたんと呼べ、これは世界の意思だ》という声がして、それ以来、なんとなく日常的にもこたんって呼ぶようになったんだよね」
「あばばばばば」
「ありゃ？もこたん狂った？なんでいきなり、って良く見るとスタンガンが押し当てられて、はっ、お前は、グフッ……」

梗くんさんがログアウトしました。

もこたんさんがログアウトしました。

？？？？さんがログアウトしました。

三十六話　カ〇ロットオォォ！！！というわけで、純粋な心を持ちながら、激しい

読んでも分からなければ、感じるんだ！！！
ということで、色々説明足りない相変わらずの稚拙な文ですが、頑張って感じてください。
頭で理解するんじゃない、心で感じるんだ！！！
小説として、それっていいのか！？と思われるようなことを平気で言っちゃってる作者ですが、単に考えすぎて、知恵熱出して意味不明になってるだけだったり。

てわけで、すごく簡単に言うと、梗くんは竜から龍神へと進化しました。
因みに、八卦を司る程度の能力は、今後ちょっと重要になってくる能力です。
さあ、龍神ですよ。龍神。もう今後が見えた人もいるかもしれないけど、言っちゃダメですよ？
ついでに言うと、蛟と竜はｗｉｋｉのまるパクリだけど、龍神だけはｗｉｋｉと求聞史記を参考に自分で考えながら書きました。

※今後オリキャラで出るたびに、テーマソングバトンのところに追加しておきますので、気が向いたら見てみてください。

鬼神様の口調がおかしいのは気にしないこと！！！

というわけで、次にお会いしましょう。

追伸：別に本当に超サイヤ人みたいな理由で龍神になったわけじゃないですよ！？

三十七話　真っ黒くろすけ出ておいで、出ないとお前を食べちゃうぞ。わはー。

今回過去最多の文字数。
しかし、会話が多すぎて、地の文はかなり少ない。
どうにも聞屋との会話は弾むなあ。

そして久々に、サブタイトルが長すぎてエラーが出た。

三十七話　真っ黒くろすけ出ておいで、出ないとお前を食べちゃうぞ。わはー。

「わはー」

朝起きると、金髪ろりぃな幼女がいた。

互いに見詰め合って、数秒。

「「わはー」」

互いに手を広げる。

「「……？」」

互いに首を傾げる。

「「わはー♪」」

互いに手を（ｒｙ

「「……？」」

互いに首を（ｒｙ

「いや、梗さんもお前も何やってんの？」

「「なにが？」」

互いに目を合わせ、そしてもこたんを見て首を傾げる。

「無駄に合わせるな！！なんか見ててむかつくから」

「「そーなのかー」」

ブチッ

あ、もこたんキレた。

「沸点低いよね、もこたんって。ねー？そう思わない？」
「そうよねー。もうちょっと辛抱ってものを覚えないとダメよねー？」
互いに一つ頷き。
「「だよねー♪」」

「てめえええらのせいだろおおおがあああああ！！！」

「「わはー♪」」

怒ったもこたんから二人で逃げ出す。

「待てこらあああぁぁぁぁぁ！！！」

とまあ、いきなり語ってみたわけだけど、新規の読者さんのために、ここらであらすじ！！！

水無月梗は二十四体の使徒を倒すため、人造人間エ〇ァンゲリオンに乗って戦う……って、これなんか違うくない？

テイク２

水無月梗は、クリ○ンを殺されたことに怒り、純粋な心と激しい怒りによって目覚めた超○イヤ人である。そして梗はフ○ーザーとの最終決戦に挑ｍ……って、なんか前回の話にも出てきた単語が入っているけど、全然話が違うんだけど。

テイク３

大江山で、敵の首魁である酒呑童子を討ち取った梗は、実は酒呑童子を影から操っていた九尾の狐へと戦いを……って、だから違うって。しかも、登場人物の時代が数百年はずれてるし。いい加減にしなよ（怒）

そろそろマジメにテイク４

朝起きると、目の前に金髪ろりぃな幼女がいた。

……いや、これだけ？全然説明になってないよ！？

しかも、これ冒頭のパクリじゃん。

もういいや、自分で言うから。

えっと、回想回想……。

端的に言って、鬼はボクの出した条件を飲んだ。

そして、ボクたちの里には平穏が戻る……はずだったんだけどね。

「おまんさんが派手にやったせいで、山なんぞ跡形も無くなってしもうとるわ」

という鬼神の言葉で、新たな住処を探さなければいかなくなったボクと鬼たち。

いや、さすがに放置するつもりは無いよ？一応壊したのボクだし。

近くに良い場所無いよな、と思っていると、ふとボクの脳裏に妙案が。

「そうだ、無ければ創ればいいんだ！！」

八卦を司る程度の能力の解説。

八卦とは、天地自然に象って作った八つの基本図像、卦の形はさまざまな事物事象を表している（諏訪子ちゃん談）。

司るとは、支配する、管理下に置くこと。

坎を創造する程度の能力では、坎が象徴する自然、水に関するあらゆる事象を可能とした。つまり、地を象徴する坤か、山を象徴する艮ならば、山の一つや二つ創れるはず。

ということで、やってみると、丘くらいの小さい山なら出来たんだよ。でもこれじゃ大きさが足りないというので、鬼神の妖力と自身の神力の両方を使いながら大きな山を創造すること三日、ついにそれらしいのが出来た。

＼＾ω＾／ヤターーー

と、喜んだはいいけど、あ～疲れた、と言って鬼たちと一緒に山で寝ちゃったんだよね。さすがに三日連続で能力を使い続けるのはきつかったみたい。

で、起きてみると。

「わはー」

金髪ろりぃな幼女がいた。

「以上、回想終了です」
「だれにいってるの？」
「さあ？誰だろうね。ところでさ、キミは誰？」
「ルーミアだよ」
「そう、それでそのルーミアちゃんはなんで朝からボクのところにいたの？」
「散歩してたら偶然いただけ」
「そーなのかー」
「それ私のセリフ……」
「まあ、気にしない。ついでにさ、後ろから追ってくるもこたんどうする？」
「あれは食べても良い人間？」
「ふーむ。食人妖怪か。まあ、もこたん不死だから食べてもいいよ。けど強いから、頑張ってね」
「そーなのかー」
「って、さりげなく、人を生贄にするな！！！」
「あれ、もこたん、聞こえてた？まあいいじゃん。これも訓練訓練」
「く、こいつ絶対にいつか殺す」
「ふふ、出来るかな～？ま、楽しみにしてるよ」

てなわけで、発動《明鏡止水》。足元に出来た水鏡を通して一気に神社へと跳ぶ。

「たったいま、ただいま」
いたが〇ます、な一家のお父さんが言いそうな寒いギャグを飛ばしながら帰還。
「巫女さーん。ご飯出来てる～？」
その後、怪我も完治して境内の掃除をしていた巫女さんと一緒に

ご飯を食べた。

「そういえばルーミアって何の妖怪だったんだろ？」

後で聞いてみよ。

朝食食べて、のんびりしながらもこたんたちの様子を見に行く。

戦場がそこにあった。

狂月「ルナライトレイ」

二本の太いレーザーが、そしてとんでもない量の妖力弾が、ルーミアから発せられ、もこたんを殺す。

けれど、もこたんはすぐに再生をし、ルーミアの周囲一帯を燃え上がらせ、ルーミアを焼く。

剣で炎を振り払いながら、ルーミアがその手に黒い鳥のようなものを作り出す。

夜鳳「ナイトフェニックス」

同時にもこたんも手を突き出し、自身の象徴たる鳳凰を顕現させる。

火の鳥ー鳳翼天翔ー

最近になって、もこたんもボクを真似て、自分の技に名前をつけたらしいね。厨二病患者の輪はこうやって広がっていくのかねえ。

「うーん、ていうか、ルーミア姿変わってない？さっき翼なんて無かったし、剣も持ってなかったよね。それに背も伸びてるし」

「あやや、宵闇の妖怪があれほど強いとは、意外でしたね」

「まあ、さっきまでの見た目からだと今の姿は想像できないよね」

「ですね、後で取材させてもらえないでしょうか？」

「さあ？頼んでみたら？妖怪だし、食べられることはないでしょ」

「……あの、いい加減、ツッコミがほしいのですが」

「あげないよ。ふふ、ボクってあややみたいな可愛い娘はつい虐めたくなるんだよね」

「可愛いだなんて、そんな本当のことを言っても、何も出ませんよ？」

「じゃあ、おじさんがお小遣いをあげよう」

「その言い回しは、何か不吉な予感がしますね。後、おじさんというのはどうかと」

「うーん、あややはツッコミの才能が無いね」

「あやや、別に芸人を目指しているわけでもないので」

「あれ？そうだっけ？ところでさ」

「はい？」

「キミだれ？」

「……昨日一度会っているのですが、覚えてないですか？」

「昨日？うーん。天狗はいっぱいいたからなあ、一番最初の娘が一番印象強かったけど、顔までは。名前だけは覚えてるんだけどね」

「あや？そうなのですか？」

「うん、面白い名前だと思ったからね。射命丸文（しゃめいがんぶん）なんて」

「射命丸文（しゃめいまるあや）です！！！」

「お、今のツッコミは良かったよ、あやや」

「……もしかして、本当は覚えてました？」

「うん（↑すごく良い笑顔）」

「こ、殺してやりたいわ……」

「あやや、素が出てきてるよ」

「おっと、失礼しました」

「今ので、これまでが演技だということは確定したね」

「演技ではありません。営業用と言ってください」

「対して違うとは思わないけどねえ。まあいいや。お、もこたんが競り負けそうだ」

「あややや、ついに決着ですか。これは良い一枚を撮らねば」

「あれ？なんでカメラなんて持ってるの？」

「おや、水無月さんはこれをご存知で？」

「梗でいいよ。写真撮る機械でしょ？」

「了解しました。よくご存知ですね」

「誰が作ったの？」

「河童です」

「ＫＡＰＰＡ？」

「いや、今発音がおかしくなかったですか？」

「気のせいでしょ。河童と言うと、水に住んでる妖怪だよね。頭に皿あったり、甲羅背負ってたり」

「それはただの伝承です。私の友人の河童は普通の人間とほとんど変わりませんよ」

「へ～。ねえねえあやや。ボクもその友人に合わせてくれない？とっても興味が出てきたよ」

「はあ？まあ、鬼と天狗は友好体制を敷いていますし、その鬼と友好的な梗さんですから、構いませんが」

「やったね。へー、河童か。それはまだ会ったこと無いな」

「まあ河童はあまり他者と関わりませんからね。っと、妹紅さんが押し返しましたよ」

「よし、いけもこたん。るーみゃをやっつけろ」

「あの……さきほどから、私のことをあややと呼んだり、妹紅さんのことをもこたんと呼んだり、宵闇の妖怪をるーみゃと呼んだり、それは癖なのですか？」

「うーん、どうだろう。世界の意思（さくしゃのよくぼう）かもしれないし、単にボクの癖（せってい）

なのかもしれないねえ。だけどまあ、さすがに相手は選ぶよ？幽香相手にゆうかりんなんて言った日には、戦争が起きるし」

「幽香……もしやフラワーマスターのことですか？」

「フラワーマスター？ああ、花を大事に育ててたし、そうかもね」

「あやや、あの方に出会って無事だったのですか、いや、鬼神様にも勝ったようですし、それぐらい出来るのでしょうかね……」

「はいはい、独り言禁止。って、あ。ルーミアが次の技出そうとしてる」

「おお！！絶好機会が到来しましたね」

魔海「メイルュトローム」

渦を巻くように放たれた妖力弾がもこたんを襲う。

「るーみゃ、まだ色々隠し持ってそうだね」

「そうですね、どうせなら全部撮影したいところです」

「もこたんはこの辺りが限界かな？」

「そうなのですか？」

「力だけなら、そこまで差は無いけど、経験の差とあと躊躇いの無さの違いかな」

「なるほど、妹紅さんも所詮は人間だと。というか、どうして妹紅さんあんなに再生能力が高いんですか？鬼神様のような能力ですか？」

「まあ、そんな感じかな。ちなみにあの炎は妖術であって、能力じゃないよ」

「ただの妖術であれほどとは、すごいですね」

「だねえ、もこたんの火に関する才能だけは、ずば抜けてるよ。って、あ、またるーみゃが次を出した、入れ替え早いなあ」

魔戦「ブラックジャック」

ただの妖力弾の射撃。そう見えたその瞬間。

「っ！？」

一瞬、辺りが暗くなる。朝にも関わらずだ。

「これは……るーみゃの能力かな？」

「闇を操る程度の能力らしいですよ。もっとも普段は自分の周りに纏わせるのがせいぜいらしいですが」

「けど今、日の光すら遮ったよね。妖怪なのに」

「ですね。これは想像以上に強いかもしれませんね」

妖怪が日の光を恐れないのは、一種、強さの証明だと思っている。しかも、あやや の話が本当ならルーミアは暗闇の恐怖から生まれた妖怪だ。それが日の光を一瞬とは言え消すとは。

「今のもこたんじゃどうやっても無理だねえ」

「さっきからやられっぱなしですね」

「もこたん、実戦経験が少ないんだよね。こうして経験値稼ぎさせて上げないと、いつまで経っても強くなれないからねえ」

「人間にしては十分な強さだと思いますが、あ、また次が、これが最後みたいですね」

闇風「アビスの風」

風が通るがごとき光の帯と、その後打ち出されるレーザーに、もこたんがやられる。

「ここまでかな。はい、ストップ」

発動《水檻》。

地面から噴出した水がもこたんを囲い、保護する。
実はこの水檻って、単なる水で囲うだけの技じゃないんだよ？
これ水の結界になってて、大妖怪以上じゃないと、触れることすらできない強力な結界なんだよ。

「あら、邪魔しないでよ」
「まあまあ、人の肉が食べたいなら、これで我慢してよ」

そう言って、鏡界から映し出したもこたんの体（複製）を取り出し、ルーミアにあげる。

「う～ん、まあこれでもいっか」
「ところで、何かさっきと姿違わなくない？」

「妖力出しちゃうとこの姿になっちゃうのよね～」
「あー、ボクも神力全開にしたら、姿変わったからよく分かるよ」

「神力って、梗は神なの？」

「そこの里の神だよ。手を出したらるーみゃも倒すから出しちゃだめだよ？」

「るーみゃって何よ……まあいいわ。それより梗って強いの？」

「強いですよ。鬼神様に勝つくらいですから」

「あら、天狗。いたの」

こっちのるーみゃは毒舌だねえ。

「ふーん、鬼神に勝つくらいねえ」

「そこの水の結界破れるなら相手してあげよう」

「無理そうだし、やめておくわ」

「そう、平和的でけっこう。ボクの里以外の人ならいくらでも食べて良いからね」

「……そうするわ。薮蛇な真似はしたくないし」

うんうん、みんなこういう風だとボクも楽なんだけどね。

それからすぐに、もこたんの複製を持ったまま、ルーミアとは分かれた。

「よし、あやや。まだ朝だ。今から河童に会いに行こう」
「え、今からですか。私これから仕事が」

「ボクから鬼神に言っておくよ」
「妹紅さんは？」

「発動《明鏡止水》。よし、神社に送った。これでオッケー」
「いや、しかしですね」

「よし、じゃあ、連れて行ってくれたら、後で取材でも何でもお答えするよ」
「すぐ行きましょう。さあ、あっちです」

「うんうん。物分りが良くてけっこうけっこう。じゃあ、行こうか」

と言う訳で、次週。河童に会いに行きます。

え？何？あ、はいはい。メタなのは禁止。あ、了解。

テイク２

と、言うわけで、ちょっと河童に会いに行ってきます。

これでおｋ？

うん、じゃあコレで行こう。

三十七話　真っ黒くろすけ出ておいで、出ないとお前を食べちゃうぞ。わはー。

最初、梗くんとルーミアはシンクロ率たけーな。

ＥＸルーミアの設定については、けっこう独自色強いです。ただＥＸ出しても面白くなかったんで、こういう設定はどうだろうというものにしました。これ不味いかなあ。元々二次創作キャラだしありかな？

将来的に封印してもられな、元通りだし、いいか。いいということにしておこう。

スペルカードみたいに書きましたけど、この時代にスペルカードないので、ただの技名として読んでくださいね。

全部動画見て書いただけのものですが。

ところで、二次小説のＥＸルーミアって、どうにもクールな印象に書かれるんですが、あれって何が元なんでしょうね。弾幕風に出てくるＥＸルーミアは口調こそ違うけど、元のルーミアとそんなに性格違わないような気がするんですが。これって作者だけかなあ？

さて、次は河童。にとりが出てくるかなあ。まだ生まれてない？いや、きっと生まれているはず。

三十八話　お値段以上、にｔ……はい、ストップ！！ただでさえ最近、著作権ぎ

今回は後半なんてカオス。
ていうか、文字数が増えるのはいいのだけど、なんで会話ばっかなんだろう？
文を入れるとなぜか会話ばっか書いてしまう。しかもほとんど考えなくても勝手に指が動くから、知らないうちにかなりの量が出来てる。
方向修正も大変なのになあ。

三十八話　お値段以上、にｔ……はい、ストップ！！ただでさえ最近、著作権ぎ

「にっとり～～～ん」
と叫んでみる。

現在地、川なう。

「「……」」

叫んでみたもの反応は無い。

「あやや、本当に名前あってるの？ていうか、場所はあってるの？」
「会ってますよ。名前は河城にとりです。場所もここで合ってますよ」
「でも出てこないよ？すぅ、にっとり～～～ん！！！」
「にとりは人見知りですから、出てきませんよ」

仕方ない。

「釣でもしようか」
「釣？この状況でどうして魚なんて」
「釣るのは河童だよ」
「河童を釣る？どうやってでしょう？」

ふふ、まあ見てなよ。

不敵に笑って、ボクはその場を離れた。

ぷかり

水面に浮かぶ、緑。

それに近づく影があった。

「そろり……そろり」

自分が口に出していることすら気づかないほど、集中していた。

「さっきの人間はもういないよね……そろり、そろり。もうちょっと」

そして手を伸ばし、水面に浮かぶ緑を……掴む。

「やった」

歓喜の声を上げた瞬間。

「捕ま～えた♪」

がしり、とその腕を掴まれる。

「きゃあああぁぁぁ！！」
「遅い遅い」
瞬間、全身を浮遊感が遅い。

気づけば、川から離れたところにいた。

どうやって河童を釣ったか。1、鏡の中からきゅうり映し出す。それを川に浮かべて、流す。2、しばらく様子を見て、河童がきゅうりを掴んだら、そこに鏡界を開いて、手元に召喚。3、河童とったどーーー！！！

「あやや～、まさか本当にキュウリに釣られるとは。なかなか面白いものを見せてもらいました」
「河童はキュウリが大好きって本当なんだねえ。まあ、実を言うとこんなまだるっこしいことしなくても、最初からどこにいるか分かってたんだけど」
「じゃあなぜこんなことを？」
「だってそのほうが」

楽しいじゃん？

「くす、そうですね。それで、にとり、大丈夫？」
「あわわわわわわ」
「慌ててるねえ」
「人見知りですからねー」

閑話休題。

「それでにとり、こっちが梗さんですよ」
「どうも～、梗で～す♪」
「止めませんかそのキャラ。合ってませんよ」
なんでキャラとかそんな言葉知ってるんだろ？
まあいいけど。
「ちっ、分かったよ。水無月梗です、近くの里で水神水月やってます」
「す、水神様！？」
「そーだよ」
「水神で、水月様って。蛟の！？」
「今は竜改め龍神だけどね、ていうかなんで知ってるの、ボクが元蛟だって」
「河童って、水辺無しでは生きられませんから、水神信仰してるらしいですよ」

「へえ、初めて知った」
「その辺を知ってか知らずか、人間とは盟友と呼ばれるほどに仲が良いらしいです」
「妖怪と人間が盟友ね。面白い関係だね。ところで、なんでさっきからこの子は固まってるの？」

「さあ？にとり？どうかしましたか？」
「どうかしましたか、じゃないよ！！水月様だよ？水神の水月様。あの諏訪大戦で大和の神の半数を独りで倒したっていう、今この地上で一、二を争うほどの強大な神様だよ！？河童の間でも最も人気の水神様で。あわわわわわわ、そんな方がここに……」

「あ～。また古い話出してきたね。まあ古いと言ってもほんの数百年前だけど。ていうかボク一番人気なんだ」
「それは普通に古いですよ。鬼神様を倒した今、間違いなく一番でしょうし。いえ、それより一番人気という言い方はどうかと、競馬みたいですし。しかし、にとりって意外とミーハーだったんですね」

「待て、なんで競馬なんて知ってるんだ。それにミーハーなんてどこでそんな言葉を……いや、もういいか。面倒だし。それよりこの子がカメラ作ったの？」
「そうですよ。にとりのお陰で私の新聞がより良いものとなりましたよ」

「私の新聞？」
「文々。新聞というのを発刊してるんですよ。良ければ梗さんもこれを機に購読なさっては？」

「購読？おいくら？」
「これほどですが」

「ふむふむ、まあこの程度なら、賽銭で潤ってるうちの神社なら問題ないかもね」
「ほうでは？」

「いやいや、もうちょっとまけてくれないと、購読まではね」
「むむ、そう来ますか。ではこれほどで」

「もう一声来ても良いんじゃない？」
「まだですか？ではこれほどで？」

「後少しだけ、ね？ついでに里に宣伝もしておいてあげるから」
「ええい、ではこれでどうでしょう！！？」

「ふむ、これなら、よし商談成立だね」
「むむむ、けっこう値切られましたね。梗さん、中々やりますね」
「そっちもね」

河童（もくてき）そっちのけで話込み、そう言えば河童に会いに来たんだと気づいたのは、その数分後だった。

「あ、そうそう、忘れてた。別に趣味や酔狂で河童に会いに来たんじゃなかったんだった」
「あやや、そうなのですか？私はてっきり興味が沸いただけかと」

まあ、そう取られても仕方ないのかな。

「違うよ、まあそれもあることは否定しないけど。それよりもさ。改めまして、初めてまして。水無月梗だよ。梗って呼んでくれて良いよ」

「か、河城にとりです」

すっごい緊張してるね。改めてみると、たしかに皿も甲羅も無いや。あの帽子が皿で、背負ったリュックが甲羅の代わりなのかな？

「そう、じゃあにとりね。それでさ、このカメラをにとりが作ったって本当？」

「は、はい。そうですが」

「それって河童ならみんな作れるの？それともにとりだけ？」

「いえ、河童ならだいたいは」

これは思ってたより期待できそう。

「河童は手先が器用なんですよ。それで他よりもずっと高い技術を持っているのですが、高過ぎて他の誰にも使い方が分からないんですよ」

「ふーん。ねえ、にとりが作ったものって他にもある？」

「え、あ、はい。工房にありますけど」

「見せてくれない？」

「うえ！？あ、いや、でも見てもつまらないですよ」

「それはボクが決めること。ね？」

「は、はあ。まあ構いませんが」

そう言って、にとりんラボへ行くことになりましたとさ。

「なるほどなるほど。面白いものいっぱいだね」

「分かりますか！？」
「あや、私には分かりかねますね」

いや、ホントすごいよ、にとりんラボ。ここだけ時代が五世紀くらいずれてるんじゃない？ってくらい。

「うーん、まさか電話まであるとは。恐るべし河童の技術」
「これが分かるんですか？」
「電話でしょ？」
「これそういう名前なんだ」
「あれ？にとりは自分で作ったものの名前知らないの？」
「いえ、実は」

にとりんのお話をまとめるとこう。

ここから一週間くらい歩いたところに、誰も住んでない、廃棄された昔の都市があって、そこにあった昔の技術で作られた道具を集めてみた。

うーん。それ多分、永琳ちゃんたちのいた都市だね。

それを解析して色々作ってるらしいけど、解析できる河童もすごいね。

「今どれくらいまでの技術が再現できてるの？」
「えっと、これくらいです」

そう言って見せたのは、さっきの電話。まだ固定式だけど時代を

考えると十分だと思うけどね。
「うん、ならさ、一つ取引しない？」
「は、はい！？」

「簡単に言うとね、その都市って昔ボクがいた都市でもあるんだよ。だからある程度は道具の原理と使い方は分かる。それをキミに提供。その代わりにキミは確立した技術で出来たものをボクに提供」

例えば、これとかね。と言って電話を指差す。

「ほ、ほほ、ほんと！！？」

あ、敬語抜けた。なんというか、目の前のことに集中すると他のことが見えなくなるタイプだね。

「これがボクからの提案。キミはどうする？」
「受ける！！絶対に受けるよ」

というわけで、河童と技術提携の契約を結びましたとさ。

まあ、正確に言えば、住んでた都市では無いし、本当にいただけの都市だけど、まあ嘘ではないし、いいよね。

あの後、にとりの見せてきた道具の原理とか使い方をいくつか教えてあげると、にとりはそのままにとりんラボに篭ってしまった。
「あやや～、今日はもう無理ですね」
「にとりんラボに篭っちゃったしね」

「にとりんラボ？」
「いや、別に気にしないで。ただの脳内変換だから」

大丈夫か、こいつ？みたいな目は止めてね。

「うーん。思ったより時間かかったね」
気づけばもう日暮れ。そろそろ良い時間だよね。

「じゃあ、鬼神とこに行こうか」
「は？どうしてでしょうか」

「だって、まだ何も言ってないから、あやや、このまま帰るとサボりだよ？」
「先に言ったんじゃないんですか！？」
「だって」

面倒だったから。

「事後承諾のつもりだったんですか！？」
「ごめんごめん」
「私は、明日同僚になんて言われるか、恐ろしいですよ」

「うーん、じゃあ天狗の長にも言ってく？天魔だっけ？」

「天魔様にまで喧嘩吹っかけるつもりですか」
「イヤだな、そんなことしないよ」

ボク、平和主義だし。

嘘付け、みたいな顔されたけど、気にしない。

「うん、今日は中々楽しかったよ。じゃあね、あやや」
鬼神のところに寄ると、宴会に参加していけ、とのことだったので、ありがたく寄らせてもらう。
巫女さんには水鏡で連絡しておいたし。もこたんも無事そうだったし。

「はい、では。これで。いずれ取材に向かうと思うので、覚悟しておいてください」
「やだな、取材で覚悟なんていらないよ」
「ふふふ、今日のことも含めて、しっかりと聞かせてもらいますから」

「怒るなあやや。ボクは楽しかった」

「まあ、私も楽しかったですが」

「おい、梗。おまんさんもそろそろぐっといかんかい」

「酒ねえ。初めてじゃないけど、ボク酒はそんなに強くないよ？」

「ていうか、なんで私があんたの膝の上にいるんだい！？」

「気にしちゃダメだよ萃香ちゃん。ほら、もう一杯どうぞ」

「おっとっと、これはありがたい、って違う！！」

「ほらほら、また空いてるよ」

「あっと、零れる零れる。ってだから」

「ねえ、鬼神さん、この娘ボクにちょうだい？すごく可愛いんだけど」

「かはは、萃香がええゆうたらな」

「ちょっと、母様！？ええい、離せ～～、私は絶対イヤだよ」

「あはははは、萃香。良い格好じゃないか」

「ちょ、ちょっと、勇儀、助けてくれよ」

「あはははは」

「この笑い上戸！！いいから助けなって」

「ほら、また杯が空いてるよ」

「いや、だから」

「ああ、徳利のほうが良かった？」

「あ、そうだね、そっちのほうが、って、だから……はあ、もういいや」

「そうそう、諦めが肝心だよ」
「あんたが言うな」

「かははははは、萃香が子供扱いか。まあ、分からんでもないがな」
「可愛いねえ、萃香ちゃん。ホント一家に一人抱き萃香ちゃんが欲しいね」

「なんじゃそりゃ？」
「夜寝る時に、抱いて寝る萃香ちゃんだよ～」
「梗、おまんさんも酔っとるの。まあ、いいが」

「は～な～せ～」
「あははははははは」

「あやや、ホント。なんでしょう、この混沌とした空間は。まあ、面白いので、一枚撮っておきましょう。梗さんの様子を今度の取材の時にでも見せれば面白いかもしれませんし」

パシャリ

どこからか聞こえるシャッター音を聞きながら、ボクはぼうっとする頭で、何かを言っていた。

はて?ボクは何をしてたんだったかな?

まあいいや、ふわふわして気分がいいから、今日はこのまま寝ちゃおう。

「って、寝るなよ!?私を抱いたまま寝るなよ?」
「フリですね、分かります」

「勇儀!?何言ってんの?」
「アハハハ、萃香こそ何言ってんのさ」

「萃香は能力で逃げればいいんじゃないだろうかのう?」
「なんか、コイツの周りだと上手く使えないんだよ」

「じゃあ、頑張って抜けるしかないね〜」
「勇儀、お主も珍しく酔ってるのう」

「アハハハ、だって母様、あんな面白い萃香、最高の酒の肴じゃないか」
「かははは、たしかにのう」

「だから、私は見世物じゃない。っていうか……

いい加減に離せ～～～～～～～！！！！」

三十八話　お値段以上、にt……はい、ストップ！！ただでさえ最近、著作権ざ

河童が水神信仰してるとか、けっこう勝手なオリジナル設定です。
ただ、水辺で生きるからには、水神を畏れてはいるかな、とは思ってるので、そこから考えました。

後半なんてカオス。口調多少おかしいか？酒のせいということにしておいてください。
鬼神の口調が一番面倒。自分で設定しておいてなんだけど。

鬼と宴会って、どうにも二次での定番ですよね。まあ酒好きなのはみんなだから、仕方ないのかもしれないけど。
作者的鬼のイメージだと、あんまり後を引かない気がするので、今回は梗くんも酒宴に参加。ジャストサイズの萃香を膝上に。

前回はケロちゃんをぎゅっとしたので、今回は飲兵衛を膝上抱っこ。
いや、ホント。前回のケロちゃんはけっこう反響がすごかった。
さてはて、今回はどうなることやら。

しかし、萃香を膝上に置くと、角が邪魔そうだな。折るか…（ボソ）
？

三十九話　トラベリング！！レッツ鏡界ツアー。移動経費無料。移動時間零。移

すみません、神採りやってたら時間を忘れて、昨日の投稿忘れてました。
章変えしました。
本当はここで幻想入りくらいまでするつもりだったんですが、路線変更で幻想入りは七章か八章に持ち越しに。
ホント……完結するまで何章できるのかな……。

三十九話　トラベリング！！レッツ鏡界ツアー。移動経費無料。移動時間零。移

ちょっと前から気になってたんだけど。

ボクの鏡界を操る程度の能力、というのは、相手の見えない部分、例えば技術とか、種族とか、能力とかをも写し取ることができる、この間冗談で鬼神を映したら、龍神から鬼神にジョブチェンジしたので、かなり度肝を抜かれたのを覚えてる。

で、その時に気づいたんだけど、鬼神になったら、妖力が爆発的に上がってたんだよね。

で、逆に神力は少しだけ下がってたんだよね。

それで色々試すために、今度は里の人間を写し取ってみたんだよ。

そうすると、霊力が少し増えて、神力が少し下がった。

ここからはボクの考察。

鬼神になった時の神力の減少具合＝人間になった時の神力の減少具合、かつ、鬼神になった時の妖力の上昇具合≠人間になった時の霊力の上昇具合、ということから、神力が妖力や霊力になったとは考え難い。

とすると、この減った神力は龍神という種族を映すのを止めたから、ということになるね。つまり映し出した相手によって、その相手が持っていた力（霊力とか妖力とか神力とか）も写し取れるということになる。

で、問題はこの力、どこから出てくるんだろ？

鬼神になったからと言って増えた妖力が周囲から減るわけでも無い。

てことは、どこからともなく出てきた？

そんなわけ無い。

てことは、鏡界からという仮説が一つ成り立つ。

鏡界って、そういうのも映し出せるのなら。

てことで始めた神力の偽造。

ボクの持ってる大量の神力を偽造できないかな、と思ってやってみたこの試み。

なんと成功。

ただし、神力（偽）がつくので、本来の神力より力の質は低い。

だいたい神力（真）の半分くらいの力しか持たない。

ただ、それでも霊力や妖力と比べると、十分な力を持つので便利なんだけどね。

それと、やっぱり鏡界のものだから、十日もしたら消えてしまうけどね。しかもボクのは特に大量にあるので、さらに短く二日しか持たない。しかもなんでか知らないけど、一度映せば一ヶ月くらいは映せない。

というわけで、今度から戦闘前にでも映して、使えば節約になるね。

きょうはしんりょくのぎぞうにせいこうした。

ここから本来の意味で本編です。

朝から神社でのんびり過ごし。
最近後進の育成に力を入れ始めた巫女さんの様子を鳥居の上から見学し。
そろそろまた旅を再開しようかな、と思っていた。
そんなある日のこと。

「もこたん、旅行に行こう」
「は？」

何言ってんだこいつ、みたいな目で見られけど、気にしない。

「もこたんもいつまでもここにいるわけにはいかないでしょ？」
「まあ、それは確かに」
「ならこれを区切りとしよう。今回の旅行先でもこたん落とすから、そのまま一人旅でもしなよ」
「な、ちょ、んないきなり」
「というわけでレッツゴー」
「だから待て、って、人の話を聞け～～～～！！！！！」

ボクの鏡界は色々な場所と繋がっている。例えば、ボクがこの世界に来たときのように、異世界にすら。
ただ出口となる鏡はどれも同じ形をしているので、分かりやすく目印でもつけておかなければ、どこに出るか分からない。
と言う訳で、行って見ようか、鏡界ツアー。

「なあ、梗さん、本気で止めにしないか？」
「まあまあ。せいぜい悪くて異世界に跳ぶだけだって」
「せいぜいなんてもんじゃないだろ！！！！？」
「ふふ、もうボクは誰にも止められない。ボクは、ボクは……風になる！！！いくぞー、もこたーん！！！」
「うおっしゃーーー！！って、だからちｇ……」
まだ何か言ってるもこたんの手を掴み、ボクは鏡界を潜った。

「あら？」
「あれ？」
「え？」
三者三様の反応。

「うーん。ここどこだろ？」
「「「……」」」

目の前でフリーズした少女三人。一人はチェックのスカートでどこかで見たような顔の幽香（↑言ってる言ってる）。一人は背中に白い翼を生やした女の子。一人はなぜこの時代にあるのか不思議なメイド服の少女。

「やっ、幽香。久しぶりだね」
「あら……梗。久しぶりね」
軽く手を挙げて幽香に挨拶。いやあ、良かった。覚えててくれて。

「え、誰!？ていうか、どうやって入ってきたの!？」
メイド服の子がちょっとパニクってる。
「あ、どーも。水無月梗です。よろしく」
「あ、ご丁寧にどうも。夢月と言います、って違います」
「あー、梗に関しては気にしないほうがいいわよ。面倒なことだし」
「幽香の知り合いなの？」
「昔の友人かしら？」
「ふふ、幽香がそう思うなら、そうなんじゃないかな？」

あ、ところでさ。

なんでもこたんいないんだろ？

一方その頃もこたん。

「覚えてろよー！！！！」

手を引っ張られた勢いで、蹴躓き、床にあった、別の鏡へと入ってしまったもこたん。

現在地不明。なぜなら移動先不明の鏡界なのだから。

「ちくしょー、いつか絶対復讐してやる。っていうか、ここどこだよ」

どこかの湖？

「梗さん、ここどk……」

ふと気づいた。そうだ、あの時自分は別の鏡に入ったのだから、梗さんとは別に場所にいるんだ。

あの変な世界が梗さんの能力だということは知っている。だからこそ分かる、鏡が違えば行き先はまるで違う。ならば自分と梗さんは……。

それにあの時言っていたではないか。

「もこたんもいつまでもここにいるわけにはいかないでしょ？」

「まあ、それは確かに」

「ならこれを区切りとしよう。今回の旅行先でもこたん落とすから、そのまま一人旅でもしなよ」

つまり、これからは一人で生きろと、そういうことなのだろう。

自分はこれまで梗さんに助けられて生きてきた。あの人が居なければ、どうなっていたか分からないほど。

ならば、梗さんがああ言ったのなら、自分は一人でも生きていかねばならない。

他ならぬ、梗さんの言葉なのだから。

「……さようなｒ、いや違うな」

さようなら、と言ってしまえばもう会えない気がするから嫌だ、と誰かが言っていた。

そして代わりに再開の期待を込めて、こう言うんだそうだ。

「また会いましょう。梗さん」

奇しくも、そこは、水無月梗が始まった湖であるとは……誰も知らないことである。

一方そんなもこたんの心情を知らない梗くん。

「あはは、梗って面白いね、お姉ちゃん」
「ふふふ、そうよね。良かったらしばらくここにいる？」
「あら、私のところに泊まるのでしょう？」
「うーん、そうだね。今回旅行だから、それぞれ一日ずつ泊まってもいい？」
「私はいいよ」
「私もいいわよ」
「決まったわね」
「そう、みんなありがとね～。あ、夢月ちゃん、お茶お代わりもらえる？」
「いいよ」
「よく飲むわね」
「この紅茶美味しいから」
「あはは、ありがとう。梗」
「ところで夢月ちゃんって何でメイド服着てるの？」
「お姉ちゃんの趣味だよ」
「幻月ちゃんの趣味か。じゃあ仕方ないね」
「そうよ、仕方ないのよ」
「何言ってるのよ、二人とも」
「ゆうかりん、珍しく否定的だ」
「ちょっと、誰がゆうかりんよ」

「あはは、ゆうかりんだって」
「気に入ったなら、今度からそう呼んであげようか？ゆうかりん」
「ちょっと、夢月も幻月も」

あはは、この三人面白いね。

ん？もこたんのこと？まあ、不死だし何とかなるでしょ。

本当は一週間くらいで放り出す予定だったけど。まあ、結果的には同じだし、いっか。

それに、もこたんには実はこっそりマーカーつけてるし。とりあえず、世界までは変わってないみたいだし。詳しい位置は分からないけど、とりあえず、同じ世界にいるなら、いつか出会えるでしょ。

とりあえず今は、ボクの教え子のこれからの躍進を祈って、乾杯。

心の中でそう呟き。ボクは紅茶を流し込んだ。

三十九話　トラベリング！！レッツ鏡界ツアー。移動経費無料。移動時間零。移

神力（偽）により、エネルギー切れの心配がなくなった梗くん。
単純に考えて、最大ＭＰ５０％アップ（しかも神力）なので、強化というより狂化かもしれない。
因みに、この神力（偽）、色々な意味で最後ら辺りの伏線になるかもしれない予定。

というわけで、スキマツアーならぬ、鏡界ツアー。

今回は夢幻世界でした。勘のいい人はもう次が分かりましたか？

因みに、鏡界ツアーは後二話で終了。その後一話入れて六章終了になる予定。

それと、色々不都合なので、もこたんとはここで別れてもらいました。
早く輝夜を見つけなければ。
ちなみに、本編に書いてませんでしたが、輝夜たちは、梗くんが帰ってくる前に里を出て行ってます。何度か鬼を追い払ってくれた、とか本編に書くつもりだったのに、忘れてました、いつか、書いておきたい。

四十話　トラベリング！！レッツ鏡界ツアー。移動経費無料。移動時間零。移

今回短いです。次回への繋ぎでしかないし、何より、前半があんなに難しいと思わなかった。

自動車学校でようやく見極め貰ったので、明後日試験だよ。どうしよう、まだ学科もやらにゃならんのに、ＰＣから離れられない。どうすればいいんだ！！！（↑さっさと勉強しろ）

四十話　トラベリング！！レッツ鏡界ツアー。移動経費無料。移動時間零。移動

滞在予定の二日の間、四人での時間を精一杯楽しみ。

そして二日後。ボクは夢月と幻月の世界、夢幻世界を出た。

「じゃ、次行ってみようか」

鏡界を歩きながら、次はどの鏡に入るか考える。

「よし、じゃあ次はこれで」

適当な決め方で鏡の一つに跳び込むと、鏡を潜った。

ゆらゆらと揺れる紅茶。そして、カップに入った紅茶の中から伸びる白い手。

それはまさしく、ホラーな光景だった。

「きゃあああああぁぁぁぁぁぁ！！！」

紅茶を飲んでいた人が驚きのあまりに、悲鳴を上げてしまうのも無理ないほど、それは恐ろしい光景だった。

「いかがしましたか！！？」
「こ、紅茶から手が！？」
「とうとうボケましたｋ……いえ、元から天然ボケされてましたね」
「夢子ちゃん、それどういう意味！？」
「いえ、なんでもありません、少し口が滑っただけです」

わいわい、がやがや。

何か騒がしいね。

「やっほ～」
「でで、でた～！！」
「何者！？」

メイド服のお姉さんが投げた短剣を避けて、両手を挙げる。

「わ、わ、待った、降参、降参。ところでここどこ？」

さり気にまぜた質問に答えたのは、意外にも床で腰を抜かしたサイドポニーのお姉さんだった。

「ここは魔界よ」
「ＭＡＫＡＩ？」
「ま・か・い」
「ほんまかい……あ、ちょ、冗談だから、メイドさん、剣投げないで、死んぢゃう、刺さるって」
「夢子ちゃん、やっちゃえ」
「了解しました」
「いや、だから、やめ、あ、あぁぁぁぁぁ～～～～！！！」

閑話休題。

「というわけで初めまして。水無月梗です」
さっきまでの流れ？気にしないことだよ。

「頭に剣が刺さってるわよ」
「気にしないでください」

「……えっとそう、私は神綺。それでこっちが」
納得まで何か葛藤があったみたいだけど気にしてはいけないんだよ。
「夢子と申します」
「あ、これはどうも」
色々あったけどとりあえず、話が聞いてもらえるようだね。

現在故障中……じゃなかった。現在交渉中。

はい、ここの主である神綺と色々交渉して、一晩泊めてもらえることになりました。
なんか、特に危なそうでも無いし、別にいいわよって。
その代わり、この魔界に引き篭もっているらしい神綺のために、外の世界の話をすることになったけど、まあお安い御用ってやつだ

よね。

「へえ～、魔界って、神綺が作った世界なんだ。でも何で作ったの？」

「なんでって……なんでだったかしら？」

「……（ついに痴呆の始まりですか）」

「夢子ちゃん、今何か失礼なこと思わなかったかしら？」

「いえ、これと言って何も」

「「……」」

今の状況に合う言葉があるとすれば何だろう。一触即発？

「夢子ちゃん、お仕置きよ！！」

「はぁ、困りましたね」

憤る神綺、溜息をつく夢子ちゃん。

そして。

「きゅ～」

「は～、やれやれ」

肩を竦めて立っていたのは、何故か夢子ちゃんだった。

「うわ～、神綺って意外と弱いね。いや、夢子ちゃんが強いのか？」

「いえ、魔法を使えば強いのですが……」

「もやし？」

「そこまで酷くは……」

結局、倒れた神綺を介抱するため、夢子ちゃんもいなくなり、適当に魔界というのを探索した一日目だった。

「ふっ、若さゆえのあやまちよ」
ニヒルを気取っているのか知らないけど、すごくミスマッチだね。

因みに、今の「なんで勝てないと分かってて魔法使わなかったの？」と聞いたときの答え。

「神綺様。これっぽっちも似合いませんよ」
毒舌だね、このメイドさん。ついでに言うと、夢子ちゃんって神綺が作った存在らしい。ちょっと親近感を覚えたんで、ちょっと仲良くなったよ。
「むー、失礼ね。夢子ちゃん」
「はい、ストップ。昨日みたいなことになるから止まって」
「まあ、お客さんがそういうなら」
「梗様、ありがとうございます」
「いえいえ。それより、昨日はこの周囲見てきたけど、他に面白い場所って無いの？」
そう聞くと、二人して唸り始める。
「夢子ちゃん、魔界にそんな場所あった？」
「いえ、私にもちょっと分かりかねます、神綺様」
「無いのかあ。うーん、じゃあ後一杯紅茶貰ったら、次に行こうかなあ」
「あれ、もう行っちゃうの？」
「うん、また時間が空いたら来てもいいかな？」
「いいわよ。梗ちゃんなら歓迎するわ」

神綺の中で何がどう働いたのかは分からないけど、一応受け入れられたみたい。
「是非、またいらしてください」
夢子ちゃんとも仲良くなったし、また来たいね。
夢子ちゃんの入れてくれた紅茶を飲み干し、荷物の中から一枚の姿見を取り出す。
「これこの家に置いておいて。そうすれば、いつでもまた来れるから」
二人が頷くのを見て、ボクは姿見を置き、そしてそれを潜った。
さて、次はどんな場所に行くのかな？
そんな軽い思考で、目に付いた鏡へと、飛び込んだ。
そして、鏡界を抜けた先の光景に時を忘れて、呆然とした。

「……あ……え……」

古くなった畳。

一番上まで手の届かない大きな箪笥。

端のほうが少し破れた障子。

そこから見える、コンクリの壁。

部屋の片隅に置かれた大きな姿見。

洒落ていると思っていた欄間。

煤けて来ている電球。

それは。

水無月梗と、雪代縁が、最後の瞬間を過ごした。

水無月梗が、雪代縁を、殺した。

今も記憶に焼きついて離れない、その部屋だった。

「あ……あ……」

どのくらいそうしていただろう。ふと、ボクは我に返る。

「はぁ……すぅ……はぁ……」

いく度と無く深呼吸し、気持ちを落ち着かせる。

そうすると、ふと疑問が沸く。

「ここは、いつの世界？」

一億年もこの場所が変わらないんなんてあり得ないだろうから、過去の世界だろうけど。

けれど、ボクがこの世界から居なくなった瞬間ならば、夜だろうし、何より縁の死体があるはず。

死体……いや、いい加減落ち着いて現実を見据えろ。

自身に言い聞かせるように、何度もその言葉を繰り返し、ようやく落ち着く。

と、その時。

「おや『久しぶり』かな、梗？」

背後から声がした。驚き、振り返ると。

「えに……し？」

そこに雪代縁がいた。

四十話　トラベリング！！レッツ鏡界ツアー。移動経費無料。移動時間零。移動

神綺様、梗くんをちゃん付けか。初めてのパターンだな。
神綺、夢子のペアのキャラがおかしいけど、気にしないでもらえるとありがたい。

次回、なんとまたオリキャラ。前々からどこかで出そうと思ってたけど、こいつ本当に必要か？と思ってたんで自粛しようとしてたけど、こういう展開に持っていけるかも、とか思いついたんでやっぱり出すことにした、という曰く付きのオリキャラ。
当初、そのオリキャラで、一本小説書くかな、とか思ってたけど、主人公にするには微妙すぎて、やっぱり止めた、けど捨てるには勿体ないので何かの小説で出そうと思ったら、ちょうど鏡蛟紀があった、という経緯を辿ったキャラです。
まあ、次回をお楽しみに。

四十一話　嘘吐きと鏡のついた嘘。それと、すきま桜とうそのとｋ（ガスッ）

また短い。書くことが無かった。
今回出たオリキャラは時々出てきます、基本は放置で。
ようやっとこの必要なのかわからん章が終わった。
次からいよいよ紫とか出せるかな？

四十一話　嘘吐きと鏡のついた嘘。それと、すきま桜とうそのとk（ガスッ）

橘蒼（たちばなあお）。妖怪空言（そらごと）。嘘を吐いた後悔の念で生まれる妖怪。人を騙すことは無いが、嘘しか吐かないので、結果的に騙される人間が後を絶たない。名前を音読みにして、逆さから読むと、意味が分かる。

と言う設定で作られたキャラクター。

それは縁の想い描いたものだったはずだ。

縁が中学に入る前のことだ。

少しずつ自身の力を恐れるようになった、雪代縁が始めたことの一つ。それが超常現象を調べることだった。

超能力や魔法、それこそ心霊現象などというオカルトまで。

それらの事象が纏められた一冊のノート。その途中に書かれた些細な文章。

妖怪空言（そらごと）。嘘を吐いた後悔の念で生まれる妖怪。人を騙すことは無いが、嘘しか吐かないので、結果的に騙される人間が後を絶たない。名前を付けるなら、橘蒼（たちばなあお）。音読みにして、逆さから読むと、意

味が分かる。

縁にとってはただの空想だった。調べ物の最中にふと思いついただけの、妄想の産物。特に意味も無い戯れのはずだった。

けれど。

奇しくも、彼女の能力によって、それが実現してしまった。

「いつ生まれたのかは知らないけど、ここにいるってことは、ボクか縁から生まれたんだろうね」

縁の顔をしたそいつ、橘蒼を見てそう呟く。

「私は『雪代縁から生まれた』んだよ」

楽しそうに笑う、蒼を見ながら。

「嘘吐き」

そう呟いた。

その少し前の話。

殴った。問答無用で。一切の容赦なしに、縁の顔したそいつを。

「縁みたいな顔で、縁みたいな仕草で、縁みたいな笑顔で、縁みたいな声で……ボクの名前を呼ぶな」

虫唾（むしず）が走る。吐き気がする。怖気（おぞけ）がする。鳥肌が立つ。

気持ち悪い。殺してやりたいくらいイライラする。

「『痛い痛い。これでは死んでしまう』」

そう呟きながら、そいつは何事も無かったかのように立ち上がる。

「おやおや、どうした？ひどく『嬉しそう』じゃないか」

そんなわけが無い。これほどまでに怒っているのだから。嬉しそうなどということがあるはずがない。

「その特徴的な言葉遣い、キミ、空言だろ」
一瞬で記憶の中から導き出された答えに、そいつは楽しそうに笑った。
「『いいや、違うよ』」
だから、ボクはこう言った。

「嘘吐き」

そして冒頭に戻る。

気づいたら、守矢神社にいた。

「はぁ!?なんで?」

「いや、何ではこっちのセリフだよ。いきなりなんでいるんだい、梗?」

「あ、ケロちゃ……ぐふっ」

「まだ言うか、それまだ引っ張るか。ミシャグジパワー舐めるなよ。あんたでも必ず祟ってやるからな」

「お前らは、数百年ぶりに会っていきなり、なんでそう同じノリでいられるんだ?」

神奈子が呆れた目でこっちを見てくる。

「死ね、死んでしまえ。最後に私にしたことを悔いながら、死んでしまえ!!」

ものすごく殴られた。これでもかっていうくらい。どうも旅立つ

間際に抱きついたことを根に持っているらしいね。
「アハハ『今にも死にそうそうだね』」
その瞬間、ハッとなる。
「蒼!?キミがなんでここに!?」
「おかしなことを言うね。『キミがボクを連れて来たんでしょ』」
「鬱陶しいから、一々嘘吐くな。本当は?」
「アハハ、『面白そうだったからついて来ただけだよ』」
「どうやって!?キミじゃ鏡界を抜けられないはずだ」
「アハハ、『ボクの能力以外でだよ』」
あちゃあ、と顔を覆う。ここまで来る途中の記憶全然無いけど、ついて来たのに気づかなかったんだろうね。でないと、絶対に追い返してる。
「梗、このお前とそっくりなやつ誰だい?」
神奈子が少し警戒しながら尋ねる。
「まあ、不本意ながらボクの知り合い。橘蒼って名前で、分類的には妖怪?なんだろうね」
「アハハ、知り合いだなんて寂しいこと言わないでよ。『一緒に寝た仲じゃないか』」
「ね!?寝た!?」
「梗……あんた……」
「だから嘘ばっかりつくな!!」
「アハハ、空言に嘘吐くなだって。『ホント梗って大きいよね』。色々と」
「何がだ!!背か、背のことか!!」
「色々だよ、背とか、アレとかね」
「〜〜〜〜〜〜〜〜!!!!!!」

「いや、珍しいね。梗があんなに調子を乱されるなんて」
「神奈子、面白いから、もう少し見てようよ」
「ここに良いのが一本あるんだが、呑むかい？諏訪子」
「お、いいね。今日は美味い酒が呑めそうだよ」
「肴が最高だからね」

「「ふふふふふふ、お主も悪よのお」」↑実は色々と梗への恨みが溜まってた二人。

うやむやになってたけど、いつの間にか守矢神社にいたその経緯を聞こうと、蒼に尋ねるが、嘘しか吐かないので、断念。結局何があったのか、思い出せないまま、その日は守矢神社に泊まった。

翌日。

「『こんにちは？それともこんばんわかな？』」
「いや、おはようでしょ」
「『今日はすごく天気が悪いね』」
「いや、外日本晴れってくらいに晴れてるんだけど」
「『ああ、じゃあ午後から雪が降るよ』」
「もういい加減その性格面倒なんだけど」
「『仕方ないよ。脊髄反射的にそう喋ってしまうんだから』」
「反射的だったら、顔はにやけてないと思うよ。ていうか、いい加減縁の顔は止めろ」

ふう、とかやれやれ、とか言いながら、その手を顔に当てる。むかつく、殺して良いかな。

怒りに震える手を押さえながら、見ていると、一瞬でその顔が変わる。

「って、キミ女だったの!?」

その顔を見て驚愕する。普通にどこから見ても女の子だ。しかも意外と可愛い。

「『私は男の子だよ』」

それでもやっぱり、蒼はそういうやつで、結局ボクはこういうしか無い。

「嘘吐き」

「さて、ボクはそろそろ帰るよ」

そう言って、鏡の前に立つ。

「ちょっと待った、あの妖怪は?」

「捨ててくんで、適当に放り出しておいて」

「ちょ、ちょっと待ちな……」

「じゃーねー」

問答無用で、鏡を潜る。

そして後には諏訪子ちゃんだけが残った。

「待ちなあぁぁぁ、きょ～～～～～！！！！！」

四十一話　嘘吐きと鏡のついた嘘。それと、すきま桜とうそのとｋ（ガスッ）

梗くんの天敵、橘蒼。名前の由来は、橘蒼を音読みにして、反対から読んでみるよ分かるはずですよ。

四十二話　大人になってもお祭りと聞くとテンションが上がる人は上がる。まま

今日はいよいよ自動車学校の仮免の実技試験だ〜〜〜〜！！！
結局学科は受けてないから、まだ仮免はダメなんだが。
あ〜〜〜〜〜〜〜、すごいドキドキする。
心臓がバクバクだわ。
作者こういうのに弱いんだよねえ。

そういえばこの間逆お気に入りユーザーが２０人になりました。感謝感謝。ポイントも８００超えましたし、ホントありがたいです。

四十二話　大人になってもお祭りと聞くとテンションが上がる人は上がる。まあ

どうにも最近、やる気が起きない。

もこたんいなくなって、なんだかんだで寂しいのかな？

「どう思う？巫女さん」

「えっと、私にはどうにも分かりかねますが、ならお祭りでも開いてみたらどうでしょう？」

「お祭り……そっか、ここ神社なんだよね。自分の家みたいに思ってたから忘れてたけど」

「神社です。ですがまあ、水月様にそう思っていただけているなら、喜ばしい限りです」

「昔はこんなこと言ったら、恐縮しちゃってたけど、やっぱり歳の功かな、巫女さん」

「そうかもしれませんね。この歳になると、もう残りの人生なんて少なくて、惜しむほどのものではなくなりますから」

「そんなこと言わない。ボクはやっぱり寂しいよ？キミがいなくなるのは」

「そう言っていただくと光栄ですね」

「ボクってね、生きている時間は一億を越えているけど、実際はその大半は寝て過ごしていたんだ。だから、記憶に残る時間は実質千年にも満たない。だからまだ心が若いんだろうね。親しい人、それこそ妹紅ちゃんがいなくなって寂しく感じてる。キミがもうすぐいなくなるのも寂しい……ふふ、ホント。神様だって言っても、こんなものだよ」

自嘲的なボクの言葉に、巫女さんがはっきりといいえ、と言った。

「……ただ無感情なだけの神ならば信仰は恐れにしかなりません。私たちのことをそんな風に思っていてくださる水月様だからこそ、私たちは悠久の時、貴方様を信仰してこれたのですよ」

珍しく感情の篭った声に、ボクは驚き、そして笑う。

「ありがとう。巫女さん」

「ふふ……歳の功ですよ」

そのちょっとした冗談に、二人して笑い。

そして、いつの間にか、寂しさは薄れていた。

ドンドン、という太鼓の音が聞こえる。

神社に多くの人が集まり、その顔は一様に楽しそうだった。

「楽しそうだね。みんな」

ボクは巫女さんと二人、本殿でその様子を見て楽しむ。

神社の仕事は、臨時雇いの里の女の子たちに巫女さんとして頑張ってもらっている。

「お祭りですから。水月様のお陰で、一番の問題である水に困ることが無いので、作物も良く育ってますし、今回のお祭りで振舞われているものはだいたいこの里で育ったものですよ」

「ふーん。ボク自身はどちらかと言うと、守護する神として始めたんだけど、いつの間にか豊穣にも絡んでたか」

「この地は大した水源も無いですが、水月様の加護で土地が乾き切るようなことも、水害に遇うようなこともありませんから、たくさん農作物が出来るんですよ」

「ところでさ、巫女さん」

「はい」

「この神社、作り替えない？」

「は？えっと」

「ボクが始めた時、ボクはミズチという水神だったんだよ。けど今は龍神になって、与えられる加護も増えている。だからいっそ神社作り変えて、水神信仰から龍神信仰に変えないかな、と思って」

やっぱり、信仰の対象の違いによって色々違ったりする。

与えられる加護とか、そういうものが大きい。

水神信仰だと水関連だけだけど、龍神信仰ならもっと大規模な加護になる。

それは里が今より豊かになることも意味する。

「まあ、その分締めないと、信仰が減るんだけどね」

人間ていうのは、楽ばかりさせてると、それに慣れてしまって堕落してしまう。神様として、それじゃダメだ。

今はもう神力（偽）が作れるので、信仰はそこまで無くてもいいんだけど。

「そう、ですね、確かにそうかもしれません。あまりにも長い間、変わっていなかったので、そういう発想がありませんでしたね」

「じゃあ、このお祭りの間に言ってしまうとしよう」

ドォォォォン

神社の境内に雷が落ちる。全員が驚き、そこに注目する。

「やあやあ、お祭りの中失礼するよ」

ボクは全員を見渡しながら、続ける。

「今度神社を作り替えることにしたから、そのことを伝えるよ。信

仰の対象も変わる。水神から龍神になるのでよろしく」

全員が驚く。そしてすぐに否定が出た。

「これまでずっと水神様を信仰してきたのだから、今更他の神を崇めるなんてことは出来ません」

そういう意見が多かったことに、諏訪子ちゃんみたいにボクの信仰も強く根付いていることが分かったから、ついつい嬉しくなる。

「ああ、と言っても、神が変わるわけじゃない。同じ神、まあつまりボクだね。ボクが以前よりも強大な神になっただけの話だから、キミたちが信仰する対象が変わるわけじゃない」

そう言って、神力を僅かに開放する。皆ボクが以前鬼を追い払った時の神だと気づいたみたいだね。

「簡単に言うと、これまでより与えられる加護が増える。その代わり、信仰を疎かにする者にはきつい罰があるけどね。それと神社を作り替えるのと同時に、名前も変えるからよろしくね」

それだけ言うと、ボクは本殿へと戻った。

「水月様。あの、このようなことを口に出すのは何ですが、言葉遣いをどうにかできませんでしたか？あれではあまりにも威厳が」

「大丈夫だよ。声に神力を乗せてるから、言葉遣いなんて気にならないほど威圧的に聞こえたはずだよ」

神力を出すと人間は萎縮する、それはいつかの件で学んだこと。

「私にはそのように聞こえませんでしたが」
「巫女さんはボクの神力良く浴びてるから、耐性が出来てるんだよ。何より、ボクの巫女だしね」

まあ、そんなことがあって、お祭りが終わるまで二人でそれを見ていた。

最初は、呆然としていた皆だったけど、すぐにまたお祭りを再開しいていた。
やっぱり人間っていうのは逞しいね。

その夜のこと。

じっと本殿で腕を組み座る。

無言のまま目を閉じ、静寂の中に混じる微かな違和感を感じている。

「ここ一週間くらいずっと見てるよね。キミは誰かな？」

わざわざこんな丑満刻まで待ってたんだ。そろそろ出てきてもらわないと困る。

「あら、見つかってましたの？」

ぬらり、と目の前の空間が裂け、そこから一人の女性が出てくる。

「こんばんわ」

「ええ、こんばんわ」

金色の髪とこの国には無い珍しい服を着た女性。なるほど、彼女が。

「キミが八雲紫かな？」

「あなたが水無月梗？」

互いが互いを知っているらしい。それを互いに確認した。

「何か御用かな？」

「ええ、勿論」

ふふ、と互いに笑って、ボクは立ち上がる。

「どうやって入ったのか知らないけど、境内に出て話そうか。まだあそこ、今日のお酒が残ってるだろうから」

そう言うと、彼女は意外そうな顔をした。

「てっきり、実力行使で追い返されるものだと思ってましたわ」

「そっちのほうがお好み？」

「いえ、出来るなら穏便に済ませたいのはこちらもですわ」

「ふふ、キミはけっこう嘘吐きだね」

「あら、イヤね。私が嘘吐きだなんて」

そんなことを言っているが、ボクの聞いた彼女の情報から考えるに、ボクがこういう性格だと知っているから、わざわざこうして出てきたんだろう。だとしたら、あの意外そうな顔も嘘ってことになり、そう考えるに、彼女はけっこうな嘘吐きだね。それも蒼とは違う。人を騙す嘘吐き。

まあ。

「嫌いじゃないけどね。そんなのも」

「あら、嬉しいわ」

ふふ、胡散臭い笑みを浮かべ、どこからともなく取り出した扇子で顔を覆う。

境内に出ると、彼女も一緒にやって来た。

「それじゃあ、聞かせてもらおうかな、ボクへの用事というのを」

そう言ってボクは、徳利の入ったお酒を一口含んだ。

四十二話　大人になってもお祭りと聞くとテンションが上がる人は上がる。まあ

巫女さんイメージだいたい５０～６０代。時代的にももうあまり長くないなあとか思ったり。しかし自分で想像してたより巫女さんが個人的に好きなキャラだなあ。優しいお婆ちゃんみたいんで、作者けっこう好きかも。

名前どうしようかな、つけるべきか、ここまで来たら巫女さんで通すか。

そしてとうとう出ましたゆかりん。ここまで長かったよ。この間時代設定見て、色々と想像してたのと違ってやばかったので、慌てて年代考証の設定を修正したよ。まったく、ノリだけでやるとこういうのが多いなあ。

四十三話　何が、というわけじゃないけど、全体的に胡散臭いんだよね、彼女。

こ、更新できますた。
長らくお待たせしてすいません。
次は明日くらいになると思いま……いや、こう約束していつも破ってしまっているから、安易な言動は慎もう。

最近、どうもタイトルが思い浮かばないなあ。

四十三話　何が、というわけじゃないけど、全体的に胡散臭いんだよね、彼女。

「人間と妖怪の共存ねえ……胡散臭い話だねえ。ていうか、無理じゃない？」

八雲紫の話は結局のところその一点に集約されていた。

人と妖が共に暮らす理想郷を作る。ってことらしいけど、なんとも難易度の高い話だよねえ。

「で、ふざけてるのが、その地の守護者にボクを登用って部分だよねえ」

まったくふざけた話だ。

「その理想郷ってどこにあるの？」

「まだ決まってないですわ」

「ボクはここの守り神だよ？それを分かってて言ってる？」

「それは……」

「土地神に自分の土地の守護を放棄しろと？」

「……分かってはいますわ。無茶なお願いだと。けれど、他の神ではこんな無茶の提案に乗ってくれる可能性なんてないのよ……」

後半、感情的になって素の言葉遣いになったかな？

「あなただけなのよ。こんなあり得ないような提案に乗る可能性のある神は」

「なるほどねえ」

他の神じゃ、人と妖怪が共存なんてあり得ないって言うだろうね。

理想のためと言うだけあって、よく調べてるねえ。

実はボクは、あまり人と妖を区別しない。単純にボクの気に入った人間に妖怪が手出ししたので排除したことはあっても、特に妖怪が憎いとか嫌いとかそういうのは無い。この里の人間が神として祭ってくれているから守ってはいるものの、鬼を殺すことの無かったように。この里の人間以外は別にどうなっても構わないと思っているように。

つまり、紫の理想を叶えるためにボクという存在はかなり適役だと言える。

けどまあ。

「ここはボクの土地だ。そしてボクはこの土地の神だ。他の地へ旅することはあっても、定住するなんてあり得ないよ……この地が滅びでもしない限り……ね」

というと、紫の目がすっと細まった。

「なら……この地を滅ぼしてでも連れて行かせてもらいますわ」

その言葉に、ボクは哂った。

「どうやって？」

だって、ここは。

「ここは、ボクの世界なのに」

そして、紫が驚愕に目を見開く。

映すは真か鏡か。

「ボクが本当に何もせずにキミを招いたと思った？そんなわけ無い。キミがいるその空間ごと、鏡界に映させてもらったよ。キミが出てくる前にね」

空間ごと反転させたんだ。気づきはしなかっただろうけどね。

鏡を通した空間の反転。今まで見せたことは無いけど、できるとは知っていた。なぜかは知らない。そういう知識があるのだから。

また、記憶に無い知識か。本当になんとかしないとねえ。

「時間は三日。その間キミはこの世界に留まり続ける。ああ、能力はだいたい想像がつくけど無駄だよ。この世界ではボクが絶対だからね」

八雲紫という名を聞いたのは数週間前。
鬼の住む山でのこと。

「スキマ妖怪？」
「そうだよ。そいつがここに来て、人間と妖怪の共存できる地を作るから、鬼もここに来ないか、って母様に言ってたんだよ」
萃香ちゃんの話によると、一月ほど前、まだボクと衝突する前にやってきて、鬼神相手に大立ち回りしたらしい。
「負けたの？鬼神」
「負けて無いよ。けど、どうにも互いに千日手だったのも確かだね」
「千日手ってことは、鬼神が攻め切れなかったの？」
「なんかいきなりそこかしこに穴が開いてそこから別の場所に移動するんだよ」
「だからスキマ妖怪？」
「そう、スキマ妖怪っていうらしいんだけど、どんな能力なのかは全然わかんなかったね」
空間に穴を開けてるのか？なら空間で囲ってしまえば勝てるかな？
「ああいう面倒なのは鬼は苦手だよ。もっと梗みたいに正面からぶつかってくれたほうが分かりやすいし、鬼はそっちのほうが好みな

んだよね」
「いや、普通に鬼相手に真正面とか無理だよ。神力全開強化でようやく僅かに上回るって、あり得ないよ、普通。他の妖怪じゃ、まず無理でしょ」
「まあ、わたしもあんた以外に鬼とまともにやれたやつは、天魔くらいしか知らないけど」
「天狗の一番上だっけ？」
「そうだよ。何せ天狗って種族は速いんだ。目も眩むような速さで移動される」
「ああ、あやや は速かったなあ。まあ、檻で囲んで圧殺したけど」
「あんたもよくやるねえ」
「いやいや、鬼ほどじゃないよ」

と、いうようなことがあって……ん？途中から話がずれてるような気がするけど、まあいいや。

まあ、そんなことがあって、スキマ妖怪八雲紫の話を聞いたんだよ。

でまあ、一応彼女についての情報を集めてたんだけど、その時、必ず最初に出てきたのが、人間と妖怪の共存という話だった。

「キミは相当頭がいいよね」

永琳ちゃんとどっちが上かな？

「だからこそ、妖怪が人間の発展と共に滅んでいくことに気づいた」

妖怪だけでなく、きっとボクみたいな神も。

「だからこそ、キミは今の自分が異端であることにも気づいている」

気づかないはずが無い。今まで彼女の情報を集めてきて、彼女に好意的だった話が一つも無いように。彼女自身がそれに気づかないはずが無い。

「他の妖怪からしてみれば、何で餌と共存なんてしなければいけない、と思うだろうね。人からすれば、自分を襲う危険な敵と共存なんて無理と言うだろう。神からすれば、もっとだ」

神なんて、基本的に妖怪なんて滅べばいいと思っているからねえ。諏訪子ちゃんはともかく、昔の神奈子はそうだった。今はどうか知らないけどね。

神は人間の味方だ。妖怪の味方をする神がいれば、それは悪魔か魔神だ。だからこそ人間にとって害悪でしか無い妖怪を神は嫌う。嫌悪し、憎悪し、そして排除する。

そんな思想を持った者たちに、共存などと話をしても到底受け入れられるはずも無い。

「だからキミは、先に受け皿を作ることにした」

そうすれば、自分の話が真実だと気づいた妖怪たちはその理想郷に縋ってくるだろう。

「けれどただ集めるだけじゃ、ただの無法地帯だ」

妖怪に人間の法は無い。妖怪を縛るなら、妖怪の持つ法で縛るしか無い。つまりは、実力による恐怖支配。

「つまり、その法を作るのが、ボクってわけだ」

妖怪を滅ぼさず、けれど、妖怪を抑える力を持ち、されど妖怪でなく、そして絶対的に人間の味方というわけでも無い。

「さて……何か間違えた？」

そう尋ねると、彼女は胡乱な者を見るような目で、ボクを見ていた。

「あなた……何者？」

「どういう意味？」

「どうしてそこまで理解が高いのかしら？……普通の神なら鼻で笑って一蹴するような話よ？」

「……さて？何でだと思う」

そう言って、ボクは笑って返した。

「さて、じゃあ、一つ賭けをしよう」

長い沈黙の中、ボクはそう言って切り出した。

「賭け？」

「そう、この地の人たちに、妖怪のいる地だと分かっていても、ボクと一緒に来るか聞いてみよう。もし、行くというならボクはキミの言うとおり、その地の守護をやってあげよう。けれど、行かないというなら、ボクも行かない。それでどう？」

「賭け、と言ったわね。私は何を賭けされられるのかしら？」

やっぱり理解力が高いね。目先のものに捕われないのは、先を見据える上で必須だからねえ。

「そうだね……人でも探してきてもらおうか」

もこたん、それに永琳ちゃんと輝夜の三人の行方、知らないんだよね。今のうちに確認だけでもしておいてもらおうか。空間を跳べるなら、きっと出来るだろうし。

「まあ、ダメだったらダメだったで、代案だしてあげるから、どう？受けてみない？」

実は代案なんて、全然考えて無いけど、まあ、何とかなるよ。面倒ごとは考えずにいたいしね。

「……いいわ。その賭け、受けてあげようじゃないの」

「ふふ、気風の良い人は好きだよ。じゃあ、明日のお祭り最終日が勝負だね。ちょうど明日は鬼もいるし」

「は！？鬼ですって！！！？」

「うん。山から人を攫わないことと酒を持参することを条件に鬼も

明日のお祭りには参加するよ」

ちなみにこのことはもう里の人には通達してある。最初から誰も反対しないのが、予想外だったから聞いてみたら、「水月様がお守りくださいますから」だって。ここまで信頼いや、信仰かな？されてると、ホント嬉しいじゃないか。

「紫も参加する？明日はボクも一緒に飲むし、きっと楽しいよ？」

四十三話　何が、というわけじゃないけど、全体的に胡散臭いんだよね、彼女。

長かった。内容は少ないのに、時間かかったなあ。
あ、ところで、今朝仕事中にふと思いついた企画あるんですが。
こんなのどうでしょう？ってことで、ちょっと活動報告に載せてみますので、ちょっと暇つぶしくらいに読んでみてください。
鏡蛟紀終わった頃に、気が向いたら書きます。

四十四話　酔うと途端に愚痴り出す人いますよね、絡み酒並みに迷惑だよ、ホント

できたーーー！！完成したぞーーー！！
ていうわけで、幻想郷ここに誕生。
まあ、まだ正確には出来て無いけど。
まだ霧の湖も、迷いの竹林も、無名の丘も、魔法の森もないんだよなあ。
あるのって、人里と妖怪の山くらいじゃね？
冥界とか魔界とか地底とかはよく分からんけど、多分きっと紫が何とかしてくれる、はず。

四十四話　酔うと途端に愚痴り出す人いますよね、絡み酒並みに迷惑だよ、ホント

「ここ一週間くらいずっと見てるよね。キミは誰かな？」

そう言われた瞬間、気づかれていたことに戦慄した。

「キミが八雲紫かな？」

自分の名前がすでに知られていることに驚愕した。

「なら……この地を滅ぼしてでも連れて行かせてもらいますわ」

本当はそんなつもりはなかった。まず無理だろうと分かっていたから。

けれど、その言葉に、目の前の神は哂った。

「どうやって？」

何のことか分からなかった。

だって、ここは。と続けて。

「ここは、ボクの世界なのに」

その言葉に自分が罠に嵌ったことに気づいた。

そのまま殺されでもするのかと思ってみれば、意外にも話し合いが続けられた。

そして、そのあり得ない理解の深さ、自身を見透かされているようで恐怖した。

そして理由を問うた自分に。

「……さて？何でだと思う」

そう言って、笑って返した。

不敵だと思った。けれど……。

あの偽物の世界から出た、その次の日。

驚愕と言えば、今まで生きてきてこれほどまでに驚愕したことがあっただろうか？

目の前で行われている祭りとは名ばかりの酒宴。

それだけなら何も驚きはしない。

だが最大の問題はここにいる面子だ。

人間、鬼、天狗、そして神。

これだけの存在が一同に介し、そして酒を酌み交わしている。

それは、自分が説き、そして誰もがあり得ないと一蹴した、人と妖が共存した光景だった。

「これが、キミの見たかった光景？」

そう言われたとき、ドキリとした。見透かされている、完全に。

だったら、誤魔化しは無用だと思った。

「ええ、そうよ。私がずっと切望していたのは、これよ」

紫が素直にそう言ったことに、ボクは驚く。まあ、表情には出さないけどね。

「ふふ、じゃあ、聞いてみようか。昨日のあの質問」

何となく、先は読めているけどね。

「……いえ、いいわ」

ほら。

「私の負けでいいわ」

やっぱりね。そして、多分次はこう言うんだろうね。

「その代わり、ここにその理想郷を作らせて欲しいって？」

「……やっぱり見透かされてるわね、ホント。やり辛い神だわ」

まあ、紫はあまり実力行使で何かするってタイプじゃないからね。

それに。

「いいよ。いくつか条件があるけど、それを呑めるなら、ここにその理想郷作ってくれても、構わないよ」

当然、打算もあるんだけどね。

「いや、意外な展開だったね」
「意外とかいう程度じゃないわよ。何で祭りに鬼神がいるのよ」
「萃香たちだけ楽しむなんぞ、させんわ、ワハハハハ！！！」
「鬼なんてみんな酔っ払いみたいなもんだよ。人の話なんて聞きはしない」
「人じゃなかろうて」
「うっさいよ。言葉の綾くらい放っておいて」
「ところで、おまんさん。いつかのスキマ妖怪じゃなか？」
「八雲紫ですわ、鬼神さん」
「なんじゃ、おまんさんも、梗に負けたんかい。ワハハハハ、愉快愉快」
「ボクは不愉快だけどね」
「ていうか、なんで私はまたあんたの膝の上にいるんだよ！！！！」
「気にしちゃダメだよ。萃香ちゃん。世の中そんなものだから」
「というか、なんでいつもいつもあんたは私を膝の上に乗せようとするんだよ！！」
「え、だったお手ごろサイズで可愛いし」
「あんただって、小さいだろうが！！」
「……（ピキピキピキピキ）……（パキポキ）」
「無言で拳を鳴らし始めたよ、梗のやつ」
「おう、勇儀か、おまんもこっちで飲め」
「面白そうだから、そうさせてもらうよ、母様」
「ぎゃあああぁぁぁぁぁ！！！！角は、角だけはやめてええ

ええぇぇぇぇ！！！」
「梗が珍しく怒ってるけど、萃香のやつ何やったんだい？」
「ふんむ、どうも梗は、自分の背がちまいこと気にしちょったらしいのう」
「まあ、ちょっと低いけど、そんな気にすることじゃないんじゃないのかい……って、萃香抱えたままこっち来た！？あ、やめ、わあぁぁぁぁあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」
「もう何がなにやらね。けど、あの神が身長を気にしていたとは、面白いことを聞かせてもらったわ……え？いつの間に、背後に……ま、待ちなさい。ちょっと、待って……きゃあああああぁぁぁぁぁぁ！！！」
「ワハハハハハハ。今日は楽しい祭りじゃのう。ほれ、おまんども、今日はわえもとっておきの酒を出すぞ！！！鬼だけでのうて、人間も天狗も呑めや！！！」
「あやや、それじゃあ一口」
「おう、最初は天狗か。ほれ、これじゃ、呑め」
「あやや、これはなんとも……さすがは鬼神様ですね。これほどの名酒を持っておられたとは」
「おう、おまんさん、いける口やな。ところでどないや、天魔は来てへんか？」
「残念ながら」
「あやつも、もう少し頭が柔らかくなりゃええんじゃがのう」
「アハハハハハハハハハハハハ。そーれー、回れ～～～、回れ～～～～」
「「「キャアアアアアアアアア～～～～～～～」」」
「あの方々は何をやってられるのでしょうか？」
「梗はもう酔っとんのかのう？まあ、人の気にしちょる部分を言うようなことはせんほうがええ、ちゅうことや」
「はぁ……？」

ふと目が覚めると、真夜中だった。

竜の体の時から、食べる必要も眠る必要も無かったのだけど、気絶はするらしく、酒が入ると意識を失うことはしばしばあったんだよね。

能力で水を作り出し、口に含む。冷たい水が、体温を少し冷やしてくれる気がした。

「月が綺麗な夜だこと」

後ろで声がするので、振り返ると、紫がいた。

「おや、お目覚めだね。ご気分はどうかな？」

「最悪よ。あなたが散々振り回してくれた（物理的な意味で）お陰で、酔いが一気に回ったわよ」

吐き捨てるように呟く、紫にどこか微笑ましいものを感じる。

「どうすればこんなことができるのかしら？」

ふと尋ねられ、ボクは顔を上げる。

「こんなこと？」
「今日の祭り、いえ、今ここに広がる光景は、私が目指した人と妖の共存という形に最も近い。いえ、もうなっていると言ってもいい。どうすればそんなことができるのか教えてくれないかしら？」
「光景って……みんな酒に酔って水揚げされた魚みたいになって寝てるだけだけどね」
「茶化さないで」
「ふぅ……どうすれば……ねえ」

目を閉じ、自分がしたことを思い出す。

「信じることかな？」

「信じる？」
「ボクはね、割りと何もしてないんだよ。昔はそれはよく村を守るために戦っていたけど、一度眠ってから数百年前に目覚めるまで、特に何かしてたわけでもないんだよね。それは、加護くらいは無意識的に与えてたみたいだけど、ボク自身が動いたのは、この間の鬼の時が久しぶりなんだよねえ」

幾度か驚きの顔をしながらも、紫は黙々とボクの話を聞く。

「ボクがこの村、いや、今はもう里か。里に帰ってきたのは数十年前。未だにボクを信仰していてくれたことに驚いたよ。だってそれって、未だボクなら守ってくれるって信じてくれてるって意味でしょ？だからね、ボクも信じた。ボクを信じてくれるみんなを信じた。みんなならボクが好きになった色々なものを受け入れてくれるってね」

何かの話で、そんな言い回しあったよな、とか思いながら続ける。

「この里のことに、ボクは積極的に関わるようなことはしない。巫女さんにある程度の自分の意思を伝えたなら後は何もしない。里のみんな一人一人の暮らしだからね、自分で考えさせて、自分で決めさせるんだ」

ボクには一番大切なときの決定権が無かったから。その意趣返しなのかもしれない。充てつけかな？縁への。

「けれど、人間が考えたところで……」

「あまり人間を舐めないほうがいいよ。特に共存しようと思っているならね」

そう言うと、紫が大きく驚く。紫自身頭がいいから、自分で決めたほうがいい意見が出ると思い込んでしまっているんだろうね。

「物の見方は一つじゃない。なら、人間にしか出せない答えというものもあると思うよ、ボクは」

勿論、妖怪にもね。と付け加える。

「この里は柔軟だからね。鬼でも天狗でも、紫みたいな一人一種族の妖怪でも、大抵のものは受け入れてくれるよ。でもね、受け入れるだけで、甘やかしてはくれない。だから、自分一人の意志で何でも叶うなんて思っちゃいけない。共存っていうのは、互いに歩み寄る部分があって初めて共存なんだから。一方的なのは、従属って言うんだよ」

それがボクが思ったこと。人と妖の共存。この話を聞いて、抱いた感想がそれだった。

「紫は、人間の言葉に耳を傾けている？人間だからって、無意識的に思ってない？そんな思いのまま、共存なんて言ってもただの押し付けだよ？」

そして、最後にこう付け加える。

「明日里に言って、妖怪を探してみるといいよ」

「里に？」

「向こうは気づかれて無いと思ってるけど、実は里にもいくらか妖怪が紛れてるよ？」

ま、無害そうだったから、放っておいたけどね。

「じゃあ、最後に言っておくよ」

「何かしら？」

「紫の言う理想郷を、この地に作ることを許可するよ」

「……ええ」

「里の人間だけは襲わせないようにきちんとしてくれればボクとしては別に文句は無いよ。必要ならいくらか手伝いもしよう」

「いいのかしら？」

「うん、いいよ。まあ、ボクみたいな神もいつかは消えちゃうだろうしね。その予防線だとすればいいんじゃないかな。うん、きっといいよ」

「そう、その」

「？」

「ありがとう」

顔を紅くしながら礼を言う紫の姿に、ボクは不覚にも笑いがこみ上げる。

「ふふ……なんと言うか、紫も若いね」

「どういう意味よ？」

「さて、どういう意味だろうね？」

さて、これからが忙しいかな。

四十四話　酔うと途端に愚痴り出す人いますよね、絡み酒並みに迷惑だよ、ホント

後一話か二話で、また放浪編入ります。
次は命蓮寺かな？
それで白玉楼やったら、終わり？

軽く聞いて見ますけど、魅魔様とか出したほうがいい？

四十五話　キノコタケノコニョキニョキと。ついでに山と湖、森に竹林もニョキニョキと。

タイトルだけで、何となく話が分かってしまうな。

注意：今回の話は超がつくほど独自色が強いですよ。割とレンタルマギカに影響を受けてるような気がするけど。少なくとも東方っぽくないかも。オリ設定嫌いな人は引き返したほうが無難。

まあ、今更と言えば、今更なんだけどねえ。

四十五話　キノコタケノコニョキニョキと。ついでに山と湖、森に竹林もニョキ

「霊地？」
「そう、妖怪が集まりやすい地点のことよ。それがこの辺りには鬼たちの住む山くらいしか無いのよ」
「ああ、竜穴ね」
縁の時代なら、パワースポットとか呼ぶんだっけ？
「それならあるよ、しかもけっこういっぱい」
「無かったわよ？」
「それは隠してるからだよ。一億年も前にね。大体さ、ボクが一億年も守ってた土地だよ？土地にボクの神力が染み付いてる。それ自体で一つの霊脈が出来てる」

霊脈っていうのは……うーん、霊地と霊地を流れる川みたいなものかな？風水とかあの辺で時々使われるね。
霊地の上に建物を建てたりすると、相応の効果が顕れる。人間の場合、霊力なんかが自然と身についたりすることもあるね。霊地の上で育った生命は特別な力を持ったり。動物だけじゃないよ、例えば植物。霊地の上で育った植物は、通常以上の力を持つ。万病に効く薬なんて、大抵霊地の上で育ったものを使うね。
霊脈はそれより効果はやや薄くなるけど、広範囲に渡って力を発するからかなり重要だったりする。

ただ悪い面も存在する。霊脈っていうのは、目に見えず、形も存

在しない。五感では感じれないので、第六感で感じるようなものだ。形の無いものというのは、同じく形の無いものに影響を受けやすい。存在が流動的というのか、人間なら体という形あるものに魂が固定されているので、移ろい難いのだが、これが体を失った途端、その時の思いによって成仏したり、自縛霊になったりと、移ろい出す。それと同じで、霊地や霊脈も生命体の感情によって少しずつ左右される。なので、霊地の上で多くの生き物が不浄な念を抱いたりしていると、霊地が汚染されたりする。そうなると、効果が一転、生命に害悪しか与えなくなったりする。汚染された霊地の上は大抵が草木の一本も生えない死んだ土地になることが多い。西洋とかで言う、レイスとかリッチとかスケルトンとかグールっていうのは、こういう土地が長年放置されていると生まれる、らしいよ。ボクは実際に見たこと無いけど。ちなみに、吸血鬼はどうかしらない。

さて、話は変わるけど、神社っていうのは、大抵が霊地か霊脈の上に立っている。神にとっても、やはり違うもので、神としてもそこは抑えておきたいところなんだろうね。

そして、結界を張って、妖怪が入れないようにしている。時々、突き破ってくるやつがいるらしいけどね。ボクの神社は来たことないけど。

そうした力のある神を祭る神社は時々、そういう汚染された霊地を浄化することがある。日本の異能集団ってそういうのに特化したのが多いからねえ。

神社だけでなく、時々寺院もするんだけどね。霊地でひたすら般若心経を唱えている坊主の集団がいたら、きっとそれは寺院だ！！迷わずしよう、１１０番通報、そして彼らはムショ暮らし。ざまあ。

「というわけで、説明修了」
「……誰に言ってるのかしら？」
「うん？大きなお友達にだよ」
「（頭がおかしくなったのかしら？酒の飲みすぎかしらね？）」
「あの祭り以来禁酒を心がけているボクに、何を言うか。まあ、とにかく、霊地がこの辺に……五箇所くらいはあるから、それを見に行くよ」
「まあいいわ。それが本当なら、いよいよ私の理想も具体的になるわ」
「ふふ、まあ、頑張ってよ。紫」

というわけで、理想郷作りいよいよ始まりだね。

移動中。場所は里から見て、山の反対方向。そこに竹林がある。

「この竹林が一つ目の霊地」
「やっぱり何も感じないわよ？」
「《反射》で全部の情報を遮断してるからね。気がつかなくても当然だよ」

別に反射って、外から外へ跳ね返すだけじゃなくて、中から出て行くものを戻すのにも使えるんだよねえ。
例えるなら、懐中電灯とそれを見る人の間に、一枚板をはせた感じかな。光は反射して見えなくなるよね。
まあ、だから、実はボク自身にも今どうなっているのかわかって無いんだけどね、とか思いつつ《反射》を切る。

「「！？」」

これぱかりは紫だけでなくボクも驚いた。

「これは……」

「また独自な進化してるねえ」

霊地は生命の思念に影響を受けやすい。けれどこの辺りにはほとんど生命が無い。で、どうなったのかな？と思ってたんだけど。

「すごいね、これは。紫ぐらいの力が無いと迷うよこれは」

特に何か代わり映えがする風景でも無い。何の特徴も見出せないその風景に、気づかず迷いこめば、もうそこから出ることは叶わない。そういう霊地になってしまっている。

「これって、妖怪が住めるの？」

「難しいわね。けれど霊地には違いないし」

「春になると筍が取れるから、あまり妖怪に居座られるのも困るんだけどねえ」

「まあ、住みたいという妖怪たちがいるなら、勝手に住みつくでしょ。ここは放っておきましょ」

「そうだねえ、じゃあ次に行こうか」

というわけで移動中。次は山の麓。

「この辺だね」

そう言って《反射》を切る。

「わお」

「これは、霧かしら？」

反射切った途端に、霧がもくもくと。一瞬で、辺りが見えなくなったよ。ん～でもそれだけだね。特に他には無いし。
「ここなら良さそうね。でもただの平地。特に何もないのよねえ」
「ここにも山でも生やす？」
「目の前に山があるじゃない」
「ん～、じゃあ森でも作る？それとも川？」
「霧でこの辺は温度が低くなりそうだから、湖でもあったらいいかもしれないわね」
「湖ね、分かったよ」

えい！

と念じると、地面が抉れて水が溜まる。鬼たちの住む山からも川が流れてきていて、地下で繋がっているので、そっちにも繋げる。

「まあ、掛け声に意味はないんだけどね」
「何を言ってるのかしら？」
「いや、何でもないよ。というわけで完成」
「なんというか、さすがは神よね。湖を数秒で作るなんて」
「まあ、水だしね」

意味が分からないわ、とか呟く紫を連れて、次に逝く（誤字…だよね？）。

「というわけで、里からそう離れていないここが三番目だよ」
「森かしら？」
「まだ小さいけどねえ。多分、《反射》解いたらもっと大規模になるよ」
というわけで、《反射》を切る。

「……？」
「何か変わったかしら？」
何も変わって無いことに、疑問符を浮かべる。
「森の中入ってみる？」
「そうね」
というわけで、二人して森の中へ。
「なんか湿っぽいね」
「そうね、あちこちに茸が生えてるわ」
ふと目を凝らすと、微細な何かが見えた。
「ちょっと待った、紫。これ何か飛んでない？」
「そう言われるとそんな気もするわね」
ふと見ると、生えた茸の一つから胞子がふわふわと出ていた。
「茸の胞子。しかもよく見ると森全体から出てる」
すごい量だよ。なんで気づかなかったんだろう。
「梗……あれ」
紫が指差す方向を見る。そこに動く茸がいた。
いや、冗談じゃないよ。本当に茸が自立的に移動してるんだって。
「お化け茸？すごいね、この森。霊地の影響かな？」
「それ以外にこんな状況になる要因があるかしら……」
「紫の理想郷はこれも受け入れるの？」
「ちょっと遠慮したいけれど、これはこれで何かの価値があるかもしれないわ」
「そうだね。ただ里の人は入らないようにしないとマズイね」
「あら？どうしてかしら」

「この胞子、何かやばいよ。ボクとか紫ならともかく、下手すると小妖怪でもやばいかも。具体的にどうなるかは分からないけど」
「そう……！？梗、あれ」
また紫の指差す方向を見ると、お化け茸が鹿に群がってその肉を食べていた。
「うわあ、すごいね。独特過ぎる生態系だよ。この森の食物連鎖の頂点は茸かあ」
「独特で済ませれる梗はすごいわね……」
ショッキングな光景にさすがの紫も目を丸くしていた。

うん、まあ色々とショッキングだったんで、森は出たよ。

「で、ここが最後」

里から東にいった小高い山とその周囲の森。その山の頂上に立ってボクは言う。

「ボクが霊地を隠したとき、ここが一番強力だったんだ。だから、今度ここに神社を移転しようかと思ってるよ」
それにここは、霊脈も通ってるからね。
呟きながら《反射》を切る。

「そう、確かにこれは梗に管理してもらったほうが都合がいいわね。ここに下手に妖怪がいると、霊脈が汚染されかねないわ」
「それにここの霊地はちょっと特殊だからねえ」
「特殊？」
「まあ、色々惹き寄せちゃうんだよ。ホント、色々とね」

だから、今まで封じていたんだ。

「まあ、気にしないで。ここはもう少し封印しておこう。ここに神社が出来るまではね」

神社に戻ると、もう夕方を過ぎていた。

「とりあえず、後はキミに任せた。ボクは巫女さんと神社の移転について色々話わないといけないから」

「そう、今日は助かったわ」

「ふふ、まあ、せいぜい頑張ってみてね、紫」

「そうするわ」

そう言って、スキマを開く紫を見て、ふと一つ思い出す。

「そうだ、紫」

「……何かしら？」

「キミの言う理想郷に名前は無いの？」

「名前？」

「いつまでも理想郷なんて呼び方じゃ、現実になりそうにならないし。名前を考えてみない？」

「……そうね」

一言呟き、しばらくの間考える。そして、ふと顔を上げ、こう呟いた。

「幻想郷。これにしましょう、それじゃあ、また」

言い残し、紫がスキマを通る。

「幻想郷ねえ。幻想郷」

幻想となる者たちのための郷？

それとも、やっぱりこうなったじゃないか、というあてつけの名前？

「まあ、考えても仕様がないね」

独りごち、そしてボクは巫女さんの元へと向かった。

四十五話　キノコタケノコニョキニョキと。ついでに山と湖、森に竹林もニョキニョキと。

ていうわけで、幻想郷の要所が出来る話でした。
うん、ホントは梗くんが「エロイムエッサイム」の呪文と共に、迷いの竹林や、霧の湖や、魔法の森や、神社建設予定地の山がニョキニョキと生えて来る話だったんだけど、結局作ったのは湖だけだよ……。
どこで間違えたんだろう？まあ、これはこれでいいか。

次回、神社の移転の話、それから旅に出る話。
それで七章は終りかな？

余分な話。

信頼と実績のアッテムト。
デスコンボ発動。

最近はこの言葉を聞くだけで、涙が出そうになる作者です。
誰か！！誰かアリスに救いをおおおぉぉぉ！！！！

意味の分からない人にはとことん意味が分からない話。

一度調べてみるといい。そして見るがいい。
心が抉られるよ……ホント。

そして１９話を見て、チルノの天使ぶりに癒されるんだ。

四十六話　移転一転、一点移転。いや、ふと思いついちゃって。何か言いたくなった。

前半のふざけ具合に反比例して、最後がドシリアス！！！！
さようなら、巫女さん。そして、こんにちは、巫女さんの名前。
後２人お気に入り登録してくれれば、ピッタリ１０００ｐｔなんだけどなあ。誰か登録してくれんかな？

四十六話　移転一転、一点移転。いや、ふと思いついちゃって。何か言いたくな

「ねえ巫女さん」
「はい？どうかなされましたか？」
「神社移転するって言ったでしょ？」
「そうですね」
「名前変えるって言ったでしょ？」
「そうですねえ」
「なんて名前にしよう？」
「……考えてなかったのですか？」
「うん。巫女さん何か良いアイデアない？」
「あいであ？」
「あ、そっか、通じないのか、考えはない？」
「水月神社ではダメなのですか？」
「水神信仰と混じっちゃうんだよねえ。ダメってことは無いけど、加護がごっちゃ混ぜになるよ？となると、困るのは里の人たちだね」
「それはけっこう問題ですね」
「だねえ。というわけで良い知恵貸して？」
「分かりました。それでは……そのまま龍神神社なんてどうでしょうか？」
「分かりやすくはあるけど、ボク以外の龍神がいた場合、問題にならない？」
「いるのですか？」
「ボクは見たことないねえ。けど、少なくともボクも最初は龍神じゃなかったし、後世に別に龍神が出てくるかも。そんな時に龍神神社だと、信仰の流れがおかしくなるね」
「うーん、では普通に名前を付けるのが一番ですか……水無月神社は？」

「名は体を表すって知ってる？そんな名前付けて水系の加護がなくなっても知らないよ？」
「うーん。では……白霊神社はどうでしょう？」
「びゃくれい？って何？」
「以前見た水月様は全身真っ白でいらっしゃいましたから、白き御霊と書きまして白霊神社です」
「……うーん……うん、ありだね。ただ、読み方はそのままでもいいから、当て字にしておいてくれる？」
「当て字ですか？」
「うん、本当の名前をあえて隠すんだよ」
「えっと、何故でしょうか？」
「まあ、色々と理由はあるんだけど、一々説明しても理解できないと思うから、とにかく当て字にしておいたほうがいいと思って」
「はあ、まあ分かりました。ではびゃくれいではなくはくれいと読みましょうか。そのほうが当て字も作りやすいですし」
「うん、じゃあ、巫女さんが考えてくれて良いよ。当て字」
「そ、それはさすがに、マズイです。神社の名を神を放っておいて人間で考えるのは」
「神社建てるのに、一々神に伺いを立てる必要は無いんだよ。だったら、当て字くらい巫女さんがつけたって大丈夫だよ。究極的に言って、神社なんて祭ってる神の機嫌さえ取れてればそれでいいんだから」
「本当に言い切りましたね」
「でも至言でしょ？奉るというのはそういうことだよ？」
「……はあ、分かりました。では私が考えておきます」
「ふふ、よろしく、巫女さん？」

神社の移転は里の大工総出での仕事となった。
まあ、大きいからねえ神社なんて。

縁の時代と違って重機なんて無いし、大仕事には違い無いよね。
それでも建設まで半年って、時代を考えると異常な速度じゃない？
まあ、ボクがちょいちょい手伝ってる分もあるんだけど。

人間だと難しい部分も、ボクなら割りと簡単に出来たりするからねえ。

本当は、神社完成までまた旅に出ようかと思ったのだけれど、巫女さんの体調も思わしくないし、神社が完成するまでは里に残ることにしていた。

んで、時間が跳ぶこと四ヵ月後。

「いや、まさかこんなに早くできるとは」
現場の方々には、水月様のお陰ですと言われたけど、それでもこんなに早くできるなんてねえ。

というわけで、当初の予定よりも二ヶ月も早く神社完成。

山の頂上だから、けっこうかかると思ったけど、一人で往復半日で全部持っていったのが良かったのかねえ。
掘削機の無い時代に、拳打で地面を掘ったり、邪魔な石をデコピ

ンで砕いたり、何人がかりで支える柱を一人で持ったり、色々やったのが報われたかな？

「で、後は名前だけなんだけど。できたの？」
「はい。『博麗神社』この名前にさせていただきました」
「そう。巫女さんが決めたならそれでいいや、じゃあ、神の名前は『白霊』にしておこうか」
「分かりました。みづ……白霊様でしたね」
「うんうん、里の人たちにもちゃんと伝えておこうね」

これでようやく色々終わったよ。と新築の神社の縁側で巫女さんと二人並んでお茶を飲む。

「ようやく一息つけたね」
「色々ありましたから。みづ、白霊様が帰ってこられたのが私にとってはその始まりですかね？」
「あはは、忘れてたわけじゃないんだけどね。色々あって、ずっと寝てたんだよ」
「まあ、帰ってこられたのですから良いのですが。それから鬼がやってきたり、幻想郷でしたか、その話が持ち上がったり。そしてこの移転が最後になりますね」
「……最後？」
「ええ、何となく分かるのですが、私ももう歳ですから」
「そう……逝っちゃうの？」
「後どれくらいになるかは分かりませんが。新しい巫女の後継もいますし、お会いになられましたか？」
「キミと一緒に修行しているところを何度か見たことあるよ」
「そうですか、そろそろあの娘に全部任せてしまってもいいかもしれません」

「……やっぱり、寂しいね」
「またお祭りでも開きますか？」
「ううん、そろそろまた旅をしなきゃいけないから」
「そうですか……」

変な巫女だと思う。だって、自分の祭っている神様が守っている土地から出て旅に行こうとしているのに、そうですか、の一言で済ませてしまうのだから。
でも、だからきっとこんなにも心許してしまったんだろうねえ。

「まださ、何も達せられて無いんだ。だから、ボクはもう行くよ」
「……行ってらっしゃいませ。白霊様」
「うん、行ってきます。霊夢」

巫女さん改め、博麗霊夢に、ボクはそう答え、そして出て行った。

「……ずるいですよ、最後の最後で……ずっと、巫女さんとしか呼ばなかったのに……」

彼女が上を向いて、何かを堪えていたことを、ボクは知らないし。

「……だって……巫女さんが何十年と信仰してくれた神様だからね……最後に泣き顔なんて……見せられないよ……」

ボクが上を向いて、何かを堪えていたことを、彼女は知らないんだ。

四十六話　移転一転、一点移転。いや、ふと思いついちゃって。何か言いたくなる気がする。

今回久々にオリキャラしかいない気がする。

そして初めて出てきた巫女さんの名前。

霊夢なんです。ええ、まあこれ一週間くらい前からこの名前は考えていたんですが、採用するかどうかずっと迷ってて、結局使うことに。

やはり泣いたか梗くん。梗くんにとって家族の愛情ってすごく眩しいんですよね。縁とは十日くらいしか一緒にいれなかったし。八意家も結局あれだし。だから、包容力激高の巫女さんを無意識的に親みたいに思ってたりする。そこまでいかなくても、頼れる存在みたいに思ってしまうんですよね。一人で生きてきた分、よっかかれる存在にはほとんど無条件で心を許してしまう。けどまあ人間ですから、寿命が絶対的に違っていた。そういった意味では、八意先生の時よりも寂しいと思ってるかもしれません。そう言った部分を鑑みて、もう一度読んでみてみてもらえると、また何か変わってくるかもしれませんね。

ちなみに、これで七章は終りです。

分かり難い人のために時系列。

諏訪大戦終わって数百年後↓巫女さん生まれる。

かぐや姫の噂を聞き、途中で幽香に出会う↓初めての接触、この時

巫女さん十代半ばくらい。
五十年前後、もこたんを連れて鬼を追い払うため里帰り→巫女さん六十台。
今回の話→巫女さん六十後半？

だいたいこんな感じ。
途中で結婚とかせずに生涯巫女を貫いたのは、実際に祭神と出合った影響か否か……。それとも、梗と同じく、互いに家族みたいに思っていたからなのか……。さて、まさしく神のみぞ知ることですね。

とりあえず、巫女さん、お疲れ様です！！

というわけで、次回を待て。

四十七話　十人十色。十人いればそれぞれの色があるけど、千人いれば、もしかすると

章始めはいつも短いので、勘弁願います。
眠いんだよ。まだ書き途中なのに、すごい眠いんだ。
自分2時半から仕事だぞ?七時には寝ないと、不味いんだよ。
ていうわけだから、ここらで勘弁。

四十七話　十人十色。十人いればそれぞれの色があるけど、千人いれば、もしかすると……

かつて、縁はこの世界を可能性の世界と称した。

だとするならば。

もし。

もしもだ。

あの時、縁が死なない可能性があったのなら……

だとするなら……

また旅に出ること半年。

都に行って人と交流したり、山に行って妖怪と交流したり、里や村に行って人と交流したり、川や海に行って妖怪と交流したりしながら日々を過ごしていた。

その道中に出合った妖怪の間での噂によると、妖怪の駆け込み寺、というのがあるらしい。

最初は縁切りでも頼む寺なのかと思ってたけど、聞いた話によると、人間と妖怪の共存というどこかで聞いたような説法をする僧侶がいるらしい。

「紫は知ってた？」

「ええ、話には聞いていたわよ。いつか行こうと思っていたのだけれど」

梗が代わりに行って、様子を聞かせてちょうだい？

「別にいいんだけどね。面白そうではあるし。あ、でも神なのに余所の神社に行ってもいいのかな？」

「さあ？私は残念ながら妖怪なんで、分からないわね、ふふ」

うわ、胡散くさいなあ。だから、ばｂ……いや、何でもないよ。

旅の途中、どこかに向かっていたらしい紫がボクを見つけたので、そんな会話をして、また別れた。

まあ、紫も幻想郷を作るのに、忙しいみたいだしね。邪魔はしないでおこう。

というわけで、二週間ほどかけて来て見た。妖怪の駆け込み寺と噂される信貴山寺だよ。

「ふーん。門前は普通……じゃないね」

妖怪の駆け込み寺というから、わざわざ夜に来た甲斐あってか、門前にいきなりいた。

「こんな夜に参拝客？熱心ね」

尼のような格好をした、けれど人では無い彼女は。

「なるほど、なるほど。妖怪の駆け込み寺というのもあながち嘘でもないみたいだね」

そう呟いた途端。

「雲山！！」

彼女が叫び、同時に上から何かが降り注ぐ。

ドン、という音と共に、それがボクのいたところを押し潰す……ハズだった。

「うん？何これ？雲のオジサン？」

まあ、大妖怪でも無いただの妖怪の攻撃だし、片手で止めても別に不思議でも無いんだけどね。相手にはそれが驚愕的だったみたいだよ。

「片手で止めただって……貴方は危険だ。姐さんのところまでは絶対に行かせない！！」

「いや、ていうか勘違いしてるみたいだけど、別に何かしようって

わけじゃないよ？」

問答無用、と言わんばかりに次が来る。

さてはて。こんな時どうすればいいのかねえ？

とりあえず、神力（偽）を一割ほど放出。つまり全力の五％くらいか。

それだけで、すでに相手の顔は苦渋に満ちている。

「貴方……神か。神がこんなところにどういう用かしら？姐さんに何かしようっていうなら、神と言えど、容赦しない！！」

「姐さんってのが噂の僧侶かな？ていうか、人の話を聞かないなら、こっちこそ容赦しないよ？」

さらに一割開放。

と、その時。

「待ってください」

女の人が降りてきた。どうにも尼さんの格好には見えないけど。

「あ、姐さん！！？危ないですから、下がっててください」

「大丈夫ですから。それで、この寺にどのようなご用件でしょうか、水神水月様？」

「あれ？ボクのこと知ってるの？」

「貴方はとても有名な方ですから」
「ふーん。まあ、どうでもいいけどね。それで、用だっけ？妖怪の駆け込み寺っていうのを見たかっただけだよ」
「妖怪の駆け込み寺……ですか……」
「そうそう、キミたち自身がどう思ってるかは知らないけど、噂ではそうなってるね。何でも人間と妖怪の共存を目指しているとか」
「ええ、仰る通り、私は人と妖怪の共存を目指しています」
「ふーん、本当だったか。まあ、そんな無謀な夢を見ている僧侶を見てみたかったんだよ」
「私は無謀などとは……「あー、はいはい。説法なら寺で聞いてあげるから。とりあえず入れて？」……分かりました」
「姐さん！？よろしいので？」
「あの水神水月様だというのなら、もっと簡単に貴方を倒せたでしょう。それをしなかったということは、こちらに害意は無いということだと思います」
「無いよ。だいたいそっちの尼さんが問答無用でやってきただけだしね」
「雲居よ。雲居一輪、こっちが雲山」
「そう、覚えておくよ。で、そちらのお姉さんが？」
「聖白蓮です」
「そう、よろしく？」
「はい、こちらこそ」

とりあえず、寺への侵入は完了だね。別に侵入なんて言い方しても、何かするわけでもないけど。

「聖？そちらの方は？」

寺に入っていきなり耳の生えた少女に出合った。ネズミ耳？
「水神水月様、で通じますか？」
「！？あの噂の。ご主人に伝えたほうが？」
「そうですね、ここは一応毘沙門様の寺ですから、伝えておいたほうがいいかもしれません」
少女はすぐにこちらに一礼して、その場を立ち去った。
まあ、余所の神様の寺に入れてもらえただけでも、御の字だろうねえ。
「さっきのネズミ耳の子は？」
「ナズーリンです。この寺の毘沙門様の使いをしています」
「へえ～。ところで今更だけど、余所の神の寺に入ってきても良かったの？」
「毘沙門様には私から許可を貰いますので」
「そう」
そして、そのまま寺の一室に通される。

「改めて自己紹介を、この寺で僧侶をさせてもらっています、聖白蓮です」
「ご丁寧にどうも。水神水月改め、龍神博麗だよ」
「龍神……？」
「そう、龍神。でもまあ、呼び方は梗でいいよ。それがボクの名前だし」
「では、梗さんと、お呼びさせていただきます」
「うん、それで？キミの説法でも聞かせてもらう前に、一ついいかな？」
どうぞ、と促されたので、気になっていたことを尋ねる。
「白蓮は、ホントに人間？」

四十七話　十人十色。十人いればそれぞれの色があるけど、千人いれば、もしかすると

キャラの口調おかしかったら、教えてください。
まだ、星蓮船はやり途中なので。
とりあえず、平安のエイリアンの曲がグットすぎる。
Ｅｘボスのテーマっていいのが多い。Ｕ．Ｎ．オーエン超える名曲
は自分の中で無いけど。

四十八話　夢と希望、理想と現実となんとやら。さてはて、どう言うべきか。

一度消したんですが、修正箇所を消去しても、２５００字くらいはあったので、投稿します。残念ながら二話目は無理っす。時間的に。もう寝るので。

後二千字程度で終わらせるかなあ、それとも船長とか、星とか、出番すら無いし、ナズもまだ少ししか出てきてないんだよねえ。うーん。どうするべきか。もう眠いんだが。

四十八話　夢と希望、理想と現実となんとやら。さてはて、どう言うべきか。

可能性の因果を考えれば、それは十分にあり得る話だった。

けれど、現実という名の壁がどこまでもボクを邪魔する。

矛盾が理を超えることは無く。

だからこそ、所詮は机上の空論に過ぎなかった。

もし、もしも。

この壁を越えれるのなら。

その時は……

「なぜ私が人間か、などと聞くのでしょう？」

質問に対し、返って来たのは更なる質問だった。

「だってキミ、妖力を感じるんだから、当然でしょう？」

普通人間ならあり得るかもしれない。けれど、僧侶から妖力を感じるというのは、ひどく不自然な話だった。

そもそも、人間が妖怪と共存しようとするのも、おかしな話だ。

けれどもし。もしもだ。

その人間が人間でなかったのなら、この寺がこれだけ妖怪だらけなのも、おかしくは無い。だって、自分の仲間なのだから。

「……私は、妖怪ではありません。魔法使いです」

その言葉に、ボクは、もう一つ白蓮から感じていた力の正体を知った。

「そう、その初めて感じる力が魔力か。初めて知ったよ」

「魔力をご存知ですか。ええ、そうです、確かに私はもう人間ではありません」

「もう？」

「はい、私は元々は人間でした」

白蓮の話によると、白蓮にはひどく優秀な弟がいたらしい。命蓮という名の弟は、素晴らしい僧だった。清廉で聡明で、法力の腕前も高かった。けれど、そんな凄い僧だった弟も、歳には勝てず、死んでいった。その時、ふと自身が死ぬことが恐くなったらしい。そして、法力ではなく妖力・魔力といった類の術により若返りの力を手に入れた。僧侶として人々の信奉を受け、表では妖怪退治を依頼

される一方で、白蓮は若返りの妖力を維持するために裏では妖怪を助けていた。けれど、妖怪を助ける内に妖怪たちの不憫な過去を知り、我欲からではなく本心から妖怪たちの力にならねばと思うようになった。

「それで共存？というより、妖怪を助けようって感じだね」

紫と似てはいるけど、白蓮はもうちょっと妖怪よりだね。

「そうですね。けれど、最終的には人と妖怪が共存できるようになればいいと思っています。人と同じように、妖怪にも心優しきものもいます。だから、そう言ったものを知っていければ、人と妖は手を取り合い、共に生きて行くことができるのではないでしょうか？」

はっきり言って理想だ。それも甘ったるい。夢物語と言っても良い。それも紫以上の。

紫は互いに拮抗を守ることで共存させようとした。可能か不可能かで言えば、可能。特にボクのような中立な立場の抑止力があれば。

けれど、白蓮のは……。

「妖怪は人間を喰う。絶対に変えれない摂理だよ」

「人を食わない妖怪もいます」

「極少数だけどね。普通は食う。食わないと生きれないから。命の危険をもってして、初めて人は妖怪に危機感を持ち、そして恐怖する」

未知が何故恐いか？それはどんなことがあるか、分からないからだよ。もしかしたら、自身の命すら奪われかねないかもしれないから。可能性の話でしかなくても、たった一度で全て終わってしまう可能性なんだ。恐怖して然るべきだと思う。

「この摂理を変えてしまっては、もうそれは妖怪じゃなくなる。妖怪は恐怖から生まれたんだから」

「そんなはずは無い。例え、恐怖しなくとも、忘れることがなければ、人が自身の隣人を忘れることがなければ、妖怪は生きていけるはずです」

「それは妖怪にとって生きていると言える？」

その言葉に、白蓮が目を開く。忘れない、つまり幻想にはしない。生きていけるかどうかは知らない。けれど、人を襲うことが存在意義の妖怪が人を襲わなくなったら、それは生きていると言えるのか？ボクには疑問だよ。

「人だって動物を食べて生きている。キミは、牛や猪、鶏や魚と共存することができる？家畜でなく、隣人だと言える？」

「それは、言葉が通じないからで」

「通じたらきっと彼らはこういうだろうね。食べないで。殺さないで。助けてくれ、って」

「……」

それは、まさに、妖怪を前にした人間の台詞だった。

嫌だ、殺さないで、助けて。

そして無力にも妖怪に食われていく人なんて、いくらでも見たことがある。

完全に黙りこくり、顔を伏せる白蓮を見て、少し言い過ぎたと思い、けど、と続ける。

「けどね、牛を飼っている人が愛着を持つように、鶏を飼っている人が可愛がって殺せなくなるように。妖怪だって、人間と手を取り合うことができないとは言わない」

言葉遊びみたいだけど……そもそも家畜と妖怪との共存の話を一緒に考えるのも変なんだけどねえ。

「キミはキミで考えればいい。キミが正しいと思い、それで為せたのなら、素直に拍手しようじゃないか。ダメだったら、別の方法を考えればいい。キミが諦めない限り、ボクはそれをバカにしようとも思わないし、邪魔もしない」

一つ、例えを挙げよう。そう言うと、白蓮が伏せていた顔を上げた。

「ボクの友人の妖怪は、いつか妖怪が幻想となっていくことを危惧した。だから、妖怪が生き残るための世界を作ろうとした。そのために人と妖が互いに生きていける世界を目指した」

それは、紫の歩いてきた道。それは、白蓮が目指したものに近い道。

「今ね、それは実現しかけている」

そう言った途端、白蓮が驚愕した。

「幻想郷。それが彼女が目指した理想郷の名前。まあ、一応教えておいてあげるよ」

キミが目指すものは、実現が限りなく難しい。

だから、後はキミが意志を持ち続けることができるかどうか、それだけだよ。

どうにも説教臭くなったなあ。と自身でも思う。けど、どうにも気になったことが口から出てしまう性質なんでよねえ。

共存という形が、やり方は違えど可能だと知った白蓮はどこか浮き足立った様子だった。

「説法するつもりが、逆に説法されましたね」

とは、白蓮の弁。笑いながら言ってた。

さて、ここに来た用事が終わったんだよねえ。

今深夜ってところか。特にやることも無いし、帰ろうかなあ？

「泊まっていってはどうでしょう？あの水神様に何かあるとも思いませんが、あまり無闇に妖怪を退治されても困るので」

「……まあいいか。じゃあ、そうさせてもらうよ」

というわけで、お寺にお泊りになりました。

あらゆる方法を考えた。けれど、答えは一つしかなく。

けれど、最大の障害が一つある。

理が矛盾を許さない。

これをどうにかしない限り、ボクの望みは叶わない。

ここが現実である限りは、不可能だ。

いや、例え鏡界だって……。

どうすれば、どうすればボクの望みは叶うのだろう……誰か、教えて。

四十八話　夢と希望、理想と現実となんとやら。さてはて、どう言うべきか。

最後少しだけ付け加えて、投稿完了。

何か説教臭いこと書くと、むずむずして恥ずかしくなるんだけど、これって自分だけ？

ちなみに、ひじりんは説教キャラなイメージあるけど、確かにあるけどこの時まだ二百か三百にも満たないくらいのはずだし、梗くん一億だから年上というなら梗くんの方がずっと年上。だから、多少説教しても大丈夫だと思う。多分。

ちなみに、前話の最初とか、今話の最初とか最後にチョコチョコ書いてるのは、ラストに向けての伏線ですよ～。

幻想入りするまでに伏線全部書いておく必要があるからなあ。

ついでに言うと、西行寺編の次にもう一章やって、それでようやく幻想郷に帰ってくる予定。

今何故か紅魔郷の話が浮かんでしまった。

引き篭もりな妹に四苦八苦する姉の姿を思い浮かべておけばオッケー。

やばい、紅魔異変がかなりのギャグになりそうだ。そこまで覚えてるかは知らんけど。

四十九話　嘘吐き襲来！？いや、悪夢だったか。毘沙門天！？いえ、ドジッ娘です。

頑張ったが、これ以上書けなかった。
ナンテコッタ！？

寅丸星は作者の勝手なイメージが過分に入ってます。

四十九話　嘘吐き襲来！？いや、悪夢だったか。毘沙門天！？いえ、ドジッ娘です。

悪夢だ。目が覚めてまず最初にそう思った。

目が覚めたのに、悪夢というのもおかしな話だが。

「『こんばんわ』」

朝起きていきなり目の前に橘蒼がいた。

「な、なんでいるの？」

守矢神社に捨ててきたはずなのに。

「なんで？不可思議なこと聞くんだね。『キミの後をずっと追ってきた』からだよ」

「嘘でしょ」

鏡界を通って移動しているボクを追えるはずも無い。

「最初にキミは悪夢だと言ったけど、『これは現実』だよ」

と、そんな夢を見た。

「死にたい……」

朝からテンション最悪だ。なんでよりにもよって、あんな嘘吐きの夢を……。

「おはようございます」

部屋を出て、すぐに白蓮と会った。

「おはよう」

「よく眠れましたか？」

今朝見た悪夢を思い出し、苦笑いで返答を濁す。

「意外と言えば意外だったね。お寺っていうから、野菜しかないのかと思ってた」

目の前に出された魚を見て、ふとそう呟く。

「いえ、私は仏門に入りし者なので、食べませんよ？けれど、水月様は「今は博麗ね、昨日も言ったけど梗って呼んで」……梗様「様付けいらない」……梗さんは仏門ではありませんから」

なるほどね。ていうか、用意できること自体に驚いているんだけどね。

「妖怪の方に頂いたのですが、寺では食べないので、困っていたんですよ」

あ、なるほど。ちょうどその時にボクが来たと。

「ちょっといいかい？」

朝食を終え、さて一心地ついたら帰ろうと思っていた矢先、昨日のネズミ耳の子が声をかけてくる。
「えっと……なずーりん？とか言ったっけ？」
「よく覚えてらっしゃる。ナズーリンだ。毘沙門天様に仕えている。よろしく」
「梗だ。様付けはいらないよ。それで？その毘沙門様の使いが何か？」
「ご主人が貴方に会いたいと言っているんだが、会っていってもらえないだろうか？」
毘沙門様が？ボクに？
「なんで？だって、神様としての格を見ると、天と地ほど違うよ？」
実力は負けてるつもりは無いけど。例え、有名な武神でもね。て言っても、毘沙門天って実は最初は財宝の神でしかなかったんだし、純粋な武神ってことなら、阿修羅とかシヴァなんだけどねえ。
「私は伝えろと言われただけなので、ご主人の意図は知らないよ」
「そう。まあいいや。取り合えず、会うよ。こっちから行ったほうがいいかな……礼儀的にもね」
まあ、こっちとしては、一晩世話になった身だからね。家主には一言くらい挨拶もしておいたほうがいいと思う。
「そうか、ならば案内させてもらうよ」
そう言って動き出したナズーリンの後についていった。

「で……これ誰？」
案内された先にいた少女に、ボクは不思議な顔で尋ねる。
「ご主人だが？」
「私が、毘沙門天です」
そう言う二人に、ボクは疑問を問いかける。

「この人が？冗談でしょ？こんなに神力の少ない毘沙門天なんているわけないよ」

はっきり言って少ない。少なすぎると言っても決して過言では無いほどに。

ボクの万分の一も無い。いや、下手すると二万分の一以下かもしれない。

この寺で何年やってきたのか知らないし、この寺にどれくらいの信者がいるのか知らないけど。

こんなの少なすぎる。

「妖怪が祭られて神になったばかりみたいな感じの神力だね」

言った瞬間、自称毘沙門様がギクリと、口にした。

いや、普通口に出して言う？それを？

「もう一回だけ聞くけど……これ誰？」

今度は神力（偽）の威圧付きで尋ねる。偽だけど、それでもボクの莫大な量の神力なら十分威圧になる。

冷や汗を流す二人を見ると、ナズーリンが溜息を吐いて、毘沙門様（自称）を見た。

「ご主人、やっぱり誤魔化せないようだよ」

「そ、そうです、ね、ね」

ビビリ過ぎだろ、この自称毘沙門天。

「てことはやっぱり、そっちの子は毘沙門様じゃないんだね」

「……えっと、はい。私、寅丸星と言いまして」

言いかけたまま、ナズーリンを見、ナズーリンがそれを引き継ぐように話し始める。

「ご主人は毘沙門天様の弟子だ」

ナズーリンの話によると、星は元はここの山に住んでいた妖怪なんだけど、毘沙門天を信仰する白蓮から、多忙のため寺に来られない毘沙門天の代わりに信仰を集められるように『毘沙門天の代理』になるよう山で最も人格者の妖怪として推薦されたらしい。白蓮が妖怪の毘沙門天代理を立てようとしたのは、毘沙門天にいつか退治されるのではと怯えていた山の妖怪たちを安心させる意味もあって、毘沙門天は黙認する形で星を弟子にし、念のために監視役としてナズーリンを付けた。という話らしい。

「プ、アハハハハハ！！！人格者！？この恐がりな自称毘沙門天様（偽）が、人格者……アハハハハ！！」

思いっきり笑ったら、頬を膨らませた星に殴られた。まあ例え全力で神力を込められても、痛くも無いけどね。

ちなみに、ナズーリンはうんうん、と納得顔をして、星に耳を引っ張られていた。

「だというのに、ご主人と来たら、何もないところでこけるは、大事な宝塔を失くすは、写経中に居眠りするは、宝塔を失くすは……こちらの身にもなってほしいよ、まったく」

……

「なななな、ナズーリン。そそ、そそれは、秘密だと。いや、この間のことだけは絶対に言っては」

「この間何かあったの？」
「いえ、何もありません。決して、寺の妖怪に脅かされて腰を抜かしたなんてことはありません……っあ」
「ご主人、君はもう黙っていたほうがいいと思うよ」
「アハハハハハハハハ！！！！」
笑った。とにかく笑った。ホント、こんなに笑ったのは久しぶりだってくらいに笑った。

結局、何がしたかったのか、よく分からないまま、混沌とした時間は過ぎ、昼前になったので、お暇することにした。
「じゃあ、お世話になったね」
「こちらこそ、貴重なお話を聞かせていただきありがとうございました」
てな会話が別れ際にあって、そのまま解散。ボクはまた充ての無い旅路へとついた。

その一月後。

風の噂で聞いた話しによると、白蓮は人の手で封印されたらしい。

「まあ、仕様が無いよね」

白蓮は妖怪に目を向けていたけど、人の心にまでは目を向けていなかった。

その視野の狭さが若さを感じさせるねえ。

「まあ、封印ならまた会えるでしょ。だから」

いつか、また、ね？

我武者羅にやっても無駄なのは分かっている。

けれど、どれほど考えても、結果が出ないことに苛立つ。

どうすればいい？

どうすれば……どうすれば……

魔法使いというものに出会う。

魔法という存在を知る。

縋るわけではない。

けれど。

新たな可能性としては、知っておいて損は無い。

待ってて。

必ず……

四十九話　嘘吐き襲来！？いや、悪夢だったか。毘沙門天！？いえ、ドジッ娘です。

段々だけど、最後の書くのが思いつかなくなってきた。

まあ、聖編は終りということで、最後くらいは書いたけど。

結局船長出せなかったな。

たまたま出払っていたことにしておいてください。

時々思うけど、毎回大体決まったパターンで終わってる気がする。

気のせいかな？

五十話　さくらさくら。森山直太朗さんの歌じゃありませんよ？　（前書き）

待たせた皆の衆！！！
昨日始めた東方人形劇だが、今朝十一時頃殿堂入りしたぞ！！
けれど、設定ミスってて、レポートが書けず、また最初から始めることになってしまったあああああああ！！！！
五時間かけて、バッジ８個取った。後はレベル上げて明日には再び殿堂入りだ！！！！

とかやってたら、今日更新するという話忘れてて、慌てて書いた三十分ほどの即席話なので、２５００字未満です。ごめんなさい。まあ、西行寺の導入話だと思って諦めてくれっせい～（↑ください）。

五十話　さくらさくら。森山直太朗さんの歌じゃありませんよ？

「ねえ」

ようやく明かされた心の内に、その最後の答え合わせに、ボクは問う。

「キミは……どれくらい死んでしまいたい？」

その疑問に、彼女はやつれた青い顔で、桜を見上げながら、今すぐにでも、と答えた。

どれくらいという言葉に、どんな返答が正しいのか、ボク自身にも分からないが、それでも、その答えが最悪だということぐらいは分かった。

けれど、それは分かっていたこと。だから、ボクの心に波は立たない。

「じゃあさ……」

だから、本当はこっちが重要。

本当に聞きたかったことは、そこに詰まっていた。

「キミは……どれくらい生きていたい？」

彼女の表情が初めて驚愕に染まった。

一緒に来て欲しい。そう言われたのは突然のことだった。

変わり映えしない旅道中、限界すら感じてきた今日この頃。

そんなある日、突然目の前に紫のスキマが開いた。

「何かあった？」

その言葉に、彼女は返答に詰まる。隠すのではなく、考え込む素

振りは、彼女としては非情に珍しかった。

「お願いがあるのよ」

お願い、というのもまた不思議な言葉だ。特に紫の口から出てくることが。いつもなら頼み、というところだろう。

それをお願い、と言ったからには。

「幻想郷に携わることじゃなく、キミの個人的な用件ってことかな？」

「理解が早くて助かるわ……」

それだけ呟き、また考え込む紫を見て、非情に面倒事の予感がした。

面倒事はゴメンなんだけど……ねえ？

けれど、断る気にもなれない。紫がここまで真剣に悩ませるほどの用件なのだから。気になると言えば気になるし、手を貸せるなら貸してやりたいと思う程度には、ボクは人情的だ。

「私の友人に会って欲しいの」

……え？

世界が止まる。

ボクの中の時間が凍る。

……。

……。

数秒後。

「っは！？あまりのことに思考を放棄してたよ」

「私に友人がいるのが、そんなにおかしいかしら？」

「……いや、ボクなら絶対にゴメンだな、と」

笑顔できっぱり言うと、紫の口が引き攣っていた。

「言ってくれるわね……」

「キミの友人って言うのは、アレ？やっぱり腹黒い人？孔明？」

「時代も地理も違うわよ。というか、やっぱりって何よ？人を何だと思ってるのかしら？」

「ＢＢ……じゃなかった。胡散臭いスキマ妖怪」

「誰が胡散臭いのよ……それと前半なんて言おうとしたのかしら？」

「だから、キミの笑みは胡散臭いだって。みんな言ってるよ？鬼とか、天狗とか、河童とか」

「待ちなさい、会ったことも無い河童がどうしてそんなこと言っているのかしら！？」

「知らないよ。きっとどこかで見てたんだよ」

「そんなわけないでしょ。あの山の連中が……」

「いや、でも……」

あれ？何の話してたんだっけ？

「いや、だから……って、違うわよ、どうして話が変わってるいるのよ！？だから、私の友人に会って欲しいという話よ！！」

「なんで？」

「自分の能力の影響で、引き篭もった生活を強いられているから、ちょっとした清涼剤にでもなればと……あ」

「なるほど。そういうことね」

「もしかして、さっきまでの会話はわざとなのかしら？」
「え？何のこと……？」
この狸、とか言ってる紫は放っておいて、一人考える。
一億歩譲って紫に友人が出来たという話が本当だとする。
その友人は、自身の能力の影響で、家から出れない生活を余儀なくされている。
閉鎖した世界にいる友人のために、一服の清涼剤を、ということで、ボク？
……なぜボク？
紫が友人だという時点で、妖怪を連れて行ってもいいはず、だったら鬼でも連れて行けばいい。鬼は喧嘩好きを除いてしまえば、割合気の良い連中だ。四天王以上はかなりの長生きだし、世界を知っている。それこそ一日中呑んでいるだけの連中だし、暇と言えば暇だろう。
でも今ここにいない。今から行くのだとすれば、ここにいないということは、連れてきていないということ。
鬼はダメでボクは良い理由は何だろう？
気になったのは、能力の影響で家に閉じこもっているという部分。
例えばどんな能力なら、そんなことになるだろう？
考えるに、一つ思い浮かんだのが、制御できていない力。

そう……例えば……過去の、縁のような。

それも物理的なものではなく、精神的なものだったりすればどうだろう。

鬼は物理的な衝撃にはとことん強くできている。ボクが全力で戦ってもちょっとやそっとでは死なないのも、そのお陰だ。

つまり、炎が飛んで来ようが、槍が飛んで来ようが、鬼ならそう心配するような事態にはなったりしない。

だから、もし能力のせいで、連れて行く者を選別しているなら、何らかの精神に作用するような能力。

ボクなら反射で多分なんとかなるだろうから、大丈夫……か？

「……う？……梗、聞いてるのかしら？」

ふと、紫が声をかけて来て、意識が現実を向く。

「ゴメン、考え事してた、それと紫、行くのはいいんだけど、先に一つだけ教えて」

ボクの細めた目を見た紫が微かな警戒を見せる。

やっぱり、何かありそうだね。

その反応に確信を得ながら、ボクは聞く。

「その友人の能力って何？」

紡いだ言葉に、紫の警戒心が跳ね上がる。

「……何か言わないと、困るのかしら？」

「何か言ったら、困るのかな？」

即答すると、紫が諦観したように溜息をつく。

「そうね、こちらから誘ったのだから、先に教えておくのが礼儀よね」

ぶつぶつと一人呟き、そしてボクを見て言い放った。

「私の友人の能力はね……死に誘う程度の能力よ」

五十話　さくらさくら。森山直太朗さんの歌じゃありませんよ？（後書き）

ゆゆ様まだ出てきません。次では出てきますので。

最近になっての話、それこそここ二、三話の話ですが、少し文章の書き方を変えてみました。
気に入ってもらえれば嬉しいのですが。

お知らせ。
東方人形劇嵌ってるので、また更新滞りそうです。
三日に一話以上は書けるように頑張りますので、ご了承ください。

最初の殿堂入り時点で咲夜さん７１って上がり過ぎだろｗｗ
目指せ紅魔館ＰＴ。おぜうと妹様を探すのだ！！

五十一話　ボクと彼女と月夜と桜と。笑い、咽い、そして嗤う世界の影で。（前

タイトルが意味不明すぎる。当てはまりそうな言葉適当につけて言ったら、わけの分からんことになってしまった。

皆まで言うな。今回ばかりは、作者も困って入るんだ。
というわけで、お待たせしました。最新話ですがな。

今日も今日とてまったく浮かばなかったんですが、それでも書き始めたらまあ、作者の想像とは斜め八十度な方向に飛んでいって、わけの分からない話になってしまった。

かなり読みづらいかもしれませんが、要望あれば、例のごとく解説を出しましょう。

五十一話　ボクと彼女と月夜と桜と。笑い、哂い、そして嗤う世界の影で。

「こんにちは」

「……だれ？」

「ボク？ボクはね、水無月梗っていうんだよ。キミは？」

「……西行寺幽々子……」

「そう、なら、初めまして。幽々子ちゃん」

「……初めまして」

「……キミが紫の友達？」

「……（こくり）」

「そっか……」

「……あなたは？」

「ボク？そうだね、友達、なのかな？本人には言え無いけどね、恥ずかしいし」

「……そう……」

ざり

一歩踏み出すと地面の砂が音を鳴らす。

ざり

また一歩踏み出す。

「それで……この蝶がキミの能力？」

「……」

無言の肯定。それと、どこか排他的な目つきが、暗に近づくなという意思を示す。

けれど。

ざり

その意思をも無視して、さらに一歩近づく。

視界に舞う蝶を軽く掃い、祓い、そしてさらに一歩。

ぞわっ

背筋が凍ったような感覚に、無意識的に笑みが引き攣る。

それでも。

ざり

さらに。

ざり

進んで行く。

そして。

「じゃあ、改めまして、初めまして。水無月梗だよ」

少女の傍に立ち、そしてそう言い放った。

なんでこんなに気にしてるんだろう？

自分でもよく分からない感情が渦巻く。

自分の心は、世界で一番分からないものだと、誰かが言っていた気がする。

至言だと思った。だって、自分が理解できてしまったのなら、自分はただの既知と成り下がってしまうのだから。

つまりそれは、自分の感情の動き方を知る、感情を支配してしまえるということ。

それは、生きてるって言うのだろうか？

遠まわしになったけど、結局思うことは何も変わったりもしない。

ボクは、どうしてこんなにも彼女が気になっているのだろう？

ねえ、教えてよ……縁。

わざわざ紫を後から来させてまで行った挨拶だったのだけれど。

その後、西行寺幽々子という名の彼女と、特に何があったわけでも無い。

ただ、やって来た紫と三人で他愛も無い話をしただけだった。

だから、これはきっと気の迷いなんだろう。

密かにつけておいた目印を頼りに、彼女の家に夜中にやってくる

なんて。

「……あら？こんな夜にお客さんかしら？」

ざり、という砂利を踏む音と共にかけられた声に、振り返る。

「……泥棒かもしれないよ？」

なんでも無いように答えた反面、心の内は何故か騒がしかった。

「随分可愛らしい泥棒さんがいたものね」

「……キミも十分可愛いよ？」

「あら、褒められたわ。ありがとう」

きゃらきゃらと笑う彼女に、ふと疑問が沸いて出る。

「朝に会った時と性格が違うね」

「そうかもしれないわね。けれど、私は私よ？」

ふふ、と微笑む彼女を見た瞬間、どくんと心臓が跳ねる。

「……キミは誰？」

吐いて出た言葉はそんな疑問で。

「ふふ……初めまして。私が西行寺幽々子よ」

ツキアカリに照らされた桜の下で、彼女はそう言って笑った。

分からなくたって。

知らなくたって。

ただ、目の前だけを見ていればいい。

あの時もボクは、そう思ってた。

ボクに見せるその笑顔の意味も。

独り夜に見せるその涙の訳も。

ただ、時間が消し去ってくれると、本気でそんなことを思ってい

たんだ。

まったく。

どうしようも無いバカだったんだ。

まったく。

そんなわけ、ないのにね。

「どうしてキミは笑うの？」

「この狂喜しそうな偶然に出会ったからよ」

「どうしてキミは哂うの？」

「終りを迎える夢を見たからよ」

「どうしてキミは嗤うの？」

「そこにようやく得られる安らぎがあるからよ」

ザッと、風が吹き、庭に生えた桜が枝を揺らす。

ひらひらと、一枚、また一枚と落ちゆく桜を花びらの包まれ、彼女はただ笑っていた。

「大きな桜だね」

特に意味も無い、そんな言葉に、彼女は子供のような笑みを見せる。

「そうよねえ。それに、綺麗でしょ？この西行妖は」

「西行妖？」

「ええ、遥か昔より生きる、妖怪桜よ」

そう言われ、改めて桜を見上げる。

「桜の木の下には死体が埋まっている。そんな言葉、どこかで聞いた気がするよ」

多分、縁の知識だけど。桜を見ていると、ふと思い出した言葉だ

った。

「埋まっているわよ。桜に導かれ、そして死に誘われた者たちの亡骸が」

「おお、恐い恐い」

おどけてみせると、彼女はまたクスリと笑う。

「あなたは平気なのね、紫が連れてくるだけはあるわね」

「うん、実はこの瞬間も、死にたくてたまらないんだよ」

そんな言葉に、また彼女は笑って。

嘘吐き。

そう返した。

「ねえ、運命ってあると思うかしら？」

唐突に、彼女がそんなことを言い出したので、ボクは目を丸くして答えた。

「そんなもの、無いと思うよ」

「あら？どうしてかしら？」

「だって、世界が動かすのは、全知全能の神でも、ましてや運命なんてものでもなく、そこに存在するモノたちだからだよ。だったら、筋書きの決まった道なんて、あるわけが無いさ」

十人十色ってね。そんな呟きすら、彼女は楽しそうに笑っていた。

「私はね、あると思うわ、運命」

だって、と続けて。

「今この瞬間、この場所で私たちが会ったのは、運命だとは思わない？」

「……さて？どうだろうね？」

さっき、否定したはずの答えを、今度は濁す。その違いにすぐに気づいた彼女がふふ、と笑う。

「死に誘う程度の能力、だっけ？キミの力は」

「ええ、そうね。みんな、勝手にやってきて、この桜の下で死んでしまうわ」

「なるほどね。キミとこの桜は繋がりがあるわけだ」

彼女の能力は、この桜を通して発せられているのか、はたまた、この桜の力が彼女に通ってしまったのか。

「鶏が先か、タマゴが先か」

「何かしら、それ？」

「……いや、気にしなくていいよ」

会話を打ち切るように言ったボクの意図を知ってか知らずか、ふと桜の下まで歩き、そしてそれを背にしてボクのほうを向く。

「みんな誘われていくのよ、この桜の下（もと）へと」

「差し詰め、ボクと紫も誘われた哀れな生贄ってことかな？」

「ふふ、この桜は何も求めないわ、ただそこに咲いているだけ。周りの人たちが、その美しさに魅入られて死んでしまうのよ」

「それはそれは、罪な美しさだね」

「ええ、そうねえ。まさに罪な美しさだわ。けれど、背徳的なその姿が、何よりも美しいのよ」

「そして、その美しさに一番魅入られているのは……キミなんだね」

ピタリと、彼女は桜を見上げたまま、数瞬固まり、すぐに動き出し、ボクを見る。

「ええ……そうね。私が一番、この桜に魅入っているのよ」

そう言って再び桜を見上げ、魅せる彼女の笑みは。

どうしてか。

ひどく、儚かった。

五十一話　ボクと彼女と月夜と桜と。笑い、哂い、そして嗤う世界の影で。（後

うーむ、何でこんな話になったんだろう？

結末は決まってるのに、その道中が思いつかなかったから、無理矢理書いたら暴走してしまって、こんな話に。

まあ、これはこれで次に繋げやすいからいいのだが。

では、座して次を待て。

五十二話　キミの答え。ボクの答え。彼女の答え。そして。（前書き）

注意！！
今回の話は、都合の良い解釈と曲解された設定による、独自展開となっています。そういうのが嫌な方はご遠慮ください。
いつもそんな感じですが、今回特に酷いので、先に注意しておきます。

それと、設定矛盾してない？というメッセがあったのですが、次にそういうのを送る方はどこが矛盾しているか教えてくれるとありがたいです。設定として、わざと矛盾させている場面と素で間違えているだけの時があるので。

五十二話　キミの答え。ボクの答え。彼女の答え。そして。

ひらひらと舞う桜の花弁。

けれども、そこにあるのはゆらゆらと揺れる彼女の姿。

「最初から、そうするつもりだったの？」

ボクのその言葉に、彼女は優しく微笑む。

「ええ。そうよ……言ったでしょ。今日会ったのは運命だって」

「死んでしまいたい」

そう、彼女が呟く。さきほどまでとは打って変わって、朝と同じようなぼんやりとした、まさしく死んだような目で。

「どうして？」

理解できないその感情を、ボクは問う。

ボクは死にたいと思ったことは無い。縁が生きろと言ったのだから。だから……。

「これ以上、生きている意味が分からないからよ」

「……そう」

それは、随分と辛いかもしれない、そう思った。

「生に執着するだけの理由は、本当に無いの？」

「ないわ」

まさしく、即答だった。それだけに、彼女の心理が相当追い詰められていることも分かった。

「生きていて楽しいことは無い？」

「この桜を見ることだけかしらね」

「生きることは辛い？」

「空虚すら通り越した日々に、今更何も感じないわ」

深い泥沼のようだと思った。何を問うても、底なしに落ちていくだけ、何も浮かばない、そんな想像（イメージ）。

波紋すら立たない、その心に、それでも一石を投じる。

「紫は？友人なんでしょ？」
「……」
返す言葉は無かった。ただじっと、虚ろな目で何かを考えていた。
「……そうね……紫は……」
何か、変化があった。それが本当に些細な波だとしても。確かに心は揺れた。
「紫と過ごした日々も、つまらないものだった？」
「……」
そして首を振る。否定の意に、少しだけ安心もする。まだ心は死んでいないのだと。
「……ねえ、あなたは人間？」
話を打ち切り、唐突に切り返された質疑に、一瞬戸惑うが、すぐに首を振って否定すると、彼女はそう、と呟いた。
「人間じゃないとダメだった？」
そう尋ねると、彼女はまた首を振った。
「ただ……羨ましいと、そう思うだけよ」
「……？……羨ましい……？」

「人という枠はどこまでも狭いわ。人間はどこまでも集団でしか生きられない。必然的に行動に枠が出来る。けれど、それに比べて妖怪はどこまでも孤高に、自由であり続けることができる。私は、それが羨ましい」

さすがに、驚いた。死にそうな顔の下でそんなことを考えていたのか、と。

だから、少しばかり疑問が沸いてくる。

「聞いていい？」

「ええ……何かしら？」

「キミはさ。自分の能力が嫌いなの？それとも別に何とも思ってないの？」

どっぷり五分は黙ったまま、彼女はじっと桜を見上げていた。

そして、ようやく口を開く。

「嫌いよ……大嫌い……」

だからと言って、どうすることもできない。だから、彼女はここ

まで磨耗してしまったのだろう。

その答えを持って。

ようやく、というか。早くもというか。

彼女が見えてきた。

「ねえ」

ようやく明かされた心の内に、その最後の答え合わせに、ボクは問う。

「キミは……どれくらい死んでしまいたい？」

その疑問に、彼女はやつれた青い顔で、桜を見上げながら、今すぐにでも、と答えた。

どれくらいという言葉に、どんな返答が正しいのか、ボク自身にも分からないが、それでも、その答えが最悪だということぐらいは分かった。

けれど、それは分かっていたこと。だから、ボクの心に波は立たない。

「じゃあさ……」

だから、本当はこっちが重要。

本当に聞きたかったことは、そこに詰まっていた。

「キミは……どれくらい生きていたい？」

彼女の表情が初めて驚愕に染まった。

「おかしなことを言うのね」

けれど、すぐに表情を戻し、彼女はそう言う。

「死にたいと言った人間に、生きたいか、そんなことを聞くの？」

くすり、と彼女の表情にまた笑みが出てきた。

「何かおかしい？」

「だって、そんな矛盾したことを聞くのはおかしいじゃないの」

「生きることと死ぬことは矛盾しないよ。少なくともボクの中ではね」

キミの中では、矛盾するのかな？

「当たり前でしょ」

「へえ、じゃあ」

今、キミは生きてるの？

「……」

当たり前でしょ、という言葉は無かった。

「ボクの想像を一つ言っていいかな？」

「……ええ、どうぞ」

「西行寺幽々子という人間について、考察した、ボクなりの答えだよ。まず最初に、キミが抱いているそれは罪悪感だ」

ピクリ、と彼女の肩が震える。

「キミは死にたがっている。これは本当のことだと思う。キミは耐えれなかったんだ、桜に惹かれ、死んでいく人間が後を絶たないことに。ならば今までどうして生きていたのか、これもきっと、桜があったから。桜の美しさに魅入ってしまっていたことが、キミにとっての生きる理由だった。両者を天秤にかけて、ちょうど釣り合ってしまっていた。だから割り切ることもできず、生きることに対する嫌悪感だけを引き摺って、現状を維持していた」

けれど、と繋げる。

「ここから完全にボクの予想だけど、キミはそれを考えるほどの余裕が無かった。ギリギリを生きていたからこそ、余計なことを考えることも無かった」

そして。

「でも、今のキミはそのことに考え持ち、そして自身の今を否定している。何故？」

それは。

「紫の存在だとボクは想像する。紫という友人が出来たことで、天秤は生に傾いた。だから生きる余裕が出来た。生命活動以外の余白が出来てしまった……そしてキミは気づいた。自身が生きたいと願っていることに」

自身の力で何人も殺しておいて。それでも自身の生を願う少女。

「そのことに気づいてしまったから、だからキミは死を渇望した。

生を望む自分自身をどう思ったのかは知らない、けれど、少なくとも良くは思えなかった。だからこそ……」

「ええ……生きてはいけないと思った。今まで他人を殺し続け、けれど自分は生きようと足掻く。自身のその姿があまりにも醜く、滑稽にすら思えたわ」

彼女の口から、補足までもらい。そして答えがあっていると同時に、自身の思いに一つ気づく。

そっか。何でこんなにも彼女のこと放っておけないのかな、って思ってたら……縁に似てるのか。

自身の手で自身の全てを消し去ってしまった縁。

そしてその罪悪感と、絶望でボクに自身の死を望んだ縁。

分からなくたって。

知らなくたって。

ただ、目の前だけを見ていればいい。

あの時もボクは、そう思ってた。

ボクに見せるその笑顔の意味も。

独り夜に見せるその涙の訳も。

ただ、時間が消し去ってくれると、本気でそんなことを思っていたんだ。

まったく。

どうしようも無いバカだったんだ。

まったく。

そんなわけ、ないのにね。

今際の際に、縁は言った。

梗……キミが自分で決めたことだけは……絶対に守って。でないときっと、後悔するから。

そしてボクは一度後悔した。心の底から。魂に届くほどに。

だから、もう後悔だけはしないように。

今は、ボクのしたいことを押し通させてもらうよ。

けれど。そう続けることを忘れない。だって、まだボクの答えは終わっていないのだから。

「ボクが考え付く予想なら、紫だって出来たかもしれない。でも紫は今のキミを曲解してしまっているから、このことに気づいていない」

理論的な考え方をするほど、西行寺幽々子という人間を曲解してしまう。理屈でなく、感情でものを考える人間のほうが、まだ幾分か彼女を理解できるだろう。

「キミはね、理論的に考えると矛盾し、破綻してる。キミの生きたい理由と死にたい理由は、どちらも言ってしまえば、桜が存在する

から発生する」

西行寺幽々子という人間は常に矛盾を孕んでいる。そのことを念頭において考えないと、彼女という人間を理解することはできない。けれど、物事を理論的に考える人間ほどそれができない。だから紫では今の彼女を理解できていないのだ。

「けれど、キミの中でそれは矛盾しない。他人から見れば不可思議極まり無くてもね。ボク自身よく分からない感覚だ」

だから、これは、キミのためだけの答え（ヒント）だ。

「さっきボクは言ったよ。生きることと死ぬことは矛盾しないと。その意味をキミが分かったのなら、キミはその罪悪感から解き放たれる」

それが、ボクの答え。彼女を知り、彼女を想像し、彼女を思った末の答え。

だから、さあ。

早く、この夢を終わらせよう。

五十二話　キミの答え。ボクの答え。彼女の答え。そして。（後書き）

暇つぶしに昨日から始めた東方人形劇『幻想』だが。今日レッドを倒してしまった。Ｅマリサ一人で大半は倒せるな。Ｅレイム以外は余裕。

つうか、０のしまが酷すぎる。なんできんのたまが１０個セットでその辺に落ちてるんだよ……。ポイントマックス１０個セットも落ちてるし。

そしてシロガネ山ェ。なんで途中から出てくるやつ全員レベル１００なんだよ！！！テメエら野生のポケモンだろ！？とか思う。

そしてなんで人形劇にホウオウがいる！？しかも技が一つも無いし。

コガネシティの地下はツッコミドコロが満載だ。

というか、おんがくきょうしつの存在する意味が分からん。

五十三話　サクラサクラ。それは舞い散る桜のように。（前書き）

一言言わせてくれ。

やってられっかーーーーー！！！！

最近ちょっと更新が面倒になってきた。いや、それでも書くんだが。うーむ、予め話を決めて書くと、設定は矛盾しないけど、書いててあんまり楽しくないんだよなあ。

ていうか、タイトルやべーよ。色々アウトな気がするよ。いや、でも以前もすきま桜と～って書いたし、いいかな？いいよな？うん、おっけ。

五十三話　サクラサクラ。それは舞い散る桜のように。

そのままでいられたなら。

何も考えず、ただ日々を漫然と生きていられたなら。

知ることも、聞くことも、見ることも、そして、識ることもなければ。

それは、それで。一つの幸せの形だったのかもしれない。

「以上がボクの答え、キミを見て、キミを知って、キミを思った末の、回答（こたえ）だ」

「そう……」

けれど彼女は少しも嬉しそうな顔はしない。寧ろ、余計に追い詰められたような顔をしていた。

それから長い沈黙が続く。

そして、ふと桜を見上げ、気づく。

この桜、さっきより……

とその時。

「知りたくなかったわ」

長い沈黙を破り、彼女がそう呟く。

ザッ、という音と共に、西行妖という名の、巨大な桜が枝を揺らす。

「……まさか、この桜」

「気づいたの？思ったよりずっと早かったわね」

けれど、もう遅い。

ギリッと歯を鳴らす。爪が食い込むほどに拳を握りしめる。

けれど、そんな些細なことは気にならない。

目の前のコレに比べれば。

ひらひらと舞う桜の花弁。

けれども、そこにあるのはゆらゆらと揺れる彼女の姿。

「最初から、そうするつもりだったの？」

ボクのその言葉に、彼女は優しく微笑む。

「ええ。そうよ……言ったでしょ。今日会ったのは運命だって」

桜に寄りかかり、彼女はそう言って笑う。

瞬間、視界を桜が覆いつくす。

「っく」

咄嗟に下がる。同時にここに来てから常時展開していた《反射》を全開に。

「本当に残念だわ。もっと早く知っていられれば……こんなことにはならなかったのでしょうね」

儚い笑みを浮かべながら、彼女はそうして桜に寄り添うにして立っていた。

「……さようなら、梗さん」

妖怪桜が妖しく光る。

それと同時に、周囲の空気が淀み、そして桜から発せられる圧倒的な妖気の威圧に、後ずさる。

溢れ出た死の気配に、庭に生えていた他の桜も、その他の庭木も何もかもが、急速に死んでいく。

それを視界の端で確認していながら、それでも目は西行妖から離すことは出来ない。

つまり、この桜は。

「つまり、今までずっと封じられてたってわけ……？この妖怪桜、封じられた状態であそこまで影響だしてたの？」

まさしく化け物だ。それも、自分とは比べられないほどの。

世界を塗り替えるほどの力。それはまさしく、どこぞの宗教の創

造の神の領域ではないだろうか。

いや、この桜にそこまでの力があるかどうかは知らない。けれど、死を体現するこの桜は、あらゆる生命にとって致命的な存在だ。しかも、圧倒的過ぎて、排除することも出来ないほどの。

ピシリ、と頭の奥で何かの音がする。

「今のは……《反射》の鏡にヒビでも入ったかな……？」

砕ける、つまり能力が押し負ければ、ボクですら死の気配に飲まれる。それほどに圧倒的かつ濃密な力だ。

「あまり悠長にもしていられない」

放っておけば、この死の気配はどこまで広がるか分からない。けど、ここで止めて置かないと大惨事になることは確実だ。

「自己投影《スキマ妖怪》」

発する音により、能力を想像（イメージ）。

自己投影は、読んで字のごとく自身に投影すること。つまり、ボクがかつて蛟を映したように、いつかには、鬼神を映したように、他の何かを自身に映す。

これにより、龍神としての能力《八卦を司る程度の能力》は使えなくなるが、代わりに、投影した存在の力を使うことができる。

今回の場合、八雲紫だ。つまり《境界を操る程度の能力》。

以前一度だけ映したことがあったんだけど。

「使い慣れてないとか、使用に当たっての計算が面倒とか、言ってられないね。この状況で世界を別つ能力ほど適したものは無いし」

膨大な計算の元、緻密に精密にやらないと上手く扱えない能力だと知り、今まで投げていたのだが、状況がそれを許してくれない。

選択肢は二つ、見捨てて逃げるか、ここで止めるか。けれど逃げても収まるとは限らないし、何よりも、ここで逃げ出すだなんて、そんな選択肢はボクには選べない。

焼き切れそうなくらいに、脳を回転させて膨大な式を編み出す。そして、手をかざし、念入りに範囲を設定。

「別れろ」

紫は軽々と使っているけど、とんでも無い。一回の使用で、全身がフラフラする。

けれど。

「とんでも無いね、この能力」

能力を併用して創り出した結界により、世界から切り離された妖怪桜。そして、結界の外にいるボクはその威圧から逃れ、ぺたりと座り込む。

「……どっと疲れた」

ほう、と息を吐き、また計算を始める。面倒なことになったし、餅は餅屋に任せよう。

「あなた……これ……」

紫が絶句する。最後の一回とばかりにスキマを開いて紫を呼び出すという、前代未聞な出来事をして、落ちてきた紫の第一声がそれだった。

「幽々子ちゃんは死にたがってた。そして、今日、それを実行に移そうとした。そして幽々子ちゃんが西行妖の下で何をしたのか知らない。けど、何かしたから桜が暴れだした、これが現状」

簡潔に述べると、紫は一旦目を閉じ、そして開く。

「どうして梗がこんな時間にこんなところにいるかは今はいいわ。それに、この結界をどうやって張ったのかとか、どうやってスキマにいた私を連れてきたとか、聞きたいことはたくさんあるのだけれど……今はこっちに集中することにするわ」

その目は、いつもとは違い、真剣そのものだった。

「ホント、キミの能力は便利だねえ」

ようやく軽口を叩けるようになったのは、まさに紫のお陰だった。紫が境界を操って、能力を影響を受けないようにしているからこそ、こうして結界の中で余裕を持てる。

「いたわ……」

けれど、そんな軽口もすぐに閉ざしてしまう。

妖怪桜の木の下で、満ち足りたような笑顔のまま事切れた幽々子ちゃんを見つけてしまったから。

五十三話　サクラサクラ。それは舞い散る桜のように。　（後書き）

本当は今回で西行寺編終りだったはずなんです。けど、途中から書くのがダルくなってきて、丁度いい感じに終わらせれそうなところだったので、次回に続くにしてしまった……。

あ、後、小説の感想じゃない感想は削除させてもらいました。
次からはできれば、活動報告のほうで語ってください。

ところで、今度は混沌パッチ充ててまた最初から始めてしまったよ。
咲夜、マリサときたから、今回はレイム選んで、途中から鬼巫女にしてしまった。
ツエーーーー！！！
最終ステがおかしすぎる。ていうか、そろそろ飽きてきたな。一旦やめて、別の遊びを始めるかなあ。

ちなみに、今回の小説の中で出てきたオリ設定。スキマについてです。
八雲紫が数字に強いのは東方文花帖の藍様の記述にあったので、それから思いついた設定。どこかで見たような気もするけど、きっと気のせいでしょ。多分ね。

五十四話　サクラチル、そして夢から覚める時。（前書き）

西行寺編完結……のはずだったんですがね。

何と今回を含め四話もやった西行寺編ですが。

魂魄妖忌が一度も出ていないのです！！！！

というわけで、後日談も含めた妖忌の出番を急遽予定しています。

というわけで、今回で西行寺編本編は終り、ということで。

五十四話　サクラチル、そして夢から覚める時。

幽々子ちゃんの死体を抱きしめて、紫は無言のまま震えていた。

「……言っちゃなんだけど、今この瞬間に感傷は許されないよ。時間が無い」

言いたくは無い。友人を亡くしてうち震えている紫に、こんなこと。

けれど、目の前の妖怪桜からは今も尚、どんどんどす黒い死の気配が溢れている。

この家に門番もいるらしいが、今この結界が壊れれば、その門番も死ぬことになる。

「分かってるわ。もう、大丈夫よ……」

幽々子ちゃんを抱きしめたまま、紫が立ち上がる。

そして、言い放つ。

幽々子の死体で、この桜を封印をしましょう。

紫のその言葉に、ボクは少し意外だと思った。

紫は、幽々子ちゃんを大切にしていると思っていたから。

けれど、それはボクの思っていた通りだったようで。

「この西行妖に縛られて成仏できなくしてしまえば、形は違えど、幽々子はまた生きることが出来るかもしれないわ」

形は違えど、というのがボクには良く分からない部分ではあったが、紫が幽々子ちゃんにもう一度生を与えようとしていることだけは分かった。

「それで、梗に一つお願いしたいのだけれど」

「分かった、ボクはどうすればいい？」

「私が封印の準備を整えたら、西行妖に損傷を負わられるかしら？」

この化け物桜に傷をつけろ……？

「そう……分かった」

それで何になるとは聞かない。紫の中ではきちんと予測が出来ているなら、それで良い。

やるだけやってみよう。指針も無くやってるよりはよっぽど分かりやすい。

自己投影《龍神》。

これによりまた《八卦を司る程度の能力》を使えるようになる。

そして《水槌》を発動。神力を練り込んで撃ち出す。

けれど。

「傷どころか、触れることすら出来ない……か」

桜を包む不可視の結界により、西行妖には水滴の一つもつかない。

神力を付加した《水槌》でダメとなると、この桜に傷をつけることができる攻撃なんて、無間地獄でも引っ張り出すしか思いつかないが、例のごとくで却下過ぎる。

それに、同じ死の力をにおわせるあの力ではこの桜の結界を突破できないかもしれない。

「さて、どうするか……」

紫は封印の準備を始めている、ボクが事を成し遂げることを信じて。

「だったら、その期待には答えないとね……」

どの道、この桜は放置できないんだ。

思考する、深く深く。

自身が持つ力でこの桜に傷をつけることができる力を探す。

八卦は乾・坤・震・巽・坎・離・艮・兌の八つで構成され、それぞれが天地雷風水火山沢を象徴する。

その中であれを突破できそうなのは二つ。

「火か雷……かな？」

力の強大さではなく、相生の関係にある火か、同じ木行の雷。同じ木行でも風は破壊には向かない。

どちらかならあの桜を損壊させることができるか？

「どうにもイメージ沸かないなあ」

どちらもあの桜の妖力に対抗できるとは思えない。後一歩足りないと言ったところか。

ではどうするか……？

紫のほうを見ると、封印の準備とかいうのはもう終わりかけているようで、何度かこちらを確認している。

「……そっか。何も別個に考える必要は無いのか」

三矢の教えというのが、今からすれば未来、縁の時代からすれば過去の日本である。一つで折れる矢なら、二つ重ねる、二つで折れる矢なら三つ重ねる。

「重ねる。そっか、出来なくも無い」

口の端が釣りあがる。これなら行ける。あの桜の結界を打ち破って尚、あの桜を燃やし尽くすほどの力を出せる。

紫のほうを見ると、向こうも準備を終えたらしく、互いに一つ頷く。

「いくよ！！！」

風で強化した火行の雷。名づけるならば《紅雷（くらい）》。

轟音と共に真紅の雷が降り注ぎ、そして桜とぶつかり合う。

せめぎ合い、桜を守る結界がギチギチと音を立てる。

「ぶち抜け！！！」

言葉と共に、結界が破壊され、雷が桜本体を燃やす。が、すぐにそれも消えて、西行妖が自身の修復を始める。

それと同時に急速に弱まる死の気配を感じ取った紫が何かを呟くと、桜の発光が弱まる。

それを確認すると、幽々子ちゃんの死体を桜に横たわらせる。

「……」

また何か呟いた。瞬間。

バッ、と風が一瞬吹いたかと思うと。

西行妖についていたその全ての花びらが舞い落ちる。

「……綺麗だねえ……幽々子ちゃんにも見せてあげたいよ」

戯言を呟きながら見ると、桜に横たわっていたはずの幽々子ちゃんの死体が消えていた。

そして。

「あら？呼んだかしら？」

目の前に、ふわふわと浮かぶ、幽々子ちゃんの姿があった。

「どういうこと？」

説明プリーズ。

「後で教えるわ」

それだけ言って、紫は幽々子ちゃんに向き合う。

「初めまして、八雲紫ですわ」

そう言って、礼をした。

初めまして……？

そんなボクの疑問を無視するように、幽々子ちゃんもきゃらきゃら笑いながら。

「ええ、初めまして。西行寺幽々子よ」

そう言った。それから、続けて。

「それで？そっちの人は？」

とボクに聞いてきたので。

「初めまして、かな？ボクは水無月梗だよ」

事態がよく分からなかったが、紫と幽々子ちゃんの言葉から、こういうのが正しいのだと判断した。

後から聞いた話だけど、紫は西行妖に幽々子ちゃんの死体を媒介に封印を施した。結果的に桜に縛られて成仏できなくなった幽々子ちゃんは亡霊になって出てきた。亡霊になるときに、記憶を失くすことは珍しくも無いらしく、紫は予めその可能性も分かっていた。

ということらしいけど。ボクには正直サッパリな話だ。

っていうか、桜に縛られるって、地縛霊って言うんじゃないだろうか？

まあいいけど。

結局、何がどうなったのか、当事者であるボクにも理解しきれな

いまま。

長い夜は終りを迎えた。

五十四話　サクラチル、そして夢から覚める時。（後書き）

・簡易技解説
《紅雷（くらい）》
火行の雷という、不思議な性質を持つ雷。
それをさらに、風の属性を足すことにより、相生により火行を強くし、比和によって雷を強化する。
結果的に、「震」「巽」「離」の三種を混成の最強の一撃が出来上がる。一点突破力なら、水槌のざっと十倍くらいの威力を誇る。
妖怪の山に落としたら、山が半分抉れるくらい。全力でやると、そのまま地底深くまで抉れるくらいの威力だと覚えておくとオッケー。

今だから明かそう。梗くんの龍神の時の姿は、ＭＨの祖龍と嵐龍を足したような姿だ。全身白い東洋龍イメージすると、ちょうどミラルーツがけっこう似ていることに気づいた。そこに最近やったアマツを足すと、あら不思議、龍神白霊の完成。大きさは違い過ぎますけどね。
そのことに気づいた時、梗くんの最強技は必然的に決定してしまった。あれですよ、ルーツの紅い雷。で、考え付いたのが《紅雷》です。
パクリいうな。ちゃんと今回でそこに至る説明を書いたし、見た目が多少似ているだけだ。インスパイアなんだ。リスペクトなんだ。

ところで、一つ聞きたいですが。
神無月に起こる出雲での神様の集会に梗くんが呼ばれる話を思いついたのですが、見てみたいですか?見たくないなら、そのまま次に

行くんですが。
出来れば意見欲しいです。

五十五話　そう言えばあの人出てきてなかったよねえ。な後日談かなあ？（前書

タイトル色々と酷い。
ていうか、新作出そうかな……でもまだ一つも完結してないんだよな。
ああ、悩ましい。

モンハンで狩人祭だからインしなければ為らないというのに。
毎日小説書いてる気がする。どんな暇人だ、自分は。

五十五話　そう言えばあの人出てきてなかったよねえ。な後日談かなあ？

ジャパニーズ土下座。

膝をつき、手をつき、頭を下げる。

極度に尊崇高貴な対象に恭倹の意を示したり、深い謝罪や請願の意を表す場合に行われる。

簡単に言うと、偉い人を敬う気持ちを示したり、ごめんなさいと謝るときに行われる。

この場合、どっちだろうね？

目の前にいる幽々子ちゃんという主への礼か。

幽々子ちゃんを助けた（？）紫への礼か。

まあ、少なくとも、ボクへの感謝はなさそうだけど。

「申し訳ありませんでした」

それは誰に言った言葉なのか。

事の始めはちょっと前に遡る。

それは西行妖の封印が済んだ朝のこと。

「ここで気絶してるこの人誰？」

幽々子ちゃんの屋敷の玄関で倒れている帯刀した少年を見て、ボクが紫に尋ねる。

「魂魄妖忌。この屋敷の庭師兼門番と言ったところかしら」

「あら、そうなの？」

名前以外、何も覚えてない幽々子ちゃんだから、当然自分の家のことも覚えていないようで、自分の家の従者を初めて見た、という表情で見る。

「とりあえず、このまま玄関に置いておくわけにもいかないかな？」

というわけで、少年を背負い、屋敷を移動。そして適当な部屋に寝かせる。

「ところでさ、さっきから気になってたんだけど、この白いふわふ

わしたの何？人魂？」
　少年の周囲をふわふわと浮く白い物体を指差し尋ねると、紫はおしいわね、と言って説明する。
「それは半霊よ。魂魄の家系は代々半人半霊なのよ」
　半人半霊……ようするに。
「人間と幽霊で子供なんて出来るの？」
「出来たんでしょうね。こうしてここにいるのだから」
　へえ、と驚く。
　まあ、そんなことを話していると。
「う……ぅ……」
　少年の目が開く。そして、ボク、紫と見回し、最後に幽々子ちゃんを見て。
「幽々子様！！！？」
　飛び起きた。
「あら、初めまして」
　自分の名前が呼ばれたので、挨拶する幽々子ちゃんに。
「え…あの…はじめ…まして？え？あ、えっと……幽々子様？何か薄くなってる気が……？」
　何が何だか分からずしどろもどろな少年だった。
　うーん、ちょっと状況説明しないとダメかもね。

紫に目で合図すると、紫もそうねえ、と言わんばかりに頷く。

「はい、ちょっと従者さんはこっちね。幽々子ちゃんはちょっと待ってて。ほら、紫行くよ」

「あら、私は仲間外れ？寂しいわね」

くすくすと微笑む幽々子ちゃんを放置して、紫と少年の三人で隣の部屋に移る。障子作りの和風の部屋ってこういう時はすぐに移動できて便利だと思う。

とりあえず、隣の部屋で、現在の幽々子ちゃんの状況とか、昨晩あったこととか、まだ会ったことの無かった妖忌くん（何となくそう呼ぶようになった）にボクのことを説明したりとか、色々話し。

そして。

「申し訳ありませんでした」

冒頭に戻る。

紫は胡散臭い笑顔で妖忌くんを見ているし、幽々子ちゃんは何が楽しいのか、微笑んでいる。

「何のことかは分からないけれど、別に気にすることないわよ～？」

軽いノリで幽々子ちゃんが返すと、妖忌くんが頭を上げる。

「いえ、何よりも私は自分が「はい、待った」」

とそこでボクが待ったをかける。

「自己完結の決意表明を今ここでする意味はあるの？」

それに、何もかも忘れている幽々子ちゃんにいらない情報を与える必要も無い。

「……そうですね、申し訳ありません」

数秒、考え、そして妖忌くんはそう答えた。

「何だかよく分からないけど、あなたはこれからどうするの？」

幽々子ちゃんのその言葉に、しばし考え込み。

「幽々子様さえよければ、もうしばらく、ここで働かせていただきたいと」

そう答える。そして幽々子ちゃんはまたもや軽くいいわよ～、と言って返すと、妖忌くんはまた一礼して、部屋を出て行った。

「何か気難しい子だね？」

「可愛くていいじゃない」

ボクのそんな感想に、幽々子ちゃんがそう返す。

可愛いって……。

「男の子が言われて嬉しい言葉じゃないと思うけどね」

そんなことを呟きながら、苦笑した。

ちょっと話は続いてその三日後くらい。

ここ三日くらいはずっと幽々子ちゃんの家にお世話になっている。

記憶を失った幽々子ちゃんまた最初からやり直すために紫が訪れ、ボクはそれに便乗してついて来ている。

生前の記憶を失った幽々子ちゃんは、生きていた頃よりも格段に明るかった。

思ってたよりも、記憶を失ったことはプラスに働いているようだね。

ただ、まあ。

弊害というのか、何と言うのか。

記憶を失い、一旦リセットされたことが、生前の幽々子ちゃんの眠れる本性を呼び覚ましてしまったらしい。

それは……驚異的なまでの健啖だ。

いや……もう圧巻だよ。

ボクらが一人分食べ終えている間に、米櫃に山盛りあったご飯十人分以上が綺麗になくなっているのだから。

妖忌くんの話によると、生きていた頃は一人前ですら咽を通らなかったほどらしいのだけど、今は人の十倍食べてもお腹が膨れないらしい。

見ているこっちのほうがお腹一杯になるよ。

だって、最初は笑っていた紫が、だんだん呆れていって、最後には気持ち悪そうにお腹さすってたくらいだからねえ。

「えっと……頑張れ、妖忌くん」

一日に消える食事代を計算して、途方に暮れる妖忌くんを見て、さすがにボクも笑えない状況だったよ。

で、まあ話を戻して、以前よりも明るくなり、能力を垂れ流すようなことも無くなった幽々子ちゃんは、活動的になった。生きる（死ぬ）楽しみが見つかったんだろうね。生きていた頃よりも生き生きしているのは皮肉だとしか言え無いけど。

で、紫と幽々子ちゃんとボクの三人でのんびりお茶を啜りながら縁側で話していた、そんな午後の話だよ。

「あの……梗殿」

三人でお茶していると、妖忌くんが戸惑いながらやってきた。

「どうしたの？ボクに用事？」

「ええ、それが、梗殿にお客です」

は……？

ボクに？

何で幽々子ちゃんの家に来るの？

とまあ色々疑問は沸いたが、とりあえず行ってみること。

「うん、分かった、どこにいる？」

「門の前で待ってもらっていますが」

了解、と言って二人にちょっと言ってくる旨を告げ、ボクは門へと向かった。

門へ向かうと、何と言うか、箆棒（べらぼう）に意外なお客さんがそこにいた。

「えっと、お久しぶりだね、ナズーリン」

「ああ、お久しぶりだ、博麗殿」

「どうしてここが、とか聞く前にボクに用事だって？」

「ああ……ご主人からキミに招待状だ。半年後にある、出雲の集会へのね」

かつて出合った毘沙門天の使い、ナズーリンが立っていた。

五十五話　そう言えばあの人出てきてなかったよねえ。な後日談かなあ？（後書

補足説明。
妖忌くんが玄関で倒れてた理由。西行妖の妖力に当てられたから。
本当ならそのまま自殺して全身全霊になってたところを、梗くんのスキマ能力併用結界で西行妖が隔離されたので、何とか助かった。
けどそのまま気絶。

妖忌くんの年齢。いくらなんでもこの頃から爺さんなわけが無い。
半人半霊は通常より歳を取るのが遅いだけとこのことなので、この頃はまだ少年くらいなのではないかと。それより若いと、働けるのか疑問だし。
頑固ジジイなイメージが強いけど、まだ若いし、こういう気難しいくらいの少年像でもありだと思う。

ナズ。毘沙門天の代理補佐です。正式には毘沙門天の使いですが。
ダウザーだからこそ見つけた約百年越しの再開です。

以上。

というわけで、出雲編やることに。脱線ばかりしてるけど、一話で終わらせるつもりですので、色々勘弁。
ただ出雲の集会について調べると、諏訪の神様は来ないみたいなんだが、どうしようかねえ？

五十六話　八雲立つ出雲。暗雲でも立ち込めてくるのかねえ？（前書き）

二話分くらいの話を一話に纏めたら、ちょっとグダグダになっちゃったので、注意！！！

五十六話　八雲立つ出雲。暗雲でも立ち込めてくるのかねえ？

「もう一度言ってみなさい……龍神」

「ふふ、何度でも言ってあげるよ……太陽神」

絶対零度。

絶対温度の零度。摂氏マイナス２７３．１５度で、これ以下の温度はないとされ、熱力学第三法則によれば到達不可能な温度。

まあ、科学的な意味は、の話だけどね。

言葉の比喩表現として使うなら、凍りつく～、凍りつくような～をさらに誇張するための表現と言えるんじゃないだろうか。

だから、もしこの凍りついた場の状況を表す言葉があるとすれば。

「弱者が強者に負けた……それだけの話だよ」

絶対零度。

その一言に尽きた。

十月のことを神無月という呼び方をする。

その理由は、十月に全国から神々が出雲に集まり、集会を開くからしいね。

だから、出雲では神無月では無く、神在月と呼ぶらしいよ。

とまあ、こんな話をしたのは、この出雲の集会に呼ばれたから何だよね。

一年に一回は開かれるこの集会に、今までボクは呼ばれたことは無かったんだけど。

毘沙門天の代理をしていた寅丸星と毘沙門天の使いのナズーリンの二人のいる寺に今年になって久々に毘沙門天本人（神？）がやってきたらしい。

で、最近のことを聞いたら、随分前に来たボクの話になって、毘沙門様がボクに会って見たいということで、今回の集会に来ないか？という招待を受けたので、ちょっと行って見ることにしたわけだ

よ。

出雲地方って実は行ったことが無かったので、紫に聞いたら出雲大社までは無理だが、その近くまで送っても良いとのこと。これで時間の問題は無くなった。

……なんだろう？近所のお兄さんに、ちょっと近くの小学校まで送ってってもらう子供のような、そんな所帯染みた感じがするよ？

というわけで、紫のスキマで、出雲大社の近くまで出て、そこから歩いていくと、見えてきたのは巨大な神社。

出雲大社（いずもたいしゃ）、正式名称出雲大社（いずもおおやしろ）。

この国で唯一つ『大社』の名を冠している神社。

祭神は……。

巨大な屋敷のような神社に入ると、本殿へと向かう神々が他にも何柱かいた。

その神たちの流れについていき、そして本殿へと入っていく。

中に入ると、ざわざわとした雰囲気で、どこかのお祭り会場のようだった。

集会と言っても、けっこう自由なようで、皆が色々なものを持ち寄って、好き勝手に飲み食いしていた。

と、そこで見慣れた神を見つけ、ボクはそちらへと寄っていく。

「や、神奈子」

ボクが挨拶すると、振り返った神奈子が、驚いたような顔をする。

「梗……？」

「そうだよ、お久しぶり」

そう言うと、神奈子も久しぶりだね、と言って笑った。

「二百年ぶりくらいかな？」

「そのぐらいになるかねえ。けど、あんたがここに来るとはねえ、今までずっと来なかったのに」

「うん、まあ今回は珍しく呼ばれたからねえ。今まで一度も呼ばれたことは無かったし」

と言うと、神奈子が素っ頓狂な顔をした。

「あんた、私のほうから何度誘おうとしても、いつも神社にいないだろ」

そんなことは……と言いかけて、そういやそんなこともあったな、と思い出す。

「いや、でも三百年くらい前からはずっといたよ？」

「そうなのかい？旅に出るって言って守矢から出て行ったから帰ってきてないのかと思ったら」

「あはは、まあ一旦旅は止めてたんだよ。でもまあ二百年くらい前から再開してるね」
「あんたも相変わらずだねえ」
「そう言えば、諏訪子ちゃんは？」
「あ、ああ、ここ大和の神ばかりだから、隅のほうで土着の神たちと盛り上がってるよ」
「ふーん、ボクもそっち側かな、後で行こうか」
「ところで、今回は呼ばれたって、誰にだい？」
「あ、うん、毘沙……」

と、言いかけたその時。

「神奈子、そちらの者はどなたでしょうか？」

唐突に。

音も無く。

背後に着物の女性が立っていた。

「ああ、こいつかい？水神水月だ」

「……なるほど。あなたが」

神奈子の知り合いらしい。

「神奈子、こっちの神様は？」

「ああ、天照大神だ、一応私の元上司みたいなのだよ」

「あらつれない、私はあなたを今でも可愛がっておりますのに」

「冗談は止してもらえるかい」

という二人のやりとりを余所に、ボクは思考を巡らせる。

天照大神。日本の最高神とも言える存在だね。というか、どこかで聞いたような……。

「ああ……月夜見の姉妹だっけ」

言った瞬間、天照が凍った。

「どうしてあなたが月夜見を知っているのかしら？」

「どうして？昔殺しかけて逃げられた神の名前くらいは覚えてるさ」

口の端が無意識的に上がり、くつくつと笑う。それで天照は何か気づいたらしい。

「そうですか。あなたが禍津鏡」

「それはボクの名前では無いねえ。龍神博麗、名前は水無月梗だよ。覚えておくといいよ」

「では、龍神……この私の姉妹に働いた暴挙について言うこと

はありますか？」

「無いよ、だって……弱者が強者に負けた、それだけの話なのだから」

言った瞬間、今度は空気が凍った。

「なん……ですって……」

怒り心頭の天照がボクの目を捉え、そして問う。

「もう一度言ってみなさい……龍神」

「ふふ、何度でも言ってあげるよ……太陽神」

絶対零度。

絶対温度の零度。摂氏マイナス２７３．１５度で、これ以下の温

度はないとされ、熱力学第三法則によれば到達不可能な温度。

まあ、科学的な意味は、の話だけどね。

言葉の比喩表現として使うなら、凍りつく～、凍りつくような～をさらに誇張するための表現と言えるんじゃないだろうか。

だから、もしこの究極的なまでに凍りついた場の状況を表す言葉があるとすれば。

「弱者が強者に負けた……それだけの話だよ」

絶対零度。

その一言に尽きた。

「弱者ですか……私の姉妹が……弱者」

「逃げられちゃったからね、どっちが勝者か敗者かは知らない。けど、ボクが強者で、月夜見が弱者なのは間違いないさ」

「取り消しなさい。私の姉妹を弱者と言ったことを、今すぐ取り消

せば、まだ見逃してあげましょう」

「なるほどなるほど、事実を力づくで動かすのか、キミたち大和の神らしい選択だねえ」

「野蛮な土着の神ごときが……大和の神に楯突くというのですか……」

「野蛮ねえ……他の神の領分に力づくで侵攻してくるキミたち大和の神が言えること？」

「キサマ……」

「さっきまでの口調はどこに言ったのかなあ？っていうかさ、さっきから人を見下したような発言ばかり」

消すよ、キミ？

「冷や冷やさせないで欲しいよ、全く」

「あはは、ごめんね、諏訪子ちゃん」

二人して杯を合わせる、乾杯ってね。

「全く、私の立場にもなって欲しいもんだよ。大和の神に色々言われたじゃないか」

そこに神奈子も入ってきて、三人でゆったりと酒を酌み交わす。

「私も諏訪子もどうしようもできなかったわけだけど、天津神が止めなければ、どうするつもりだったんだい？」

「その時は……消すよ。ボクの全てを持って」

くつくつと笑いながら、抑えていた神力を解き放つ。

「……全く、あの戦争の時、あんたと直接戦わなくて心底良かったよ」

「私も……意地張らずに同盟という形を取っておいて良かったよ」

「「梗みたいな化け物と戦わずに済んだからね」」

「人を化け物とは酷いねえ」

「化け物だよ。元上司をこんな風に言うのはあれだけど、まず天照じゃ勝てないね」

「さっきあのまま続けてたら、本当に大和の神全滅させてたかもね。けど、梗が天照大神の姉妹と喧嘩したことがあるってのは初耳だね」

「もう一億年以上前の話だしねえ」

「私のざっと十万倍か……気が遠くなるねえ」

くいっと杯の中身を飲み干し、また注ぐ。

いつからか、こうして酒にも慣れ、かなりの量を呑めるようになった。鬼と宴会なんてしたらアウトだけどね。

二人の杯にも注いで上げる。

そして、三人で杯を突き合わせる。

「「「乾杯！！」」」

楽しい時間なんだけれど、心残りが一つ。

「天照とか言うあの神、戦ってみたかったなあ」

そんなボクの呟きを聞き、二人が口を揃えて。

「「戦闘狂」」

そんなことを言った。

そんなことないのにねえ。

しばらく飲んで、ちょっと酔い覚ましに、神社の庭まで出ていると、後ろから誰かが来た。

さきほど本殿で一度顔を合わせた神。

そして、ボクをここに呼んだ神、毘沙門天だった。

「ふふ、中々面白いものを見せてもらったよ」

「そうですか？まあ、あなたはどちらでも良かったみたいですけど。ボクが倒れようと、天照が倒れようと」

「まあ、少しくらいはキミを応援していたさ。せっかく招待したのだしね」

「そうですか、まああありがとうございます」

「いやいや、キミを誘って正解だったよ。いきなりこんな面白いものが見れるなんてね」

「人を見世物みたいに言わないでほしいですが。まあ、とりあえず、この度は誘っていただきありがとうございます。毘沙門天様？」

「なに、様付けも敬語もけっこう。キミのことはナズーリンから聞いているよ、龍神博麗殿？」

「そう、じゃあ、普通に話させてもらうよ。それと、梗でいいよ」

「そうか、では梗くんと呼ばせてもらおう」

「ではボクは、毘沙門さんと呼ばせてもらおうかな」

「キミはこの集会に最後まで参加するのかな？」

「ふふ、ここまで騒いだらもう出入り禁止でもおかしくないからねえ。これで最後なら少しくらい楽しんでも罰は当たらないでしょ？」

「罰……はは、誰がキミに罰を与えられると言うんだい。この国でキミより強い神はもういない。須佐之男殿の行方が分からぬ今の国ではな」

「誰よりも強いからって、誰にも負けないってことでも無いでしょ。それは、毘沙門さんのほうが分かってるんじゃないのかな？隣の国では武神として崇められてるあなたならね」

「ふーむ、至言だな……」

この後、しばらく、何でかこんな話をし続けて、最後にナズーリンと星のよろしくと言って、彼と別れた。

この集会は、三日くらい続いた。

その間、天照大神とは冷戦状態と言ったところで、互いに目を合わすことも無く、時間は過ぎて。

「帰りに、ちょっと寄り道した守矢神社で酒宴中だよ～」
「誰に言ってるんだい、梗？」

ふふ、誰にだろうねえ、諏訪子ちゃん。
ふふ、たった一度の移動ならスキマを使えばすぐ済むから便利だよねえ。

それにしても。

「いやあ、やっぱりここは落ち着くねえ」
「何で住んでる私たち以上に寛いでるんだい、あんたは……」
「神奈子、今更梗に常識を言ったって無駄なことくらい、分かってるだろ？」
「……そうだな、今更だな。もう私は気にしないことにするよ」

そこ～、全部聞こえてるよ～。

「って、梗、何で私にもたれかかって……こらぁ！！！抱きつくな、鬱陶しい！！」
「うーん、ケロちゃん暖かいねえ～」
「うわ、酒臭い、いいからさっさと離れな、この酔っ払い」
「あんたらは、何と言うか、何があっても変わらないね」
「ちょ、神奈子、この酔っ払いと一緒にするんじゃないよ！！！」
「連れないよ～、ケロちゃん」
「さっきから、ケロちゃんはやめ、ちょ、だから離れ……ちょ、ま……ぐえ」
「あ～、梗が諏訪子潰しちゃったね。ご愁傷様、諏訪子」
「この抱き心地は至福～」
「出る、何か色々出るから、ちょ、梗、力強い、本当に、出る、何

か生まれる！！！」
「すす、諏訪子！！？諏訪子が、色々とお見せ出来無い姿を曝そうとしてるよ。ちょっと、梗、止め」
「……（すやすや）」
「って、寝てる！？こらー！！離せ、梗！！！」
「あー、何とかお見せ出来無い姿は回避かい？じゃあ……いいか」
「良くない！！！いいから神奈子、助けてよ」
「いや、でも、ねえ。こんな幸せそうな寝顔されてると、ちょっと……ねえ」
「ねえ、じゃない、はーやーくーはーなーせー！！！」

五十六話　八雲立つ出雲。暗雲でも立ち込めてくるのかねえ？（後書き）

何か、やっぱり毎回終わり方がパターン化している気がする。

気のせいかな？

色々と過程を省いて書いてるけど、ちゃんと読者に伝わってるのだろうか？

ちなみに、今回の天照との対立のフラグは、僊月抄辺りで回収するかも。

今回色々な神様が出てきたので、関係性とか調べて、考えて、こじつけるのが大変だった。

それに久々に４０００字超えたし。

ていうわけで、これで出雲の話は終りです、次は九章。放浪編最後の章になる予定ていうか、絶対になります。

九章は今回も出てきた、禍津鏡の伏線について回収されますよ～。

感想とかポイントとか感想とか感想とか待ってまーす。

五十七話　地球は青かった。当たり前なことなのに、実際宇宙から見た人が言う

モンハンＦやってたら、投稿遅くなりました。
っていうか、負けた……団長も何を考えて、三連続負け続きの蒼組なんて選んだのだろう？
はあ、勝ち組クエの剛ラオ行きたかったなあ～。
古龍種の牙って、牙テオが今出てないから、クシャか勝ち組ラオしか無いんだよなあ。
せっかく炎妃龍討伐の証１０枚集めたのに、偏愛が作れないじゃないか。

五十七話　地球は青かった。当たり前なことなのに、実際宇宙から見た人が言うと重みが違う。

突然ですが問題です。

ボクは今どこにいるでしょう？

？博麗神社

？太陽

？月

？欧州

？守矢神社

面積とか酷い差がありますが、気にせず答えをどうぞ。

「やあやあ。お久しぶりかな。豊ちゃん」

というわけで、正解は？月でした。

「その呼び方……あら？あら……？あら……？梗さん？」

そしてボクの目の前には昔の友人、綿月豊姫ちゃんがいるのでした。

「月に行かないかしら？」

ことの始まりは、また旅してる最中に突然現れた紫からのお誘いだった。

「月？いつ？」

「一ヵ月後よ」

「どうやって？」

「私の能力で」

「何しに？」

「戦争」

ボクの疑問に、紫が端的にとんでもないことを言った。

聞けば、妖怪たちを率いて、月に戦争を仕掛けるつもりらしい。

「負けるよ。まず間違いなく」

過去のことを知っているだけに、ボクはそう進言しておく。

「月の技術は、妖怪の力を遥かに超えている。まず間違いなく一方的に負けるよ」

とりあえず、鬼と天狗辺りを全員連れて行けば、いいところまで行くかもしれないけれど。

それでもやはり、最後には負けるだろうね。

だって、月には永琳ちゃん特製対妖怪用武器がごろごろしているし。

はっきり言って、あそこは魔窟だと思う。

主に永琳ちゃんの発明の、という意味で。

多分、月に行ってからも発明を続けてたんだろうし、どんなびっくりアイテムがあっても不思議では無いよなあ、と思っている。

けれど紫はそれでもやるつもりらしい。

「そう、じゃあ、どこまでやれるか、見物させてもらうよ」

参加表明はしないけど、見学はさせてもらうよ。

そう言うと、紫は少し考え込むような仕草をした後、いいわよ、と言って頷いた。

当日、月にて。

「まあ、分かってたことだよね」

目の前で銃殺されていく妖怪たちを見ながら、呆れた声で呟く。

「しかし永琳ちゃんも自重しないね」

一億年前銃火器だったものが、レーザーに取って代わっていた。

けど、街中でレーザービームの乱射ってどうなんだろう？

それと、何で時々兎耳の女の子たちが混じってるんだろうね？

「けどまあ、光の速さとか、さすがにボクでも殺されそうだよ」

おお怖い怖い、と嘯き街中を歩く。反射で全ての情報を遮断しているから、見つからないよ。永琳ちゃんとか、依ちゃん、豊ちゃん辺りになら見つかるかもしれないけど。

「発動《鏡花水月》」

言葉と共に、倒れた妖怪が起き上がる……ように月の人たちには見えているだろう。

鏡花水月によって見せられる幻は、相手にプラシーボ効果をもたらすからね。

「現（うつつ）に蘇る虚（うつろ）ってね」

くすくすと笑いながら、スキマにてこの光景を見ているだろう紫を探す。

「あっちは大変だねえ」

殺しても死なない、逃げても壁をすり抜けて追いかけてくる、そんな幻に追い立てられ、逃げ惑う兵士たち。

「それで、紫はそんなところで何してるの？」

路地裏で何かしている紫を見つけ、向かってみる。

「あら梗。無事だったのね」

「あはは、見えないように隠れながら歩いてるからね。で？そっちは何してるの？」

「見てるのよ。月の技術を」

「言ったでしょ、月の技術は凄いよって」

「ええ、そうね。まさかここまで発展した技術を持っているとは思わなかったわね」

「進みすぎた科学は魔法と変わらない。そんな言葉があるけど、月と地上を比べると確かに納得できると思わない？」

「そうね。人間とはここまで力を持てるものなのね」

おや、今更気づいたんだね、紫は。

「前に言ったでしょ。あまり人間を舐めないほうがいいよ、ってね」

それを思い出したのか、紫はくすりと笑って。

「そうね、確かに言われたわね」

そう呟いた。

「それで、さきほどから月の兵士が逃げているけれど、梗の仕業かしら？」
「うん、殺したはずの妖怪が蘇って襲ってくる幻を見てるんだよ」
想像したのか、紫は呆れ顔になって外道、と呟いた。
「どっちも傷つかずに済む方法を模索してあげたんだよ。感謝こそされ、非難される覚えはないよ」
きっと今ボクの顔はあくどい笑みを浮かべているのだろうな、と自覚する。
「まあ、それより、今のうちにさっさと逃げたほうがいいんじゃない？」
「……そうね、そうさせてもらうわ」
頷き、紫はスキマを作ると、一人そこに入っていった。
「うーん、他の妖怪たち回収しないのか」
まだ生き残っている妖怪もいるのにね。
「まあ、だとすると、今度の戦争は」
辺りにある妖怪の死体を見て、やっぱりそうなのかな？と想像を確信へと変える。
紫が今回月に攻め入った理由。その考察。
不思議だとは思っていたんだよ。ボクは紫がボクをそれなりに信頼していることを知っている、特に実力の面では。そのボクが勝て

ないと言ったのに、紫はそれでも月へと攻め入った。
つまり、それは月を征服したいとか、そういうことではなく。

「勢力削りってことなのかな」

ここ二、三百年幻想郷に帰っていないが、紫の話によると、妖怪の数がけっこう膨れ上がったらしい。
けれど、妖怪の数が増えたら、その分だけ、幻想郷の決まりを守らない妖怪も出てくる。

「ボクがいればそれで良かったのかもしれないけど、紫はボクに強制はしないしね」

だからそう言うアウトローな妖怪を集めて、その暴力の捌け口に月へと送る。
紫がいなくなれば、妖怪たちは月から逃げることが出来なくなる。
そしてボクが勝てないと言ったのだから、その妖怪たちは放っておけば、紫が何もしなくても全滅。

「という流れなのかな、と思ったわけですよ。キミはどう思う？」

ふと、背後に向かって声をかけてみれば。

「さあ？私には分からないわ。妖怪のことなんて」

そこに一人の少女がいて。

「やあやあ。お久しぶりかな。豊ちゃん」

きっとボクのことに気づいていないだろうから、そう言ってみる。

「その呼び方……あら？あら……？あら……？梗さん？」

そしてボクの目の前には昔の友人、綿月豊姫ちゃんがいるのでしたとさ。

五十七話　地球は青かった。当たり前なことなのに、実際宇宙から見た人が言うと重みが違う。

月の姉妹様方の口調って、良く分かんないですよね。
自分は虚刀典とか参考にさせてもらいながら書いてますけど。
明日くらいに儚月抄全巻読み直すかなあ。

ていうわけで、次回を活目して待て。

五十八話　過ぎる時間。回帰する夢。それと毒舌巫女。（前書き）

バカな……時系列が跳ぶ……だと……？
久々の連日更新ですね。
今回は過去話みたいなことになってますよ。
多分、東方っぽく無いんで、つまらないって人いるかもしれませんけど、後一話で終りですから、辛抱強く待っていただけると。

五十八話　過ぎる時間。回帰する夢。それと毒舌巫女。

昔々あるところに、一人のたいそう綺麗な少女がいた。

少女は、村で一番大きな屋敷に、独り住んでいた。

連日連夜、少女の所には色々な人たちが食べ物や着物を持って来て、少女はそうやって生活していた。

そしてある日、少女の元に一人の青年が訪れ、こう言う。

「この素晴らしき鏡をお納め下さい」

そしてその日から、少女の生活は少しずつ変わっていった。

一日、また一日と過ごすたびに、少女が鏡を見る時間が増えていく。

それが何故なのか、自身でも良く分からないまま。

ある日、少女はそれに気づく、鏡に神様が宿っていることに。

「鏡さん鏡さん」

ふと呟いた言葉に、鏡から一人の少年が出てくる。

「何ぞ、我に用か。人間」

「鏡さん鏡さん。どうか私とお友達になってくれませんか？」

続いて出た言葉は、少年を驚かせるに足る言葉だったらしい。

「良かろう、我と友誼を結べ、人の子」

少年から出た言葉に、そして少女は生まれて初めて笑った。

意識が戻る。

呆けていたら、ついつい転寝（うたたね）していたようだった。

「……変な夢」

さきほどまでの夢を思い出し、そう呟く。

「きっと、あれが……」

心当たりは十二分にあった。

どうにも月から帰ってきてから、調子が狂う。
きっと一時的なものなんだろうけど。

「タマちゃん、タマちゃーん」

自身の神社の縁側に腰掛け、この間初めて会った巫女さんを呼ぶ。

「タマちゃんなんて呼び方、するんじゃねーです」

すぐに神社の中から少女が来る。

博麗霊、霊と書いてたまと読む、らしい。初めて会った時、第一声が「守り神のくせに神社からいなくなってんじゃねーですよ」だった、変な巫女さんだ。というか、喋り方が歴代巫女さんの中でダントツに変だよね。

「昼間からだらだら寝てばかりとは、神様ってのは良い御身分じゃねーですか」

後、この毒舌なんとかならないかな、一応ボク祭神で、この娘巫女なんだけどねえ。

「うん、まあ後で聞いてあげるから、取り合えず、お茶二人分淹れておいて」
「二人分？」

「うん、後で友人来るから」
「へいへい、了解したですよ」

そう言って、戻ろうとして、立ち止まる。

「さっき……うなされてたみてえだったですけど……その、大丈夫だってんですか」

「あれ、どうしたの？心配してくれた？」

「か、勘違いするんじゃねーです。巫女として、一応祭神様の心配をしただけだってんですよ、別に私としては、どっちでも……どっちでも……」

顔真っ赤にしちゃって、こういうところ可愛いよねえ。
逃げるようにして、奥に行ってしまった巫女さんを見てくすりとしながら、自身の見た夢に思いを馳せる。

もう一度寝たら、続きが見れるかな？

そんなことを考えつつ、また意識は落ちていった。

ある時、自身の依代たる鏡がとある少女の下へと運ばれた。

鏡に宿る自分は、鏡を通してその光景を見ていた。

隔絶され、孤独の意味すら知らず、幸せも不幸せも無く、ただ漫然と日々を過ごすだけの少女を。

心、そして例え発することは出来なくとも、感情というものを持っていた、自分は少女を哀れみ、力になりたいと思っていた。

けれど、自分からはどうすることも出来ない。

自分は世界に具現できるほどの力は持ち合わせていないのだから。

けれど。

「鏡さん鏡さん」

認識され、そして呼ばれたことにより、自分はこの世界に生れ落ち。

「鏡さん鏡さん。どうか私とお友達になってくれませんか？」

そして、少女と友誼を結ぶことによって、その存在を得た。

今なら、この少女の力になれる。

それが、嬉しかった。

「……さい。起きなさい、梗」

肩を揺すられ、目を覚ますと、紫がいた。

「ああ、来てたんだ。紫」

「どうしたのかしら、月から帰ってきてから様子がおかしいわよ」

別に、なんでもない、そう言って、立ち上がる。

「今日はどうしたの？」

ボクのその言葉に、紫が呆れたような顔をして。

「あなたが呼んだんじゃないのよ、わざわざ巫女にお茶まで用意させておいて、何を言ってるのよ」

ああ、そう言えばそうだっけ？

「あなた本当に大丈夫なの？明らかにおかしいわよ」

「何でもないよ。何でも」

ちょっと、夢と現（うつつ）の境にいるだけだから。

「ちょっと眠いだけだよ。気にしないで」

「ちょっと眠いだけだよ。気にしないで」

その言葉に驚く。

本人は気づいて無いのだろうか？いや、それすら気づけないほど判断能力が落ちているのだろうか？

龍神の体だと、眠くもならないし、体調も悪くならない。以前、本人が言っていたことだというのに。

つまり、眠気を感じているというのは明らかな異常で。

その原因は……何かしらね？

月に行ってからだ。あんなに様子がおかしくなったのは。問うても誤魔化すばかりで、何も言わない。

月で何かあったのかしらね。

今更ながら、一人置いてきたことを悔やむが、言っても詮無き事だ。

とりあえず、今は様子を見るしかない。原因の一つも分からないままでは、手の施しようが無いのだから。

生まれて初めて覚えたことは、名前を与えることだった。

少女にとって、世界には未知が溢れていた。

けれど、少女には恐怖というものは無かった。

そんなものは知らなかった。

誰もが恐れ、触れ得ぬ未知に、少女は名前を与えることで触れた。

名前を与えられた未知は、既知となり、そして妖怪となった。

誰もが少女を恐れた。けれど、手は出せなかった。

なぜなら、その妖怪を抑制し、人々への害をなくしているのもまた少女だったから。

誰もが少女を恐れ、少女に山のような贈り物をする。

自身の命が一人の少女の掌の上であることを理解させられていたから。

けれど、少女はそれを理解しなかった。

いや、恐怖という感情を知らない少女にとって、周囲に人間の反応は意味不明のものだった。

ある日、少女から自分に名前が与えられた。

「あなたの名前は天津。何でも映す綺麗な鏡さん。まるで天のように。だからあなたは天津鏡」

名前が与えられた時、自分の中に何かが満ちていくのを感じた。

それが幸福という感情だと知ったのは、そのしばらく後のことだった。

「梗!?梗!!しっかりしなさい!!」

揺すられ、目を開ける。

「あれ……ボク……寝てた……？」

そんなボクを信じられないような顔で、紫が凝視する。

「あなた、本当にどうしたの？変とかそんなものじゃないわよ。もう異常と言っていいわ」

「……ううん……何でもない……よ……」

あれ……視界が回って……あれ……？

「ちょっと!?梗!!しっかりしなさい!!梗!!!!」

さあ、夢の続きと行こうぞ。人間。

五十八話　過ぎる時間。回帰する夢。それと毒舌巫女。（後書き）

前回の月編の続きを期待した人ごめんなさい。
続きはまだ出ません。今回は、月に行ってから一ヵ月後の幻想郷、博麗神社での話しとなっています。

ちなみに、今回の話で梗くんに関しての一通りに伏線は出尽くしましたよ。なので、それらしきもの全部集めて、頭を悩ませれば、梗くんに関しての伏線は全部回収できるかも。
まあ無理か。分かったら凄すぎる。読解力とか推理力とか言うレベルじゃねえ。最早未来予知か読心術だ。
ヒント：縁が見た夢との視点の違い。
さあ、分かった人は天才だ。

ところで、今回出した毒舌巫女さん（ツンデレ風味）タマちゃんどうでした？書いててちょっと可愛いな、と思ったんですが。正直、一発キャラにするにはちょっともったいない属性持ってるし、けど人間だから原作まで引っ張れない。さてさて、どうしたものかなあ？
ちなみに、参考にしたキャラは伊藤美琴ちゃん。容姿も同じ感じを想像しておいて下さい。

五十九話　暗い夢の底、終わらない夢、そして嘘吐き再び　（前書き）

えっと、リアルが色々と忙しく、長く空けてしまいすみません。
雪代も今を生きる人間なんで、一日中ＰＣに張り付いていられないのですよ、非情に残念なことに。

多分、今回の話は意味が分からないでしょうねえ。
まあ、一応今までに出揃った情報を統合すればだいたいは分かるはずですけど……読者さんには不親切な話かもしれませんねえ。

最終話くらいまで読めば、十分話は通じるはずですけどね。最終話はいつになることやら。

五十九話　暗い夢の底、終わらない夢、そして嘘吐き再び

何日、何ヶ月、何年と時を共に過ごす。

そして、いつからか、少女の中で少年の存在が変わるのは必然だったのかもしれない。

ただ、気づけば互いが互いを好きになっていて。

けれど、今更何も変わることは無く。

ただ、漠然と幸せな日々を過ごしていた。

互いに気持ちが通じあった日から、何年になるだろう。

何か特別変わったものがあったわけではない。

けれど、あの日から、自身の心はいつだって幸せで満ちていた。

その日、ふと屋敷を出る。

そこに黒い靄のようなものがあって。

「おいでなさいな、天邪鬼（あまんじゃく）」

少女が呟くと、ひゅっと風が吹き、いつからか、そこに子供のような何かがいた。

「うちにおいで？」

少女が手を差し出すと、それはけらけらと笑い、一歩下がる。

「……」

少女は薄く微笑み、その様子を見守る。

「そう、なら人を食べなさい」

そう言うと、それは、げらげらと笑い、走り去っていった。

「ふふ……」

少女はただ、その様子を見ているだけであった。

「……ぁ……っ！！！！」

その様子を見ていた人間の姿に、終ぞ、気づくことは無かった。

「……」
「……」

室内を重苦しい空気が満たす。

一人、床で眠る梗を霊と紫の二人がじっと見つめている。

「八雲様……この方は……白霊様は何で起きねーですか？」
「……分からないわ」

いつもの紫ならば、笑って巫女をからかっていたかもしれない。
けれど、今の紫には巫女のおかしな言葉遣いを気にする余裕すらなかった。

原因が分からない。

ざっと見た限りでは、何も異常は見つからなかった。

能力を使ってみたが、この神はいつも他者の能力を弾く能力を使っていて、どうにも手が出せない。

だからこそ、どうしようも無い。原因が分からなければ、手の打ちようも無い。

どれほど多くの妖力を持とうと。

どれほど規格外の能力を持とうと。

今ここで何も出来ず歯噛みするしか無い。

「今は……様子を見るしかないわ」

それが、現実だった。

一人の男が一人の少女の後をつけていた。

少女はこの村で最も恐れられている少女。

少女が一度名を呼べば、次々と新しい妖怪が生まれてくる。

けれども、少女が止めるからこそ、妖怪から村は守られている。

自作自演のようなその少女に、不審感を抱く人間は多かった。

一部の人間は、少女をまるで神でも崇めるようにしていたが。

けれどそんなのは少数派で、少なくともその男は少女を危険視していた。

否、しないはずがなかった。

少女のほんの気まぐれで、村人全員の命運が決まるなど、そんな状況が許せるはずも無かった。

けれども、少女が妖怪を押し止めているのも事実。

だから、こうして何かしでかさないか、監視するためにも少女をつけ回しているのである。

そして、その日、男は確信した。

この少女は、自分たちを滅ぼす気なのだと。

さて、話を少し変えて、その時少女が呼びかけた、天邪鬼と言う妖怪について考える。

天邪鬼という妖怪の性質を言うならば「人の心で遊ぶ鬼」だ。

他人の言うことと真逆のことをしようとする、というのは、それが他人が嫌がることだから。

つまり、少女が「うちにおいで?」と言えば、ついていかないほ

うが少女が嫌がるからそうした。

そして少女がその性質に気づいたからこそ、人を食べろ、と言った。

知性のある鬼ならば、それがわざと反対のことをさせるためだと気づく。けれど、知性の低い天邪鬼という子鬼はそれに気づかず、人を食べることを止める。それが少女の嫌がることだと思っているから。

そして、知性が無くとも、天邪鬼という妖怪の性格を知らない人間がその光景を見るとどうだろう？

例えば、少女を監視していた男などは？

このままでは、この村はこの少女によって滅ぼされる。

そう考えた男の行動はシンプルだった。

いざという時のために持っていた護身用の刃を抜き。

そして。

少女の背後から。

その背を突いた。

「ありゃりゃ、殺されちゃったね。彼女」

まるで映画でも見ているような気分だよ。
直接頭に流れ込んでくる、いや、頭の中で再生されていく映像のような記憶に、そんな感想を抱く。

ところでここどこ？
記憶を視覚的に見ることが出来るなんて便利だとは思うけど。

もしかして、ボクの心の中、とかそういうとこなのかな？

「それで？続きは？」

記憶はそこでぷっつりと途絶えていた。
だから、後ろにいる彼に尋ねる。

「この誰のか知らない記憶の続きは？」

「……」

「黙られても困るねえ。勝手に人をこんなところに引きずりこんで

おいて。勝手に人にこんなものを見せておいて……ねえ、禍津鏡。いや、天津鏡って言ったほうがいいのかな？」

「……何故気づいた？」

「ここまでヒントが出揃ってて気づかなかったら、よっぽどバカだよ。それに、あの月夜見とかいうのから聞いたからだよ。キミの話はね」

「……あいつか……」

「知ってるよ。キミ、人間に恋したんだってね。ただの九十九神程度の存在で。体を持たぬキミには叶わぬ思い。けれどキミが存在を手に入れたのは、彼女のお陰だ。彼女に名を与えられたからキミは今ここに存在する。まあ、月夜見としてもキミがここまで強力な存在になるのは予想外だったらしいけどね」

「……」

「そしてさっき見た通り、彼女は殺された。キミは怒った。そして誰よりも彼女の傍に居続けたキミは、一角の神と同列の力を持っていた。そんなキミが暴れたからキミは地獄に落ちた……はは、なんて間抜けな話だろうねえ？」

「キサマ！！！！」

「怒った？怒ったよね、怒っただろうよ。でもね……こっちだって怒ってるんだよ」

キミのせいで縁がどれだけ苦しんだと思っている。

「あの女は所詮、我の映し鏡に過ぎぬ」

「……キミはそんな風に縁を見ていたんだね……全く……救いようも無い。ボクのことも同じように見ているんだろうね」

「当たり前だろう。キサマなぞ、我の駒に過ぎぬ」

キミは気づかない。さっきまで一緒に回帰していた記憶に違和感を覚えなかったのがその証拠。

キミは気づかない……だからキミは。

「だからキミは救われないんだよ。永劫ね」

「吼えたな。いいだろう。今この瞬間からキサマの全てを奪い取ってやろう」

「勝手にすればいいさ」

そして。

「その先にあるものを見て、独りで絶望してればいい」

どこまでも壮絶な顔で、ボクは嗤った。

「ほらほらそこをどいて。梗を『眠らせられない』じゃないか」

「何を言ってるの……？それ以前、あなた誰よ」

紫が突然現れた少女に警戒を顕わにする。

「誰？誰だって？ボクはね『八雲紫』って言うんだよ」

その言葉に、紫は警戒心を高める。

「嘘ばかりついてないで、本当のことを言いなさい」

その言葉に、少女、蒼は笑って答える。

「無理だね、無理。ボクは『嘘なんてつけない』のさ」

この嘘吐き、と内心思いつつ、こちらへとやってくる少女から目線を離さない。

「それで？梗、キミはまだ『起きない』のかい？」

そして、少女が笑い、そう言うと。

「……ああ、起きたくなかったね。キミがいるなんて、最悪の目覚めだよ、蒼」

そう言って。

水無月梗が起き上がった。

最悪、っと内心呟く。

目が覚めて一番最初に聞いた声がこいつの声というのは、最悪な気分だ。

目が覚めて、いつになく険しい顔をしていた紫と、何故か泣きそうになっていたタマちゃんを大丈夫だと落ち着かせて、何だかんだで、神社に居座った蒼に、嫌な汗を流しながら放置していたその晩のこと。ちなみに紫は、もう帰った。まだまだ忙しいらしいしね。

色々考えることがあったので、本殿に独りいたのだけど、ふと蒼に聴こうと思っていたことを思い出し、探しに出る。

そして、縁側に座って外を見ている蒼を見つけ、声をかけた。

「とりあえず、蒼。死んでくれる？」

あ、間違えた。挨拶しようと思ったのに、つい口から素直な本音が。

「いやだな。キミに本気になられたら、ボクは『死んでしまう』じゃないか」
「生き残る自信ありありの癖に、面倒くさいやつだね、蒼は。ていうかその嘘つく癖もういらないからやめなよ」
「無理だよ。ボクみたいな『没個性なやつ』は、こうでもしないと個性がなくなるんだよ」

この大嘘付き。と言いそうになって、踏みとどまる。そんなことよりも、聴かなければならないことを思い出す。

「……それで、急に目が覚めたと思ったら、キミの仕業？」
「やだな、梗。ボクにそんなこと『出来るはずない』じゃないか」
出来るはずがない。嘘しか吐かない蒼だから、つまり出来る。やっぱりこいつのお陰か、悔しいけど。
というか、こいつの性格や、性質を加味して、薄々そうなんじゃないかと思っていたんだけど。
「事実と虚実を逆転させる能力……かな」
「『違うよ』。全然『違う』」
否定。けれど、嘘だから多分肯定。
「そう……取り合えずは……助かったよ」
「ふふ、そうかい？まあ、『ボクがやったわけじゃないけど』ね」

ホント面倒なやつだ。一々意味を読み解く身にもなってほしいものだ。

「ああ、それと……彼に『会えなかった』のかい？」

聞いた瞬間、背筋がぞわりとした。

「キミは、どこまで知ってるんだい？」

「俺は『何も知らない』。ボクは『何でも知ってる』。けれど、私は『何もしない』し。俺たちは『何でもする』んだよ」

意味が分からなかったけど、どうせこいつに聞いても余計に分からなくなるだけだし、放っておくことにする。

「まあいいや。それより、ほら。一杯どう？」

そう言って、徳利を渡してやる。

「おやおや、困ったね。俺は『酒には強くない』のにね」

「そこはボクたちに似なかったのか。ボクは弱いからねえ。今はもうそこまででも無いけど」

正直、こいつとこんなことするのは、これが最初で最後だろうけど。

「「乾杯」」

チン、とならし、月見酒とする。

そして、夜の帳の下りた空を見つめ、この奇妙な光景にくすりと笑った。

五十九話　暗い夢の底、終わらない夢、そして嘘吐き再び　（後書き）

まあ、色々と情報足りないのは分かります。ていうか東方っぽくないなあ。でも、今回のメインが主人公だからなあ、東方キャラが少ないのは仕方ないんだよなあ。

ついでに言うと、梗くんは蒼のことを嫌ってるわけじゃないんです。ただ、死ぬほど苦手意識持ってるだけで。蒼と話していると、どうにも調子を崩されてしまい、思わず普段口にしないような言葉もぽろっと出てきます。

次回、タマちゃんの外伝。最近、主人公の梗くんよりも気に入ってきたキャラ、タマちゃんです。

外話　偶々（たまたま）タマちゃん。うん、語呂がいいね。（前書き）

連投連投♪

外話　偶々（たまたま）タマちゃん。うん、語呂がいいね。

私があの方と初めて出会ったのは、一年前。
本人は忘れてるみてえですがね。まったく。

この幻想郷を守る博麗の巫女となって二年ほど。
何も無かったからこそ、油断してた。

私でも十分やってける、このままで大丈夫、だと。

ただ、その日、いつもより調子が悪かった。体調不慮というべきか。
けれど、私は飛ぶ。人里の周辺で凶悪な妖怪が出たとの話があったから。
人里を守る、それがこの神社の巫女としての役割だから。言い訳は出来ない。

先代の巫女様に教えてもらった技と術を駆使し、ようやくその妖怪を倒した。
その瞬間、確かに私は油断していた。
だから、後ろから近づく、別の妖怪に気づかなかった。

例えば、いつも通りの調子なら、近づいた敵を避け、倒すことも出来たかもしれねえですが。
けれど、調子を崩した私では、それを避ける出来なかった。
ただの一撃、けれど妖怪の一撃は人のそれを遥かに上回る。その一撃で、身動き一つ出来なくなった私。
私の上に乗り、こちらを見る妖怪。

その瞬間、初めて死を覚悟した。
悔しかった。恐怖より先に、悔しさが出た。

先代に巫女様にあれだけ教えてもらったことだったのに。
最後まで気を抜くなとあれほど言われていたのに。

「私もここで終りってことですか……悔しいってんですよ」

その呟いたその瞬間。

「じゃあ、まだ生きてみようか」

声が聞こえたと同時に、体が軽くなる。

「ダメだよ。うちの巫女さん苛めたら」

声と共に、急激に威圧が増す。

「跳んでけ」

視界の端に捉えたその光景は瞠目した。

ただの蹴りで、妖怪を吹き飛ばした。

人間の所業では無い。妖怪でも出来るだろうか。

「……誰だってんですよ……」

その言葉と共に、私は助かったという安堵から、一気に気が抜けて。

「ふふ……ゆっくり寝ておきなよ」

目の前が暗くなっていった。

気づいたら博麗神社の自室にいた。

「……っ！？」

そして、これまでのことを思いだし、飛び起きた。

翌日、人里に行ってみると、誰も自分を助けた人のことは知らなかった。
そして、収穫も無いまま、神社に帰ると、本殿の扉が開いていることに気づく。
中を見ると、本殿の奥にある一枚の鏡の前に一枚の手紙が落ちていた。

『気を抜かないこと。次も助けてあげれるとは限らないよ。それとお大事に』

この鏡は、神様の通り道だと先代の巫女様が言っていた。
つまり、私を助けてくれたのは。

『ダメだよ。うちの巫女さん苛めたら』

昨日の言葉を思い出し。
そして確信する。

「……あれが、うちの祭神様っつうことですか」

また会ってみてーですね。

ふとそんなことを思い。

くすりと笑った。

龍神博麗。本当の名前は白霊。それが先代の巫女様から聞いた、この神社の祭神……らしいが、先代の巫女様は会ったことが無いらしい。先々代の巫女様から聞いた話によれば、祭神様はいつもふらりとどこかに行っていて、里の危機など以外では気まぐれで帰ってくるらしい。けれど、いつもすぐにまたどこかに行ってしまうので、会うこと自体ちょっとした運がいるとか何とか。

何で自分の神社の祭神に会うのに、運がいるってんですか……。

聞いた時は呆れ過多だったが、それでも信仰が続くのは、確かに里を守っていると言う実績があるから。

元は龍神ではなかったらしいけど、それはどうでもいい。

特徴としては、普段は人型らしいが、本来は巨大な龍の姿らしいということ。そして、この周囲には鬼などという強大な力を持つ妖怪もいるのだが、その鬼すら降すほど強大な力を持つということ。

それが、私の知る、祭神の全てだった。

それから一年くらいして、朝に境内の掃除をしていた時の話。

バタン、という音をともに、本殿の扉が開く。

「……」

目を見開く。いつか聞いた、いつか助けられた、いつか会いたいと思っていた、祭神様その人がいたから。

「おや……ああ、キミが今代の巫女さんかな？」

心の準備を整える間も無く、声をかけられ、ドキリとする。

「は、はい、博麗霊です。お、お久しぶ「初めまして。祭神の白霊だよ」……え？……初めまして？」

「そうだけど？どうかした？」

肯定されて初めて気づく。

わ、わ……忘れてやがりますか、この神（ひと）！？

そう考えた時、ふとこの一年間次はいつ帰ってくるのだろうか、と悶々と考えていた自分を思い出し。

少しばかり、イラっときた。

「……よ」

「え？何て言った？」

だから。

「守り神のくせに神社からいなくなってんじゃねーですよ！！！」

ついつい、そんなことを言ってしまった。

死にたい……。

青い顔をして、項垂れている自分。それでも、境内を掃く手を止めないのは長年の習性とでも言うべきか。

二度目の出会いを夢に見て、朝から気分が鬱に落ちている。

「はぁ……何であんなこと言っちまったんでしょうね……」

本当は、助けてくれてありがとうと、そう言いたかっただけなのに。

相手が覚えてないと、自分のことを忘れられていると思うと、胸が締め付けられるようで。

あれからも、顔見るたびについ言いたくも無ねーこと、言わずにいられねーんですよね。

だからいつものように、今日も呟く。

「あの時、助けていただき、ありがとうございました……白霊様」

そして、はぁ、と溜息を吐く。

「何で顔を見ると言えなくなっちまうんでしょーか？」

そして、最終的にいつもこう思うのだ。

「素直になりたい」

外話　偶々（たまたま）タマちゃん。うん、語呂がいいね。（後書き）

完全タマちゃん視点での話でした。
まあ、あれですよ。自分はずっと気にしてて、思い悩んでたのに、相手はそんなことすっかり忘れて去っていることに、思わずむかついちゃったんです。一度言い出すと、きっかけを掴むまでは素直になれないツンデレの性が彼女にもあるのです。
後二十話？くらいで原作入れるかなあ？

鬼が地底に行く話、永夜組の話、博麗大結界の話、吸血鬼異変の三つはやることが決まっているんですけど、ルーミアの話、多分宵闇異変とかそんな感じになる話って、やろうかなあ？
現状のまま原作入ると、紅魔郷のステージ１がＥＸルーミアになる可能性が……それなんて無理ゲー？

激！丸秘設定。見るなよ！？絶対に見るんじゃないよ！！（前書き）

久々の設定集です。
梗くんとタマちゃんの二人だけですけどね。
タマちゃんは今後の数話のメインになる予定ですから。

梗くんに関しては、出揃った情報をまとめてみる意味合いもかねてます。正直みんな、今までに出た梗くんの設定なんて忘れてるだろうから。

激！丸秘設定。見るなよ！？絶対に見るんじゃないよ！！

名前：水無月　梗（みなづき　きょう）
種族：人間（能力使ってないと実はただの人間なんです）→龍神もしくわ妖怪（能力使用時）
年齢：１８歳（実年齢不明すぎるので外見年齢）
容姿：銀色の長い髪を後ろで一つ括りにしている。目は蒼い。身長はやや低め、けど本人は凄く低いと思い込んでいる。縁の言った言葉を真に受けたのと、後は価値観の違いとでも言うべきか。
性格：最近はそんなに諦観することは無くなった。自分で割りと何でも出来るからだと思われる。ただやはり面倒事はまだまだ嫌いな様子。ただ呆れながらも、紫の持ってくる厄介事に巻き込まれている辺り、身内には甘いのかもしれない。基本的に自分の大切なものとそうでないものとを分けていて、大切なもの以外にはけっこう非情。とういうかどうでもいいとしか思ってない。
口調：一人称「ボク」。やや優し目な口調（～だねえ、かもね、～だよね）。
所属：博麗神社の祭神（月に行くことで旅の目的は果たしてので帰ってきた）
能力：鏡界を操る程度の能力（色々と謎が多い）？
　八卦を司る程度の能力（厳密に言うと、梗本来の能力でなく、能力で龍神となった時の能力）
備考：実はまだ人間止めてなかったことに、割りと最近になって気づいた。実は鏡界を操る程度の能力で自分へ龍神の投影を無意識的にやっていただけなので、止めるとただの人間に戻る。神力自体は

梗自身に宿っているので、ただの、という言い方が正しいのかどうかは知らないが。
最近、実は自分の中に変なものがいることに気づいて、色々画策中。
今代の毒舌巫女のことはけっこう可愛がっている様子。猫みたいで可愛いらしい。

名前：博麗　霊（はくれい　一たま）
種族：人間
年齢：１３歳
容姿：ろりぃ。セミロングくらいの黒髪を一つ括りにして前に垂らしている。目は普通に黒い。典型的な日本人。黒は五行で水を象徴するので、元水神の巫女としてはかなり意味合いが強い。
性格：好きな人にほど甘えられない。どうでもいいやつほど態度が恭しい……他人行儀とも言う。割と言うことは毒舌気味。無表情から放たれる絶対零度の視線だけで、人が殺せるという噂も……。
口調：一人称「私」。一言で言って変な口調（～じゃねーですか、～だってんですよ）。
所属：博麗神社の巫女
能力：まだ考えてません。

備考：成長期で周りの女の子はみんな背も伸び、体つきも変わっていっているのに、自分だけなぜか変わらないことを気にしてたりする。毎晩お風呂で、ペターンな自分の体を見て溜息をついてるとか何とか。そう言えばどこぞの巫女さんも昔幽香に胸ネタで弄られてたな～。梗の巫女の宿命なのだろうか？

外見可愛い幼女ですが、博麗の巫女だけあって、普通に強いです。機嫌が悪いときは、本気で情け容赦ないので、一部妖怪の間では鬼巫女と呼ばれているとか何とか。

胸の話題は厳禁。口にして針達磨（はりだるま）にされた妖怪は数知れず。口にするとキレます。その際の戦闘力は……１００００……１２０００…バカな、まだ上昇しているだと?!

梗くんに助けられた時は、体調が悪かったのと、まだ若さがあったのとの二つが原因で油断していたから。

外見だけ見るなら可愛いので、里の男から求婚されたことがあるらしい（時代が時代なので、そこまで変でも無い……と、思う。）。

返答はまず第一声「変態」の一言から始まり、その後求婚してきた男性は再起不能になるまで叩きのめされたとか何とか（その後、その男性は女性恐怖症に……）。お兄ちゃんと呼んでくれるなら死んでも良い。

ちなみに、ここまでの設定、全部作者が今考えたものなんで、作中に出てくるかどうかは知りません。

激！丸秘設定。見るなよ！？絶対に見るんじゃないよ！！（後書き）

半分以上冗談なノリで作ってみました。
タマちゃんに関しては、完全に書きながら考えた。
ホント、キーボードの上に手を置くと、色々と妄想が浮かび上がってくるんですよ。

誰か～～、タマちゃんの絵をくれ～～～！！！
と思う今日この頃の雪代でした。絵心欲しいなあ。中学生の落書きレベルの才能しか無いからなあ。

六十話　暗い空。重苦しい夜に、鴉啼く。っていうと詩的だと思わない？（前書

というわけで、更新。
ルーミアバンザーイな話になる予定。
さすがに紅魔郷の一面からＥＸルーミアは無理。

六十話　暗い空。重苦しい夜に、鴉啼く。っていうと詩的だと思わない？

暗い空を見上げて、一つ溜息をつく。

「さすがに……三日も雨続きじゃ、気も滅入るねえ」

朝から雨模様な空に、そんな愚痴をこぼす。

「白霊様。メシできたってんですよ」

「はいはい、すぐ行くよ」

まあ、愚痴っていても、変わらないし、農家の方々には寧ろ良いことらしいので、放っておいてるんだけどね。

「しかし、こうも雨が続くとやることが無いよねえ」

「私は境内の掃除が無い代わりに、雨漏りの修理やらねーといけませんがね」

「雨漏りなんてしてるの？」

「建てられてから何年経ってるのか知りませんが、何十年も建ってたらそれは雨漏りもするってんですよ」

なるほど、この神社一応築二、三百年だからねえ。

「じゃあ、後で水避けの結界張っておくから、雨漏りの修理はいい

よ」

八卦を司る程度の能力は割りと日常的な便利な使い方が出来る。火除けも出来るし、雷避けも、地形変化防止で、地震や土砂崩れにも耐性が出来る。さらに、山も象徴しているので、山を豊かにしたりも出来る。

水避けは読んで字の如く。敷地内を結界で覆い、水気の侵入を阻害する。雨避けくらいにはなるよ。

「なんつう反則的な……きたねー、さすが神様、きたねーです」

何かタマちゃんがブツブツ言ってるけど、スルーで。

以前、妖怪の山で貰った、河童製の将棋盤を広げ、タマちゃんと二人、将棋を打つ。

雨漏りの修理に半日費やす予定だったらしいので、時間が空いたらしい。

「やり方知らねー相手に、これは苛めってもんじゃねーですか」

「実戦こそ何よりの訓練ってね。まあ、実際やって覚えてみなよ、負けたからって特に何かあるわけでもないし」

パチン、と駒を一つ進めながら、そう言う。

「ところで、雨漏りなら何で一昨日やらなかったの？雨は今日で三日目だよ？」

「一昨日と昨日は奥の倉庫の整理で忙しくて、雨漏りに気づけなかったってんですよ」

「倉庫？ああ、昔色々入れたなあ。鏡一枚あればここに帰って来れたし、旅先で色々拾ったよ」
「ガラクタばかりだったら全部捨ててやろうと思ってたのに、全部とんでもないもんばっかじゃねーですか」
お陰で、何一つ捨てられねーです、とタマちゃんが愚痴るのを聞いて、苦笑いする。

「ていうか、何であんな鏡類が多いんだか……保管するほうの身にもなれってんです」
「あ～、ダメだよタマちゃん。鏡類は捨てたら。八咫鏡とか入ってるからね」

ズテン

そう言った瞬間、タマちゃんがこけた。

「なんてもんポンポンと置いてやがりますか！！？というか、何でそんなもんがここにありやがります！？！！？」
「何でって、ちょっとかっぱらってきたから。だいたい二百年前後くらい前に、平家っていう家があってね～。そこの人たちが持ってたから、八尺瓊勾玉と一緒にもらってきたんだよ」
「な、な、なななな……」

口をパクパクとさせているタマちゃん。うん、何か可愛いかもね。

「それこそ御神体にでもすればいいじゃねーですか！？え、じゃあ本殿の御神体って、それよりも凄い……」
「神社を移転した時に変えてね、今は邪馬台国っていう昔の国にあ

った銅鏡を飾ってあるよ」
何と驚き、神奈子が持っていたのをくれたんだよねえ。邪馬台国は中央にあったらしいっていう説もあるけど、ホントだったのかねえ？
「うーん、凄いと言えば凄いけど、八咫鏡ほどの衝撃はねーですね……」
と、考えていると、タマちゃんがうんうん唸っている。

「とまあ、そんなことを言ってる間に、王手」
「んな！？あ、えっと、王をこっちに」
「そうすると、今度はこっちかな、王手」
「えっと、えっと、王を……あ……ない……投了だってんですよ」

がっくり項垂れたタマちゃん。少し恨めしそうにこちらを睨んでいる。
「ふふ、頑張った頑張った。十分健闘してたよ」
そう言って、下げた頭を撫でてあげると、猫みたいに表情が柔らかくなって……。
「って、何しやがりますか！？」
はっとなって、こちらを睨んでくる。少し涙目になってるのが……縁の時代風に言うなら、すごく萌える。

タマちゃんで遊びながら悠々と午後を過ごす。
「こういうのんびりとした日が続けばいいのにねえ～」

けど、ボクは知らなかったんだ。

こういう台詞が、縁の時代で言うフラグと呼ばれる恐ろしいものだったなんて。

知らなかったんだ。

夕方。だいたい酉の刻の正刻（六時）くらい。
季節は水無月（六月）。
梅雨時という言葉の通り、雨が良く降っている季節。

夏の季節に入るだけあって、日の入りが遅く、この時間帯でもまだ太陽が出ている。
と言っても、雨雲で影ってはいるのだけど。

「……ふーん」

心なし小声で呟く。タマちゃんはまだ気づいていない。まあ、歳を考えれば今でも十分ではあるけど。ボクの巫女さんである以上、気づいてくれないかな、などと神バカ（？）なことを考えてみる。

鳥居を越えて、長い長い階段まで行く。そこからは幻想郷が一望できるのだが。

「暗いねえ」

少しずつ、少しずつ、辺りが闇に閉ざされていっている。あまりにも僅か過ぎて、中々変化に気づけないのだけれど。

「周囲一帯に、妖力が充満してきてる」

そして、その妖力が満ちた範囲でだけその変化は起こっている。
つまり、これは。

「妖怪の仕業か」

目を細め、呟く。その時、後ろから足音がしたので、振り返る。

「はぁはぁ、何か変な感じがしねーですか？」

タマちゃんが慌てた様子で、走って来ていた。
その様子を見て、ボクは笑う。

「うん、よく気づいたね。変化が小さすぎて分かり難いけど、段々辺りが暗くなってるよ」

ボクの言葉にタマちゃんの目が変わる。それは……。

「そういうこと……異変っつうことですか」

戦う人間の目。鋭く尖らせた視線で、周囲を見、そしてそこら中に漂う妖力を見つけて目を見開く。

「異変って？」
「里では、妖怪なんかが起した大きな事件をそう呼ぶみてーですよ」

異変ね、異変。なるほど、言い得て妙かもしれない。

「行くよ。博麗霊。仕事だ」

そう言って、ボクは嗤い。

「やってやるってんですよ」

そう言って、彼女は嗤った。

六十話　暗い空。重苦しい夜に、鴉啼く。っていうと詩的だと思わない？（後書

タマちゃん何気に初めての異変。まだ十三くらいだしね。霊夢がおかしすぎるんだと思う今日この頃。
Ｒｅｗｒｉｔｅ買ったんで、二、三日は更新しないかもです。
サラダバー。

六十一話　人間が魅せる話だよ。人の可能性っていうのは凄いよ、やっぱ。

タマちゃん無双じゃねえけど。
タマちゃんの話が中心。

六十一話　人間が魅せる話だよ。人の可能性っていうのは凄いよ、やっぱ。

博麗神社の退魔術というのは、単純な陰陽術では無い。
その最もな例が、封魔針と呼ばれる針だと思う。

「タマちゃん。その針何？」
「はぁ？封魔針じゃねーですか」
「封魔針？」
「知らねーんですか？読んで字の如く、魔を封じる針だってんです」
初めて見た……ことも無いか？

「ああ、霊夢が何か使ってた気がする。暗器でも使ってるのかと思ったら、それだったんだね」
初めて知った。

「それって本当に効果あるの？」
ボクの問いに、タマちゃんは結構と答えた。

「ふうん、まあいいや。もう行ける？」
さきほどまで炊事していたので、術符などを取りに行っていたタマちゃんにそう尋ねると、しっかりと頷く。

「そう、じゃあ行こうか」

「その前に、白霊様も行くってんですか？」
純粋に不思議そうなタマちゃんに、こくりと頷く。
「今回ばかりはタマちゃんじゃあ手に負えないからね」
遠くに感じる強大な妖力を見つめ、そう呟く。

正直言って、タマちゃんの実力は低くない。
感知や結界と言った能力はまあ歳相応だけど、戦闘技能は歳不相応に高い。
戦い方は一言に言って、反撃型。ようするにカウンター。能力の関係もあるんだろうけどね。
タマちゃん、こと博麗霊の能力は《先（せん）を取る程度の能力》。
簡単に言うと、敵が動くという気風を感じ取れるらしい。
そのせいで、相手の先の先を取るカウンターという非常にハイレベルな戦い方になっている。
一言で言い表すなら『撃たれる前に討つ』。誤字じゃないよ？
酷い時には一切の抵抗すら許されず、ひたすらに符で打ち倒されることすらあるしね。

けれど、やっぱり人間だよね。殺し合いとなると、どうしても他と比べて一歩弱い部分がある。
特に、今回のような強大な力を持った相手との戦いとなると、ね。
それでも弱い部類の中妖怪なら倒せるタマちゃんは立派に人外指定してもいいと思う。
このまま経験を積んで大きくなったら、大妖怪と互角に遣り合えるかも。どんな人間だよって自分でも思うけど。

妖力の渦巻く中心を目指し飛ぶ。道中にも妖怪が出てくるけど、タマちゃんが先を取って出てきた瞬間には消し炭にしてくれるので、楽々進む。

うーん、タマちゃん凄いなあ。もう雑魚妖怪は瞬殺かあ。

天才と呼ばれる人間は、往々にして伸びる時は一気に伸びる。特に戦闘関連の才能を持っている人間は、その戦闘の真っ最中に急激な伸びを見せるんだけど。

技術だけでなく、霊力まで徐々に上がるというのは凄いねえ。

感情の触れ幅で結構上下したりするけど、タマちゃんの場合、感情をスイッチみたいにオンオフして、戦闘時と平時で分けているらしい。本人から聞いた。

以前縁がやってたＲＰＧ風に言うなら、今タマちゃんは経験値を積んでレベルアップしてる最中なんだろうね。

ついでに言うと、さっきからボクもタマちゃんも無言だ。タマちゃんは多分、その目で先を見続けているんだろう。そして、その目に敵を捉えると、勘だけでタイミングを併せて符を投げ、一発で敵を撃ち落している。

ボクはその様子をじっと見ている。互いに余計なことは言わない、今は実戦の真っ只中にいるのだから。

ねえ、紫、やっぱ人間って凄いよ。無性にそんなことを思った。

「タマちゃん。調子悪くなったりしてない？」
「別にどうもしてねーですが？」
「そう、ここより先に行くと、妖力がさらに濃くなるよ。中てられると危険だから、気分悪くなったらすぐに教えてね」
「了解です」

森の上空で一字止まる。里で森と聞けば、魔法の森（いつかの茸だらけの森）という言葉が出てくるけれど、別にこの辺りにはそれ以外にも森はたくさんある。規模の大小で言えば、魔法の森が一番だというだけだ。

下に見えるのはそんな何の変哲も無い森の一つ。けれど、今は木が見えないくらい黒い闇に覆われている。

「あそこに大本がいるよ。正直タマちゃんは危険だからここまでにして欲しいところだけど」
言っても聞かないだろうね。
「ここまで来て帰れって、冗談じゃねーってんですよ」
「だろうねえ。だから、自分の身が最優先だよ。キミが一番脆いのだから」
「……了解です」

正直おしいと思う。人間を見下すわけではないけど、タマちゃんが妖怪だったらとんでもなく強かっただろうから。けれど、人間だからこそ、タマちゃんは強いのではないか、とも思う。

さてはて、どうなのやら。

「じゃあ、行くかな？」

「行くってんですよ」

そう言って、眼下の森へと飛び込んで行く。

視界が暗い。森の中は闇に包まれて、ほとんど何も見えない。

「タマちゃん、見えてる？」

「勘で大体避けれるんで、問題ねーです」

なんだその勘……ボクも欲しい。

視界はほぼ零。その中をこの騒動の中心だろう妖怪の妖力だけを頼りにして飛ぶ。

途中で木にぶつかったりするけど、ボクのほうが堅いので、木のほうが砕け散る。

けど、この妖力どっかで感じたことがあるんだよねえ。

気のせいかと思ったけど、どうにも気になる。

ずっと昔というほどでも無いけど。

そう、ほんの二、三百年前くらいに……。

そんなことを考えながら飛んでいる内に、どこか広いところに飛び出た。

闇で視力を奪われ、妖怪たちも活動を潜めているのか、道中一度も出てこなかった。

そして、飛び出た先では、何故か闇が消えており。

「うーん……何か覚えのある臭い」

そこに、彼女がいて。

「ねえ……あなたは食べられる人間？」

口の端を吊り上げ、嗤ってそう聞いてきた。

六十一話　人間が魅せる話だよ。人の可能性っていうのは凄いよ、やっぱ。

Q．か、彼女は一体誰ナンダー！？
A．ルーミアです。

誰だってわかるでしょ。普通に闇を操る程度の彼女です。
この頃はまだリボン無いです。そういう設定です。
というわけで、初めてタマちゃんの能力が出ました。
どこかで聞いたような、そうでも無いような能力ですよ。
イメージ的に相手が動こうとした瞬間に、動かそうとした箇所に針がささるような戦い方。
威力さえあれば、けっこう強いっす。

というわけでまた次回。

六十二話　あんた、もしかして鳥目？人は暗いところでは物が良く見えないのよ

いやあ、モンハンに熱狂してたら、いつの間にか、時間が経ってました。
ここで一つ下らないお話。

自動車学校　応急手当の授業にて
「はい、では、すぐ傍で、車にはねられた人がいます、あなたならどうしますか？」
一人目。
「はい、救急車を呼びます」
二人目。
「病院に電話します」↑自分です。
三人目。
「以下同文」
四人目。
「応急手当をします」

取り繕って、病院に電話、と言いましたが、内心では「棺桶に入れて、教会に連れて行く。その後、神父にゴールドをわたして復活させてもらう」などという考えが思いつき、変に笑いのスイッチが入ったまま、授業を一時間過ごすことに。お陰で、ニヤニヤする顔を必死に取り繕うのに苦労しました。

という何の山も落ちも無いバカな話でした。

六十二話　あんた、もしかして鳥目？人は暗いところでは物が良く見えないのよ

なるほど、と思った。
どこかで感じた覚えのある妖力だと思った。
一度きちんと会ってたんだから当たり前だ。

「キミか……ルーミア」
「あれ？……どっかで見たよーな……」
「梗だよ。水無月梗。三百年くらい前に会ったでしょ？」

そう言うと、ルーミアはしばらく考え込むような素振りをして。

「ああ、会ったわねー……そう言えば」

そう言って頷いた。

「それで、幻想郷に闇を振りまいているのはキミの仕業？」

「そうよー」

あっさりとした答え。それは、隠す気もないからかな。
「止めてくれない？」

「どうしてー？」
心底不思議そうな顔。まあ、人食い妖怪に言っても無駄だろうけど。

「里の人間がキミの妖力に中てられると、最悪死んだりするんだよ」

「大丈夫よー」

何の問題も無い、そんな口調で彼女は言う。

「後で私が全部食べるから」

まあ、そんなものだろうな、とは思ってた。その答えに後ろでタマちゃんが身を固くした。

「大丈夫だよ、タマちゃん。また守ってあげるから」

その姿にふと思い出した、一年前の記憶。そして沸いて出た言葉に、タマちゃんが目を見開いた。

「大丈夫。いい子だから下がってて。ここは、危ないから」

ボクの言葉に、やや呆然としつつ、タマちゃんは森の上空へと退避する。

「ねえ、ルーミア。ボク、前に言ったよね」

そう、あの時ボクは確かに言った。

「『そこの里の神だよ。手を出したらるーみゃも倒すから出しちゃだめだよ?』ってね」

発動《水雷》。
何の予告も無く、突然に地面を爆破する。
「キミがこの闇を止めないというのなら」
悪いけど。
「倒させてもらうよ」

発動《水槌》。
落ちてきた巨大な水球に森の一部が押し潰される。

轟音。そして、その後の静寂。

「……まあ、普通の妖怪ならこれで終りだろうけど」

残念、相手は大妖怪の上位。立派な化け物レベルだ。

「くす」

ふと聞こえた哂い声の頼りに、体を捻る。
瞬間、今までボクの体があった場所を黒い黒い針のようなものが通り抜ける。

「……闇の物質化ってことかな……多分影も。つまり」
周辺全てがルーミアの武器ってことか。ちょっときついね。

覚醒「パニッシュ」

ルーミアが哂いながら呟く。

周囲が一瞬光る。

そして。

「な！！……に！？」

ボクを目掛け、次々と妖力弾が飛来する。

それを避ける。避けて避けて、そして避けきれない弾を拳で弾く。

「何今の……」

ルーミアは宵闇の妖怪じゃなかったっけ？何で光ったわけ？

「クスクス」

そんなボクの疑問に、ルーミアはただただ哂って。

狂月「ルナライトレイ」

そう呟いた。

頭を過ぎる嫌な予感に、咄嗟に飛び上がる。一瞬遅れて、ボクのいた場所を二本のレーザーのようなものがなぎ払う。

「わお……」

一言言って、強くなっている。前に会った時は、妹紅ちゃんより少し強いくらいだったはずなのに。

いや、あれが全力とは限らないわけだけれど。

「何か前よりずっと強くない？」

「あはは、そう？そうかもねー、だってここは、闇夜は私の領域なんだから」

その言葉にハッとなって空を見上げる。神社を出た時、確かにまだ夕焼け空だったはずなのに、今は何故か夜空となっていた。

夜を早めた？時間……なんて操れるわけないか。前は普通に闇を纏うだけの能力だったし、じゃあ。と、そこまで考えた、その時。

影閃「ストゥームブリンガー」

言葉と共に、ルーミアの手に闇を纏った黒い大剣が出現する。

「ふふ」

含むように笑い、そして突進してくる。

「ボク素手なのに、そっちは剣かあ」

やってらんないよねえ。ていうか。

「考える時間くらいちょうだいよ」

けれど、そんな時間も無く、ルーミアが間近に迫る。

「ふふ、とりあえず、死んでよねー」

「お断りだよ」

距離を測り、被せるようにして飛び出す。

「ストゥームブリンガー！！！」

振り下ろす大剣を紙一重で避け……ようとして。

「な、ぬ！？」

大剣と擦れ違った瞬間、衝撃で弾き飛ばされる。

「ふふ」

「そっか、そう言えば、周りの闇って物質化できるんだったね」
剣のインパクト強くて、忘れてたよ。

正直、ちょっとマズイ。この周囲が真っ暗なこの状況は、完全にルーミアの支配下だからなあ。圧倒的不利は否めない。例えるなら鮫と海の中で格闘するくらい、茂みの多い森の中で虎と戦うくらい不利だよ。

「仕方ない。後始末が面倒だから、やりたくは無かったけど」
そうも言ってられないか。こんなところで、タマちゃんが近くにいるのに、全力を出すのもアレだし。

発動《離為火》。

「燃えろ」

一言呟く。たったそれだけで、周囲の木々が燃え始める。

八卦が一つ『離』。通称は『離為火』。象徴するのは『火』。属性的には『陽』に属するので、この『陰』の闇を払うのには最適だ。
難点があるとすれば、森一つ焼き払うわけだから、後で戻しておかないといけないのが、かなり大変なことだろうねえ。戻しておかないと、この辺りに住んでいた妖怪がみんな別の場所に行ってしまう。そんなことになれば、住処を巡って争いが起こる。それは好ましくない。

「これで少しは、弱くなるのかな?」

苦々しい顔をしたルーミアを見て、ボクはそう呟いた。

やっぱり無理かー。と内心呟く。
会ってすぐに気づいた。あの時の自分より化け物染みた神だと。
忘れているフリをして、心の内を誤魔化していたけれど、内心、やばいなあ、とかそんなことをずっと反唱していた。
この闇を撒き散らした空間でなら、あの神にでも勝てるかと思っていたのだけれども。

まさかこんな一瞬で覆されるなんてねー。

今の自分の能力は《夜を司る程度の能力》と言う。少し早い夜を呼び込んだのも、この能力であり。周囲一帯を暗闇で覆ったのもこの能力。――ちなみに、先ほどの光は、月の光。夜を司るだけに、そういうことも出来る。――そして、この闇夜は私の領域。ならば、その領域でなら、あの神との差もぐっと縮まり、勝機も見える、はずだったのだけれど。

さっきまではいい感じだったのにねー。

そして、心の内で呟く。

けれど、まあ、まだ手が無いわけではない。
個々人で効き目がまるで違うとっておきが一つある。

梗には、随分と効きそうねー。

心闇「ダークサイドマインド」

そして、自身（わたし）のとっておきを唱えた。

六十二話　あんた、もしかして鳥目？人は暗いところでは物が良く見えないのよ

最後のはなんでしょうね？
ちなみに、まだスペカなんてありません。
それっぽく書いているだけで、ただの技です。

六十三話　もしも時を戻せたら、そう思うことってよくあるよねぇ。（前書き）

今回視点変更が多いので、分かりやすく視点変更するたびに行間を大きく開けています。一応分かるとは思いますけど……？

六十三話　もしも時を戻せたら、そう思うことってよくあるよねぇ。

強くなりたいと思った。

誰にも負けないくらい。
誰からも頼られるくらい。
どんな困難でも乗り越えられるくらい。

あの時のような後悔はしたくないから。

もう、大切なものを失くしたくは無かったから。

ボクが弱かったから……違う。
ボクが気づけなかったから……違う。
ボクが支えて上げられなかったから……違う。

だから、縁は死んだんだって……違う！！

許せなかった。何よりも、誰よりも、自身が許せなかった。どうして縁の苦しみに気づけなかったのか。

あれから気が遠くなるくらいの時が流れている。

けれど、ボクの中でそれは永久に変わる事無く、ボクの心を抑えつけている。

怖かった。その一言が。たった一言、誰かに呟かれるだけでボクはきっと心が折れてしまう。

どうして縁が死んで、ボクが生きてるんだって。

そう言われるのが……何よりも……怖かった。

世界が吹き飛ぶかと錯覚しそうになった。

突然、眼下の森から発せられた強大な力に、周囲一帯が震えていた。

「な…！？」

そしてその発せられたのが神力だということが私を驚かせた。

あの場所に神は一人しかいない。つまり、この神力は。

「白霊……様？」

さきほどから自身の勘が警告を発し続けている。逃げろと。危険だと。

「……それでも、行くしかねーじゃねーですか」

だって私は。

「あの方の、巫女だってんですよ……」

一呼吸し、心を落ち着かせると、一度きゅっと目を固く瞑り。そして、開く。

大丈夫。行ける。

心の内でその言葉を反芻し、そして、眼下の森へと飛び込んでいった。

何で？

……え？

何でキミが生きてるの？

……。

助けて欲しかったのに。だからキミを創ったのに。

……い。

まさか十日も傍にいて気づかれないなんて思わなかったよ。

……さい。
キミが死ねば良かったのに。そうすれば、ボクは生きれた。
……なさい。
ねえ……なんでキミが生きてるんだい？
ごめんなさい。

ふふ、と笑う。そうして、ようやく余裕を取り戻す。

心闇「ダークサイドマインド」。簡単に言えば、相手の心の闇を突く力。過去の心の傷を抉り、むざむざと見せ付ける。逃げ出したいようなその記憶と強制的に直面させられる。そして暗示効果で自身を苛んでしまう。自身で自身の心を壊す技。そうして精神の弱い相手ならば、その心はあっさりと壊れてしまう。後に残るのは、ただの動くことのない新鮮な食べ物だ。

あの神、梗は確かに反則的なくらいに強い。けれどそれは物理的な面でのみ。精神的な面では、子供のように脆い。何があったかは知らないが、暗示で増幅させるまでも無く、極端なくらいに自己嫌悪が激しかった。

目の前で苦しみ、膝をついた神の目の前に立ち、その大剣を振り上げる。

「いただきます」

にやりと笑い、そして。

一直線に大剣を。

振り下ろした。

「う……あ……」

声が掠れる。

あまりの衝撃に、脳が思考を止めそうになる。

「白……霊……様……？」

そこに。

ボロボロになった妖怪を片手で持ち上げ。

ギリギリと首を絞めて、噛っている……。

自身の祭る、神の姿が……そこにあった。

振り下ろした大剣に手応えが無かった。

そのことを疑問に思う間も無く、衝撃が体を襲う。

「ぐ……かは……っ！！！」

すぐに体勢を立て直し、そして自身を吹き飛ばした梗へと向く。

「……う……あ……あ……あ……」

何かを呟きながらこちらを見る目は、暗く、明らかに正気ではないことが伺える。

「アアアア

抜けそうになる力を無理矢理込めて、大剣で一刀の元に斬り伏せようとして。

バキン

神力の篭ったその右拳を軽く打ちつけられるだけで、自身の大剣は軽々と砕けた。

「ふふ……あはは、何よそれー……まさしく化け物ねー」

バカらし過ぎる。こんな化け物相手に、自分は勝とうとしていたのか！？

無謀！！今思えば、余りにも無謀！！！

まだ正気を保っている時ならば、生き残ることくらいは出来たかもしれない。

けれど。

「アハ、アハハハハハハ！！！！」

自我を失い、力の赴くままに暴走した今のこの神ではそれも無理だった。

明らかに様子がおかしい。
だからこそ、声を出した。

けれど、帰ってきたのは、歪な笑みだった。

背筋が凍りつくかと思うほどの寒々しい気配。なぜあんなことになっているかは知らないが、完全にあの妖怪も自身も殺す気でいる。

「……止めねーといけねーですね」

正直、怖い。あの圧倒的な暴力に、人間である自分が敵うはずも無い。
立ち向かえば待っているのは確実な死だ。
けれど逃げれば、きっとこの幻想郷が滅ぶ。直感がそう言っている。

何より。

「荒魂（あらみたま）を鎮魂（たましずめ）するのは、巫女の役目じゃねーですか」

あれだけ荒れている理由も分からないのに、鎮魂するのは、不可能に近い行為だが。

「大丈夫……大丈夫……出来るってんです」

それは信頼。初めて会った時、自身を守ってくれた神。そして、まだ二年にも満たない月日ではあるけれど、毎日あの方を見てきた。
あの方だけをずっと。そして……。

「また……守ってくれるって言った……勝手に信じさせてもらうけど、破んねーでくださいよ？」

だから信じる。

きっと大丈夫だって。

そして、目をきゅっと瞑り……すっと息を吸い――――――

六十三話　もしも時を戻せたら、そう思うことってよくあるよねえ。（後書き）

順番がおかしいけれど、まあわざとなんだけど、とりあえず、タマちゃん視点とルーミア視点を入れ替えて読めば、順番的にはばっちりになりますよ～。多分ね。

というわけでまた自戒しながら次回。

六十四話　知らぬが仏っていうけど、知ることが痛苦だとしても、知りたいこと

今回ちょっと迷走気味で、区切り良く作れなかったので、いつもより五百字くらい少ないです。

六十四話　知らぬが仏っていうけど、知ることが痛苦だとしても、知りたいこと

「……ごめんね」

「別にいいです……ちゃんと……止めてくれましたし」

「あはは……何か、声が聞こえたからね……」

「ちゃんと、届いたみてーですね」

「うん……大切な人の声だもの……聞こえないはずないよ」

「……（カァ）」

「顔真っ赤にしちゃって？どうしたの？」

「べ、別に……何でもねーです」

「ふうん……ふふ、可愛いね」

「……（プシュウ）」

「……ふふ」

「……」

「……良かったよ……約束……守れたから」

「……」

「……ねえ……縁……ボクはさ……ここにいてもいいのかな……？」

「……よく、意味が分かんねーですけど」

「……ううん、何でもないよ……そう、何でもないから、気にしないで」

「……」

「……」

「……何があったか知らねーですし、何て言って欲しいのかも知らねーですが……少なくとも私は……あなたがいねーなんて、嫌だってんですよ……」

「……」

「……」

「……ふふ……そっか。そう…か…。あはは、そうなんだ……」

「『　』様？」

「ううん、なんでもないよ……けど」

ありがとう……それだけだよ……。

ふと気づくと、目の前にタマちゃんがいた。

あれ？ボク、何してたんだっけ？

記憶を呼び起こそうとするが、ズキリと頭が痛む。

ルーミアと戦ってたところまでは覚えてるんだけどねえ。

なんだか、タマちゃんと話していたような気もするのだけれど……。

「……タマちゃん、どうかした？」

そう尋ねても、タマちゃんはじっとこちらを見るだけで何も答えない。

「タマちゃん……？」

はて、何だろうと思っていると、不意にこちらに倒れ掛かってきて。

ぼすん……という音がする。
大きく見開かれるボクの目。
気づけば、タマちゃんがぎゅっとボクを抱きしめていた。

「……」
何を言えばいいのか分からず、思いがけなく戸惑う。

「タマ……ちゃん？」

ふと、すすり泣くような声が聞こえたような気がして……。
ポン、とその頭に手を置いた。

やがてそっとボクから離れたタマちゃんが先に帰ってます、という言葉を残し、飛び立つ。

あれ？先に帰るって、ルーミアは？と思い、ふとその姿を探すと、すぐ近くで倒れたルーミアを見つける。

「……ボクがやったのかな？」

多分、タマちゃんじゃ勝てないだろうし、ボクなんだろうけど。
こんなにボロボロにした記憶無いんだけどねえ。

死傷寸前の大怪我をしたルーミアを見て、そんなことを思う。まあ、妖怪だし、放っておけば治るだろうけど。

「でもまあ……都合が良いと言えば、その通りだね」

そう呟き、懐から通常の五倍近くの長さのお札を取り出す。

殺すことはしない。けれど、放っておいてまた暴れられるのも困る。

だから、お札で力を封印をする。

「ま、せっかくだからリボンみたいに括って……」

妖力がすっかり減少し、子供に戻ったルーミアの頭部にリボンのようにお札をつけていく。神力を使った封印の術式を使っているので、妖怪であるルーミアには触れられないし、その妖力が一定以上になることも無くなる。

とにかく、これでこの異変は解決となるのかな？

ああ、それはそうと、タマちゃんと一回話し合わないといけないかもねえ。

……ねえ……縁……ボクはさ……ここにいてもいいのかな……？

あの方のその一言が、どうしても気になって。
ずっともやもやした気持ちを抱えたまま、いつの間にか神社に帰ってきていた。

当人はその時のことを覚えていない様子だったが、それでも確かに聞いた。
それがどういうことなのかは分からない。けれど、何気ない言葉だったからこそ、それが本心なのだと理解できて。

それが自分の知らないことだから、余計に考えてしまう。

「はぁ……」
よくよく考えてみれば、自分はあの方のことを何も知らない。
神だから……巫女だから……それが普通のはずなのだ。

だから、自分が今抱いている気持ちが間違っていることも理解している。

けれど。

「やっぱり……知りてーです……」
何より……。

「縁って誰だってんですか……」

ふとした拍子に出てきた、自身の知らぬその名前に。
「はぁ……」

自身でも気づかぬうちに、嫉妬していた。

六十四話　知らぬが仏っていうけど、知ることが痛苦だとしても、知りたいこと

あ～～～、話が進まない～～～～！！！！！

結局悩んでるのって一つなんですよね。

タマちゃんの進退です。

タマちゃんご存知の通り人間なんで原作まで残すのは普通なら無理です。

でも残しておけばそれはそれで面白そうだし、人間として一生を終えるのならそれでもまた話は書けるのです、どっちも良さそうだからこそ、どっちにするか悩んでしまう。

だからあえてみんなに聞いてみたい。タマちゃんは原作まで残すべき？

次で完全に分岐してしまうから、タマちゃんの進退が決まるまで次の投稿はないと思うが良い！！

番外三話　とあるタマちゃんの一日。狐の尻尾はもふもふ、猫の尻尾はすべすべ

久々に五千字近いよ！！快挙だね。
そしてとうとう１５００ｐｔ越えたよ！！
登録へって１４９９ｐｔに戻ったけどな。

鏡蛟紀初の短編。本編進めろ！タマちゃんどうなる！との声が聞こえそうだけど、よく考えると、タマちゃんのプロフィール、全然書いてないことに気づいた。というか、まだ考えてすらないや。なので、こうやって埋めてみることに。少しでもタマちゃんのことを知ってくださいな。彼女は今後も出ることになりましたから。

というか、今だいたい１２００~１３００年代くらいなんですが、藍様出してないことに気づき、急遽出演です。
藍様の尻尾は犠牲になったのだ、もふもふに埋もれて幸せそうなタマちゃん、その犠牲にな。

番外三話　とあるタマちゃんの一日。狐の尻尾はもふもふ、猫の尻尾はすべすべ

『タイトル？そうだねえ、言うならば【可愛げ】……かな？』

端的に言うと、揺れた。
揺れに揺れた。

って言っても、何のことかは分からないよねえ。
簡単に言うと、地震だよ。

ルーミアの起した異変から半年くらい。あれ以降、特に何か起こることも無く、日々のんびりと過ごしていた。
今日もそんな一日のはずだったんだ。

夕方、タマちゃんと二人での夕飯を済ませ、食後の一服に御茶を啜っていたその時。
突然、辺り一帯が揺れた。

「なななな！！！！！ななな、なんだだだっててんですかかか！！？！！？」
「うわあぁぁぁ……けけけけっこうゆゆゆ、揺れがおおおお、お

っきききいいねえぇぇ」

揺れのせいで、言葉がぶれながらの会話。

放っておくと長く揺れそうなので、ちょっと裏技を使うことにする。

「発動《坤為地》」

八卦の一つ《坤》は、地を象徴する。だから、地震を鎮めることも出来る。勿論、起すことも出来るけど、そこまで大規模なものは起せないんだよね。龍神っていうのは、地方によっては海神と崇められることがあるように、その前の竜や蛟が水神であるように、属性的には《水》なんだよね。その辺りが原因だろうな、と思ってる。

ちなみに《坤を創造する程度の能力》というのを諏訪子ちゃんが持っているけど、あれも大地を操る能力だよ。まあ、一概にそれだけとは言わないけど、そういうことも出来るのは確かだね。

「っとと、これで収まったかなあ……？タマちゃん、だいじょ……う……ぶ……？」

能力で地震を収め、タマちゃんを見ると、卓袱台の下に潜り込み、生まれたての小鹿のようにプルプルと震えていた。

やがて、地震が収まったことに気づき、そっと顔を出す。

「「……」」

ばっちりぶつかり合った目と目。やがて、はっとなって、元の位置に座りなおし、澄まし顔で何事も無かったかのように御茶を啜る。

でもね、タマちゃん。顔が真っ赤になってるし、足がまだ震えているよ？

「……ねえ、タマちゃｎ「うるせーです。私は全く怖がったりなんてしてねーです！！」……まだ何も言ってないよ……いやいや、いつも強気なタマちゃんにも意外と可愛いところが……って、うわ、あぶな！？」

思わずにやにやしながら、問おうとしたら、針が飛んできた……って、これ！！！？

「封魔針！？ちょ、こんな攻撃力激高な危険なもの投げる！？照れ隠しにはちょっと危ない……ってうわ、分かったもう言わないから、部屋の中でそんな危ないもの投げるなあああぁぁぁ！！！！」

まあ、霊力を込めなければ、当たってもただの針なんだけどねえ。

本日の教訓。あまりタマちゃんをからかわないようにしましょう。でも無理だよねえ。涙目で顔真っ赤にして上目使いでこっちを睨んでくるんだよ？

あまりにも可愛くて、思わず苛めたくなっちゃうじゃないか……。

っというか……空が飛べるのに、地震が怖いってのもおかしな話だよねえ。

いやはや、タマちゃんの意外な可愛げを発見した一日だったよ。

『もふもふ尻尾に癒されているタマちゃんを見てるだけで【癒される】よ、ホント』

それはとある日の朝。

「初めまして」

朝。朝食の場。何故かいる狐耳の人。

「……誰？」

「白霊様のお知り合いじゃねーんですか？」

胡散臭そうな目でボクを見るタマちゃん。

「朝いきなりやってきて、白霊様に会いてーとのことだったんで、連れてきたんですが？」

ここに狐耳さんがいる理由を説明するタマちゃん。はて？ボクにこんなもふい知り合いはいないんだけどねえ。

「だから初めてと言ったでしょう？お初御目にかかります、八雲藍

でございます」

どうやら初めてみたいだねえ……え……？

「八雲？」

「はい、八雲紫様の式でございます」

式……？

ああ、式神ね。

「紫に式なんていたんだね。しかも九尾か……」

狐の後ろでその存在を豪快に主張する九本の尾を見る。

「それで？紫の式がどうしてここに？」

「紫様より、一度挨拶に来るようにと言われまして」

「こんな朝から？」

「ついさきほど、今すぐに言ってくるように、と」

「本人は？」

「……」

何か目を逸らされた。心なしか呆れているようにも見える。

「えっと？紫、どうかしたの？」

「……寝てます」

「はい？」

「最近は一段落ついたからか、いつも昼近くまで寝ています」

「……何そのダメ人間」

紫と出会って、もう四、五百年くらいは経つのかな？

その間にも色々な妖怪に出会ってきたけど、一番人間臭くなった妖怪かもね、紫は。

「ああ、ところで、藍――紫の式だし、名前で呼ばせてもらうよ？――はご飯もう食べた？」

「……はい？」

「いや、だから、さっきいきなり来いって言われたんでしょ？こんな朝から。朝ごはんちゃんと食べたのかな？って」

まあ、うちは神社だからねえ。朝は結構早いよ。六時半くらいにはもう朝食だし。

「いえ……まだですが」

「タマちゃん、もう一人分ある？」

「なくはねーですね」

「じゃあそれに、この間作ったアレだしてあげて」

「アレですか……？でもアレは今晩の」

「ま、いいから。また作ればいいんだよ」

「はぁ……仕様がねーですね」

ぼやきつつもちゃんと取りに言ってくれるタマちゃんに微笑ましいものを感じつつ、藍を見ると少し困ったような顔をしていた。

「あの、博麗様？突然来訪しておきながらそこまでしていただくわけには……」

「梗だよ。ボクの名前。紫も呼んでるからそっちでいいよ。それに良いんだよ、食べていけば、どうせ紫は昼まで寝てるみたいだし」

それに……と続けて。

「きっと気に入るよ。キミならね」

そう付け加えた。
まあ、藍は不思議そうな顔をしていたけどね。

「……」

それはもう『黙々と』という言葉似合いすぎるほどの光景。
一心不乱に目の前の『稲荷寿司』を食べる藍に、思わず笑ってしまう。ふと見ると、タマちゃんも少し笑っていた。

二十世紀の日本で和食、とされている料理って、実はほとんどこの時代には無いんだよねえ。
稲荷寿司もその一つで、油揚げ自体が室町時代に伝来したもの。握り寿司の文化は江戸時代なんだよ？知ってた？
寿司自体は何百年か前からあるにはあるけど、知ってる？この時代の寿司って、縁の時代で言う鮒寿司に相当するものなんだよ？
一度だけ縁が食べた記憶が残ってるけど、食べた直後、地獄絵図が展開されたからねえ。もの凄い苦手意識が記憶と一緒に来てる。

でも毎日同じような内容の食事だと飽きるよねえ。だから、最近になって知識を元にこう言った簡単に作れそうなのから作ってるんだよ。タマちゃんも食事のためにか積極的に手伝ってくれてるし。
なんで神社で食事の開発してるんだろうね？まあ、美味しいものは人を幸せにしてくれるってことで。

目の前の狐さんみたいにね。

用事というのは、最初の挨拶だけだったらしく、藍はほくほく顔で帰ろうとしたのだが。
「そうは行くか！！タマちゃん！！」
「がってんです！！」
二人して飛び掛る。畳の上に押し倒し、そして……。
「もふもふ」
「もふもふ」
「いや、あの……」
「「もふもふもふも

持ってしまった不運をせいぜい呪ってくれ。

まあ、あれだね。幸せ、というか、幸せ過ぎた一日だったよ。

あの後、昼になって目覚めた紫が神社にやってきて、ようやく開放された藍が即座に逃げ出してたけど……ねえ？

紫と、また今度もふもふさせてくれたら代わりに何でも手伝うよ？オッケー。などという裏取引があったことを藍は知らないんだろうね……ふふ。

『タマちゃんの昔話だね、まあタマちゃんにも【色々あった】んだよ』

始まりはタマちゃんの一言からだった。

「縁ってのは……誰だってんですか？」

「……なんでその名前を知ってるのかな？」

いつもの楽しそうな声とは違う、底冷えしそうな冷たい声。

だからこそ、それが聞いてはいけない、触れてはならないものだと確信した。

けれども……もう引く気にもなれなかった私は、そのまま続けた。

「この間、白霊様自身が言ってたってんですよ。まあ、呆けてたみてーですし、覚えてねえみてーですが」

そう。たった一言呟き、そのまま黙り込んでしまう白霊様。

膝が震える。心の中は恐怖でいっぱいだった。大事な人に嫌われてしまうかもしれない恐怖。

けれど、それでも、知りたかった。

まだ、その理由が何なのか、気づいてはいなかったのだけれども……。

「……」

思わず黙り込んでしまった。タマちゃんの口から出た、予想外の名前に、思わず神力を抑えるのを忘れてしまうくらいに。

滲み出た神力の気配に、タマちゃんが苦しそうにしているのに、気づき、慌てて抑える。

そう……だね。少しだけなら言ってもいいかもしれない。あの時からずっと、ボクのことを慕い続けてきてくれた少女だから。

「縁はね……雪代縁って言うんだ」

「ゆきしろ……えにし？」

「うん。それで、彼女は、ボクの……家族だよ」

本人曰く、姉。けど実際はボクを創った人物だから、母親、というのが一番近いのだろう。けれど、《映した》のだから、双子というのなら、それもまた近い。そういう意味では姉というのも間違ってもないのかもしれない。

けれどやはり、この言い方が一番当てはまる。

家族、というのがね。

それ以上のことは言うつもりは無かったのだけれど、タマちゃんも聞くつもりは無かったのか、それ以降、その話が出ることは無かった。

そして、代わりに沸いた疑問を聞いてみることに。

「ねえタマちゃん。一つ疑問なんだけど、タマちゃんの家族は？」

どこの神社でも巫女に関して、神は口出しすることは余り無い。よほど気に入らなければ、神が換えるように要求するかもしれないけれど、基本的には人間の側で決められる。

博麗神社でもそこに違いは無い。そもそもボクはあまり神社にいなかったからね。

タマちゃんは最近帰ってきた時にはもうすでに巫女だった。

けれど、まだ十歳前後の時にすでに巫女だったということになる。

今まで気づかなかったけど、親とかどう思っているのだろう？ただでさえ、命の危険のある妖怪退治まで請け負っている巫女なのに。

だから聞いてみたのだけれど、タマちゃんはうーん、と唸る。

「家族、ですか。先々代の巫女様はもう引退して楽隠居になってんじゃねーですか？」

自由な人でしたから。と付け加える。

「いや、そうじゃなくて、両親とかは？」

「いねーですが？」

「……え？」

あまりにもあっさり答えられたので、一瞬理解できなかった。

「だから、両親いねーです。いや、いるかもしれないですが、私は知らねーです」

だって、私。

「生まれた時にはすでにこの神社に捨てられてましたから」

何の感情も見せない顔で、何の気持ちも悟らせい目で、何の思いも窺えない声で。

あっさりと、そう答えた。

番外三話　とあるタマちゃんの一日。狐の尻尾はもふもふ、猫の尻尾はすべすべ

最初の『』が短編ごとのタイトル。分かりますよね？よね？

タマちゃんは原作まで残ってもらうことに決定。

さらに、要望が多かったので猫化してもらうことに。

現在考えているのは二つ。

1、猫に食べらる。

2、障り猫に取り付かれる。

2は西尾先生の本を久々に読み返してて思いつきました。

パクリなどではないんだ！！インスパイアなんだ！！

最後に。

何故か書いてたら、非常に長くなったので、最後の話は次回、番外四話へと続きます。

番外四話　思い出の中の存在。本編には出てきませんよ？（前書き）

一週間も空けてしまい、申し訳ない。
モンハンでイベントやってるんで、それをやりまくってたら、すっかり遅く……。
寝不足で、思いつかなかったのもありますがね。

番外四話　思い出の中の存在。本編には出てきませんよ？

ざっ、と音がする。直後にゴロゴロと転がる体。
それが自身のものだと気づいた時、全身に痛みが襲う。

「ほら、さっさと立て。まだまだこの程度じゃ困るんだよ」
見下すようにこちらに視線を向ける巫女を、必死に睨み、そして立ち上がる。

「そうだ、それでいい。あたしのためにも、おまえ自身のためにも。早くお前には一人前の巫女になってもらわないと困るんだよ。タマ」
「……」

言葉はない。口の中が血だらけで、喋れないのもあるが、何より怒り心頭で声が出なかった。
ギリッ、と歯が軋む音。自身の口から漏れた音だと気づきもしない、無意識的な行動の理由は、悔しさ、そして怒り。

「さあ、続きと行こう。そして早くあたしに一撃入れてみな」
そう言って嗤う、彼女を見据え。

次の瞬間、地を蹴り、飛び出した。

ザパァァ

「けふけふ！？」

感じた冷たさで目が覚め、そして吸い込んだ空気に混じった水が肺へと入り、咳き込む。

「起きたかい？なら夕方まで休憩。夕方から術の修行をするよ」

言うだけ言って、彼女はその場を立ち去る。

「けふけふ……」

体術の修行、そしてその途中で気絶させられ、水をかけられ起される。そんな流れにももう慣れてしまったもので、口内の水を吐き出し、ゆっくり息を整える。

「……けふ、けふけふ」

道中、肺に入った水滴に、咳き込みはしたが、ようやく息を落ち着かせた。

今はだいたい夕方前、言われた時刻まで半刻ほど時間の猶予があるだろうか。

その間は休憩とのことだったが、全身ずぶ濡れなままではマズイので、重い体を引きずり、自室へと戻る。

本当は湯でも沸かしたいところだが、そんな時間も無いので、全身を手拭いで軽く拭き、新しい巫女服を着て済ます。

「……ふわぁ」

と、そこで一つ欠伸が出る。

少しばかり眠い。さきほどまでのは気絶だ、睡眠ではない。

うとうと、と急速に薄れゆく意識。

そして、部屋から出た縁側の柱に寄りかかったところで、目の前が真っ暗になった。

時間になってもタマが来ないことを不審に思い、タマの部屋へと向かう。時間の都合上、恐らく風呂には入っていないだろう。なら、部屋で着替えているはず。どこかに行くほどの時間も体力も残っていないだろうから、いるならばまだ部屋にいるはずだ。

そう考え、タマの部屋へと行くと、部屋の外の縁側でタマが柱によりかかり、寝ていた。

「はぁ、寝るのは構わないが、こんなところで寝るな」

溜息を一つ吐き、その体を抱き上げ、タマの部屋へと入る。布団を片手間に取り出し、そこにタマを寝かせる。

スゥスゥ、と静かに呼吸する幼い少女。その姿は昔を思い起こさせて。

「もう少し寝かせるかねぇ」

まだ、時間はあるのだから。

自身が霊（たま）と名づけた生後間もない赤子を拾ったのは、六年近く前のことだ。

ふと夜中に聞こえた誰かの泣く声に起きる。探すと、鳥居の下に捨てられた子供がいた。

当初、人里の人たちと相談し、誰かに預けるつもりでいた。

それが、ただの子供であったのならば。

抱き上げて初めて気づくのは、その霊力の強さ。自分よりも遥かに高いその霊力に、その瞬間、この子をここで育てようと決めた。

探したが、赤子の名前を示すようなものは無かったので、自身の名を一字与え、霊（たま）と名づけ、次代の巫女とすることとした。

拾ってから三年後、無事に育った霊に次代の巫女になるように伝え、それと同時に修行を始めることも伝える。

それから始まった、自身でも厳しすぎると思うような、文字通り血反吐を吐くような日々。

正直言わせてもらって、ここまで着いてきていること事態が想像以上だった。

本来なら巫女の修行は、十年から二十年かけ、巫女が交代するのは、二十代頃からだ。

実際、自身も二十四でこの神社を継いだ。

博麗の巫女は、世襲制ではない。人里の依頼で妖怪退治を請け負う以上、完全実力主義の必要がある。

それでも、今まで途切れたことも、妖怪との戦いの途中で命を落とした者もいないのは、その質の高さからか、それとも別の要因からか。

本来、巫女が実力主義である必要などあるはずも無い。巫女は本来神を祭る存在なのだから。

祭られた神こそが、人を妖怪から守らなければならないのだから。

けれども、博麗神社には神がいない。いや、いるにはいるのだが、いつでも不在で、幸運でもなければ会えないらしい。少なくとも自身はあったことは無い。

けれども、信仰が途絶えないのは、過去からずっとこの辺りを妖怪、災害、その他もろもろから守ってきた実績らしい。

そして、そんな特異な神社であるからこそ、巫女には相応の実力が必要となる。

今の霊ではまだ足りない。本来なら後十年以上かけてじっくり育てることが出来れば良かったのだが。

後、持って三年程度。それが自身に残された命。病に罹り、蝕まれた命。

それが、こんな焦ったような修行の理由。

自身が死ねば、神社を継ぐのは霊だ。後三年、つまり七、八歳で命賭けの実戦に出なければならなくなるということ。

未熟はそのまま死に繋がる。

「そんなことは、させないよ。絶対にね」

ぎゅっと、拳を握る。

だって、あの子は。

「大切な、あたしの子供なのだから」

血の繋がりなど関係無い。

あの子が自身をどう思っているかは知らない。けれど、自身にとってあの子は大切な子供だ。

だから……。

「絶対に……死なせないよ」

穏やかに眠る少女の寝顔を見て、一人そう決意した。

それは、あまりにも突然だった。

「巫女様！！！！」

いつものように、体術の修行中、突然血を吐き、膝をついた彼女に驚愕し、慌てて傍へと行く。

「いい、大丈夫だ」

「巫女様！！すぐに横にならねーと！！」

「いいから！！落ち着け！！」

威圧する声に、身を竦め、ようやく正気に戻る。

「いいかい、タマ。今この瞬間からこの神社をお前が継げ。お前も

これから博麗を名乗れ」

唐突に告げられた言葉に、また思考が停止しそうになる。

「な、何を……」

「前々から分かってたことだ。元々病床の身だったんだ、思っていたよりも半年も早かったがな」

その言葉にまた驚き、そして彼女が倒れた。

「巫女様！！」

倒れ伏した彼女を担ぎ、神社の中へと連れて行き。

そして、その日の晩、彼女が死んだ。

「それからは、毎日修行して、巫女様みてーに、あの人に託されたこの場所を守りたくて、博麗の巫女に相応しいだけの力が欲しくて、週に一回は妖怪退治やってました。それで、ある日、体調不慮のまま妖怪退治に出かけて、白霊様に助けてもらって、それで、今日に至るってわけですよ」

「……ふーん」

頬杖を突き、目を細めてそれだけを漏らす。

それから、ただ一言。

「……会って見たかったな」

そう、呟いた。

番外四話　思い出の中の存在。本編には出てきませんよ？（後書き）

人に歴史ありって話でした。

次の話から本編に戻ります。
いよいよタマちゃんは猫化するかなあ。

ああ、前も聞いたような気もするのですが、非常に気になっているので、また聞きます。
シリアスな話とコメディっぽい話、両方作ってますが、どっちが面白いと感じますか？参考として非常に聞きたいので、出来ればお答えください。

六十五話　ネコと不死と神と巫女、前編。なんともごちゃ混ぜな組み合わせだよ

今回ちょっと話がごちゃごちゃしてるかも。
何か、この小説の書き方が少し分からなくなってきた。

タイトル考えるのがもう面倒。でも、七十話まで続けてきたのだから、今更変えるのもどうかと思うしなあ。

六十五話　ネコと不死と神と巫女、前編。なんともごちゃ混ぜな組み合わせだよ

今の状態を一言で言い表すならば。

「どうしてこうなったんだろうねえ……」

ｏｒｚ、って感じかな？

「冗談じゃねーですよ！！！！！！！」

頭に立派な猫科動物の耳の生えたタマちゃんが怒髪天のごとく吼えた。

ホント、なんでこんなことになったんだろう？

順を追って説明すると。
まず、三日前にタマちゃんが化け猫退治をしたことから始まる。

「いいの？殺さなくて？」
「いいんですよ、別に……しばらくは悪さ出来無い程度にはしばいておきましたし」
「そう」

現在地、人里近くの森の中。人里から妖怪退治を頼まれたので、タマちゃん出動、それにボクが暇だったのでついて行ってみる、という形になっていた。

人里の人から聞いた話によると、どうも化け猫らしく、やたらすばしっこいらしい。
というわけで、その化け猫が来るのを待ち、来たところを撃退、という方針で動くことにしたタマちゃんだったんだけど、いざ対峙すると、その素早さに驚き、最終的に逃げられちゃったんだよねえ。

ボクがやってもよかったけど、もう一度やります、というタマちゃんの言葉を受けて、止めたんだよね。
それで、逃げられたのがちょっと悔しかったらしい不満顔のタマちゃんが何をしたのかと言えば。
地面の上に魚を置き、つっかえ棒で支えた籠を置くという何とも雑な罠を設置。

「いや……ただの猫ならまだしも、化け猫にこれは普通無理だよねえ」

さすがにその日は来ないだろうと思い、次の日朝から罠の近くで見張り。そしたら、またその化け猫がやってきて、しかも罠に嵌った。

え……？なんで？という疑問を余所に、タマちゃんが飛び出して行く。

まあ、それでも妖獣だからね、すぐに籠を跳ね除けた。

けど、その時間でタマちゃんの結界で囲まれて、あえなく御用になった。

対妖結界に捕らえられ、化け猫だったんだけど、タマちゃんはそれを殺すことはしなかった。

適当に痛めつけ、弱ったところで、近くの森に放してしまった。

で、最初に戻るというわけ。

「不思議なんだけどさ、なんであの化け猫、あんな手抜きな罠に引っかかってたの？」

いくら何でも、あんな雀を捕まえるための雑な罠で化け猫が捕まるはずも無い。

「能力です」

「……？……タマちゃんの能力って《先を取る程度の能力》だよね？」

「だから『視線の先』を『取った』んですよ」

うん？良く分からないんだけど？

「自分でもよくわかんねーですけど、視線を誘導したり、相手の視界から消したりもできるみてーです」

「便利な能力だねえ」

その翌日のこと。
朝神社の傍に小さな妖気を感じたので、外に出てみる。
「あー……これは。何と言うか」
神社の階段の途中で、昨日の化け猫が死んでいた。
全身傷だらけなのを見るに、あの後別の妖怪にでも襲われたのかな？

何でここにいるんだろうねえ。まあ、何となく理由は分かるけど。
「タマちゃんには見せられないねえ。面倒なことになりそうだし」
とまあ、そんなことを呟いた、その時。

噂をすれば影がさす、というか。

「どうかしたってんですか？白霊様？」
本人が来た。

「タマちゃん、来ちゃダメだよ」
と言ったけど、少し遅かったようで。

「あ……」

タマちゃんが見てしまう、ボクの足元にいる、自身が弱らせた猫を。その死に様を。

瞬間。

にゃー

と、そんな、猫の鳴き声が聞こえた気がして。
気づいた時には、もう遅かったんだ。

「ねえ、永琳……私たち、いつまでこうして隠れなければいけないのかしらね」
「仕方がありません、姫様。月の追っ手から逃げるためにも、今はこうするしか」
「分かってるわ……そんなこと。分かってる。ちょっと聞いただけよ」
「……」
「そんな顔しないの。それに、責任を感じているのなら、筋違いよ。こうなった責任は全て私にあるのだから」
「……はい」
「そうね、久しぶりにあそこに行って見ない？」
「は……？……いえ、そうですね、もう以前より数百年は経ちますし、それもよろしいかと」
「ふふ、貴方にしては珍しいわね」
「何がでしょうか？」

「無自覚なの？永琳、貴方今、何だか嬉しそうよ？」
「……そう、かもしれませんね」

「ふん……割りと数だけはいたけど、この程度みたいだね」
燃え盛る周囲一帯の中で、一人佇む。
「さて、これで頼まれたことも終わったし、一度戻るか」
一人呟きつつ、炎の中を何の恐怖も見せずに歩いていく。
「けど……いつになったら会えるのやら」
目的の人物がまだこの世界にいることは知っている。
なぜならそう教えてもらったのだから。
「嘘、じゃないだろうね。あの人ならもっと別の嘘を吐くだろうし」
思い出すその人は、基本的に嘘吐きだ。いや、正確には嘘はあまり吐かない。けれど人をわざと曲解させるように思考を誘導する。
「だから、あれは嘘じゃないんだろうさ」
本当だとは分かってはいる。探し出すまで長い時間がかかるだろうとは、最初から覚悟していたし、自分にも目的の人物にも時間という概念はあってないようなものだ。
だから、どこか大丈夫だと高をくくっていた。いつか必ず会える、絶対にたどり着くことは出来る、と。
「だから問題なのは、私自身の心……それは……分かっているよ」
体は人為らざるものとなろうと、心までは変わらなかった。だから、こんなにも辛い。
本当にいつか、辿り着くのだろうか？会えるのだろうか？そんな思いが沸いてしまう。
そう思う程度には、この世界は広かった。自身が今まで知りもしない体験をし、言葉の上でしか知らなかった地へと行った。そして、

世界を巡れば巡るほど、その世界の広さに驚き、そして、恐怖する。

永遠に、巡り会えないのではないか？そんな風に思ってしまう。

結局、それは、未だ心が変わっていないだけなのだとも気づかなかった。

六十五話　ネコと不死と神と巫女、前編。なんともごちゃ混ぜな組み合わせだよ

最初が博麗神社組み、次が輝夜と永琳コンビ、最後に妹紅です。
多分、次で終わると思う。中編は多分無い。

六十六話　ネコと不死と神と巫女、後編。猫の言い伝えって知ってる？（前書き

ラジオ小説が進まない……。
ラジオ小説執筆→一日で五百文字くらい。その後モンハン。
鏡蛟紀執筆→一日で千字ちょっと。その後モンハン。

鏡蛟紀はだいたい二千字ちょっとなので、三日か、四日に一度こうして更新されるのです……。ラジオェ……。

口調などでおかしな点があれば、指摘ください。修正しますので。

六十六話　ネコと不死と神と巫女、後編。猫の言い伝えって知ってる？

「な、なな、ななな！！」

タマちゃんが鏡を見て、金魚のように口をパクパクとさせている。

ボクは何と言えばいいのか分からず、視線を逸らしていた。

「なんだってんですかこれぇぇぇぇーーー！！！？」

頭部に猫の耳、臀部（お尻の辺り）に尻尾を生やしたタマちゃんが絶叫した。

例えば、化け猫と言えば、どんなことを想像する？

それこそ鬼のような、ぱっとした伝承はあまり無い。鍋島の化け猫騒動、というものもあるけれど、それこそ知っている人も少ないだろうしね。縁も自身のことが無かったら、きっと一生知らなかったのかもしれない。

逆に、猫の迷信というものは多い。

その中の一つにこんな言い伝えがある。

『道端などで見かけた猫の死体に対して「かわいそう」といった同情の気持ちを起こすと猫の霊に取り憑かれる』

話は変わるけれど、猫神というものを知っているかな？

『死んだネコのそばを通ると犬神、蛇神に加えて「猫神」に憑かれると言われ、これを避けるために「猫神うつんな、親子じゃないぞ」と唱える』何ていうのもある。

まあ、察しのいい人はもう分かったとは思うけど。

見事憑かれました。タマちゃん。あの化け猫に……。

で、その結果が。

「この立派な耳と、尻尾だよねえ」

「うるせーです！！」

ちなみに、この耳と尻尾、ちょっと敏感らしく。

「ひょい」

と軽く触れると。

「ひゃぁ！？」

と、飛び跳ねるほど驚いてくれる……ちょっと楽しいかも。

「何しやがります！！……なんで手をワキワキさせてんですか、ちょ、まさか……や、やめ」

軽く触れるだけでこれなら……ふふ……。

「……ぁ……ぁぅ……」

「ついカッとなってやった、反省はしているが、後悔はしていない」

床に突っ伏したタマちゃん。満足気なボク。後は適当に察してお

いて。

「さて、それはさておいて……困ったね」
実を言うと、本当に困っている。
「ボクお祓いとかそういうの苦手なんだけど」
物理的に掃うのは得意なんだけどねえ。

正直、タマちゃんが平気そうにしているから、分かり難いけれど、普通猫に取り付かれると、狂気染みた行動をし出す。要するに正気じゃいられなくなる。タマちゃんが平気そうなのは、一重に霊力の高さであの化け猫の精神汚染を弾いているからだろうねえ。
けど、放っておけばこのまま少しずつ妖怪化だろうねえ。それは困る。神社の巫女が妖怪猫というのは非常によろしく無いし、妖怪化した時、タマちゃんがタマちゃんのままである確証も無い。

よほどのことが無ければ、今すぐどうこうという話でもないけど、それでも放っておいて良いことでもない。

「仕方ないかな……紫にでも頼ってみるかな？」
このくらいの協力はしてくれるよねえ？藍が言うには、昼まで寝てるほど自堕落な暇人生活してるらしいしねえ。

タマちゃんをふと見る。床に突っ伏したままぐったりとして動かない。

「タマちゃん？」
「……」

へんじがない、ただのしかばねのようだ。

「って、そうじゃなくて、タマちゃん！？」
「……い」

あ、片手が上がった。

「うん、起きてる良かった。ちょっと、出かけてくるから、タマちゃんのほうでも動いておいて」
まあ、何にとか言わなくても、この状況なら猫のこと以外にはあり得ないだろうし、分かるよね？

うん、まあ。それだけ言ってボクは、その場を後にしたんだけれども。

今思えば、これが失敗だったのかもねえ。

むくり、と震える体に鞭打ち、起き上がる。
「う、うく……酷い目に……あったってんです」

その時のことを思い出し、腰が砕けそうになるのを堪えながら、壁に手を突き、何とか立ち上がる。
「とりあえず、行くっきゃないってんです」

自分が実は緊急ではないが、放って置いてはマズイ状況なのは分かっている。これでも巫女だ。それも実力主義の神社の巫女だ。何より、自身のことだ、それくらい分かる。

白霊様は自分のほうでも動いておけと言われた。ふざけているようで、あの方はあの方でちゃんと考えて動いている。なら自分も自分で考えて動こう。

「とりあえず……気は進まねーですが、あの人のところへ行きますか」

その前に頭巾か何かでこの耳を隠さないと、あの人の前でこんな醜態を曝せば、どうなることやら、というやつだ。

「……ホント、気は進まねーですがね」

そして、一つ、溜息をついた。

正午。ちょうどお昼時を指す言葉。

いつもなら、神社の中で巫女が二人分の昼食を作っているはずの時間帯。

けれど、しばらく前から、神社には誰もいなかった。

「無用心よね、そう思わない？永琳」

「そうですね、姫様」

そして、誰もいない神社にやってきて、中へと入っていく二人組み。

「はぁ……何だか懐かしいわ。ほんの一時居ただけなのにね」
「姫様、御茶です」
「あら、ありがとう、永琳」

そして、家主不在の家で遠慮も無く、寛いでいた。

「ところで、永琳、この間から難しい顔してたけれど、どうかしたのかしら？」
「いえ、姫様が気にするようなことでは」
「いいから、退屈なのよ、何でも良いから話してちょうだい」
「はぁ。それが、この間、地上へと持ち込んだものを詰めた荷物を整理していたのですが……その、未使用の薬が出てきまして」
「それが、どうかしたの？」
「私たちには必要ありませんし、処分しようと思ったのですが……
……その、軽々しく処分してもいいものでもなく」
「えっと、何でかしら？」
「それが、この薬……

……月で作った、蓬莱の薬の残りなんですよ」

六十六話　ネコと不死と神と巫女、後編。猫の言い伝えって知ってる？（後書き

後編なのに終わってない……。
ちなみに、後二話くらいコメディ展開、でその次がシリアス展開になる予定。
ヒント、梗くんはタマちゃんにどれくらい心を許しているか？
意味が分かれば展開もきっと分かる。

六十七話　苺……？いや、確かに美味しいけど、それってどうなんだろう？（前）

久々に三千字越えた。
そして、意味不明な回が始まる。

ラジオが進まね～よ～。

六十七話　苺……？いや、確かに美味しいけど、それってどうなんだろう？

「つ、疲れたってんですよ……」

夕刻、ようやく帰ってこれた我が家に思わず安堵の声が出る。

「い、生きて帰れたってんです……」

飼い殺しという恐ろしき未来を想像し、恐怖に身震いする。あの変態ならやりかねない……。

首輪をつけ、鎖に繋がれ、きっとそんな自分を見て笑うのだろう。

そんな恥辱だけは何としても逃れる、という勢いで行ったのが功を奏したのか、五体満足、無事に帰ることが出来た。

そして、さきほどまでの情景を思い出してしまい。

「うぅ～～～」

あまりの恐怖に思わず唸った……。

けれどそんな思考も、すぐに吹き飛んだ。

神社に帰ってみると、居間に誰かがいた痕跡があった。少なくとも、神社を出る前に御茶を出した覚えは無い。

「白霊様……？」

か、どうかは分からないが、複数人が居座って、そのままどこかに行ったような跡。ついでに言うなら、ここ以外には誰もいた形跡が無い。ということは……。

「泥棒……？」

それにしては、ここだけに居座ったというのはおかしい。探してみるけれど、玄関から居間までの間に微量だけれども乾燥した土のようなものが落ちていた。旅人でもやって来たのだろうか？

「あの方は交友関係が不明ですから、否定はできねーですか」

他の場所には落ちていなかったので、自分たちが神社を留守している間にやって来て、しばらくここで待っていたけれど、待ちきれなくなったか出て行った。この御茶をその時のもの、ということだろうか。

「ところで……」

この御茶と一緒に置かれている、薄紅色の塊は何だろう？

白地に薄めた紅を着色したような色合いの円形の物体。生まれてこのかた、こんなものは見たことが無かった。

「なんだってんでしょーね？」

それに、やや甘い香りがする、何かの果物の匂いだ。

と、そこで以前、白霊様が言っていたことを思い出す。

丸い、白い、甘い香りがする……

「これが以前言っていた、らむねとかいうやつですか？」

食べるとしゅわしゅわするとか何とか。しゅわしゅわ、って何だろう？

「……（ゴクリ）」

唾を飲み込む。目の前にあるのは、祭神が言っていたとても美味しいらしいもの。何よりも珍しい、生まれて始めてみたそれに、好

奇心が沸く。何より、自分もこれでも女子だ、甘い物には多少の興味がある。

「一つだけ、それくらいなら……」

鼻腔をくすぐる甘い香りと言う誘惑に、心は早々に負けを宣言し、そして卓袱台の上に置かれたいくつかの内の一粒を手に取る。

それを、口へと運んでいき……。

「げっ」
「あっ」
「まずっ」

後ろからそんな声が聞こえ。

ドクン

突然にやって来た心臓が跳ねたと錯覚するほどのそのショックに、意識を失った。

話をちょっと戻そうか。うん？誰に言ってるんだろう？
まあいいや、タマちゃんがとんでもないことをしてくれるその四

時間くらい前。

「すみません……」

申し訳なさそうな藍の言葉に、笑って返し、御茶を含む。

「まあ、紫が最近昼まで寝ていたのを忘れて、朝から来たボクも悪かったよ」

火急の用事、と言うわけでもないので、ややゆったりとしていた。

「まあ、もう少しで起きると思いますので」

「そう……ところでこんな時間まで寝てるなんて、紫は夜更かしでもしてるの？」

「いえ、単純に寝すぎなだけなのだと思います」

あはは、と笑う。ダメ人間ならぬ、ダメ妖怪八雲紫。

「案外あれなのかもね、藍が頼りになるから、紫も任せられるのかもしれないよ？」

「……どうでしょうね」

ちょっと嬉しそうなのは気のせいかな？

「ふと思ったんだけど、藍って呪術とかそういうのも精通してる？」

「まあ、それなりには」

「後、狐ってことは、憑き物関係も詳しかったりする？」

「狐憑き、というものもありますし」

あ、藍に聞いても良かったね。

「じゃあ、相談なんだけどさ」

さて、ここで芳しい成果は得られることやら。

結果的には結構な成果は得られた。

「なるほどね……これだけあればタマちゃんならどうにかなるかな

？」
本当は紫がいてくれれば助かるけどね。
「悪いけど、もう帰るね、今回はこれを聞きに来ただけだから」
「分かりました。ないとは思いますが、道中お気をつけて」
「うん、じゃあね」

そう言って神社に帰ったのが、一時間後。

帰ってみると、何故か随分前に別れたはずの二人がいた。
「とりあえず、お久しぶり、永琳ちゃん。そしてボクの饅頭を食べるな、輝夜」
「ええ、お久しぶりです。梗さん」
「おひはひふひ、ひょう」
「はぁ、とりあえず、輝夜は口の中のものを飲み込んでから喋りなよ」
呆れた声で告げると、輝夜は御茶で饅頭を流し込む。
「ぷはぁ、改めて。お久しぶり、梗」
「うん、お久しぶり。というか、ここに来て大丈夫だったの？」
確か二人とも逃亡してたはずでは？
「以前来たのは大分前ですから、派手なことは出来ないけれど、このくらいなら大丈夫です」
という永琳ちゃんの弁。なるほど、と納得。
「それで？結局何しに来たの？」
「あら、知り合いのところに来ることはそんなにいけなかったかしら？」
「そんなことないよ、久々に二人の様子も見れたし」
そう言って、ボクは微笑んだ。

「そう言えば、ボクより先に巫女さんがいなかった？」
「いえ？いなかったわよ。ねえ永琳」
「そうですね、いませんでした」
ふむ、じゃあタマちゃんのほうの心当たりにでも言ったのだろうか？
「じゃあ、仕様が無い。後にしようか。ところで永琳ちゃん、さっきから浮かない顔してどうかしたの？」
「……ええ、この薬をどうしようかと、悩んでて」
そう言って見せて来たのは、いくつかの錠剤。色がやや赤い。しかも何か良い香りがする。
「何これ？」
「蓬莱の薬よ」
答えたのは輝夜だった。
「……前に見たのはすっごい変な臭いを放つ液体の飲み薬だった気がするんだけど？」
「どうして梗さんがそれを知っているのかは不思議だけれど、そうね、以前のはその通りだったわ」
妹紅ちゃん、あの時実はかなり躊躇してたからねえ。壷の封を切れば、鼻が曲がりそうな臭いが溢れ出て、ボクなんて思わずあの薬消し去りそうになったからねえ。
一口飲み込むたびに、目から涙が溢れてたし。あれは絶対に飲みたくないと思ったよ。
「不死になるって、あの薬で一度死ねるかと思ったわよ」
遠い目で輝夜が呟く。永琳ちゃんもちょっと目が死んでる。永琳ちゃんですら……か。相当だったんだねえ。
「こほん、とにかく。あの薬はあまりにもマズイ（二重の意味で）ので、改良しました」
「ほほう、どこをどういう風に？」
「苺の香りにしてみました」

「「……」」

レッツ内緒話。

（え？あれ本気？マジで言ってる？）
（知らないわよ。どうしちゃったのかしら永琳。逃亡中に何か悪いものでも食べたのかしら？）
（天然という線はどうだろう？）
（それこそ永琳の昔からの知り合いのあなたのほうが知っているんじゃないの？）
（うーん、どうだろう？あんな感じだった気もするけど、そうでなかった気も）
（要領を得ないわね）
（どれだけ昔だと思ってるんだよ。もう天然って結論でいいんじゃない？）
（投槍になるんじゃないわよ。けどもうそれでいいわね）
（輝夜こそ投槍になってるよね？じゃあ、さっきの発言は天然ってことで）
（（よし））

「そこのお二人、聞こえてるわよ？」

「「……申し訳ありませんでした」」

何か怖かった。ちょっと涙目になりそうだったよ……。

とりあえず、根本的な解決になってない件について。

六十七話　苺……？いや、確かに美味しいけど、それってどうなんだろう？（後）

出来るだけ軽いノリを意識して書いてみました。
ちなみに、苺は17～18世紀に日本にやってきたらしいですが、気にしないでください。その程度の時代考証は許して。まあ、昔の月人都市には苺が栽培されていた、ということにしておこう。

最後に言っておきますが。
次回に続きます。

六十八話　偶然って恐ろしいよねえ、ホント。（前書き）

ＲＰＧツクールというので、東方遊演戯というゲームをやってたら、いつの間にかこんな時間。
そして慌てて執筆すること二時間で書いたやや手抜きな話ですが、どうぞ。

何度も言うようですが、この作品はオリ設定が多いです。嫌悪を覚える方は素直に止めておきましょう。

六十八話　偶然って恐ろしいよねえ、ホント。

「ところでさ、二人ともこの土地に定住する気無い？」
「……無理よ。月の追っ手から逃れるために私たちは逃げなければならないのだから」

「うん、まあそれは知ってるんだけどさ。面白い場所があるんだよ。行くだけ行ってみない？」
ぶっちゃけて言ってしまうと、あの変な竹林のこと。
あれは竹林全体に迷いと惑いの属性が付いてしまっている。あらゆる監視と追跡からの『死角』に為り得る場所だ。

「面白い場所？」
「変な竹林があってね。一度入れば霊地の影響を跳ね除けるくらいの力が無いと、迷って出れなくなるんだよ。そういう『属性』の『霊地』になってる。永琳ちゃんが細工すれば、定住できるんじゃないかな、と思うんだけど」
「そう、そんな場所があるなら、もしかすると……」

月の科学というのは、縁の時代の『科学（サイエンス）』と『非科学（オカルト）』を足したような技術なんだよねえ。というより、なまじ永琳ちゃんが飛びぬけていただけに、他の人の『理解』が追いつかなくて、結果的に『非科学』が混じる結果になっている。と言っても、永琳ちゃんですらこの世界の『非科学』は完全に解明出来ていないようだけどね。

だから物理的な方法で撒こうとしても『非科学』で見つかるし、『非科学』的な方法で撒こうとしても『科学』的な方法で見つかる。だからこそ、『化学』と『非科学』の両方面からアプローチをかけることによって、比べ物にならないほど高い技術を持つ月の追っ手も撒ける可能性がある。何より、月の頭脳、八意永琳がいるのだから。

まさか、昔あの都市にいたことがこんなところで役に立つとはね。紫に着いて、月に行った時に『科学』の分野は進んでいることは分かったけど、『非科学』の分野はあまり進んでいないみたいだったしね。

「まあ、行くだけ行って見ようよ。住めないなら住めないで仕様が無いで済むことだし」
「まあ、そうね。そうしましょう、永琳」
「そうですね。行くだけ行ってみましょう」
「じゃあ、案内するよ」

一方その頃、タマちゃんは。

「ぎゃあああぁぁぁぁぁ！！！止めやがれってんですよーー！！！！！」
「良いではないか、良いではないか～～～！！」
「死に腐りやがれってんです、このド変態！！！服脱がすな、はぁはぁするな、顔近づけるな、息するな！！！」

「ふはははは、愛いやつよ。愛いやつよ」
「うっせーー！！このババア！！」
「（プッチン）フフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフ。タ～～～～マ～～～～ちゃ～～～～ん～～～～？ちょっとこれつけようか？」
「く、首輪……鎖……ふざけんじゃねーです！！！人を何だと思ってやがりますか！！！？」
「良いではないか、良いではないか～～～～！！」
「まただってんですか！！このド変態～～～～！！！！！いいから、早くこの憑き物の落とし方教えやがれってんですよ！！！！」
「口が悪いなあぁ～～？まあ、そんなところも可愛いんだけどねえ～？」
「私は、私は、ぜ～～～～～ったいに、あんたみたいなのが巫女だなんて認めねーです！！！！」
「やだなあ～～、元巫女よ～～～～。タマちゃんの二つ前。あの子を育てのも私」
「認めね～～～です！！！！！！！」

所は戻って、ボクだよ。
「梗さん……？」
「あ、いや、なんでもない。ただの電波だから」
「……（ねえ、永琳）」
「……（そっとしておきましょう、姫様）」
「何か心の距離がぐっと離れた気がする。泣いていい？」
「冗談よ」
「冗談です」

「何だかなぁ……」

とまあ冗談は置いておいて。

「ここが言った場所。最近里で迷いの竹林って呼ばれてる場所だよ」

長い竹がずらりと聳え立つ壮大な景色。荘厳さすら感じるその光景は、ただ圧巻だった。

「凄い力……なるほど、これなら梗さんが奨めるのも分かるわ」

「いけそう？」

しばし考えた後、永琳ちゃんはこくり、と頷いた。

一方その頃、タマちゃんは。

「死ね、死ね、死に曝しやがれってんです、この変態！！！」

「あふぅ、まだまだその程度じゃ私を越えることは出来ないわねえ」

「うるせーってんです！！！！死ね～～～！！！！！」

「折角素敵な猫の耳があるんだから、首輪くらいつけさせてちょうだいよ」

「絶対にお断りだってんです！！！！この化け物！！！」

「化け物は酷いわねえ」

「七十超えたババアのくせして、そんな若さの時点で十分化け物じゃねーですか！！！」

「失礼ねえ～、タマちゃんへの、愛の力で若さを保っているのよ、ん～ちゅぅ～」

「ぎゃ～～～！！！！！唇近づけねーでください！！！！気色わりーことしてんじゃねーです！！！」

「そんなこと言う子には、オシオキかしらねえ～？」

「ぎゃ～～～～～！！！！ぎゃ～～～～～！！！！」

どこまでも大変なタマちゃんであったとさ。

「あら？」

竹林の中を歩いていると、ふと永琳ちゃんが声を上げた。

「どうかしたの？永琳ちゃん」

「いえ、蓬莱の薬が……どこにもなくて……落としたのかしら？」

「……神社に落としたりしてないよね？」

「もしかしたら、神社に置き忘れてきたかもしれませんね」

「タマちゃんが飲んだら大変なことになるのに」

「タマちゃん？」

「ああ、今代の巫女さん。小っさくて何かと一生懸命で可愛いんだよ」

「……梗さん、変わったかしら？」

「え？」

「前は、親しい人以外、どうでもいいって思ってるように感じたのだけれど」

「……」

「今は、何と言うか。意地悪になった、というか。人間らしくなった、というか」

ドキリとした。けれど、それをおくびにも出さず、笑って誤魔化した。

「とりあえず、一度神社に戻ってみればいいんじゃないかしら？」

今まで空気になっていた輝夜がそう言った。

「まあ、そうだね。というか、もうすぐ夕方だし、今日のところは帰ろうか」

で、いざ帰ってみたら。

「あ、タマちゃん帰ってるみたい」
「今代の巫女さん？会ってみたいわね」
「じゃあ、行ってみようか。もう帰ってるみたいだから、居間にいるでしょ？」

そう言って、居間にたどり着くと。

薄い赤色の丸い薬を飲もうとする、タマちゃんがいた。

「げっ」
「あっ」
「まずっ」

時、既に遅し。

ごくり

何かが喉を通る音。

そしてタマちゃんが目を見開き……倒れた。

そしてその際に、たった一言、口から漏らす。

「……ま、マズイ……」

まあ、苺の匂いがするだけで、味はそのままだからね。

そんなことを思った。

六十八話　偶然って恐ろしいよねえ、ホント。（後書き）

というわけで、タマちゃん。最後に気を失ったのは、あまりのマズさからでした。
ところで、途中途中、タマちゃんに一体何があったのだろう？

次回から、シリアスパート入ります。

いい加減、原作入りたいのに、道中書きたい話が多すぎる。困ったなあ。
とりあえず、タマちゃんの出番も確定したし、次は幻想入りシステムの話かなあ。

六十九話　キミは誰？人でも猫でも、どっちにしても名前はタマちゃんだよねぇ

久々の連日投稿。

今回はオリ設定多いよ。注意してください。
蓬莱の薬のところは、一応それなりに調べた。
そっから色々推測交じりに付け足して創作しました。

六十九話　キミは誰？人でも猫でも、どっちにしても名前はタマちゃんだよねぇ

夜。

蓬莱の薬を飲んでしまったタマちゃんを、永琳ちゃんに診てもらう。

ちなみに、まだ気絶中。よほどすごい衝撃だったらしいねぇ。

「正直言わせてもらえば……理解不能ですね」

「理解……不能……？」

永琳ちゃんが？

「正確には、この状況では……という意味ですけれど。月の設備があれば、もっと詳しいことは分かるかもしれないけれど」

蓬莱の薬を飲んだ者は魂のみが本体になり肉体を依拠としなくなる。蓬莱人の魂は肉体を抜け出ると好きな場所で新しい肉体を創ることができる。というのが、永琳ちゃんの弁。

つまり、魂に直接作用する類のものらしい。

「……推測交じりになるけれど、聞きますか？梗さん」

「……うん、聞かせて」

にゃー

どこからか猫の鳴き声が聞こえる。

けれど、姿は見えない。猫の姿どころか、自分の姿すらも。

ここは真っ暗な闇の中。

何も見えない、暗闇の底。

にゃー

どこからか、猫の鳴き声が響く。

どこから？

にゃー

どこから？

にゃー

どこから？

「じゃあ……タマちゃんはまだしばらく目を覚まさないってこと？」
「おそらくは……」
「そう……」

ボッ、と目の前に炎が灯る。
そこに映し出される影……。

にゃー

どこからか猫の鳴き声が聞こえる。
どこから？

にゃー

目の前！！！

「梗、どういうことなの？」
「永琳ちゃんに聞いて、輝夜」
「永琳、ちょっと責任感じているみたいだから、今はそっとしておいてあげたいのよ」
「そう……つまりね。喰い合ってるんだよ……化け猫と、タマ

ちゃんが」

「封魔針！！」

けれど、投げた針が空を切る。

すっ、と影が視界を過ぎる。瞬間、嫌なものを感じ取り、頭を下げる。

ブンッ、と風切音がしたと思ったら、頭上を化け猫が抜けて行く。

「はぁ……はぁ……はぁ……」

不味い、というほど切迫してはいない。あちらの攻撃に一撃で致命傷となるようなものは無い。だから、まだ猶予はあるが、今の状況は嬲り殺しに近い。まだ立っていられるのは、ほとんど直感のお陰でもある。

とにかく素早い。視界の端に映り、振り向いた時には既にその腕（かいな）は振るわれている。

何故かあった針や符を投げても、避けられる。能力で先読みしても、その素早さに体が追いつけない。

「どうしろってんですか……」

呟いた声に……けれど、いつでも、どんなことでも教えてくれたあの人は……今はどこにもいなかった。

「けど、この神社の巫女なんでしょ？私が直接会ったのは随分前の巫女だけれど、相当強かったわよ？」

「そうだねえ、タマちゃんは能力も相まって、相当強いよ。多分、大妖怪相手でも少しは相手になるくらいに」

「そんなに？」

一見大したことなさそうに見えるかもしれないけれど、大妖怪というのは本当に想像の外にいるような化け物ばかりだ。それを相手に出来るということは、それだけで力の証明に為り得る。それも人間が、だ。

「けれどね、今この状況でだけは、それじゃダメなんだよ……タマちゃんがそれに気づかないと……ただの化け猫相手でも負けるのさ」

おかしい、そうは思うけれど、何がどうなっているのかが分からない。

「前に戦った時は、あそこまで速くなかったんでしたが」

明らかに以前より速い。以前は、こちらの目では追いきれないほど速かったが、けれど能力を使ってでも対応出来ないほど速くは無かった。

「それに、妖気が前より大きい気もしねーこともねーですし」

気のせい、と一蹴出来る程度だが、妖力がさっきより一回り大きくなっている気がする。

「落ち着ってんです」

状況を確認、把握、そして対処。それが、白霊様に教えてもらった戦い方。

状況。

わけも分からない場所。恐らくどこかの変な空間。そこで以前戦った化け猫と突如戦闘中、苦戦。

脱出方法は不明。そして、些か不可解のこともある。

一つは、以前より遥かに強くなっていること。

一つは、段々妖気が大きくなっていること。
気のせいではない、また妖気が大きくなっている。
「意味が分かんねーです」
私はあの方ほど考え事が得意じゃないってんですよ。

「けど、冷静ね」
「何が？」
「大切な子なんじゃないの？」
「……まあ、大切ではあるね、自分でも良く分かんないけど」
「そんな子が今大変な状況なのに、随分と余裕があるのね」
「余裕……ねえ。まあ、多分大丈夫だから、かな？」
「大丈夫？けど、危ない状況なんじゃ？」
「まあ……タマちゃんだし」
多分、何もかも無視して、ぶち壊しちゃうんじゃない？

「うざってえぇぇぇんですよ！！！！！」
全力全開。もう面倒だ、後のことなんて考えてられない。元々自分はそんな性格でも無いし。
「《雷纏（らいてん）》」
符を一枚取り出し、呪（しゅ）を唱えると同時に、全身が帯電する。

「神呪（かみまじない）……《雷天（らいてん）》！！」

瞬間、空が光った。

アアアアアアアア！！！

初めて化け猫が悲鳴を上げた。

「範囲全域への落雷、ちっとは堪えやがりましたか」

神とはそのまま、自身が祭る神。そして呪（まじない）とは、真言を指すらしい。ようするに、この術は神に訴えかけているらしい。

総じて神呪と名の付く術は、巫女が神の力を借りて使う術のことを指す。他ではどう呼ばれているかは知らないが、少なくとも、自分はそう習った。

実際に使ったのは初めてだが、これは凄い。力自体は祭っている神のものを使っているので、自身が使う霊力はその神を自身へと導く分だけで良い。それすら符を使えば良いので、実質ほとんど霊力の消費は無い。

「正に反則ってやつじゃねーですか」

と、その時、ふと自身の変化に気づく。

「霊力が、増えてねーですか？」

さきほどよりも、大きくなっている気がする。

しかも、化け猫の妖気が低くなっている気がする。

「奪い取った？ってわけでもねーですね、そんな効果あの術には……」

奪い取る？何を？というか、自分はここにいる前に、どこにいた？

蓬莱の薬とは、魂ごと体を作り替えてしまう。全てを魂に依存させ、肉体を失っても、魂さえあればいくらでも蘇ることが出来る、というもの。

ところで、憑き物というのはどういう状態だろう？

タマちゃんは猫に憑かれた。けれど、猫は肉体を持っていない。かと言って、憑かれることそのものが呪いというわけでもない。つまり、化け猫の魂がタマちゃんに宿った状態のようだ。だからこそ、紫の能力で分離してしまいたかったのだけれども……。

さて、以上のことを踏まえた上で、タマちゃんの状態を考えてみると、一つ推測が成り立つ。

今のタマちゃんは、タマちゃんの魂と猫の魂が混ざったような状態なんだろうね。

けれど、一つの存在に二つの人格が宿った今の状態で、どっちが表に出るか。

つまり、今、それを巡って、タマちゃんは深層意識下で戦っているんだろうねえ。

つまりは、魂の食い合いだ。

「どうやら、さっきのことと併せて考えるに」
私が攻撃を受けたら、あの猫の妖気が増した。
そして、化け猫が弱ったら、私の霊力が増した。
それはつまり。
「相手を弱らせるほど、自身が強くなっていく、ってことですかね」
推測に過ぎないが、まあ指針が出来ただけよしとする。

「なら、本当の本当に全力で行くってんですよ!!」

霊術「二重結界」

「そろそろかな?」
「何がかしら?」
「そろそろタマちゃんが起きるころだ」
「いや、そんなこと分かるわけ「うがぁぁぁ!!!ざけんじゃねーです!!」……あら、本当ね」
「おはよう、タマちゃん?」
「えっと、どういう状況なのかさっぱりわかんねーですが、おはようございます、白霊様」
うん、挨拶が元気良いのは良いことだね。けどね、起きたならちょっとお話しようか。

「な、何か顔怖くねーですか……」

「何でだろうねえ？」

とりあえず。

「博麗霊、さっさと着替えて、本殿に来なよ」

そう言い残し、ボクは部屋を出た。

六十九話　キミは誰？人でも猫でも、どっちにしても名前はタマちゃんだよねぇ

うーむ、タマちゃんの技が欲しいな。
二重結界はまんまとして、後は封魔針と神呪しかないし。

神呪、ようするに降霊術みたいなものだと思ってもらえれば。ただし、降ろすのは神霊だけど。今回は梗くんの力を降ろしたので『雷』が出ました。
知ってます？雷のことを昔の人は龍だと勘違いしてたらしいですよ。
雷は龍の化身、虹も龍の化身だそうです。
間違ってる可能性も大ですが。なんせうろ覚えなんで。

正直、梗くんが龍神である必要性がまるで無いので、詳しく調べなかったんですよねえ。

久々に見たはじめの一歩のアニメが面白すぎるｗｗ

七十話　ボクの選択、キミの選択。ボクの名前、キミの名前。（前書き）

長らく待たせながら、実際４０００字も無いという。すみませんでした！！
超がつくほどのオリ設定です。ご注意ください。

七十話　ボクの選択、キミの選択。ボクの名前、キミの名前。

所変わって、博麗神社の本殿。
ボクは彼女と対面していた。

「さて……キミはなんでこんなことになっているのか、分かる？」
「えっと……何となくは」
「最初は説教。分かってる？キミ、自分の迂闊さで死に掛けてるんだよ？」
「はぁ……？」
「寝てる時に猫に会わなかった？」
「はい、会いました」
「戦ったりした？」
「はい」
「負けたらキミ、死んでたんだよ？」
「えぇ！？」
「だから言ったんだよ。迂闊だって。今回ばかりは言っておくけど、ちょっと軽率だったよ」
項垂れる彼女に、けれどボクは慰めるような真似はしない。
「確かにボクたちの側にも過失……失敗があったの認めるけどね。けど、それは理由にならない。キミの安易な考えでキミ自身が死に掛けたんだから。それは反省して、折角、生き残れたんだからね」
「……はい」
「じゃあ、次に行こうか。次に今回のことで問題が出てきたんだよ」
「問題……ですか？」

「今のキミを巫女にしておくわけにはいかない。巫女はあくまで人間でなければならない。けど今のキミは人間とも妖怪とも言え無い存在だからね、だから早急に新しい巫女を立てる必要があるんだけれど」

早すぎる。今の巫女、彼女はまだ十五にも満たない。そんな早さで後身なんているはずも無い。

「博麗神社の巫女は、人側からの妖怪への抑止力だ。だからこれは急を要することだよ」

けれども。

「それは、祭神（ボク）の決めることじゃない、人の決めることだ。だから、キミが人であるうちに決めておきたかったんだけどね。後身とか、決まってる……はずないよねえ」

少しばかり事態を飲み込めてきたのか、顔色が悪くなってきている。

「す、すみません」

「謝るだけじゃあ、意味が無い。何か心当たりみたいなの無い？」

「……心当りというわけではないですが、先々代巫女様に聞いてみてはいいんじゃねーかと」

「先々代の巫女？生きてるの？」

「何でか知らねーですけど、未だに健在です」

ん？何か今おかしかったような。

「そう、じゃあ、後日そこに行くとしよう」

それじゃあ。

「これが最後……キミの処遇についてだよ」

「……ぇ？」

妖気を宿した巫女などいない。人間にはいても、巫女にはなれない。なぜならば、巫女とは神に仕える者なのだから。神を守る人の敵たる妖怪と同じ力など持って良いはずもない。

祭神たるボクがいくら妖怪を敵としていなくても、博麗神社の巫女が妖怪側への抑止力である以上、それは許されない。別に実害があるわけでもない、妖力を持った巫女が妖怪を倒しても、それでも確かに調和は取れるし、実質的に体裁、体面の問題なだけではある。けれど、妖怪や神と言った理の外に生きる存在は、由縁や意味を重視する。

伝説、由縁、謂れ、言い方はあるけれど、物理的には何の意味もなさないはずの言葉の上でのみ存在するそれらこそ、人外にとって意味のあるもの。

だから、これ以上、彼女を巫女とすることは出来ない。神社とは清い場所、人がそう信じている以上、祭神(ボク)はそこから外れることは出来ない。

「だから、キミは今のままではここにはいられない」

本来なら投げ出せばいいだけの話だけれど、彼女には身寄りがいない。

そして、人里にも行けない、今の彼女は人ではないのだから。

というより、行かせるわけには行かない。今の神社に巫女がいない、ということを知られたくはない。

些細なことのように見えるけれど、ボクを姿を直接見たことのある人なんて、もうとっくの昔に死んでいる。つまり、ここ数百年の里の平穏は巫女によって守られてきたということ。その巫女が不在という事実は確実に、人里を不安にさせる。それは妖怪側にも広まりかねない。以前の約束を、鬼がどこまで守れているかは知らないけれど、鬼のいぬ間に、という言葉の通りのネジの外れたような思考した妖怪が里を襲いかねない。

まあ、ボクはいるけどね。

内心呟きつつ、彼女を見る。

「だからボクが提示できる選択は三つ、一つ、この幻想郷から出て行って暮らす。そのための手伝いはボクもするよ」

「……」

ふるふると頭を振る。その仕草に、ボクは次の言葉を紡ぐ。

「二つ、さっきいた二人、彼女たちと一緒に、竹林で隠れて住む。幸い、彼女たちも人間から一歩踏み外したような存在だし、キミと同じ薬を飲んだ不老不死だ。ボクからも頼むし、排斥されるようなことは無いだろうね」

それに、永琳ちゃんは少しばかり責任を感じているようだし。別に永琳ちゃんのせいでもないのにね。

「……三つ目は……何だってんですか……？」

少しばかり声が震えていた。心を静かにし、そしてボクは最後の選択を突きつける。

「三つ……ボクの式になること」

式。または式神。妖怪などに『式』を打ち込むことで、使役者の命令通りに動く『道具』となったもの。

式神は動く。行動をパターン化することによって、十二分の力を発揮することが出来る。

反面、使役者の意に反することをしようとすれば、十全の力を発揮することが出来なくなる。

これはある意味、最も拘束力が強い。何せ使役者（ボク）の意に反するほど力が弱まってしまうのだから。

「式を打てば、キミの自由な意思というものは確実に制限される。だからこそ、これは選択肢になり得る。キミの本当にしたいことは出来なくなるかもしれないし」

けれども。

「今までと何も変わらないかもしれない。でもね、絶対に不自由になることは間違いない」

それが、三つ目。

「だから、さあ」

……。

「どれにする？」

キミの答えは？

式神を作るのに、一々了承を取るというのも変な話だと、縁側に

座ったままそんなことを考える。
本来なら実力下の相手を弱らせて無理矢理式で縛るのが本来の方法。
わざわざ相手に了承を得るのは、ただの『契約』でしかないのだから。

「月が綺麗だと思わない？タマちゃん」
「……やっと、名前呼んでくれましたか」
「気になってた？」
「……まあ」
「けじめみたいなつもりだったんだけどね。いつもみたいな、なあなあの関係じゃなく、祭神と巫女という立場を明確にしたかったからねえ」
それは、話の内容を考えれば無理の無い話でしょ？
「……それは、まあ」
「ふふ、でももうそれも終り。またゆるりと行こうか」
だって、と続けて。
「もうキミは時間に縛られることは無いのだから」
そして傍にいるタマちゃんの頭をそっと撫でた。

「本当に良いの？」
隣に座るタマちゃんを見て、ボクは尋ねる。
「何がでしょーか？」
「式となれば、間違いなくタマちゃんの自由は狭くなる。それでも、本当に良い？」
ボクの命令一つで自由意志が無くなってしまうのに、それでもタマちゃんは。
「良いんです」

そう、はっきりと即答した。

「私は……ここに、貴方と一緒にいたいから」

分かってはいたけれど、それでも初めてはっきりとした言葉で言われた。そのことに、思いの他衝撃があった自分に驚く。

「何がキミをそこまで駆り立てるんだろうねえ。初めて会った時に助けたこと？それなら気にする必要すら無いよ。だって、この神社の巫女だったのだから」

正直、タマちゃんにそこまで言わせる理由なんて、それぐらいしか思いつかない。

けれど、ボクの確信めいた言葉に、タマちゃんはあっさりと。

「違うってんですよ」

そう言って切り捨てた。

「最初は確かに恩義、それとただの憧れでした……けど、今はもう、違うってんですよ」

じゃあ、今は、何なのだろう？

先を促そうとして、それを先んじて、タマちゃんがポツリと零す。

「……親、みてーに思えました」

「……」

零れたその言葉に、目を丸くする。

それはまるで。

「私に親はいねーですけど、けど、何と言うか、一緒に生活して、時に教えられて、時に怒られて……こういうの何て言うのか分かんねーんですけど、ただ……普通の親子みてーで、家族だった気がして……すごく……嬉しかったってんです」

家族。その言葉がボクの心に深く突き刺さった。

それはまるで……ボクが縁に抱いていた気持ち、そのもののようで……。

ねえ、縁……キミもこんな気持ちだったの？

綺麗な月を見上げ、縁とこうして座っていた過去の記憶を思い出し。

そして気づく。縁に向けたこの気持ちと、タマちゃんに向けたこの気持ちが、よく似ていることに。

「そっか」

つまり、ボクも、タマちゃんのことを。

「ボクも……キミを……」

つまりは。

「家族だって、思ってたみたいだねえ」

そういうことなんだろう。

「だから、キミにその証を上げる」

そっと、タマちゃんの頬に手を添え。

「ん」

「っ！！？」

そっと、その唇を重ねた。

瞬間、ボクの中から何かが抜けていく感覚が襲う。

そのちょっとした脱力感を感じつつ、突然の出来事に目を白黒させているタマちゃんをしっかりと見つめ、そして言う。

「初めまして。水無月梗だよ」

初めて明かすその名前に、タマちゃんが驚く。

「今日からボクとキミは家族だ。だから、キミに水無月の性を上げる」

「水無月……？」

「そう、水無月霊。それが今日からのキミの名前。分かった？」

ボクの問いに、そしてタマちゃんは。

「……はい、梗様」

そう、答えた。

七十話　ボクの選択、キミの選択。ボクの名前、キミの名前。（後書き）

式神の創り方ってどうやるんだろ？
定番は符を張るとかそんなのな気がするけど、正直梗くんは符とか使わないし、どうすっかな？と思ってたところ『契る』というやり方で考えてみて、キスというのを思いついてしまった。
正直書いててこっぱずかしいけど、これでダメだったら泣く。

正直、今回の話って、タマちゃんに梗くんの名前呼ばせるための話だったはずなのに、なんでこんな面倒なことになってんだろう？

文字数を増やす試みと、情景や心理描写を増やしてみる試みをしてみました。まだまだ拙いですので、指摘ありましたら教えてください。

七十一話　奇人変人、いや、ああいうのは変態っていうだろうか？（前書き）

今晩中には次話も投稿できるかと。後千字ほどですし。

七十一話　奇人変人、いや、ああいうのは変態っていうだろうか？

「へ、変態だ！！」
戸を開けた第一声がこれではさすがに失礼だと、ボクも理解してるよ？
でもね、さすがにこれは言わずにはいられないよ。
二十代の着物姿の女性が巫女服に顔を押し付けて、すーはーすーはー呼吸してるなんて。

「おぉ見苦しぃいものをぉお見せしました。どぉうぞ、粗茶ですが」
そう言って運ばれてくる湯飲み。
礼をして、口元に運ぼうとして、一瞬考え、少しだけ匂いを嗅ぐ。
すー、と鼻を抜けるお茶の香りに、妙なものは入ってないようだと、安心して口をつける。
「嫌でぇすねえぇ、祭神様に妙ぅなものぉ出しませぇんよ」
ボクのその行為を見たか、彼女が袖で口元を隠しながら笑う。
「そうあって欲しいけど……けどさ……最初の衝撃が強すぎてねえ」
実はちょっと冷や汗出てる。こんなところにいていいのか、ずっと疑問が沸いてくる。
はっきり言って今すぐ逃げ出したい。この家はおかしい、一見普通に見える風景のあちらこちらに、見てはいけない狂気が垣間見え

る。

気を取り直し、畳の上に正座して向き合う。
「改めて確認するけどさ、キミが三代前の博麗神社の巫女？」
「そぉうでぇすよ。改めてぇおぉ聞きしますがぁ、貴方が祭神、白霊様？」
「うん、そうだよ」
こうして向き合って見ると、タマちゃんが化け物と称していた理由が分かる気がする。
まず一番分かりやすいのは、若さ。彼女、今八十前後のはずなんだけど、どう見ても二十代前半だ。どうなっているのか、知らないけれど、まっとうな人間でもないっぽいね。
そして、感じる霊力の大きさ。大きいわけでは、無い。寧ろ幻想郷で生きて行くには小さ過ぎる。けれども、彼女から感じるその威圧は並の妖怪など物ともしないほどだ。霊力を隠している、というわけでもなさそうだ。寧ろ、もっと別のものを隠しているような……。

「とぉころでぇ、三代前、といぃうこぉとは、霊はぁ？」
彼女のその言葉で思考を止め、顔を上げる。
「うーん、ちょっと色々あってね。もう巫女ではいられなくなってるんだよ。ついでに言うと、まだ新しい巫女がいないから、先々代でもあってるんだけどねえ」
「霊は今どぉこにぃ？」
「あの子は、墓参りだって。先々代巫女の」
そう言うと、彼女は納得したように、ああ、と頷く。
その表情が何だか、優しくて、だからか、少しだけ、眩しかった。
「そう言えば、その先々代の巫女は、キミが育てたんだっけ」
「えええぇ、そぉうですねぇ……病気持ちだぁと分かっててぇ、そぉれでも彼女を巫女にしたぁのはぁ、私ですしねえぇ」

やや自嘲とも受け取れるその言い方に、悲しみを感じた気がして、ボクは口を瞑る。

そもそも博麗神社の巫女が幻想郷における人側からの妖怪側への抑止力となっているのは、ボクが紫の提案を飲んだことに端を発する。

今更だけれど、責任を感じる。けれど、今更止める事も出来ない。幻想郷は確かに必要――なのだから。

紫はボクとの約束を信じて、幻想郷を作っている。自惚れているようにも聞こえるが、今ボクの力が無くなれば、幻想郷が成り立たなくなる。

謝ることは出来ない。けれども、だからと言って必要だったと割り切れるほど、達観でも出来ない。

「中々、辛いね……お互い」

ふいに、そんな言葉が出る。けれど、それはボクが勝手に紫と約束し、そして自身の神社の巫女たちに押し付けた役目だ。だから正直、彼女からすれば怒ってもいいような言葉だったけれど。

「そぉうですねえぇ」

そんな風にあっさり返されたことが意外だった。

幻想郷に寺と呼ばれるものはない。博麗神社という立派な神社があるのだから、当たり前なのかもしれないが。

けれど、墓苑（霊園）は存在する。出なければ、死者を供養する場所に困る。

「巫女様……お久しぶりです」

けれど、巫女様はそこに入ることを良しとしなかった。幻想郷の近くにある、自身の実家に骨を埋めて欲しいと願っていた巫女様のために、里の人たちが三日がかりで運んだ。その時、自分はその一行について行っていたことを思い出す。

あの時は、泣いてばかりで里の人たちにも迷惑かけたってんですよ。

あんな泣き虫の巫女が次代で、里の人たちも不安を覚えたかもしれない、と少々反省する。

「ここまで来るのは、あの時以来ですね」

巫女様には家族はいない。巫女様が先々代巫女様に選ばれたのは偶然ここから人里にやってきた時、まだ十九くらいだったらしいが、その時にはすでに家族は全員亡くなっていたらしい。

墓石も無く、森の中の廃れた家の傍に卒塔婆が一本ぽつんと立っているだけ。曲がりなりにも人里を守ってきた博麗神社の巫女だ。もっとちゃんとした墓を作ってもらえただろう……人里の墓苑なら。

幻想郷の外の土地。そこまでは白霊様の守護も及ばない。行動に危険が伴う。ここまで遺骨を持ってくるだけでも危険なのに、ましてや悠長に墓など。精々が卒塔婆を立てておくことだけであった。まさかそれが今もまだ残っているとは思わなかったが。

それでいい、と巫女様は言っていた。ただ遺骨を埋めてもらえるだけでも十分だと。

自身の帰る家はいつだって神社だった。けれど、巫女様にとっては、ここだった。

「それだけ……のはずなんですがね。どうにも納得できねーのは、何でしょうね？」

自身でも良く分からない感情。だから考えるのを止める。難しく考え込むのは自分らしくないから。

「漸く……漸く来れたってんです」
ほんの少し前まで自分は人里を守る役目があった。だから、たった一日でも神社からいなくなるのはマズい。その一日に、妖怪は人里を襲うこともあるのだから。

けれども、もう巫女ではない。つまり、役目は解かれた。さらに、しばらくは人里にも行ってはいけないらしいが、幻想郷の外なら良いらしい、そうして、漸く自分はここに来れた。
実に何年ぶりだろうか？そう考え、益体も無いことだと、思考を止める。
「……何を言おうって、ずっと悩んでたのが馬鹿みてーですね。結局、こうして何も言えねーんじゃ」
苦笑いしながら、そう呟く。何か言おう、何を言おう、道中ずっと考えていた。
けれども、こうしていざ墓の前に立つと、何も言えなくなった。頭に浮かんでは消えて行く言葉。けれど、今言わなければいけない言葉は見つからない。

「ああ」

そして最後にたった一つだけ、言いたいことを思い出す。
「これ、言わなきゃいけねーですね」
そうだ、ここに来て緊張していて忘れていた、大切なことを。
「家族が……できました」
強くて、優しくて、意地悪で、時に厳しい、そんな人が。だからなのかは分からないけれど。
「私は今、幸せだってんですよ」
それだけは、絶対に伝えたかった。
大切だった、この人にだけは、絶対に。

「うん、じゃあ心当たりはあるんだね？」
「そぉうですねえぇ、正直、霊ほぉどじゃ、あぁりませぇんが、そぉれでも役目を果ぁたせそうな人材は幾人かぁ知っていぃますねえぇ」
「じゃあ、その中でキミが適切だと思った人でいいや」
「分ぁかりましたぁ、後日声をぉかけておぉきますぅ」
「……所々言葉を伸ばしてるけど、眠いの？」
「まあぁ、すぅーこし、ばかりぃ」
うーん、これ今度また来たほうがいいのかな？ボクが帰った後、ちゃんと覚えてるんだろうか？
「じゃあ、また起きてる時に来るよ」
「いぃえ、いえ。祭神さまぁにごそくろぉういただくわぁけには、こぉちらから伺いますぅよ」
「え、あ、うん。そう、じゃあ、よろしく」
やや不安な気分にさせられながら、けれどもまたこの家に来ないで済むと思い、取り合えず了承しておく。
「じゃあ、また今度、神社に来てね」
それだけ言って、立ち上がり、玄関へと向かう。振り返ってみるけれど、何か今にも寝そうなくらいうつらうつらしていた。もしかして、来た時に蹲っていたのは、眠ってたから？
「だとしたら、ちょっと悪いことしたかも」
でも、あの光景は心臓に悪い。思わず叫ぶくらいに衝撃が強かった。
ところで、さらりと流してしまっていたけど、何で巫女服が家にあったんだろう？
普通ああいうものって、巫女の交代と一緒に神社に置いておくものじゃ？よく知らないけど。

帰ったらタマちゃんにでも聞いてみよう。
そんなことを考えつつ、一人ぶらぶらと神社目指して空を飛んだ。

「良かったじゃねーですか。命拾いしましたね」
帰ってきて、ちょうど直前に帰ってきていたタマちゃんに今日のこと教えたら、まず一声がそれだった。
「眠い時はまともですから。起きてるとただの変態です」
「そ、そう……」
なんか深い確執がありそうだね、この二人。
「ふ……ふふ……いつか絶対殺す……首輪……鎖……殺す……」
なんか目から光が消えてるよ……普通に怖い。
「ま、まあ、それは置いておいて、新しく巫女が来るけど、タマちゃん教えれる？」
いや、それ以前に。

「まだ以前の術が使える？」

一つ気になっていた。ボクもそうだったけど、今まで持っていた力と全く別の力を持つと、使い辛い。
永琳ちゃん調べによると、霊力、妖力、魔力、神力の四つが今までに確認されているらしいけど、少なくとも、霊力と妖力ではその性質が違う。霊力は本質的には『守』だ。破壊には向かない。逆に妖力は本質的には『攻』だ。守ることには向かない。個人個人の差はあるものの、大きく分ければ、この違いは絶対だ。
そしてその本質の異なる二つの力が同時に混在しているのが今のタマちゃんだ。二つの力を同時に持つというのは、絡まった二本の

糸を一つずつ分けて行くような慎重さが必要となる。普通に使おうとすると、一本の糸を引いても、絡まったもう一本もついてくる、ということになりかねない。

そもそも人間の使う術の大半は霊力を使うことを前提としていて、妖怪の使う術は妖術を使うことを前提としている。

だったら、異質な力が混じった術が使えるはずも無い。

これを何とかする方法は二つ。

一つ、ひたすら訓練して、二つの力を別々に使う感覚に慣れてしまう。確かに一つの方法ではある。それにタマちゃんはもう人とは比べ物にならない寿命を持っている。ならこの方法もありだろう。

一つ、霊力と妖力、両方を使う術を作る。ある意味力業。これなら無理に感覚を覚える必要も無い、寧ろ覚えないほうが自然に出来る。けれど、言うほど簡単なものではない。紫も色々と引き出しの多いタイプだけれど、全て自身の力を基準に作っている。いや、妖怪というのは普通はそうだ。自身の適性のある技だけを覚えて行く。自分に向いていないことを無理矢理覚えて、器用に使いこなすのは人間だけじゃないかな？つまり、両方を使った術、などというものは、生まれた時から両方の力を持っている存在でもないと難しい。

「中々に悩みどころだよねえ。試したけど、使えないんでしょ？」

「……はい、使えねーです」

少し戸惑ったけれど、やがてこくりと頷く。

「正直、使えないことは問題じゃないんだよ。今のタマちゃんは式神だから、ボクが力の供給をすれば、身体能力だけでだいたいの相手は倒せるくらいに強いし」

「では、何がまじーんですか？」

どうも本人は気づいていないらしい。まあ、意識に無くても仕方ないか。まだ若い、いや、若すぎる引退だったし。

「キミが使えないと、次の巫女さんに誰が術を教えるの？」

「……あ」

ボクは使えないよ？霊力なんて持ってないし。

七十一話　奇人変人、いや、ああいうのは変態っていうだろうか？（後書き）

やや無理矢理感が拭えない。
いつか修正することがあるかもしれない。

七十二話　兎詐欺さん兎詐欺さん、人参いかが？（前書き）

やや見切り発車だからか、プロットを煮詰めなかったせいか、時系列がやや乱れてる。変えても影響は特には無いと思うけど。

ようやく次話投稿。疲れた。

七十二話　兎詐欺さん兎詐欺さん、人参いかが？

「……あれ？」

朝起きると、ふと声が出た。

ふと辺りを見渡すと、いつもの神社の本殿。そこに建つ柱に寄りかかって寝ていたようだ。

「寝てた？ボクが？」

今は龍神の投影をしているから、眠らないはずなのに。

「酒飲んだ覚えは……無いよね」

うん、飲んだ覚えは無い。と、いうか。

「能力解けてる？」

解いた覚えも無い能力が解けている。眠ったからとかそう言う程度では解けないはずなんだけど。

「投影《龍神》」

発する音により、能力を想像（イメージ）。

体が作り変わっていくような感覚。けれどそれも一瞬で。

「うん、出来た。これで良い」

自身を覆う能力の余波を感じ、一つ頷くと、本殿の扉を開いた。

「本日晴天也、本日晴天也」
見事に晴れた空を見ながら空を飛んでいく。
「えっと？この辺かな」
そして、眼下に広がる竹林へと降りて行くと、そこに一軒の屋敷があった。
「ごめんくださーい」
適当に入り口をノックして、待つ。するとさほど時を置かずして扉が開かれる。
「いらっしゃい、梗さん」
「や、おはよう。永琳ちゃん」
出てきた永琳ちゃんに挨拶をし、共に中へと入る。

永遠亭と名づけられたこの屋敷が完成したのはほんの一週間程度前のことだったりする。
つまり、ここを永琳ちゃんたちに紹介してから、僅か一ヶ月足らずで作った計算に。
主に建設はボクが。設計は永琳ちゃんが。輝夜は……扇を持って踊ってたから永琳ちゃんと二人で間接技極めて黙らせた。視界の端でチラチラ邪魔だったし。
しかし永琳ちゃん、まさか建物の設計まで出来るとは思わなかった。しかも指示が的確すぎてこっちがビックリするよ。材料集めるのに半月かかったから、実質半月で組み上げたんだよねえ。
しかも同時平行で、タマちゃんの修行にも付き合わなきゃいけなかったしさあ。
なんか最近働きすぎな気もするけど、今まで楽してた分の揺り返しが来たかなあ。

ついでに言っておくと、タマちゃんだけど、やはり術を教えられ

ないのは不味い、ということで、二つの力を分けて使う術を教え込んだ。飲み込みが早いタマちゃんだけど、それでも悪戦苦闘しながら一ヶ月、ようやく霊力だけを使う方法を身につけ始め、以前の術も大分使えるようになってきた。まだ一回一回に時間がかかるから、実戦で使えるほどじゃないけどね。

だから少し前からやってきた新しい巫女さんに教えている。まあ、タマちゃんほど飲み込みは良くないけど、三代前の巫女さんが言ってただけあって、割りと成長は早い。この分なら後一年前後で最低限の強さは身に付く、とはタマちゃんの弁。

ただ自分より背の低かった巫女さんが後一年後にどれだけ成長してしまっているか、もう成長しない自身の体を見て、溜息をついているところを見かける。まあ、気持ちは分からないでもない。

まあ、それはともかく。

「大分物が増えたね、ていうか、何これ？」

通された部屋を見ると、あちこちに不審な物体が。

変な色した試験管とか、泡立つ液体の入ったフラスコとか……。

「なんとなく、懐かしいかも」

そう思った。

「ずっと昔の、永琳ちゃんの部屋に似てる」

まだ、何も知らなかった、あの頃の。

そして、過去になんて戻れないけどね、と自嘲する。

過去と言えば。

「そう言えば昔、輝夜にボクのこと『妖怪兼神様のお兄さん』って言ったらしいね」

「……ああ、そんなことも言ったわね」

「何でお兄さん？」

「さあ？けど、何でかそんな感じがしたから」

納得は出来ないけど、そういうものなのだろうか？

「あら、梗じゃない」

永琳ちゃんと二人、まったりとお茶を飲んでいると、輝夜がやって来た。

「や、お邪魔してるよ」

「いらっしゃい。というか、建てたのは梗でしょ」

「ま、でもキミたちの家なんだから」

「それもそうね」

キミたちの家なんだから、もうちょっと献身的に手伝ってくれても良かった気がするんだけどねえ。

「姫様、ようやく起きられたのですか？」

「いやだって、布団で寝るのなんて本当に久しぶりだし」

「そう言ってこの一週間ずっと、一日の半分は寝ていますよね」

うわ、それは無いよ。一日十二時間ってどんだけ寝てるの、輝夜。

ボクのジト目にばつが悪そうに頬をかく輝夜を余所に、永琳ちゃんがいつの間にか淹れたお茶を差し出す。

「姫様もどうぞ」

「あら、ありがとう、永琳」

そそくさと移動し、永琳ちゃんの側、つまり机を挟んでボクの反対側に行って座ると、湯のみのお茶を啜る。

「はあ、それで、今日はどうかしたのかしら？」

「ボク？いや、特には何もないよ。そろそろ一週間になるから、様子を見に来ただけ」

「そう、まあ永琳がいるから特に困るようなことにはなってないわね」

ちょっとだけ呆れる。あんまり永琳ちゃんばかり頼りにするのもどうだろう。でもあまりにも頼りになるから仕様が無い気もするけど。

当の永琳ちゃんは笑うだけで、心情はどうにも読めない。まあ、

ボク程度で読めるとも思えないけど。腹芸は向こうのほうが上だし。
まあ、この二人には二人なりの付き合い方があるのだと納得しておく。
「永琳ちゃんのほうも問題なさそう？」
「そうね、薬の材料が足りないのが多少不満と言えば不満だけれど、まあ仕方無いと思うしかないわね」
最近になって、永琳ちゃんはボクに敬語使わなくなってきたな、と気づいた。気を使わなくなってきたと言える。良いことか悪いことかは分からないけど、まあボクにとっては良いことなので、気にしないことにする。
「そこは仕様が無いよ。二人ともこの竹林に隠れ住むんでしょ？」
「そうね、月が私たちを諦めるまでは」
諦める？あ、そう言えば。
「確かもう五百年くらいで捜索打ち切るって、前に豊ちゃんが言ってたよ」
「えっと、梗さん？豊姫とどこで会ったのかしら？」
「うん、一回月に行ったことあるんだよね。それも割りと最近、その時の話でもしようか……どうせ、時間なんて、いくらでもあるんだし、ねえ？」

「あれ？もうこんな時間？」
竹林って全体的に薄暗いんだよねえ。そのせいで、気づけなかったけど、もう夕方だよ。
「この家に時計あって助かったよ。やっぱり神社にも置こうかなあ？」
いつかの約束があったはず、また妖怪の山のあの河童のところに作ってもらいに行こうか。

「じゃあ、もうお邪魔するね。そろそろタマちゃんたちが夕飯作ってるだろうし」
単純に人手が増えて、タマちゃんも楽になったからか、以前よりちょっと手の込んだ料理が増えた。ボクも作れなくも無いけど、やっぱり誰かに作ってもらうというのは別物だと思う。
「お邪魔しました」
そう言って扉に手を掛け開く。そこに、一匹の妖怪兎がいた。

この竹林何故か知らないけど、妙に妖怪兎が多い。少なくともまだ竹林の霊地を解放する前、数百年以上前から。
どこからやって来たのか、最初から住んでいたのか、それすら分からない。
ただ分かるのは、妖怪兎がたくさんおり、そして群れを作って生きていることだけである。

この妖怪兎はその兎たちのトップらしい。
名前は因幡てゐというらしい。
いきなりやってきて、いきなり自分がこの竹林の主だ、とそんなことを言い始めた。
こっちとしては、はぁ？と言ったところなんだけど。
でまあ、最初は一応のトップということで輝夜が相手してたんだけど、何と言うか途中で面倒がって永琳ちゃんに投げた。まあ、でもそれが正しい選択なのかもしれない。
で、その永琳ちゃんと妖怪兎が別室に入ってからすでに三十分くらい。
「出てこないね」
「出てこないわね」
何を話し合っているのかは知らないけれど、時折中で変な音が聞

こえるのは何故？
「永琳ちゃん、何かしてるんじゃないよね？」
思えば昔から何かと他人を実験に使う子だったけど。いや、まさかねえ。
「ど、どうかしら……」
どうも輝夜のほうも心当たりがあるのか、頬が引き攣っていた。

そんなちょっとした恐怖の時間からほどなくして、部屋から二人が出てくる。
どうも『群れの兎たちに智慧を授けてくれるなら永遠亭に人間が寄りつかないようにする』と言った趣旨の約束事をしたらしい。
兎に智慧を授けるって、どうやるんだろ？とか思わなくも無かったけど、永琳ちゃんならやってしまいそうだな、とも思いながらその日は帰宅。
帰るのおせーじゃねーですか、とタマちゃんに怒られながらややや冷えてしまった夕飯を食べることとなった。

追伸、タマちゃんまるで女房みたいだね、と言うと真っ赤になって可愛かった。

むむ、と思わず唸ってしまう。
「どうかしましたか？」
隣に座る式を一度見て、もう一度自身の目の前に広がる空間の裂け目からの光景を見る。
「これをあなたならどう思うかしら？」
「危険ですね」

きっぱりと答える。式だからか、生来の気質からか自身の式はこういう損得勘定の計算は速い。

「そうよね、やはり危険ね。このままでは」

このままでは、自身の築いてきたものが壊れる危険だってある。

「と言っても、梗は動かないでしょうね」

あくまであの神は人を守るついでに、妖怪を極力減らさないようにしてくれ、と言った約束をしているだけだ。

妖怪が人を脅かし、神がその人を守り、人がその神を崇める、その流れが理想的だった。いや、今までは確かにその理想的な流れに乗っていたはずであったのだが。

「徐々にだけれども、人が妖怪を押し返している。これは危険ね」

このままでは自身の危険視していたことが、妖怪の滅亡が始まりかねない。

「どうしようかしらね、あなたならどう思う？」

「私には到底。紫様が思われた通りにすれば良いかと」

信頼とも投槍とも取れる返答に、またむむ、と唸る。

「本当に、どうしようかしらね？」

七十二話　兎詐欺さん兎詐欺さん、人参いかが？（後書き）

もう次の話の展開が読めたかな？わかり易く最後に書いたし。

ｗｉｋｉ見てたら稗田阿礼と藤原不比等が同一人物という説があるというのを見た。そうだったら、阿求と妹紅は血縁ってことになるのかな、などと馬鹿なこと考えてみたり。寧ろ転生してるなら親子？説と言えば、藤原不比等が天智天皇の隠し子とかいう説があるとか。そうだとすると、妹紅って現人神になるのだろうか？天皇って天照大神の末裔を自称してるらしいし。というか、現人神って元々が『人でありながら神である』という意味で天皇を指す言葉なんだと今日初めて知った雪代でした。

まあ、さすがに無いかｗｗ

七十三話　結界って苦手なんだよねぇ。決壊なら得意なんだけど。（前書き）

今回は割りと早くできました！！
というわけで早速投稿。そして今から爆睡。

七十三話　結界って苦手なんだよねぇ。決壊なら得意なんだけど。

「ちょっといいかしら？」
「うわっ、な、何だ、紫か」
突然背後に現れた紫に飛び上がりそうになる。考え事に耽っている時にいきなり後ろから声かけられたら驚くよねえ。

神社の本殿というのは、基本的に入れるのはその神社の巫女だけだ。例外があるとすれば、そこに宿っている神くらいだろうか。けど、巫女だってずっとここにいるわけではない、寧ろ一日の間でここにいる時間なんて微々たるものだ。何が言いたいかと言うと、すごく静かなんだよね、考え事するのに向いた空間。思考を邪魔するような気の散るようなものも無いしね。

本殿の開き戸は音を立てずに開けるのは難しいので、誰か入ってきたらすぐに分かる。
だからこそ、紫みたいに音も立てずに真後ろから声をかけられると驚く。来ないと思っていたところから、盲点から来るから余計に。

ていうか、紫ってこうやって人を驚かすのを楽しんでないかなあ？どうにもにやにやした顔が癪に障る。
まあ、さすがにこの程度で怒るほど子供じゃないけどさ。

「あんまり人を驚かさないでよ」
「悪かったわよ。いつも突然出て来ても平然とした顔してたから平気なのかと思っていたわ」

「うん、まあボクも人並みには驚くから、それで、今日は何の用？」
何か決めたようなマジメな顔をしている。こういう時は何か相談事がある時だ。
「こんな夜遅くに来たんだ。何かあったんでしょ？」
紫が一端目を閉じ、開く。そして、ええ、と答えた。

つまり、話を要約すると。
「人間が増えたせいで、妖怪が押されているってこと？」
「ええ」

ふむ、と漏らし、思考する。確かに最近、人里の人間の数が増えてきたような。
「ちょっと待ってて、タマちゃーん、ターマーちゃーん！」

……バァン！！
叫ぶこと数秒、すぐさま本殿の扉が開かれた、いや、蹴り飛ばされた？
「こんな夜中に叫んでんじゃねーですよ、梗様！！！」
うーん、最近ボクの名前を呼ぶのに抵抗なくなってきたかな、最初の頃は随分詰まってたけど。

「あ、来た来た。タマちゃん、人里の住人の数を記した台帳無かった？ここ最近の分で」
ボクの告げた言葉に数秒考え込んで、すぐに顔を上げる。
「たしか稗田の家に返す前の里の各家の場所と家族の人数を書いた台帳がまだ残ってたよーな気がしねーこともねーですが？」

まだ三代前の巫女さん、タマちゃん曰くの変態巫女が現役だったころ、だいたい四十年くらい前かな？

そのぐらいに、人里に稗田家という家が越してきたらしい。稗田という名前に聞き覚えがあったので、聞いたところ、古事記を編纂した稗田阿礼の子孫で、しかも阿礼本人は闇魔に許しをもらって転生しながら妖怪図鑑のようなものを書き綴っているらしい。

話は変わるけど、時代が時代なだけに、それぞれの村の情報を纏めた資料、と言ったようなものは非常に少ない。まだ都なら話は別なのだろうが、村などという単位ではほとんど見かけない。けれど、ほとんど、と表したように、全く無いわけではない。その一つがここの里だ。というか、ボクが昔言って作らせた。今は必要でなくても、いつかは必要になるかもしれないから。そして、そう言った紙媒体の資料は全て周辺で一番安全な場所、博麗神社に保管されている。さすがに神社で盗みを行うような人はこの辺りにはいないだろうから。

話を戻すけど、稗田の家は様々な資料を集めて、保管している。だから、いっそのこと、この神社に置いてある里の資料も渡してもらえないか、と稗田の家から具申があったのが、つい最近のこと。いや、具申自体は随分前からあったらしいけど、ボクが言って作ってもらい、ボクの神社に収めた資料だから、ボクの同意無しに渡してしまうのは無理、ということで今まで伸ばしてきていたのだけれど、最近になってようやくボクが戻ってきたので、ようやく交渉が出来たということなんだよね。

勿論、ボクとしても保管してもらえるなら、自分の神社に拘る必要も無い。だから、最近になって神社にある資料を全て稗田の家に渡した。そして、稗田の家の人間が分かる範囲で纏めた里の情報を

その時に借りたんだよね。

「そう言えばまだ見てなかったよね。ちょうど良かった。持って来てくれる？」

「はぁ？……はぁ、分かりました」

多少怪訝な顔のタマちゃんだったけど、すぐに頷いて本殿を出て行った。

「そっか、最近ちょっと神力が大きくなった気がしてたけど、人数が増えたのか」

増えたのは水神としての加護のほうだろうなあ。人の勢いが強まったなら守り神としての信仰は寧ろ減ったんだろうし。ボクの能力、自然の力を使うからか、あんまり神力消費しないんだよね、だからかどんどん増える。最近は能力使うこともあんまり無くなったし。正直あって困るものでもないけど、無くて困るものでもないんだよねえ。こんな神様ボクだけだろうけど。

「人が増えて困った、それで紫はどうするの？人を減らす、というのはダメだよ？」

ボクの守る者の中にいるのだから。

「そんなことしないわ。あなたを怒らせるのも嫌だし」

「じゃあ、逆か。妖怪を強くする？」

人を弱く出来ないのなら、そういう結論しかない。そう考えてのボクの推測に、紫は頷く。

「結界を張るわ……」

紫曰く、外の世界に対して幻想郷を幻の世界と位置付けることで、勢力が弱まった外の世界の妖怪を自動的に幻想郷へと呼び込む作用を持ち、日本以外の国に住む妖怪まで引き寄せる、という意味不明

な結界を張るらしい。
　ようするに、周りに忘れられた存在をこの幻想郷に連れて来る、と言った趣旨の結界。やっぱり紫って、昔周りの妖怪に幻想郷を否定されたこと根に持ってるんじゃないかなあ？と思ってしまう。
　だってこれ、私の言った通りだろ、やっぱり忘れ去られてんじゃねーかよこの野郎、って意味でしょ？え、違う？
　ま、まあ、紫の真意はともかく、この結果を張れば確実に幻想郷に妖怪が増える、ということ。

「ボクの仕事増える気がするんだけど……」
「あら、面白そうな式を見つけたんでしょ？その子に任せれば良いじゃない」
　タマちゃんか。面白いというか、可愛いというか、優秀なのは間違いないけど。
「まだまだ修行中ってね。まだ自分の体に慣れてないからなあ」
　蓬莱の薬で魂混ざってるから、もう紫の能力で分けるってことも出来ないし。困った話だよねえ。

　まあ、結局、どう足掻いてもタマちゃんが頑張る以外の解決方法はないわけで。
「そうだねえ、タマちゃんの修行だと思って割り切るか」
　ドンマイ、タマちゃん。頑張れタマちゃん。
　それに、新しい巫女さんも頑張ってもらわないと困るしね。

「しかし、紫はそういう結界とかよく思いつくよねえ」
「まあ、結界は空間に中を創る術だから、私の能力に合うのよね。梗はそういうの苦手そうよね」
「結界は苦手だなあ。決壊させるのは得意なんだけど」
「やらないわよね？」
「やだな、冗談だよ」

ちょっとした冗談なんだけど、紫がマジメな顔になっていて驚いてしまう。
「梗の場合、本当にやれるから怖いのよ」
冗談なんだけどなあ。

「へえ」
読んでみて思わず声が出る。
「里の中だけではあるけど、よく調べてあるね」
紫が帰った後の本殿で、タマちゃんが持って来てくれた紙束に目を通して行く。
誰がどこに住んでいる、どこの家には何人の家族がいる、そしてそれぞれの家の人間の職業など、稗田の家から借りた資料にはボクの想像以上の情報が載っていた。
「今の世の中でこれだけの情報を纏めるなんて、さすがとしか言え無いね」
古事記の編纂に関わっていた人物の家系だ。当然都にいたこともあるだろう。
しかし、こうして見ると。
「陰陽師が増えてるね。というか退魔師というべきか」
職業欄に退魔師、陰陽師と書かれた人物がボクが作らせた昔と比べ、格段に増えている。

確かに妖怪側への人間の抑止力は博麗神社の巫女。だけど、巫女は一人しかいない上に、ボクだっていつでもいるわけでもない。だからか、里にも陰陽師というのは確かに必要となる。特に里から博麗神社までは距離があるしね。
火急の用件の場合、陰陽師に頼んだほうが確実な時があるのも事実だ。
「けど、さすがにこの小さな里に三十人はちょっと多いねえ」

千年くらい前はまだ退魔師なんていなかったから、ボク一人でどうにかしてた里だ。そこに三十人はちょっと多いね。妖怪が里を襲うわけでも無いし。人里を襲うということは、ボクに敵対するということだ。妖怪の山の鬼たちがその辺の手綱はある程度取ってくれているようだしね。鬼ってのは、約束事は守る。嘘が嫌いな分、自身が嘘を吐くことも嫌う。そういう性質だから紫とは違った付き合いやすさがある。まあ、約束するのにも一々馬鹿正直な力比べしないといけないから面倒ではあるけど。一度交友関係を持てば付き合いやすい種族ではある。

まあ、紫は紫で、利益の一致を見ている間は裏切らることは無いだろうし、思考が理論的な分、付き合いやすい。多少思考速度が飛びぬけているせいで、考えていることに追いつかないこともあるけれどね。

「けどまあ、これからは足りなくなるかもね」

なんせ人も増えたし、妖怪も増えたのだから。人は守るべき対象、そして妖怪は倒すべき対象。両方増えれば、仕事量は一気に増えるだろうねえ。

「まあ、せいぜい頑張ってもらおうか」

深夜……。寝静まった神社の本殿で、一人そう笑った。

「っ！！」

声にならない声で叫び炎を振り回す。あっと言う間に妖怪の焼死体が積みあがっていく。

「っ……」

けれど、そのことに何も思うことは無い。あまりにも繰り返しすぎた当たり前過ぎる光景だから。

もう数百年繰り返し続けている作業でしかない。

「……いつになれば……」

いつになれば、自分は目的の人物に会えるのだろう？

何百年も前からずっと繰り返してきた言葉、けれど今日は殊更重くのしかかった。

何のためにこんなことをしているのだろう？

いつもそう自問し、そして。

あいつに《　》するため。

そう自答する。

それでいつも気力は戻った、逆恨みだと分かっていても、それでも溢れ出る憎しみが自身の心を支えていた。

けれど。

「……いつになれば……」

とうとう限界が来た。

いくら考えても、心が浮かび上がらない、深く深く、沈み込んでしまった。

そんな時に、ふと思い出すのは、あの人。

嘘吐きで、意地悪で、けれども、それでも、確かに自分の恩人であるあの人のこと。

「行ってみよう」

あの神社がどこにあるのか、正直知らない。いつもあの人は鏡から鏡へと飛んでいたから。

けれど、探してみよう。それは確かに、明確な生きる意味となるのだから。

そして、少しだけ軽くなった心で、決して変わることの無い体を動かし、そしてまた歩き出した。

七十三話　結界って苦手なんだよねえ。決壊なら得意なんだけど。（後書き）

一つ目の結界の話ですね。稗田家については結構想像で書いてます。多分転生した阿礼は寿命が３０程度らしいので、ギリギリ死んでる気がする。
次回多分オリジナルな展開の話になる気がする。

一つ考えているんですけど、１５００年代（多分後二話か三話くらい）から梗くん退場、主人公をタマちゃんに変えようかと。そして１８００年代からまた梗くんを復活、主人公に戻して、原作開始からは梗くん、タマちゃん、霊夢の三人を主人公にしようと、そんなこと考えてます。まあ、だからどうした、という話なんですがね。こうやって考えたこと残しておかないと、後で忘れてたりするし…
…トホホ＾＾
まあ、とにかく今そんな展開考えてます。

七十四話　冥途イン白玉楼ってね。（前書き）

うーん、久々の人たちが多くて、どんなキャラだったか思い出せない。
ＰＶが百万超えました。まあ、これも一つの目安として、ご報告。
けっこう読んでもらっているようで、嬉しい限りです。
反比例するように最近感想がなくなったな。ようは感想書きたくなるほど面白くも無いということだろうけど、精進だなあ。

七十四話　冥途イン白玉楼ってね。

「……ん……ぅん……うん？」

ふと目が覚める、と同時に手の中にある違和感に気づく。

「なにこれ……ビー玉？」

と、いうには少々大きすぎるかな。水晶玉みたいなものがなぜか手から落ちる。

ごとん、という音を立てて本殿の床に玉が転がり、その音でボクは、完全に目を覚ます。

「あれ、というか、また……いや、昨日は自分で寝たのか」

そう言えば、昨日は久々に自分で眠りについたんだったね。自分から寝たのなんて久々だから忘れてたけど。

それで、これなんだろう？見た目はちょっと大きめな水晶玉と言った感じだろうか？

色は何故か薄っすらとした白と赤で分かれている。なんだっけ、何かのマークみたいな。

「モン◯ターボール？」

何かそんな形だよね。でも、この楕円形を描くような線の形って、陰陽太極図っぽいね。

でも、だったら何で黒じゃなくて赤？とも思うし。その割りに、白の中の小さい円は黒いし、これってなんだろ？

「というか、この玉から出てる力って」

何故か、本当に何故か玉から神力が、それもボクのと同じ神力が発せられている。

「ボクが作ったってこと？でも、こんなの作った覚えないし、ていうか昨日と比べて減った感じはしないし」

とりあえず、整理。

一、朝起きると、何故か水晶玉のようなものを手に持っていた。

二、それは何故かモン○ターボールのような色合いをしている。

三、玉からは何故かボクのものと思わしき神力が発せられているが、ボクの神力が減った様子は無い。

「うん、さっぱり分からない」

だから能力使ってみようか。鏡界を司る程度の能力ならどんなものかざっとの理解は出来るだろうし。

あまり使うことがないから気づくのも遅くなったけど、鏡界を司る程度の能力で分かる情報は、全部自分の中から一番当てはまる概念で説明されているらしい。だから、未知のものは全く情報が得られない。けど、ボクの知らない知識というのがどうもどこかにあるらしく、少なくとも今まで全くの未知というものには出合ったことは無い。

まあ、それはともかく、この不思議な玉を解析してみる。

龍の頸の玉。龍の首元にあるという不思議な宝玉。体の内より溢れ出した龍の力が長年に渡り蓄積された結晶。因みに伸縮自在。

なんていうか、ぽかーんていう感じだよねえ。ていうか、最後のなんだろう？

「うん……うーん。つまり、ボクの漏れ出した神力の結晶ってこと？」

だとすれば、ボクの神力が減ってない理由も分かるけど、何でこんな模様？龍の頸の玉って、こんな模様してるものなのだろうか？

あ、縮めって思ったら本当に小さくなった、面白い。

「あ、なるほど、ボクの力の結晶だからか」
この陰陽太極図っぽいのは、八卦を司る程度の能力の陽と陰四つずつなわけだ。でも、何で陰の部分が黒じゃなくて赤?うわ、今度は大きくし過ぎた、本殿が。
「まあ、考えても仕様がないか」
問題はこれどうしよう?持つと、レベル1のポ〇モンがレベル50になるくらいの能力アップが見込めそうなアイテムだね。やっと元に戻った。あんまり大きくしないほうがいいかもねえ。
「タマちゃんに渡しておこうか。まだ上手いこと実力出し切れないみたいだし」
必要なければ巫女さんが使えばいいしね。そう考え、ボクは玉を持ち上げる。
「でもその前に、ちょっと輝夜にでも見せに行こっと」
珍しいものだし、何より話の種に良いだろう。輝夜が出した難題の一つだし。まあ、結婚はしないけど。
輝夜に見せた時のことを想像し、クスリと笑った。

「ながい~~~~~!!!!」
叫ぶ。とにかく叫ぶ。だって本気で長い。なんだこの階段は、ふざけてるのか、と言いたくなるくらい長い。
「何を叫んでいるのかしら?」
「紫、長い。隙間開け」
端的に単語だけで、要求するも、笑って一人だけ隙間で逃げられた。
「こら~~~!!!」

叫ぶも後には誰もおらず。
「はぁ」
そして一人、長い長い石段の半ばで溜息を吐いた。
「まあ、体は疲れはしないんだけど、精神的にくるものがあるよねえ」
想像してみてよ、ただひたすら石段を一時間以上登り続ける自分を、これで疲労もあるなら、途中で倒れてしまうよねえ。
「仕方無い、風情が無いと思ってたから止めようかと思ったけど、飛ぼう」
もう面倒だしね。折角幽々子ちゃんに会いに来たのに、汗だくでも悪いし。

西行寺幽々子という幽霊が幻想郷から行ける冥界にいると知ったのは実は今朝のことだったりする。紫もボクが知らなかったとは思わなかったらしい。ボクとしては、あのまま西行寺の屋敷にはいられないだろうし、どうなったのだろうと思っていたのだけれども、今朝たまたま起きていた紫がボクのところにやってきて、その時にふと幽々子ちゃんのことを聞いたら、知らなかったことに驚かれた。

まあ、折角だから今日行ってみようと思い、紫も付いてくるというので、隙間を潜ったはいいけれど、出た場所は何故か階段。紫が言うには、この階段の先に白玉楼という屋敷があり、そこに幽々子ちゃんがいるらしい。
「しかし、長いねえ」
登れど登れど終らない石段。けれど、それも終わりが見えてきた。
「後千段くらいかな、見えてきた」
西行寺の屋敷にあったような門が見える。というか、これって。
「西行寺の屋敷？」
正直正門から出入りたことが一度しかないという不審者ぶりだけど、覚えてる感じだとあんな門だったような。

登り終えた石段を振り返り、その光景に少しだけぞっとした。
「到着……って、すごいねえ、下が見えない。おぉ、怖い怖い」
失笑し、それから門を潜る。
「そう言えば、門番の妖気くんどうなったんだろうねえ」
今四百歳以上？半人半霊がどのくらい生きるのか知らないけど、もう少年というほどの歳でもないかな？
庭に入って行くと、そこかしこにいる半透明なもの。
「幽霊……なるほど、冥界ね」

こちらを見てたり、全く見てなかったり様々だけど、幸い襲いかかってくるようなものはいないようだねえ。
すっ、悪戯に神力を抑えるのを止めると、ぞわぞわ、と幽霊たちがどこかへと消えていく。
「こういうのには敏感なのかもねえ」
ちょっと悪いことしちゃったかもね。とまた神力を抑えて、庭を歩き、縁側へと上がる。
「うーん、ここに下駄置いておいていいのかな？」
そう呟くと、背後から声がした。
「いいわよ、いらっしゃい。梗さん」
その声が、なんだか懐かしくて。
けれど、彼女はボクの知る彼女では無く。
それでも、彼女には違いが無かった。
だから、ボクも。
「ああ、こんにちわ、幽々子ちゃん」
そう言った。

「あれ？梗のやついないね、母様がここにいるって言ってたのに」
朝、梗様が出かけ、誰もいないはずの神社の本殿の扉が開いていた。
中から声が聞こえたので覗くと、頭部に二本の角を生やした幼女がいた。
「……鬼？」
もしかしてなくても鬼だろう。どうみても。
そんな自分の言葉に気づいたのか、鬼がこちらを振り向く。
「あんたこの神社の巫女かい？梗のやつを知らないかい？」
「私はもう巫女じゃねーですし、梗様なら朝どこかに出かけたってんです」
半眼で鬼を見る自分。すると鬼は笑って。
「ならあんたでいいや。私は鬼の伊吹萃香だよ」
「はあ、はｋ……水無月霊です」
一応名乗り返したが、大丈夫だったか？まあ鬼だし問題ないだろう、と反芻する。
「いいねえ、鬼を前にして物怖じしないその態度。中々気に入ったよ」
是非とも遠慮したかったが、けれど目の前の鬼は有無を言わさず。
「梗がいないんじゃしかたない、あんたを代わりに連れて行くことにしよう」
ほんの一瞬で、すっと消えたと思うと、いつの間にか自分の背後に立ち、襟を掴んで飛んだ。
襟を掴む手は鬼というだけあり、とんでも無い力で、とてもではないが抜け出すことは出来なかった。まあ、敵意のようなものは感じないし、第一自分は不老にして不死だ。だったらこのまま連れて

行かれても大丈夫か、と考え大人しくしていたのだが。

全然大丈夫じゃねーですよ。

思わず愚痴る。目の前には、自分を連れてきた鬼、伊吹萃香がいた。

「よーし、じゃあまずは私から行くよ」

周囲にはわいわいと自分たちを見て騒ぐ鬼、鬼、鬼、鬼、鬼の集団。

そして何故か自分はこの鬼と闘わないいけないらしい。

「なんだってんですか、本当……？」

本当、冗談じゃねーです。

少し時間を遡って。

「母様、連れてきたよ」

「ほうほう、そうかそうか、その娘子が梗……って、さすがに違うじゃろ」

「萃香、あんた一体誰を連れてきたんだい？」

鬼に連れてこられたのは、妖怪の山の頂上付近にある屋敷。梗様から聞くだけは聞いていた鬼の頭領が住んでいるらしい屋敷。

そして恐らく目の前にいる化け物がその鬼の頭領、鬼神。

「いやさ、母様に言った通り、神社に行ってみたんだけど梗がいなくてさ。どうも朝から出かけたらしいよ。だから代わりにこいつ連れてきたんだよ」

「だからこの娘誰じゃ？」

「知らない」

阿呆か、と鬼神がとても軽そうに伊吹鬼の頭を叩いた。

ズドン

なのに、床をぶち抜いて倒れた伊吹鬼。その威力に思わず顔が引き攣る。これは不味いと思った。

尋常じゃない、鬼神も、そしてその一撃を受けてケロリとしている伊吹鬼も、そしてそれを見て笑う周囲の鬼たちもだ。

化け物の巣だってんです。思わず心中で毒づく。

「まあ、ええわ。とりあえず、梗とこの若いの、名乗っておこうかの、わえが鬼の頭領、鬼神じゃ」

それはそうだろう、これよりまだ上がいたら、即座に逃げようと思ったぐらいだ。

「水無月霊だってんです、んで、何で私はここに連れて来られたってんですか？」

内心は億尾にも出さず、精一杯の強がりで答える。

けれど、鬼神は一瞬きょとん、と呆けたような顔をして。

そして爆笑した。

「わはははは、ええわ。おまいさん、ええわ。なるほどのう、萃香が連れて来るわけじゃわ」

鬼神の機嫌に感化されたように、周囲の鬼も笑みを浮かべている。嘲るようなものではなく、寧ろ好ましいといった感じだった。

「うむ、実は久々に梗と酒が飲みとうなってのう、萃香に呼びに行かせたんじゃが、留守にしておったか」

そう言えば、鬼は酒が好きだと梗様が言っていた気がする。後、底無しの酒飲みだから気をつけろ、とも。

「梗がおらんのは残念じゃが、代わりに面白い客は来た。皆、今日も飲むぞ！！」

鬼神の声に全員が喜びの声を上げる。
それにしても、今日は、ではなく、今日もという辺りに、日常的飲酒の事実が窺える。
「ダメだ、このアル中ども。早くなんとかしないと」
自分でも意味は分からないが、何となく言わないといけない気分になった。

七十四話　冥途イン白玉楼ってね。（後書き）

ホント、鬼神さんってどんなキャラだっけ？
鏡蛟紀の鬼神さんは名前ないです。特につけません。鬼神というのが呼び名です。
ていうか、鏡界を司る程度の能力でモノの解析するとか、滅茶苦茶久々の設定過ぎて、覚えてた人いるのか？
正直作者本人も忘れかけてた。

というわけで、タマちゃん目線は久々かな？
次から完全にタマちゃん視点に変わる予定。そして次の次には梗くんは……。

七十五話　鬼、時々龍。ついでに猫。豚は降って来ないよ？何人が理解できるのか

完全にタマちゃん視点オンリーな話。
ふと気づいたけど、戦闘描写って文字数稼げるな。
自分の戦闘描写は、あまり複雑に書かないようにしています。
想像できないことを書いても、意味がないと思うからです。
分かりやすい動作で、短い戦闘時間を、細かく書いてなるべく理解してもらえるように努力しています。それでも理解できない人がいる場合、作者の技量不足です、もうしわけありません。

七十五話　鬼、時々龍。ついでに猫。豚は降って来ないよ？何人が理解できるのだ。

飲んでも飲んでも飲み足りない、これが鬼か。などと横目で周囲を見つつ、そんなことを思う。

梗様曰く、酒と喧嘩が好きな連中らしい。

なるほど、と思う。

今目の前で行われている喧嘩などという生温い言葉では表現しきれない光景も、鬼の基準で言えば、ただの喧嘩なのだろう。

最初はただの酒の取り合い。そこから互いに睨み合い、そして取っ付き合いを始める。それを周囲が煽って、喧嘩に勝った鬼が調子に乗って次の相手を求める。さっきからその繰り返しだ。

まあ、私には関係ねーですし、このまま静かにさせてもらうってんです。

目の前の凄絶な光景から目を逸らし、一人考え込む。

この場から抜けるためには、どうすればいいってんですか？

個人的にはさっさと帰りたい。自分は酒などほとんど飲んだことは無いので、あまりこういう場にいたくは無い。

ふと周囲を見ると、鬼たちは喧嘩に夢中のようだから、このままこっそり出ればバレ無いだろうか？

そんなことを考え、もう一度周囲を見る。広い座敷、自分の席は手前の出口からすぐ傍。周りの鬼たちは中央で繰り広げられている喧嘩に釘付け。

能力使えば見つかる確率はさらに下がるはず。

「行くっきゃねーですね」

いつ終るかも分からない妖怪の宴、このままじっとしているなんてどの道無理というものだ。

先を取る程度の能力は、面白い使い方が出来る。文字通り、何かの先を取る能力、普段は戦闘中の『先』読みに使う、けれど、視線の『先』を誘導するという使い方も出来る。あの人は『みすでぃれくしょん?』とか良く分からないことを言っていたが。

だから、自身に向かう視線の『先』を中央の喧嘩に向けたままゆっくりと抜け出そうと動く。

ただまあ、一つ誤算だったのは。

伊吹萃香の能力を知らなかったことだろう。

「おー、じゃあ次はそこの、梗の神社のとこの、来なよ」

後ろから声をかけられた時、心臓が止まりそうなくらいどきりとした。まあ、もう不死なのだから止まったところで死ぬわけでもないのだが。

ダメだってんです、一度意識が向けられちゃ、もう視線を外せねーですよ。

見つかったからには、逃げるわけにも行かず、溜息を付きながら中央へと歩く。

「一応聞きますけど、拒否は?」

「この場でそんな無粋な真似は許されないさ」

何事も諦めが肝心だよ、とあの人が言っていた気がする。

「まさしく余計なお世話だってんです」

思わず愚痴が付いて出るが、仕方無い。後、周りの鬼たちの声がうるさい。

「梗のとこの神社のやつがどれくらい強いのか、みんな興味津々でね。全員戦いたがってるんだよ」

この戦闘狂ども、と愚痴ってみても、何も変わることは無い。

「よーし、じゃあまずは私から行くよ」

周囲にはわいわいと自分たちを見て騒ぐ鬼、鬼、鬼、鬼、鬼の集

団。
そして何故か自分はこの鬼と闘わないいけないらしい。
「なんだってんですか、本当……？」
本当、冗談じゃねーです。

「山の四天王が一人、伊吹萃香とは私のことさ」
名乗りを上げ、足を落とした衝撃でドスン、と屋敷が揺れたような錯覚を覚える。
「博麗神社の元巫女、水無月霊だってんです」
名乗られたら名乗り返すのが様式美だよ、とはあの人の弁。
「はは、いいねえ、やっぱりあんたを連れてきて正解だったよ」
言葉も言い終えぬ間に、飛び出し右腕を振り上げる。
「とりあえず、一発、行ってみようかい」
言葉と共に、右腕が振り下ろされる。
メキ、ズドッ
床が軋み、そして壊れた音。
ギリギリでそれを避け、大きく後退。大きな穴の空いた床を見て、目を細める。
「理不尽極まりねーです」
座っていた時、鬼たちが話していた内容から察するに、この鬼よりもさらに力自慢の鬼がいるらしい。そしてそれらを束ねる鬼神という存在もまたこれより上なのだろう。
それを考えれば、ぼやかずにはいられない。
これが、幻想郷最強の種族、鬼ってやつだってんですか。

理不尽さと共に、感心してしまう。妖力で身体を強化することにこれほど長けた種族もいない。その力の一つ一つが、今の自分の糧となることを自覚してしまうだけに、逃げ出す気にもなれない。

「仕方ねーです」
本日何度目かのこの言葉。そして、自身の力を一つ解放する。霊力と妖力、人と妖がそれぞれ持つ力。未だそれを両方扱うのは難しい。けれど片方ずつなら使えるようになったし、切り替えることも出来るようになった。
この切り替えというのが難しく、完全に意識だけで制御する故、その難易度が跳ね上がる。実際、最初は十秒以上集中しなければ出来なかった。けれど、片方ずつのほうが実戦では役立つので、二つの力を切り替える修行ばかりした。だから今はもう一秒程度あれば切り替えれる。
そして霊力を巫女だった時に使っていた術だけに、妖力を身体能力の強化だけに使うことで、使い分けをしやすくした。
「今必要なのは、身体能力」
元人間の体だが、どうも妖力を使って身体能力を強化すると、化け猫のように強化されるらしい。つまり、俊敏性と反射速度に特化する。
「じゃあ、行きやがりますか」
上体を傾け、蹴り足に力を込める。人ならば反応できないような素早さで、疾走する。
「中々速いねえ、けどその程度なら」
また右腕を振り上げるのが見える。動体視力もかなり強化されていて、文字通りハエが止まっているようにすら見える。そして、右腕が振り下ろされるのにあわせて、急制動、そして横に跳ぶ。
「なっ！」
ブォンッ、と空を切る音。そしてその拳圧で空気の塊がぶつかる感触すらする。確かにとんでもない力だが。
「当たらねーなら問題ねーです」
今の自分の速度についてこられるものなどほとんどいない。
思い切り振った拳のせいで、一瞬身動きの止まった鬼に、一瞬で近づく。思ったとおり、急加速と急制動の緩急に目が付いていけず、

こちらにまだ気づいていない。
右脚を振り上げる。
昇天脚。
体ごと突き上げるような蹴り。あの人曰くの「さまあそると」。
顎を捉えたその一撃に、鬼が吹き飛ぶ。確かに鬼ほどの力は無くても、妖力で強化された身体能力に、あの急加速があれば、この程度の一撃は出せる。
けれど、鬼というのはどうにも頑丈らしい。人間なら首が吹き飛びそうな一撃を喰らって。
「あいたたた」
の一言で済まされる。
「理不尽極まりねーです」
もう一度、そう呟いた。

「いやあ、やるもんだ。侮ってたわけでもないけど、思ってたよりずっと速くて、強烈なの一撃もらったよ」
顎をさすりながら、あっさりと起き上がる。
「あっさり立っときながら、言うことでもねーですが」
「いやいや、その辺の妖怪なら今ので倒れてただろうね」
でも、と続け。
「鬼の四天王をあまり舐めないでもらおうかね」
にぃ、と笑って、そして目の前から消えた。
「は？」
咄嗟に前に避けたのは、一度だけ見た神社でのことが頭の隅に残っていたからだろう。
ブォン、風切り音が背後から聞こえ、そしてそこに上半身だけの鬼がいた。
「あれぇ？避けられた？おかしいな」
不思議そうな顔をしながら、けれどその口元は笑みを浮かべている。

「まあ、いいや」
その言葉と共にまた消える。いや、良く見れば消えているのではなく、霧のようなものになっているのだと気づく。
「霧になる能力？」
「違うさ、疎と密を操る程度の能力だよ」
上か下か、右か左か、どこからともなく響く声に、囲まれたと気づく。
ドン、と気づけば、腕のようなものが自身の腹に突き立っている。
「ぐっ」
内臓が破裂する。口から血を吐く。次の瞬間には背中に足の一撃。
「がぁ！！」
背骨が軋む。妖力で体を強化していたので、辛うじて折れなかっただけのこと。
そして瞬く間に次の一撃。拳が後頭部を直撃する。
「あっ！」
頭を揺らされ、意識が霞む。その間にも次々と体の至るところに攻撃の手が加えられる。

「あ……く……」
気づけば、全身がボロボロになって、それでも立っていた。
「まだ立てるとはね。見上げた根性だよ。同じ鬼でもここまで耐えるやつはそうそういないからね」
定まった意識で見れば、少し離れたところに鬼。やや残念そうな顔でこちらを見る。
「ただまあ、梗の神社のやつだから、もう少し期待したんだけどね」
瞬間、頭が沸騰しそうになった。本人は何気なく言ったのだろう、実際ぽつりと零したその一言は周囲には聞こえなかったようだ。
けれど、気づく。そうだ、自分は元とは言え、巫女。だったら。

「妖怪に負けるわけには、いかねーってんです！！」

復活（リザレクション）。蓬莱人特有の死すらも超越する現象。一瞬にして全身の傷を治し、折れた骨を再生させ、千切れた神経を繋ぎ直す。

「なっ！？」

それを見て、驚く鬼。その瞬間を見逃すほど自分も甘くは無い。

神力強化。主から式として力を引き出すと、全身に莫大な力が沸く。

さきほどよりもさらに教化された体で、爆発的な突進で、刹那の間に鬼との距離を詰める。

「これで沈みやがれってんです」

その速さに反応できていない鬼に向かって、バチバチと雷を放つ神力を込めた拳を真っ直ぐに突き出した。

重たい体を引き摺って、壁に寄りかかる。

「きつすぎねーですか」

自分にしては珍しく弱音。

「とりあえず……勝ったってんです」

本当は嬉しい。殺し合いではないとは言え、鬼の四天王を倒したという実績、そして自身の力を実感できたから。充実感が沸いているとも言う。

「ふふ……お疲れ、タマちゃん」

聞こえた声に目を丸くした。

「頑張ってたね」

声に誘われるように目を向けると、梗様がいた。

「いつから見てやがりましたか？」
「途中から。萃香ちゃんに一撃入れた辺りかな？」
割と最初のほうからいたらしい。
「どうしてここに？」
「紫が教えてくれて、スキマを繋げてくれたんだよ」
「はぁ、疲れました。次からは梗様が行って下さいよ？」
「そうだねえ。ああ、それとタマちゃん」
「はい？」

「お疲れ様。格好良かったよ」

ボン、と顔が赤らむのが分かってしまう。
この人は分かっててそういうことを言っているのではないかと常々思わされる。

「はぁ」

そして溜息を一つつく。

「敵わねーですね、ホント」

ふと、そう思った。

七十五話　鬼、時々龍。ついでに猫。豚は降って来ないよ？何人が理解できるのか

因みに、針とか札とか使わないのは、いきなり連れて来られたから、持っていけなかったからです。
そして神力を纏った拳が雷を発するのは、それが梗くんの力の属性だから、だと思ってください。
雷というのは、昔の人に、竜の化身と呼ばれていることから、龍神と雷というのは関係が深い、という設定。

七十六話　酒好き共の酒宴。ボクは不参加でお願いします……（汗）。（前書き

そろそろ終盤にかけての伏線が出揃ってきました。
後は一つか二つくらいかな。

七十六話　酒好き共の酒宴。ボクは不参加でお願いします……（汗）。

さて、久々のボクの側だよ。
「はて？ボクの側？何のことだろ？」
久々の電波受信。けれども気にしない、気にしない。
いやあ、いいもの見せてもらった。格闘だけの遊びみたいなものとは言え、タマちゃんが萃香ちゃんを倒せるということが分かったのは大きな収穫だったね。
供給した神力も微々たるものだし、術を使えば多分、鬼神以外なら鬼の全てに勝てるだろうね。
それはつまり、幻想郷の大半の妖怪に打ち勝てるということで。
本当に上のほうの大妖怪は鬼神が抑えているし、ならば大抵のことならタマちゃんがいればいい。
つまり。
「ボクがここに留まる必要性も薄れてきたねえ」
ボクの膝で健やかに眠る少女の頭を一撫ですると、ボクはそっと微笑んだ。

「梗、おまんさんも一度どうじゃ？」
「ボク？キミと？」
ボクの膝を枕に眠るタマちゃんに微笑ましいものを感じながら見ていると、鬼神が立ち上がってこちらに来ていた。
「そうじゃ、萃香はおまんさんのところのにやられて寝とるし、勇

儀はわえに譲るそうじゃ」
「うーん、そうだねえ？」
別にやってもいいんだけどねえ。うーん、タマちゃんに一度見てもらおうか。
幻想郷の頂上ってやつを。
「いいよ。ほら、起きなよ、タマちゃん」
軽く揺すってやると、瞼が重そうに開く。
「まあ、疲れてるのは分かるけど、起きて。それから見てなよ。ボクがキミに求めている領域ってやつをさ」
やや寝ぼけてはいるが起き上がったタマちゃんを残し、立ち上がった。

寝ぼけていた頭が一瞬で目覚めた。
見開いた目で見たものは、さきほど自分が戦っていた場所で激突するあの人と鬼神の拳と拳。
鬼の拳とぶつかり合って互角という辺りに、自身の主の無茶苦茶ぶりが垣間見える。
「起きて。それから見てなよ。ボクがキミに求めている領域ってやつをさ」
さきほど言われた言葉を思い出す。
「梗様、私にあんなの求めてやがるんですか……？」
振り上げられた鬼神の脚を右腕一本で止め、その脚を掴んで片腕で真後ろに投げる。
けれど、投げられ、宙に浮いたその状態で体勢を変え、難なく着地する。
「なんか前より身軽になったね」
「いつまでもおまんさんに負けてられんからな」
「そっか、じゃあ、まだまだ上げていこうか」

瞬間、その姿が消える。少なくとも、今の自分の目では捉えきれない。

直後、鬼神の真後ろに背合わせになるようにその姿を見せ、その場で右脚を上げたままくるりと回り、その背に回し蹴りを叩き込む。

ドンッ、ダン、ダン、と床に三度跳ねて、倒れる。

「やれやれ。本当におまんさんは楽しませてくれるのう」

けれども、何事も無く立ち上がってくる鬼神。その姿に思わず戦慄する。あの伊吹という鬼よりもさらに剛力で強靭なその肉体。そして震え上がるほどの強大な妖力。

「これが、鬼の頂点」

気づけば言葉が口をついて出ていた。

「やれやれはこっちだよ。今のはそれなりに強めに蹴ったのに、これだから鬼ってやつは」

何となくだけれども、楽しそうに口を歪めるあの人。

「じゃあ、ボクももっと上げていかなきゃねえ」

そしてその場が吹き飛んだかと錯覚するほどの吹き荒れる強大な神力の嵐。鬼神以外の全ての鬼が驚愕に目を見開いている。けれど、鬼神だけはさも楽しそうに笑っていた。

「くく、うわははは。まったくまったく。これは遠慮はいらんつうことか？」

「我慢できるような性格でもなさそうだけど、キミたち鬼ってのは」

「くくく、ようわかっとるやないか。ああ、もう血が滾りおってのう。たまらんのじゃよ」

最早笑みが凶悪なものへと変貌した鬼神が右腕を振り上げ。

「ふんっ」

ブオォォン

軽く振った。ただそれだけのことで、何もかもが吹き飛ぶ。尤も、ちゃっかり鬼たちは自前の酒だけは確保しているが。

「さあて、一丁」

「死合といこうか」

互いにクスリと笑って。
そして、互いに一歩踏み出した。

「で？どうだった？今日のボクと鬼神の戦い」
「どーもこーも、互いに本気だして一発殴り合ったら建物が全部吹っ飛んで戦いも何も流れたじゃねーですか」
まあ、そうなんだよねえ。と頬を掻きながら笑う梗様。
「ったく、今日の分の巫女の修行やってねーってんですよ」
少しばかり非難がましい目で見るが、ふふ、と笑って流される。
「そう言えば、今日渡した珠使わなかったの？」
そう言われてふと今朝もらったものを思い出す。
「あれ、どうやって使えばいーんですか？」
「あれはね、ボクと繋がっているから、直接的にボクの力を引き出せるんだよ」
「は？えっと？」
「一言で言えば、ボクの力の結晶？みたいなものだから」
本人も良く分かってなさそうに、うーん、と唸る。
「うん、まあボクの力が使える道具みたいなものだと思えばいいよ」
そう言えば、梗様の能力って何だっただろう？と思っていたら、自分の疑問顔を察したか、先の答える。
「ボクの能力は〈八卦を司る程度の能力〉。八卦に象徴するものならば、操ったり出来る能力だよ」
そう言って、梗様の周囲に水の球体が浮かび上がる。軽く手を振るとそれが消え、炎へと変わり、次に地面盛り上がり、風がそれを削った。あ、境内が……今代の巫女がせっかく掃除したのに。思ってはみたものの、言わなかった。何せこの人の神社なのだから。
「二代前の巫女さんから八卦は習った？」

「ええ」
八卦は天地自然に象って作られ、卦の形はさまざまな事物事象を表しているとされる。
乾（天）、坤（地）、震（雷）、巽（風）、坎（水）、離（火）、艮（山）、兌（沢）をそれぞれ表す。
八卦が象徴するものを操る、つまり今出てきた八つを操る。
「なんか反則くせー能力です」
「まあ、神様だからねえ」
それに、最初からこうだったわけでもないしね。と悪戯っぽく笑んだ。

「まあ、普通にいらねーんですが」

言ったら、梗様が突っ伏した。境内で何してんですか、この人は。
「式だから、普通に梗様から力供給してもらえるじゃねーですか」
忘れていたのか、そう言えばそうだ、と納得した表情で頷かれた。
「はぁ、なんつうか、今日は疲れました。まだちょっと早えーですが、夕飯作るんで、さっさと寝させやがれってんです」
鬼の中でもかなり強いやつと相手させられたのだから、それくらいは許して欲しい。
この時、自分も少々疲れていた、頭もぼうっとするし。
だからこそ、次に梗様の言った言葉に一瞬頭が追いつかなかった。

「うん、じゃあボクが作ってあげよう」

本当に時々だけど、実はボクこの神社の人にバカにされてるんじゃないか、と思う時がある。
とても疲れた様子のタマちゃん、さすがにちょっと同情を禁じえ

なかったから、夕飯の支度を変わってあげようという寛大な心で接したただけ、それなのに、滅茶苦茶引かれた。泣いていいかなあ？

台所で支度してたら、やってきた巫女さん（タマちゃんじゃないよ？一応言っておくけど）も目を丸くしてたし。

まあ、普通に祭神が巫女に夕飯を作るというのがおかしいだけなんだろうけど。どうにもその辺の感覚がボクはずれている。というより、昔と感覚を変えれていないだけなのだろうけど。これまでも、そしてきっと、これからも。

「そろそろいいのかもしれない」

神社の本殿で一人そう呟く。もう皆寝静まっているころだろうし、多少独り言を呟いたところで問題ないだろうしねえ。

「今日の一件で分かった。タマちゃんがいれば人と妖の調和は十分成り立つ」

もし、いざと言う時は、紫もいるしねえ。

「だから、ボクもそろそろ、ボクの目的ってやつを果たさせてもらうとするよ」

自分以外誰もいないそこで、ボクは誰に向かってとも無く呟く。

ドクン、と心臓が鼓動を打つ。

ああ、そう言えば、キミもいたね。

でも、まだキミの出る幕じゃないよ。

自分が知らないことすら知らないキミのね。

まあ、キミにとってはたった一つの事実で十分だと思い込んでいるみたいだけど。

世界はそれほど単純じゃないんだよねえ。

まあ、せいぜい。

何もかも知って。

勝手に絶望でも何でもしてくれればいいのにねえ。

きっかけは、紫の張った倫理結界。それを見てようやく解の一つに辿り着く。

一つ解を得れば、連鎖するように他の問も解け。

そして、一つの道筋が見えてくる。

「残りの問題は、それをやる技術、それと場所か、後は時期だね」

後強いて言うなら、これをすれば現状から確実に悪化することかな？

「でもまあ、やってしまえば問題ないし。後のことなんて知らない」

どうせその時、ボクが生きている保障なんて無いのだから。

「やった見えてきた、これでキミを」

キミを助けれるね、縁。

七十六話　酒好き共の酒宴。ボクは不参加でお願いします……（汗）。（後書き

梗くんは料理が出来るのだ！！
まあ、旅とかしてたし、この時代に料理屋なんてものがそこら中にあるわけでもないと思うし、そもそも稲荷寿司の話とかちゃんとそれらしきこと言ってたし。まあ、普通でしょ。

次回から梗くんログアウトの予感。
そして来るタマちゃんの時代。
さらに言うなら、ここまで一度も巫女さんの名前出てないな。考えてすらないけど。会話すらないのは問題か……？

番外五話　巫女さんの話。一話全部だよ。（前書き）

なんか、途中で半分くらい消して書き直してたりして、遅くなりました。
なんか妙に梗くん説教くさいキャラになっちゃったんで、リテイク。
梗くんは、欺き（あざむ）、騙し（だま）、嘲り（あざけ）、揶揄う（からか）、そしてねじ伏せるキャラのつもりで書いてる。なんか主人公というより、外道だよね。

番外五話　巫女さんの話。一話全部だよ。

目が覚めたら一番最初に頬を抓る。
「痛い……」
そうでもしないと、私はまた寝てしまうから。
寝起きが悪いのは、この生活において中々辛い。恐らく、あの方は私が寝坊しようと、くすりと笑って、やれやれの一言で済まし、明日はちゃんと起きなよ？と言うだけだし、もうお一方は、呆れた目で見て、私がやるべきことを代わりに終らせてしまっているのだろう。

博麗神社の巫女はこの幻想郷における、人からの妖への抑止を担う。それ故、博麗の巫女は、それ相応の実力を必要とする。
私、博麗葉乃（はくれいはの）が博麗神社の巫女となったのは、まだ十を過ぎたばかりの時だった。
元の名は桐野葉乃。けれど、神社で巫女として龍神様に仕えている間だけは、博麗となる。
博麗神社の巫女は、血縁に縛られない。過去を振り返っても、血縁関係は無い。あったとしても偶然選ばれた人間が血縁だったというだけのことだ。

この地、幻想郷において、博麗神社の持つ意味合いは非常に大きい。それ故に、巫女の役目に付く人間に拒否権など無いと言って良い。
どういう基準で巫女が選ばれているのかは分からないが、その大事な役目が今代は自分に回ってきたらしい。

世界には妖怪が溢れているが、この幻想郷にも多くの妖怪がいる。妖怪は人を喰らい、人は妖怪を恐れながらも退治する。けれど、この幻想郷には妖怪のほうが人よりも多い。それでも均衡が出来ているのは、偏(ひとえ)に博麗神社のおかげとも言える。龍神様の加護により、里は守られ、博麗の巫女がいるから、妖怪側も強くは出られない。

博麗神社が無くなれば、龍神様がいなくなりでもすれば、この地は滅ぶとさえ思われているほどに、私たち里の人間は妖怪の恐怖と隣り合わせだ。

それがあるべき姿なのだと、巫女になって一番最初に教えてもらった。妖怪が人を喰らい、人が妖怪を退治する。それが人間と妖怪の正しいあり様なのだと。

祭神様は隠し事をしない。実は幻想郷の外では妖怪がだんだんと忘れ去られていっていること、そう言った妖怪たちが幻想郷にやってきていること、人と妖怪の均衡が崩れないように調整する役割を祭神様が負っていること、そう言ったことを一番最初につらつらと、淡々と私に話した。

「さて、キミはどう思う」

実に楽しそうに、けれど試しているような目で私を見て、私の答えを待った。

確かにひどい話ではあった。ようするに外の世界に行けば、こんな危険は格段に減るのだから。特に私は、生来より霊力が高いらしく、妖怪にはとても美味しそうに見えるらしく、何度も襲われた。そして、その度に博麗神社で作られているお札に助けられた。

外に行けば、確かに妖怪に襲われる機会は減るのだろう。そう言った意味では外の世界は魅力的だった。

けれど。

魅力的ではある。けれど、私は行きたいとは思わなかった。

理由を聞かれたが、私には答えられない。理屈がどうとかではなく、感情で言っているのだから。

「強いて言うなら、私は幻想郷で生きているから、でしょうか」

そう言うと、祭神様が優しく笑った。

「そうだねえ、あえて言わなかったけど。外がここより良いとは限らないよ？」

外の世界では、人間は妖怪と争うことが無くなった。外からの脅威が無くなれば、今度は内。とは祭神様の言っていたことだ。ようするに、今度は人間同士で争いだしたらしい。

「どうして人間同士で争うのですか？同じ人間なのに」

そう聞くと、祭神様はそうだねえ、と薄く笑った。

「結局は単位の問題なんだけど、言っても分からないよねえ……まあ、人の本質は多分悪なんだよ。幻想郷は妖怪の存在に脅かされてるけど、それが少ない外は欲が出てしまうんだろうね」

話が良く分からず、不思議そうな顔をする私に薄っすらと笑みを浮かべる祭神様。

「はくｒ……き、き、きょ、梗……様。十にもならない子供に何を言ってやがりますか」

そして、呆れたような目で祭神様を止めたのは、自分と同じ巫女服を着て、何故か猫の耳と尻尾の生えた人だった。

水無月霊。それがこの人の名前。本当は私の前の巫女だった人。実は里ではけっこう有名であったりする。まだ年若い時に巫女となったこともあるけれど、とにかく強いから。

人間としては破格の強さを持っていて、里の周辺に出るような妖怪ならば、余裕を持って倒せるらしい。正直人間じゃないと思う。聞くところによると、本当に人間をやめたらしい。ほうらいじん？

とかいうのになったらしく、不老不死の存在らしい。
何で猫の耳と尻尾が生えているのかは謎だけれども、最近は人化の術とか言うので、耳と尻尾は消している。
そして、なんと祭神様の式らしい。正直、式というのはまだ習っていないので、良く分からないのだが、主のための道具、らしい。
正直、あの二人は主従というより、家族のように見えて、それを伝えると、祭神様はふふと、笑って私の髪を撫でた。

霊様と言えば、昨日何故か朝から霊様も白霊様もいなかった。白霊様は時々、思いついたようにふらっといなくなるので、気にはしていなかった（多分、霊様が把握しているだろうし）が、霊様が何も言わずにいなくなるというのは奇妙な話だった。
ただまあ、霊様がその辺の妖怪なんかに負けるとも思えない。こうして修行してみて分かるけれど、霊様の強さは異常だ。あれでまだ全力が出し切れていないとは思えないほど。
だからもし霊様に何かあるなら大妖怪と呼ばれる人知の外に生きる妖怪たちだろうけれど。
「そんな存在がそうそう出てくるはずも無いですよね」
この幻想郷で霊様から教えてもらった大妖怪と呼ばれる存在。けれど、白霊様曰く、八雲紫という妖怪を除き、基本的には全員自身の領域から出てこないらしい。
だとするなら。
「大丈夫……ですよね？」
多分、何とかなるだろうと思う。そもそも、一番弱いのは私なのだから、心配するだけ無駄だ。
そうしてその日は、霊様がいなかったので、この間教わった術の修行をしていた。

お二人が帰って来られた。何故か霊様がぐったりとなさっている。

白霊様はそれを楽しそうに見ていた。
「お帰りなさいませ、お二人とも」
「うん。ただいま、巫女さん」
「あ、ただいまってんです。葉乃」
因みに、白霊様は私を巫女さんと呼ぶ、それから霊様は私を名前で呼ぶ。白霊様のは毎度のことらしく、霊様も一番最初はそう呼ばれていたらしい。
「霊様、お疲れですか？」
「あー、問題ねーです。それより、今日付き合えなくてわりーですね」
「いえ、ちゃんとやってましたから、大丈夫です」
声に力が無いな、と思ったが、白霊様が何も言わないので、大丈夫なのだろうと判断する。
「お夕飯、私だけで作りましょうか？」
けれど、さすがに今の霊様に手伝ってもらうわけにもいかないと思い、そう尋ねると、白霊様が答えた。
「巫女さん、先にお風呂沸かしてきてくれる？」
祭神様にそう言われたのなら、それ以上は聞く必要も無く、私はお風呂の用意をしに向かう。
後ろで、お二人が何か話されているが、必要なら後で聞かされるだろう。

風呂を沸かし、夕飯でも作るかと台所に行けば、何故か白霊様が料理をしていた。
「……？……（ごしごし）……！？」
「何で信じられないものを見たみたいに目を擦った？そんなに驚くことかなあ？」
普通自分の神社の祭神様が台所で料理していたら驚くと思う。
「今日はボクが作ってあげるから、キミも休んでいいよ。後、お風呂沸いたの？」

私が頷くと、ならタマちゃんに入るように言ってあげて、と言われたので霊様の部屋へと向かう。
博麗神社はそんなに大きくもないのですぐに辿り着く。
「霊様、葉乃です。入ってよろしいですか？」
部屋の前に正座して尋ねるが、返事は無い。
「霊様？」
再び呼びかけるが、それでも返事は無い。
気配はある。修行のおかげかそう言ったものが何となく程度だが感じ取れるが、霊様の気配は確かに室内にある。可能性としては……。
「霊様、開けますよ？」
そう言って、障子を開くと、布団に倒れてぐっすりと眠る霊様がいた。
着替えの途中でそのまま寝たのか、半脱ぎの巫女服が何となく艶かしく、けれどそれとは対称的な無垢な寝顔がとても可愛らしかった。
「ありゃりゃ、タマちゃん寝ちゃってるね」
背後からの声に飛び上がりそうになる。全く気配を感じれず、誰もいないと思っていたので、余計に驚いてしまう。
「ふふ、可愛い寝顔で寝てるね。ねえ、巫女さん」
そう言って同意を求めてきたのは、白霊様だった。
「そうですね、霊様とっても可愛いです」
時々ピコピコと動く猫の耳に、何かが溢れそうになる。
「うーん、寝ると解けるとは、人化の術はまだまだだねえ」
ボクなんて寝てる間に解けると、神社壊れちゃうしね。と笑いながら言われたが、私としては笑えない話だった。寝ている間に、寝ぼけた白霊様に潰されて死ぬなど、冗談にもならない。
そんな私の心情を察したのか、大丈夫だよ、と言って私の頭にぽんと手を置く。
「キミの想像も出来ないくらい昔からかけてきた術だよ？今更解け

たりしないって」
　なら脅かさないでください、と暗に視線で言ってみると、ふふ、と笑って流された。
「うーん、タマちゃん起きないし、二人で先にご飯食べようか？」
　もう少しこの癒しの空間を見ていたい気もするけれど、明日が怖そうなので我慢しておく。
「けどまあ、服は勝手に直したら怒りそうだから、布団だけでもかけておいてあげようか」
　そう言って、部屋の押入れから掛け布団を一枚取り出し、霊様の上に置くと。
「ふふ、まあ今日はゆっくり休んでおきなよ」
　そう言って、霊様の頭をゆっくりと撫で、部屋を出た。

おまけ

「……」
「どうしたの？」
「いえ、私も霊様のあの耳ちょっと触ってみたいなって」
「ふふ、タマちゃんに頼んでみたら？」
「普通に怒られそうですし」
「じゃあ、今の内に触ってみる？」

「多分、すぐに見つかって、明日の修行が十倍になりそうで怖いです」
「ふふ、賢明だね。あの耳かなり敏感だからすぐに分かるよ」
「はぁ……諦めるしかないか」
「諦めるのはまだ早いよ？」
「え？」
「まだタマちゃんの人化は未熟だからね、驚かせでもしたらまた解けるかもね。その時に事故を装ってそっと」
「（ごくり）」
「おっと、後はキミ次第だ」
「はい、明日から頑張ってみます」
「ふふ、ちゃんと、修行も真面目ね」
「勿論です」

とか言う会話があったとか無かったとか。

番外五話　巫女さんの話。一話全部だよ。（後書き）

思ったんだ。最近さ。
タマちゃん分が足りない！！！
って。

巫女服半脱ぎで、眠るタマちゃんか。我が家に一匹ください。
なんか自分で書いててちょっと可愛いなタマちゃん。
あれかな、こんな子がいてほしいという作者の欲望の発露だったりするのだろうか？
別にツンデレじゃなくてもいいけど、妹がほしいと思うことはあるな。

そしてまた増えたオリキャラ、タマちゃんの次の博麗の巫女、桐野葉乃改め、博麗葉乃。常に丁寧語で話すので分かるとは思うけど。
タマちゃんといい葉乃といい、作る気の無かったオリがいつの間にか出来上がっている……。これ以上増えないよな……？

七十七話　またか、そう言いたくなる日。そして、動き出す大鳥。（前書き）

久々に難産だった。
今回ちょっと文字数少ないですけど、いつも通り、章始めの話だからということで納得していただけるとありがたい。

そして久々に出したな蒼。本当は梗か紫が普通に出てくる予定だったのに。お前何故出てきたし？

七十七話　またか、そう言いたくなる日。そして、動き出す大鳥。

探さないでください。

その一言が書かれた紙を持つ手がぷるぷると震える。

整えられた神社の本殿。そこにいるはずのこの神社の主はおらず、いつも座っていた大きな姿見の手前に落ちていた一枚の紙。

そこに書かれた一言を見た瞬間、顔が引き攣った。

「あ、あの……霊様？」

いつまでも戻ってこない自分を心配した葉乃が本殿の扉を開いて入ってくる。

「どうかなされました……か……」

自分の持っている紙を見て、そこに書かれている内容に葉乃も絶句する。

「……」

まさかとは思うが。

「……す」

けれどもこれは。

「……けんじゃ……す」

どう見ても、家出。

「ふざけんじゃねーです！！！！」

主不在の神社に、怒鳴り声が響いた。

「ふぅ……」

思わず息を吐く。朝から霊様の機嫌が最悪だったので、ずっと震えていたのは秘密。

あの手紙を見つけた後、霊様は一度朝食を取ってから飛び出されていった。

その間ずっと、恐ろしいほどの気迫を立ち上らせており、逃げ出したくなったのも秘密。

「それにしても」

気になるのは、祭神様の行動。今までもどこかに出かけることはよくあったが、大抵は霊様に一言声をかけてからだった。何も言わずに出て行くこともあったけれど、それも霊様は気にした様子も無かった。

けれど、今朝の手紙のこと、そして霊様の様子。あれではまるで。

「……家出……みたいだった、よね？」

神様が家出……？それは、つまり、私たちは見捨てられたということだろうか？

とも思ったが、その加護が無くなった様子は無いので、それは無いと判断する。

さすがに巫女はそのぐらいの判別は出来る。

「うーん、なら問題ないのかな？」

自身の言ってて、いつもと変わらない気がして来た。ふらっといなくなるのもいつものこと。よく考えてみれば、今回の手紙もちょっとした悪戯のようなものなのかもしれない。さすがに家出というよりも気まぐれで片付けてしまったほうが聞こえもいいし、そうでも思わないと頭痛がしてやっていられない。

「そうそう『何も問題はないよ』。だから放っておくほうがいいんだよ」

そして聞こえた背後の声に、また飛び上がりそうになる。そして振り返ってまた仰天する。

「は、白霊様!?」

朝から姿を消していた祭神その人がそこにいた。いや、そっくりではあるが、髪と目は黒い、それ以外はまるで同一人物のように見える。

「葉乃……戻ったてんで……す……？」

そしてそこに現れる霊様。けれど、だからこそ次の瞬間、霊様が取った行動が私には分からなかった。

懐に腕を入れ、抜き放つと同時にその手に持った針を投げる。その針が祭神様の体に次々と突き刺さる。

「た、霊様!!？な、何をして……」

「よく見やがれってんです。あれがまともな存在に見えるってんですか!？」

慌てる私を余所に、霊様が冷静に祭神様を見つめ、そう言う。そして、言われたとおりよく見て、ようやく気づく。

「見た目はそっくりだけど……感じる力が全然違う？」

これは人や神というより寧ろ。

「この神社に何か用でもありやがりますか、妖怪？」

妖怪だった。

「『用なんて無いよ』？ただ梗のこと知りたいと思ってるかと思ってね」

その口から出てきた梗という言葉に無意識に体が反応する。

「梗からの伝言なんて『頼まれてない』んだけどね。しばらく帰らないって言ってたよ？」

一瞬頭が理解できず、思考が止まる。伝言は頼まれていないと言わなかったか？いや、それ以前に何故この妖怪は梗様のことを知っているのだろうか？それに、あの姿は梗様そっくりで。

ふと以前、梗様が言っていた妖怪を思い出す。

「橘……蒼……。そういうことだってんですか」

「『ボクはそんな名前じゃないよ』？」

橘蒼。梗様の一応の知り合い。外見はそっくりで、特徴は嘘吐きなところ。ただ嘘吐きはではあるが、他者を騙そうとする悪意のある嘘ではなく、単に他人に対して本当のことが言え無いというだけらしい。

「梗様が言ってやがりました」

「へえ『梗は何も言わなかったの』かい」

「『橘蒼がやって来たら、死なない程度に痛めつけて送り返せ』って」

瞬間、足に纏わせた妖力を爆ぜさせ、飛び出す。その勢いで、目の前の妖怪を蹴り上げ、外まで飛ばす。

「まあ、伝言は受け取りましたんで、さっさとお引取り願うってんです」

外に出ると、神社の境内にまだ倒れている妖怪に狙いを定め、弾かれたように走りだす。

後数歩で辿り着く距離まで詰めると、そこから跳び、曲げた左足に力を込めて。

「沈みやがれってんです！！！」

回し蹴りを放った。つま先が弧を描き、妖怪の腹へと吸い込まれていき。

「ああ、こんなのもらったら『ただじゃすまない』よ」

ドスッ、という足がわき腹に突き刺さる音とは裏腹に、楽しそうな笑みを消さない妖怪。そこで初めて顔を歪め、妖怪の腹から足を抜き、下がる。

「……確かに入ったはず……けど、平気そうじゃねーですか」

いぶかしむ。そして何かの能力かと、思い至る。
「厄介極まりねーですね……」
目を細め、もう一度行こうとしたところで。
「じゃあ、ボクはもう『帰らない』でおくよ」
そう聴き取った、その瞬間には、もう妖怪はいなかった。

バサッ
音を立てて羽ばたく。翼が上下するたび、自身はまたこの大空を進んで行く。
バサッ
高まる躍動感。興奮したように夢中で空を駆け巡る。
バサッ
眼下に広がる雲の海。空から降り注ぐ日の光。その全てに感動し、そしてまた自身は夢中になる。

すでに自身の名など、忘れ去られてしまったが。
それでも、この鼓動の高鳴りだけはいつまでも忘れることは無い。
この世界に生れ落ちた瞬間のことも、それからのことも、もう過去のことの大半を忘れてしまっていたけれど。
初めて空を飛んだ日。それだけは、決して忘れることは無かった。
自身は大鳥。自身は嵐の化身。自身は大空を翔ける者。

その名を、鵬（ほう）と言う。

「お邪魔するわよ」
声と共に、宙に裂け目が現れる。
「うぇ！？ど、どなたですか」
焦る葉乃を余所に、静かに頭を下げる。
「お久しぶりです、八雲紫様」
隣で葉乃が息を呑むのが分かる。その名は以前にも教えた名。
大妖怪、八雲紫。

「あなたからすれば久しぶりかもしれないわね、尤も、私からすればついこの間のことかしらね」
意味ありげに扇子で口元を隠し、怪しく笑う。
「まあいいわ。そんなことを言いに来たのでは無いもの。単刀直入に言うけれど、梗はいるかしら？」
尋ねるというよりは、確かめるといった口調。その言葉に首を振って答えると、そう、と頷く。
「やはりね。まさかとは思ったけれど、本当に何も言わずに行くとは思わなかったわ」
その言葉にはっとなる。今の言い方、それでは。
「梗様がどうして出て行ったのか、どこに行ったのか、知ってるってんですか？」
「知らないわ、けれど、しばらくは戻って来れそうに無いとは言っていたわね。たしか鬼の酒宴にあなたたちが巻き込まれた次の日くらいだったかしら」
「鬼の……六年も前のことじゃねーですか！？」
「私からすればついこの間のことよ」
時間感覚の違いに、眩暈すらしそうになる。つまり、あの方は六年も前から出て行く心積もりだったということだろうか？
「梗が言うには、妖怪への抑えはあなたが代わりにいるから、大丈夫だと、言っていたわ」

「私が……？」
「ええ、萃香と対等にやりあったのなら、大丈夫でしょうし、いざとなれば私も手を回すわ」
逆に言えば、梗様は今まで一人でそれだけのことをやっていたということで。
「どこに何をしに行ったかは知らないわ。けれど、あなたなら大丈夫だと、梗が言っていた。なら私もそれを信じましょう」
自身があの人に信頼されている。それだけで、もう何も言えそうに無かった。

ゴウッと風が木々を薙ぐ。ビュンビュンと風が吹き荒れ、ザーザーと雨が降り荒ぶ。
ああ、何故？
心の底から、世界へ問いかける。
私はまだこれだけのことが出来るのに。
雲を巡らし、風を吹かせ、雨を降らせ、嵐を呼び寄せる。
どうして、私は忘れ去られていくのか。
疑問、疑念、疑惑、猜疑、疑心、疑義。
何故私を忘れたのか？
自身の眼下、遥か下方に見える人の住む都市。けれど、人々はただ家路を急ぎ、屋根のある場所で雨風を凌ぐ……ただそれだけ。
かつては、強大な自然の力を畏れ、自身に力を与えた過去の人間たちの心はもう無い。
ああ、もう、私は。
その時、ふと妙にそのことに納得してしまう。
もう、私は。

この世界にいられないのだ、と。

かくん、と何かに引っ張られるような感覚。

眩暈にも似た、視界の揺らぎ。

そして気づけば、知らない地にいた。

七十七話　またか、そう言いたくなる日。そして、動き出す大鳥。（後書き）

今回から新章です。予定だと、十二章から原作開始で、十三章で本作完結の予定です。もうこれは多分変わらない。
ただなあ、神霊廟どうしようかなあ。口調とか今一掴めてないせいで、どうにも書く気になれない。

はい、というわけで次回というか今回またオリキャラ登場。多分、原作開始しても出てくる、レギュラーなオリキャラになる予定。
設定に関しては、どうにも情報が少ないので、独自解釈などを付け加えた妖怪になるかと。
多分だけど次回からしばらくはもっと早く更新できるかと。

七十八話　嵐の吹く日、朔夜。この度よりサブタイは私のものだってんです。

ちょっと文字数減った。これからは文字数減らしていくことにします。
どうも自分の小説は３０００前後がちょうどいいくらいで終るようですから。
その変わり、もう少し更新速度上がるかも。

この度より、サブタイがタマちゃんに乗っ取られました。梗くんいよいよ影も形もなくなって来たな。
因みに、朔夜の朔とは前日を示し、朔夜とは前日の夜を表す言葉。
十六夜咲夜とは、朔夜と掛けてあり、十六夜、つまり１６日の前日の夜、１５日の満月の夜を示すものなのではないか、とかニコニコ辞典に書いてあった気がする。

七十八話　嵐の吹く日、朔夜。この度よりサブタイは私のものだってんです。

ミシ、ミシ

軋み。

ミシ、ミシ

どこから？

ミシ、ミシ

幻想郷全域、つまり、結界から。

「また新しい妖怪がやってきたのね」

自身以外誰もいない部屋で呟く。そっと開いた隙間から見える、巨大な鳥の姿。

「……鵬（ほう）」

目を閉じ、逡巡思考する。まだ、動くべきではない。梗の任せたあの式の力を見るためにも、今代の博麗神社の巫女の力を見るためにも、今は静観を貫くべき。

「何と言うか……もどかしいわね」

自分で言うのもなんだが、梗のいない幻想郷において、自分に比肩しうる妖怪などほとんどいない。

「けれど、それでも出来ないことはある」
深く考えることも無く頼んでいたが、あの龍神にも出来ないことはあるのかもしれない。初対面で唯一飲まれてしまった相手。自身を遥かに凌ぐ力を持つ神。
だから気づかないうちに依存してしまっていたのかもしれない。今これほど気を揉んでいるのは、つまりそういうことなのだろう。
あの絶対的な抑止力がいなくなったことがこれほどまでに大きいとは自分でも予想外だった。

「本当、どこに行ったのかしらね、梗は」

どこかに消えた神を思い、そして一つ溜息を吐いた。

轟(ごう)と風が吹き荒れる。
夕方から急に曇り始め、夜となった今ではこの周辺一帯大嵐、そんな状況だった。
「おかしいってんです」
そんな空模様を見て、霊様が呟く。
「霊様……？」
「おかしいってんです」
何が？と聞こうとして、思い出す。そうだ、この神社は誰を祭っていた？ここの神の加護は何だった？
「龍神様の加護が消えた……？」
まさかの事態を予想し、けれど霊様が頭(こうべ)を振って否定する。
「それはねーですね。今もあの人の力を感じますし」
けれど、ならば、どうして？

「分かんねーですか？」
「……はい」
頷く私を見て、やれやれと肩を竦め。
「異変だってんですよ」
暗い暗い空を見て、そう呟いた。

「異変……うわあ、見るの初めてです」
その意味を反芻し、ようやく理解する。
異変はこの幻想郷で妖怪などが起した事件の総称。見るのはこれが初めてだったりする。
「葉乃」
呼ばれた声に振り向く。そして呆れたような顔で霊様が告げる。
「他人事みてーに言ってるけど、解決は巫女の役目だってんですよ？」
え……？
「前に言ったってんですよ。異変は最悪、幻想郷の人と妖の均衡を崩す可能性もあるんで、私たちが動かなきゃならねーです」
この大嵐、放っておけば、里の人たちの生活にすら関わる。だからこそ解決を急がなければならないの、だが。
「元凶がまるで分かんねーです」
空を睨みながら呟く霊様に、不安が拭えない。
「それに……この妖力……」
火行。その一音で周囲が燃え上がる。
「木生火」
風が火を煽り、火が徐々に大きくなっていく。
「さて……どうなりやがりますかね」

その声はどこか、弱々しかった。

どこかで嵐が喰われている。それを瞬時に感じ取り、鵬は目を開く。

空が狭い。この場所に来てから常々思っていることだ。翼を広げてもこの地から抜け出そうにも、何かに引き摺られるように、いつの間にかこの地へと戻ってきている。

だから、せめてこの地を自分に過ごしやすいように風を吹かせた。すると、山から翼の生えた人間のような形の妖怪がやって来たので、嵐を呼んで追い返した。今度は角の生えた人間のような形の妖怪が来たので、また嵐を呼んだ。けれど、そいつらはそれくらいではびくともせず、こちらへと進んできたので、自身が持てる最大の力を振り絞って嵐を起し、ようやくその妖怪たちも追い返した。

けれど、その嵐が喰われている。どうやってかは知らないが、このままでは猛威を振るっていた嵐が弱まることは確かだった。そうすればまたあの妖怪たちがやってくるかもしれない。

見たところ、翼の生えた妖怪ならばともかく、あの角の生えた妖怪に太刀打ちできるか怪しい。確かに自分も大妖怪と呼ばれる存在ではあるが、戦ったことなど少なく、何より人間に忘れ去られて久しく、昔と比べ格段に力が落ちている。

何とかしてこの嵐を維持していれば、まだ話は別なのだが。

意外なことにこの地の人間たちは嵐が吹けば、自然を畏れる遥か昔の人間の気質を未だ持っているらしい。僅かながらだが、自身の力が増している。

けれど未だ全盛期には、あの国一つを滅ぼすほどの猛威を振るっていた嵐を起せたあの頃にはまだ遠く及ばない。

生き残るための本能のようなものが理解する。何よりに窮屈な空のこの地だけが、自身が生きることを許された最後の地、なのだと。ここに来てから力が幾分か戻ったのはそのためなのだと。

「っ～～～～～～～～！！！！」

咆哮のようなものを上げる。あるいは悲鳴だったのかもしれない。もう自由に空を飛べないのだと、それを悟った瞬間、叫びが上がった。それが自身のものだと気づいたのはその直後。

けれど、それを受け入れることも出来ず、ただただ？(もが)いた。

とにかく、今は生き残らねばならない。何故かは知らないが、この地では自身の能力が使い辛い。何かに抑えられたようで、不便で仕方無い。それに自身の嵐を喰っている何か、そこに関係があるのかもしれない。

まずはそれを排除する、そう決めてまた一つ羽ばたいた。

「動きだしやがりましたね」

じっと目を閉じて、何かを探っていた霊様が唐突に目を見開く。燃え盛っていた炎が唐突に勢いを失くし始め、そして目の前で消えていく。

「葉乃、行くってんですよ」

「はい！」

縁側から立ち上がり、霊様について境内へとついて行く。

「葉乃、今大きな妖力が動いているの、分かんねーですか？」

そう言われ、集中する。けれど、周囲にそれらしき気配は無い。首を振る私に、霊様が空を指した。

「上だってんですよ」

瞬間、空から何かが落ちてくる。驚いて動けない私に代わり、霊様が一枚の符を投げる。

「火行符」

木生火。落ちてきたそれが符に触れた一瞬で燃え尽きる。
「な、何ですかあれ!?」
雲で月が覆われて、何が落ちてきたのかは分からなかったが、途轍もない大きさだったのは理解できた。
「羽だってんですよ」
至極あっさり、非常識なくらいなことを霊様が告げた。

「は、は、羽!?え、だって今この神社くらい大きかったですよ!?」
葉乃が焦ったように言うが、猫交じりのせいか夜目の効くこの目で見た限りは間違いなかった。
「少なくとも形は羽だったってんです」
そして、それはこの上空に鳥らしき存在がいるということを、そしてその大きさを示していた。
何と言う妖怪かは知らないけれど、この羽に見合うだけの大きさの翼を持つなら、この嵐の中を飛ぶことも出来るだろうし、わざわざこの神社にやって来て羽を落としたのはここで行っていることを止めたかったからということだろう、ならこの上空にいる妖怪はこの嵐の元凶と言えるだろう。
「厄介な」
心中で毒づいた言葉が漏れ出す。上空にいるということはこちらも飛ばなければ相手を見つけることすら出来ない、けれどこの嵐では強かろうと何だろうと基が人間である以上、葉乃や自分には飛ぶなどということは無理だ。
「落……せねーですね」
雷で撃ち落してやろうかとも思ったが、考えてみれば、アレは今の自分には使えないし、葉乃にもまだ教えていない。
「仕方ねーですね」

「どうするんですか？」
「今日は諦めるってんですよ」
え？と葉乃の目が点になった。

「発想と着眼点の良さはさすがと言うべきかしら？」
梗がよく使っているせいか、あの式は五行への理解がかなり深い。
五行とは即ち心理の層に直結した理の一つに他ならない。
妖怪の使う術は心理の層に属する故に、心理の層の理の五行の影響は計り知れないものがある。
風とは即ち木行。木生火。木は燃えて火を生む。風が吹けば火が燃え上がるのも同様、火が風を喰らう。自身の力が消されているのだから、妖怪も何らかの行動を起す。そこから相手の正体を探り当てる、言葉にして並べれば簡単なように見えて、名も姿も知らぬ妖怪相手に随分と先読みしたものである。
「先を取る程度の能力、ね。そこまで出来るとしたら、たいした能力だわ」
けれど、ここから先が本当の戦いだ。結界のせいで不自由であるとは言え、あれだけ上空にいる相手にどうやって戦うのか。
「見せてもらうわよ……龍神の後継」
すっと目を細め、そっと呟いた。

七十八話　嵐の吹く日、朔夜。この度よりサブタイは私のものだってんです。

世界の層の解釈はかなりオリジナル入ってます。多分そこまで間違ってもないとは思うのですけど。
世界の層について知らない人は、ｗｉｋｉの世界観見ると早いです。

一つ気づいた。自分が小説書くのに詰まるのは、大抵口調が思いつかない時だということに。つまり現在の作者の最大の敵はタマちゃんであるという事実に！！
けど、個人的には好きなキャラだから外す気にもなれず、また更新遅くなる……。

七十九話　嵐の夜に。山羊？狼？知らねーですが、何のことで？（前書き）

とりあえず、言いたいことは感想で。
徹夜して眠いので返信は遅くなるけど。

七十九話　嵐の夜に。山羊？狼？知らねーですが、何のことで？

次の日も嵐は続いていた。このまま長引けば、面倒なことになるのは自明の理。

「今日中にケリをつけてーところですね」

けれど、それには独力では難しと分かっている。あの人の後を託されたのは自分だ。けれど、独力の拘って結果を出せないのは最悪だ。それは、自身を信じた八雲様や梗様を裏切る行為であり、龍神白霊の名を貶める行為でしかない。

「葉乃と……もしもの時は、八雲様の力を借りねーといけないかもしれませんね」

葉乃の協力は必須だ。そもそもこの神社の巫女なのだから、異変の解決は義務ですらある。

「だから昨日から教えてんですけどねえ」

あれ、どこか今あの人っぽかった。語尾を延ばしたからだろうか。まあ、どうでもいいけれど。

「いけそーですか？葉乃」

本殿で祈る巫女に尋ねるけれど、返事は無い。

やることは分かりやすい。昨日と同じ自分の火行符で嵐を弱める。そこにさらに、現在の巫女である葉乃が祈祷することにより、梗様の加護を強くし、この嵐を鎮める。その後、妖怪を上空から引き摺り下ろして、倒すだけ。

「問題は、どうやって地上まで落とすか」

雲より下を飛んでいるのなら問題は無い。雷で撃ち落してそのまま弱った妖怪を倒せば良い。同じ木行同士だ、親和性もあるだろう。問題は雲より上にいる場合だ。

梗様から空の上がどうなっているのか教えられたからこそ分かる、雲より上にいられると、雷を落としても当たらない。そうなるとこちらからの攻撃方法が現状では無い、だが無いでは済ますことも出来ない。

何か考えねばなるまい。常に最悪を想定して動くべきだ。賭かっているのは幻想郷の人々の生活なのだから。

「そして相手がどれほどのものなのか」

独力で嵐を起すような妖怪だ、間違いなく大妖怪。そんな存在が弱いわけが無い。けれど大妖怪を相手にするにも、葉乃は力不足、自分も経験が圧倒的に足りない。いつかの鬼との戦闘は、真正面からだったからどうにかなっただけだ。何でもありなこの状況下でそんな博打のような真似は出来ない。

「問題多すぎだってんです。出来れば、夜になる前にはせめて地上に落とすまではやりてーですね」

夜は、妖怪の時間なのだから。

「どうする？母様」

さて、どうするべきか。わえは萃香の問いにただ黙した。

「あの嵐をどうにかしないと近づくことも出来ないよ」

勇儀が空を見てそう呟く。それは分かっちょる。

「けんど、どうにもできん。わえらにあれを止める方法もないけんの」

そもそも、昨日から妖怪の山の周辺からいなくなったんじゃけ、放っておけばええだけの話。

けんど……。

「うーん、この嵐の主なら楽しい喧嘩が出来そうなんだけどねえ」

全く持って萃香の言う通り、これほどの力を持つ妖怪との喧嘩は、梗や八雲の以来じゃけんの。萃香も勇儀も、そしてわえも滾っとる。全く、鬼とは厄介な妖怪じゃ。もっとも、鬼であることを後悔したことは無いけんどの。

「昨日一度嵐が弱まったよね。あれは何でだろうねえ？」

勇儀の問いに、ふと昨日のことを思い出す。たしかに夜に一度嵐が弱まったの、何でか？どこかで火気がしたけえ、それが原因じゃろ。ならどいつがそんなことしとんのか。

「神社かの……？」

「は？」

「え？」

わえの呟きに、萃香と勇儀が呆けたような顔をする。

「恐らく梗のとこの神社のもんじゃろうな」

梗はどこぞに行くと言っておったし、差し詰めあの式かの。

「ふむ、なら神社に行ってみるかのう」

後ろの二人は不思議そうな顔をしておったが、まあいずれ分かるじゃろうて。

一人得心し、それからわえらは神社に向かって飛んだ。

神社の南、鳥居の辺りに数枚、奇怪な紋様と火行という文字の書かれた符を貼っていく。

五方において、火行は南を象徴する。つまり、神社という一つの世界の南という位置に貼って、その意味合いを強くする。

「ふむ……準備完了……だってんですか」

葉乃の祈祷はすでに終っている。嵐はすでにその勢いを弱めてい

ることがそれを証明している。
「結局夜中になりましたが、まあいいです。思わぬ来客もありやがりましたし」
結果だけ見れば、上出来と言える。
「なら始めねーといけませんね……火行符」
昨日は一枚しか使わなかった符を今日は十枚設置した。そして名を呼ぶことで、溜まった霊力を呼び起こした。
轟(ごう)。
猛々しいほど燃え盛る炎。けれど、それは唐突に強まる嵐と拮抗する。
やっぱそう来ますか。
昨日と同じ光景。いや、一度覚えられたやりかただけに、対処が早くなっている……なら。
「離為火」
続けて呟く音(おん)、炎が風の流れに逆流するように遡っていく。
離為火、八卦が一つ離を上下に重ねた六十四卦が三十番目の卦。
五行的に見れば火行同士の比和により、より強大な炎を生み出す卦。
そして、徐々に弱まる炎が消え去った時には。
「さて、次にいかねーと」
嵐は完全に止んでいた。

八卦とは、天地事象を模った物。大げさに言ってしまえば、その形は世界を現す。
五行とは、五種類の元素が互いに影響を与え合い、その生滅盛衰によって天地万物が変化し、循環する、という思想。言ってしまえば、世界の法則。
結界とは区切り、つまり境界線。異なる二つのものの線引き。言ってしまえば、世界の中に別の世界を作る技術。

八卦だけではただの外観が似ているだけのがらんどう。五行だけなら法則を適用する言わば、本体が無い。結界だけなら領域だけがある、世界の外の法則の影響を強く受けた、ただの模造品。

では、これらを全て組み合わせてしまえばどうだろう？

結界で領域を作り、八卦が世界の形を整え、五行が世界に法則を与える。

もしそんなものがあるならば、それは……一つの世界と言えるのでは無いだろうか？

実際がどうという問題ではない。人々がそう解釈した、その意味合いこそが最も重要なのだから。

「乾為天」
乾は天を示し。
「坤為地」
坤は地を示し。
「震為雷」
震は雷を示し。
「巽為風」
巽は風を示し。
「坎為水」
坎は水を示し。
「離為火」
離は火を示し。
「艮為山」
艮は山を示し。
「兌為沢」
兌は沢を示す。

これを持って八卦と為し。

「木生火」
木は燃えて火を生み。
「火生土」
物が燃えればあとには灰が残り、灰は土に還る。
「土生金」
鉱物、金属の多くは土の中にあり、土を掘ることによってその金属を得ることができる。
「金生水」
金属の表面には凝結により水が生じる。
「水生木」
木は水によって養われ、水がなければ木は枯れてしまう。

これを持って五行と為す。

範囲は神社の下に眠る霊脈の伸びる範囲に設定。
必要な力はそこから引き出し。
維持には主から供給される神力で代用。
形象、法則は引継ぎ。
対象を設定、捕捉完了。

これを持って結界を為す。

「創世結界」

世界がカチリと、音を立てた。

「冗談でしょ！？」

スキマから見たそのあり得ない光景に、無意識的に叫んでいた。

「嘘よ……今の……そんなことって」

あり得ない、そんなはず無い、そんな風にいくら否定しても、けれど現実にそれは起こっている。

「梗……あなた一体、何を式にしたの……？」

あれは本当に人間なのか？そんなバカな。人間どころかまともな生物なのか？

自身の知る限り、あんなことの出来る妖怪も、神も知らない。

あの龍神ですら、さてこんなことが出来るだろうか。

あの式は一体自分が何をしたのか分かっているのか。

「私なら……いえ、私が全力を尽くしても出来ないでしょうね」

模るだけなら自分にも出来るだろう。結界を張るだけなら自分にも出来るだろう。

けれど、世界の中に作り上げた結界に世界を模らせ、さらに法則を作り出すなどということ、自分には出来ない。

なぜならそれは。

「世界の……創造……」

神にすら許されない所業なのだから。

七十九話　嵐の夜に。山羊？狼？知らねーですが、何のことで？（後書き）

寝る。

それから意識朦朧としながら書いてるので、起きて「なんじゃこりゃー！？」と言って内容修正するかも。

多分、次の話とあわせて一つの話になる予定。次の話全く考えてないけど。

八十話　空を飛ぶ程度の能力。原作じゃねーですよ？原作って何だってんですか

うーむ、正直、原作を汚すなと言われると、辛いものがあるかもしれん。
汚すというか、改変しまくってるからなあ。東方は設定が曖昧なところがあるけど、そこに独自解釈と思いつきをこれでもかと言わんばかりに詰め込みまくってるから、見る人によっては最悪かもしれん。

何度もいうようですが、オリ設定、原作崩壊激しいです、嫌だという人は見ないほうがいいです。

今回のオリキャラの元ネタ紹介、正直、見ておかないと今回の話は意味不明な可能性が高い。ｗｉｋｉｐｅｄｉａより抜粋。

鵬（鳳　ほう　おおとり）は、中国に伝わる伝説の鳥。その体の大きさから、大鵬（たいほう）、大鳳とも呼ばれる。
北の果てにある海に棲む「鯤（こん）」と呼ばれる体が数千里にも及ぶ巨大な魚が、これもまた背が数千里にも及ぶ巨大な鳥「鵬」と化す。鵬は天を覆う雲のような翼を広げ、荒れ狂う嵐に乗って、南の果ての海すなわち天の池へと向かう。そのときには、九万里（約３６万キロ）上空まで飛び上がって舞う。
鵬の羽根は１０戸以上の家の上を覆いつくすほどで、この巨大な羽や糞が家を壊し、人命を奪うことすらあるという。日食は鵬が上空を通過するために起こるという説もある。こうした鵬の姿は、熱帯のモンスーンを象徴化、神話化したものとも見られている。

以上を踏まえた上で、本編どうぞ。

八十話　空を飛ぶ程度の能力。原作じゃねーですよ？原作って何だってんですか

博麗霊は異端だった。
歴代の巫女の中でも、博麗霊という巫女は飛び抜けて異彩を放っていた。
これまでのほぼ全ての巫女は、龍神白霊の持つ強大な神力を直感的に感じ取り、平伏していた。畏れていたと言って良い。

けれども、博麗霊という巫女は、第一声で罵声を浴びせ、そして自身の心情を持って祭神に仕えていた。
彼女がその強大な力を感じ取れないほど愚鈍であったわけでもない。寧ろ、歴代の巫女の中でも鋭敏だった方である。
なら、どうして彼女は祭神を畏れなかったのだろう？

それは、博麗霊という人間が自分だけの理に従って生きていたから。自分以外のもの全てから浮いていた。自分以外の全てのものは全て同価値でしかなく、神だろうが妖怪だろうが、人間だろうが、初めて会った存在は道端の石くれ同然でしか無いから。

自分の目で見て、自分の心で感じ、そうして他人を記憶し、理解する。博麗霊とはそういう存在だから。
彼女に他人の感情などというものは差し挟む余地すらない。全てを自身の理に従って動いていた。
なぜなら、彼女の心象世界は彼女の生きる世界とは別だから。

簡単に言えば、心の中に実体を持たない別の世界を持つのだ。
そこでは自身だけの法則が働き、自身がその世界そのものであるが故に、自身の生きる世界とは別の理を持って生きることが出来る。文字通り、自身の存在する世界そのものから浮き上がってしまう能力。

そういう能力があるのだ。

空を飛ぶ程度の能力。
ふと脳裏に浮かんだその言葉に、はて、と疑問符を浮かべる。
「もしかってーと。新しい能力だってんですか？」
ふと今まで持っていた能力を思い浮かべるが、けれど今まで持っていた能力は全く頭に浮かばない。
先見と記憶を操る程度の能力。
「……はぁ？」
先を取る程度の能力はどこに……？もしや。
「変わったってんですか……？」
名称からして後者だろうけれど、どういう能力なのか今一分からない。
もう一つのほうの能力も分からない。空を飛ぶって、空を飛ぶだけなら普通に飛べばいい。わざわざ能力である意味が分からない。
「なんだってんですか……」
まあ、無くてもそこまで困るような能力じゃねーですし、行くっ

てんですよ。
ようやくあの大鳥（おおとり）を落としたのだから、この機会を逃すわけにはいかない。
余計な考えは捨てる。余計な考えは思考を鈍らせる。

「明鏡止水」

呟く言葉で意識を切り替える。集中していく。目の前に落ちた大鳥に。
「龍神白霊が式神、水無月霊。参るってんです」
なんてね、などとあの人なら言うのだろうけれど。
これは宣言。自身の心を澄ませ、曇らせず、ただ目の前の敵だけを倒すための。初めてなのだから、たった一人で大妖怪と殺し合うのは。

恐怖しているわけではない。昂ぶっているわけでもない。ただ目の前のソレを自身の中から有象無象から、敵へと昇華するための言葉。
そうして初めて目の前のソレに、敵意を覚える。普段よりもその切り替えが顕著になっている気がする。能力が変わった影響だろうか？
「さあ……殺しましょーか」

にぃ、と薄く笑い。

すっ、と手に針を取った。

広がる薄暗い世界。
周りには灯りなど何も無いはずなのに、世界は薄暗い。
振り替えってようやく気づく。あったのだ、この暗い世界にも、灯りは。
月は。

綺麗だと思った。
世界に自分だけが立っているような、孤独感。
これが、彼女の、彼女だけの世界。

「あ～あ、ボクがずっと探してたのに……そんな気はしてたけど、やっぱりキミが持ってたんだね」

けれど、これは自分にはどうしようも無いものだと思う。
「これがボクの理想なんだけどねえ」
どう足掻いても自分が世界からどころか、自分自身からすら浮き上がることなど出来ない。
自分など持ち合わせていないのに、鏡に何が映るというのだろう。

ボクは何も持っていない。ボクのものなど何もない。ボクの持っている物は全てボクのものではないのだから。

「空に舞うは桜花（おうか）、地に散るは叢雲（むらくも）、水に映すは朧月（おぼろづき）……結局さあ、鏡に映ったものは、偽者でしかないんだよねえ」

だからボクは。

「本当が欲しかった」

「いやあ、ええもん見せてもろうたわ」
「ここ、どこだい？」
「分からん。が、分かる」
「どっちだい？」
「とりあえず、分からんつうことは分かっちょる」
「結局分かんないのかい……」
「けどまあ、目の前で喧嘩しちょるのに、見とるだけっちゅうのは、辛いのう」
「でも、あの式に断られたんだから仕方無いじゃないか。力関係出されたら私ら引くしかないよ」
「『妖怪に異変解決されたんじゃ、人間に異変を解決する力がないみてーじゃねーですか』じゃったかの」
「まあ、たしかに、良く考えれば紫がダメって言うだろうね」
「はぁ……帰って喧嘩でもするかい？」
「帰るってどこからだい？」
「ここは結界の中……が、どういうわけか、隔世と化しておるの。あの式がこの結界を解かんと、わえらも出れんぞ」
「困ったね」
「困ったことだね」
「困ったのう」

蹴り上げる。
所詮ただの人間の力。
けれど、大鳥の巨体は空へと跳ね上がる。まるで山一つが浮き上がっているような光景。
「なんででしょーね？この結界の中に来てから」
無尽蔵かと思うほど体の奥底から霊力が沸いてくる。

「力が増えた気がしねーこともねーです」
使っても使っても沸き上がって来て、体中に霊力が充満している。
「まあ、いいってんです。所詮力……精々有効に使わせてもらいましょーか」
飛ぶ。これまでより遥かに速く、高く飛べることが出来ている。

「落ちやがれってんです」
すぐさま追いつき、そこから蹴落とす。轟音と土煙を上げ、大鳥が倒れ伏す。
「封魔陣」
地に巨大な陣が広がり、大鳥が叫びを上げる。地に落とされ、この結界に捕われていたその時点で勝敗は決した。このまま攻め続ければこの妖怪を殺すことが出来るが……。

殺すんじゃない、倒すんだ。ボクの式となった以上、キミにも調停の仕事をしてもらうよ？

「分かってるってんですよ」
梗様に任されているのだ。あの梗様に初めて頼られたのだ、どうしてそれを無碍に出来る。
「八方鬼縛陣」
鬼を縛りつける強力な捕縛陣。例え大妖怪と言えど、ここまで弱

らせたならばどうやっても逃れられない。
「調伏完了……なんて言わねーですが、まあこれで終わりだってんですよ」
降した鳥を抑えつけたまま、そしてくすりと笑った。

空が低い。
飛び立とうと浮き上がった、けれど、すぐさま何かにぶつかる。
体が大きすぎるのがこの場合仇になった。
檻の中に閉じ込められたと気づいたのは、すぐ。
けれど、もう遅かった。
普通の鳥とは違い、妖怪である自身は鳥目になどならない。夜目も効く、が明るいほうが視界が良いことには変わりない。
だから、堕ちた自身に近づいてくる影を見た時にはもうすでに敵の準備は終っていた。
「……」
何かを呟く。瞬間、空から雷を落ち、自身を撃つ。
「～～～～！！！！」
叫ぶ。全身余すところ無く包み込む巨大な雷の柱。
頭の先から羽の末端まで全身が痺れ、焼けていく感覚。その激痛に叫ぶ。
ぐらぐらとする視界。もう感覚など無いに等しい。けれど何か攻撃されていることだけは分かる。
まるで石ころを蹴ったように跳ねる自分の体。
鈍った思考で思う。
ああ、これは……自分以上の化け物だ、と。

「……」
「紫様？」
自身の式の呼びかける声すら無視して考え込む。
正直見誤っていた。致命的なまでに見誤っていた。
梗の式とは言え、所詮元人間、いざとなれば自分が助ければいい。
甘すぎる。元人間？これが？馬鹿な話だ。
「化け物ね、妖怪なんか目じゃないわ。神すらこれに比べればただの雑魚でしかない」
ここまで予見して彼女をここに残したのだろうか？
「異常ね……」
博麗神社の戦力が異常過ぎる。もし梗が帰ってきて、あの場所が均衡を守ることをやめたら、一瞬にして幻想郷最強の勢力が出来上がる。その力関係は最早絶対的にすらなりつつある。あの神社は人里からの信仰も厚い。人間がいる限り、あの祭神は際限なく強くなるだろうし、けれど人間を消せば妖怪が滅びるだけだ。
「だから最初にあの神社を取り込んだのに」
幻想郷に出来た病巣を取り除くための薬としてあの祭神が最適なのだと思っていた。
けれど、いくら梗たちが信頼できるからと言っても、ここまで膨れ上がれば劇薬過ぎて毒となりつつある。
「これは……なんとかしないと不味いわね」
「紫様……？」
「藍、しばらく私の変わりに、幻想郷を見ておきなさい」
「は？」
「私は梗を探してくるわ。今の状況は正直不味いわ」
「わ、分かりました」
状況は正直不味い。あの式の力は、毒にも薬にもなる力だ。しか

も毒になった場合、こちらに致命的過ぎる。
本人がそれに気づく前に、梗と連絡を取り、対処しなければならない。

最悪の場合、あの力は妖怪という存在を根こそぎ消してしまいかねないのだから。

八十話　空を飛ぶ程度の能力。原作じゃねーですよ？原作って何だってんですか

説明会

さてさて、今回ちょっと意味不明すぎるのではないかと、作者が心配しちゃってね。ボクのほうで今回の話を説明させてもらうこととするよ。

ふふ、ここは舞台裏だからね、メタなのも全然オッケーだとのことなので、遠慮なく言っちゃうよ？

・空を飛ぶ程度の能力。

前回「創・世・結・界！！」とかやっちゃって、なんだよそれ……？と作者が一番意味不明だった前話の続きとして思いついた設定だよ。

原作だと「空を飛ぶ程度の能力は、重力から浮いて無重力になって空を飛ぶほかに、精神的なものや物質的なもの等あらゆるものから浮くことができ、どんな攻撃もすり抜けてしまって当たらない無敵状態になるといった使い方もできる」とのことらしいけど。これに独自解釈とオリ設定で都合がいいように捻じ曲げたのが今回の能力だね。

自身の心の中に実体を持たない空（くう）の世界を持つ。空というのは、この能力の元ネタだろうと思われるものの一つ、仏教の概念で「実体が無いこと」。

実体は無いけれど、そこに確かに存在するが故に、その影響を最も

近い人物に及ぼす、そうすると、その人物は自身が生きている世界でなく、自身の心の中に佇む世界の理に従って生きることが出来るようになるが故に、その世界の全てのものから浮き上がってしまう能力。という風に決定付けたんだよね。
今まで表には出てこなかったこの能力が、なんでいきなり出てきたのかというと、タマちゃんのやった創世結界なんだよねえ。

・創世結界

正直思いついた時は、これだ！！と確信しちゃった作者の厨二病思考の結晶。タマちゃんに何かオリジナルな切り札的なの欲しいと思ってたところにチート技思いついた、で即座に採用。その際、考えた設定がこれだよ。「八卦とは、天地事象を模った物。大げさに言ってしまえば、その形は世界を現す。五行とは、五種類の元素が互いに影響を与え合い、その生滅盛衰によって天地万物が変化し、循環する、という思想。言ってしまえば、世界の法則。結界とは区切り、つまり境界線。異なる二つのものの線引き。言ってしまえば、世界の中に別の世界を作る技術。
八卦だけではただの外観が似ているだけのがらんどう。五行だけなら法則を適用する言わば、本体が無い。結界だけなら領域だけがある、世界の外の法則の影響を強く受けた、ただの模造品。では、これらを全て組み合わせてしまえばどうだろう？結界で領域を作り、八卦が世界の形を整え、五行が世界に法則を与える。もしそんなものがあるならば、それは一つの世界と言えるのでは無いだろうか？実際がどうという問題ではない。人々がそう解釈した、その意味合いこそが最も重要なのだから」
だって。正直無理矢理感は拭えないよねえ。だから最後に「実際がどうという問題ではない。人々がそう解釈した、その意味合いこそが最も重要なのだから」って足したんだよねえ。

・今回出てきた世界

今回のは「空を飛ぶ程度の能力」と「創世結界」がいい具合に混ざって出来た、タマちゃんの心象風景みたいに思えばいいよ。例えるなら、弓兵さんの「無〇の剣製」みたいな感じだね。厳密には全然違うけど、作者が頑張って考えた一番近い例えがそれ。端的に言うなら、平坦な大地がずっと続く世界。基本的に薄暗くて、空から射す月だけが唯一の灯り。心象風景って言ったけどこれらが何を顕しているか分かるなら、作者と同じような思考してるかもねえ。タマちゃんの能力がいきなり増えたのは、今まで無意識的にしか感じていなかった自分の世界を、結界という形を通して顕現することにより、認識しちゃったから、って言って意味分かる？

・先見と記憶を操る程度の能力

いつか本編で解説すると思うから、今は秘密ね。先を取る程度の能力の進化系みたいな感じだと思っておけばいいと思うよ？一つだけ言うと「先見」とは未来を見通す目、記憶とは過去を見通す目を示します。半分くらいは答えかな？まあいっか。

・今回の話のタマちゃんの性格

気づいたかどうかは知らないけど、今回ちょっとタマちゃん狂暴だったね。ちゃんと理由があります。後付だけど（！？）。テンションだけで書いてたらあなったとかそういうことじゃないからね、断じて違うからね。きっと……。タマちゃんのいる場所はタマちゃん自身の心理を顕した世界、というか、タマちゃんの世界。現実よりもタマちゃんの心理が強く動く、つまり、あの鵬を敵と断言し、敵意を抱いた瞬間から普通よりも簡単にタマちゃんの敵意が振り切れた感じだね。敵なら殺す、味方なら生かすってくらいに極端にな

っちゃうわけだねえ。ま、それでも殺さなかったのにも、ちゃんと意味があるんだけどね。

・途中で出てきた人たち

鬼の人たち出てきた……人？鬼の妖怪たち出てきた……うーん、鬼が出てきたね。これでいいね、うん、これでよしとしよう。本編に描写無かったけど、前話で「結局夜中になりましたが、まあいいです。思わぬ来客もありやがりましたし」て言ってたよね、気づいた人もいるかもしれないけど、ちゃんと伏線だったわけだ。伏線にもなってないけどね。ちゃんと前日に鬼の方々は来ました。あの妖怪と喧嘩させろ、と言ってね。でも今回言ったように、幻想郷で妖怪が起した異変を妖怪が解決するというのは、人間の力が下がっているという暗喩にもなりかねない、いや、人里の人がそう思って恐怖すると、本当に妖怪は強くなるんだよね。設定的に。本当、祭神っていうのも疲れるんだよね、みんなデリケートだし。だからタマちゃんは自分と巫女さんの二人で解決しようと思ってたみたいだね。もしもの時に備えて近くにいさせたみたいだけど。そこに拘って負けても馬鹿みたいだしね。それと、途中で出てきた一人称「ボク」のあの人は誰なんだろうね？まさか、あの人じゃないだろうし。

・時系列

ゴメン、作者も把握してない。正直、今タマちゃんとか何歳なのか、まるで考えてなかった。一応２０代くらいということにはなってるけどね。で、あの巫女さんが１５，６。話を作ることを考えてたら年代完璧に忘れてた。ごめんごめん。

・空が低い

……は？何これ？え、なんのこと……あぁ。把握。鵬ってのは、簡単に言うと非常に大きい鳥。そしてタマちゃんの世界は世界と銘打っているものの、所詮結界によって構築された擬似的な世界。要するにサイズが合わなかっただけなんだよね。タマちゃんからすれば標高１０００メートルくらいでも滅茶苦茶高いけど、あの鳥雲の上を飛んでるからね。まあ、単純に感覚の違いだよ。

・最悪の場合、あの力は妖怪という存在を根こそぎ消してしまいかねないのだから。

これかあ。まあ現状でも考えてみれば分かることだよ。妖怪と存在それそのもの根本を覆しかねないからね。妖怪どころか、神も結構致命的だね。まあ、詳しく言うのもあれだよ。そのうちボクと紫の会話が本編中にあって、その時に出てくるような気がするから、それまでは内緒ってことにしておこうか。

八十一話　後日談的な話だってんですよ。（前書き）

ちょっと短い上に、時代考証が滅茶苦茶かもしれませんが、その場合、感想とかで教えていただけるとありがたいです。

八十一話　後日談的な話だってんですよ。

一月一日。元日、元旦。正月一日目。

呼び方は様々だが、結局のところ、一年の初まりの一日の呼び方。

外の世界の神社では、大晦日の夜、除夜を神社で年越しする人が多く、神社は賑わうが、ここ博麗神社ではそんなものは無い。なぜなら翌日の一月一日、初詣の準備で多忙となるから。

実を言うと、この博麗神社という場所、立地の問題もあってかあまり参拝者が来ない。道中に妖怪の現れる道だけに、軽々しく来れないし、火急の用がある場合でもなければ、人里に設置された分社へのお参りで済むこともある。

けれど、一年の初めのこの日だけは、この神社も参拝客で溢れかえる。

「何だかんだで信心深い人多いんだよね、あの里って」

とは、祭神様の弁である。

博麗神社は神主、祭主など神職がいない。理由は知らないが、昔から博麗神社には巫女しかいなかったらしい。

そのことに意見があるわけでも無く、それで今までどうにかなっていたのだから、それはそれでいいのだろう。

だが、この時期だけは困る。何せ祭神様に手伝ってもらうわけにもいかず、となると一人で準備をしなければいけないのだから。

会場の設置などは人里からの協力もあるのでまだいいのだが、さすがにお札や御守り、破魔矢などをはじめとした縁起物や、絵馬の

製作まで人里からの協力を求めることは出来ない。
さらに年末の神社の掃除に、お節料理、倉庫の整理とやることは山のようにある。
師走とは言ったものの、博麗神社で走り回っているのはどこかに消えた祭神様で無く、何やら傷心の先代の巫女様でも無く、現在の巫女、つまり私、博麗葉乃だった。

どうにも霊様の様子がおかしい。何と言うか、愕然としているというか、落ち込んでいるというか。
どうにか力になれないかと気を窺っているのだが、忙しすぎてそのような暇も無い。
別にこれが初めての初詣というわけでも無く、すでに幾度と無く経験しており、大分手際も良くなってきている、のだが。今年は霊様が放心した様子で全く手伝ってもらえなかったので、例年の倍は忙しかった。
特に人外魔境のごとき理解の範疇を超えた品の数々の納められた倉庫整理は、想像以上に疲れた。
「……！！！？！？」
思い出すだけで震えてくるその光景を頭を振ってかき消し、一つ溜息をつく。
「ようやく終りましたあぁ～」
そう、ようやく初詣も終わり、明日来る参拝客も今日よりずっと少ないだろうから、実質的に山場は乗り切ったと言っていい。
「それにしても、霊様大丈夫でしょうか？」
前（さき）の妖怪、鵬が起した異変、人里では騒嵐異変と呼ばれたあの異変から一ヶ月近く経つが、どうにもあの異変の直後から様子がおかしいのだ。
「どうなさったんでしょうか？」
正直、原因がさっぱり分からない。だからとにかく聞くしかない。

「教えてもらえるでしょうか……？」
少し鬱な気分になりながら、神社の中へと入っていった。

切れた。
今の自分の心境を一言で表せばまさにそれだった。
何がどうしてかは知らないが、あの異変を解決した後ふと気づくと、梗様との繋がりが切れている、つまり、式が剥がれていることに気づいた。
大問題だった。
非常に簡単な話、以前は鎖に繋がれていたはずの狼が、いきなり開放されていた、そんな風な話だ。
鎖に？がれていた時からずっと大人しく、近づいても吼えもしないし、触れても咬みはしないとする、けれど、鎖に？がれていない、自由な状態では同じ狼だと分かっていても恐怖が先行する。
つまりはそういう話なのだと、自分で分かっていた。
何より、あの人との大きな？がりが一つ失くしたという事実に、心が沈んだ。
「まるで犬みてーですね」
自嘲気味に呟く。憑かれたのは猫なのに、自身を客観的に見ると、飼い犬のようだ。
そして、もう一つ問題がある。
「あの結界、もう張れませんね」
そう、そういう問題もあった。あれは梗様の能力を使って構成した結界だ。
結界を作るには、あの人の八卦を司る程度の能力が必要となる。
まあ、それも事前の準備次第で出来なくも無いのだが、実戦では必要とされるものが多すぎて使えないだろう。

「けど……何より」
式の剥がれ、あの人からの力の供給の絶たれた今の自分は、大妖怪相手にはもう戦えない、それが一番の問題だった。
元々大妖怪相手に打ち勝てる人間がいる時点でおかしいのだが、そんなこと今言っても仕方無いし、意味も無いので省く。
けれど、戦えないと言ったところで、梗様に頼まれている以上、戦わないといけない。勝てないなら今度こそ、あの鬼たちや八雲様の力も必要となる。
「困りやがりましたね」
と呟いたその時。

「そんなところでどうかしたのかしら？」

神社の縁側で一人佇んでいた自分のところに、妙な女性がやって来る。
誰だってんですか、変な服着てやがりますね。
真っ黒な、ふわふわとした不思議な衣装。強いて言うなら、あの伊吹鬼の服に近い感じか。
「誰だってんですか……？」
普通に返したが、よく見ればその体から多大な妖気が感じられる。つまり、妖怪だ。
ゆっくりと自身の中で霊力を高めると、妖怪がふふ、と笑う。
「お待ちなさいな。別に争いに来たわけではないわ」
全く敵意を示さない妖怪に顔を顰める。その時、ふと感じた覚えのある妖気だと気づく。
「お前……あの鵬とか言う鳥じゃねーですか」
言うと、目を丸くし、すぐに笑って手を叩く。
「あら、気づいたのね。今日はお礼を言いに来たの」
「……礼？」
妖怪が？自分に？

「そうよ、私を止めてくれて感謝するわ」
「妖怪退治をして妖怪に感謝されたのは初めてな気がするってんですよ」

つまり、要約すると、自分という妖怪の存在が忘れ去られていた影響で、呆然自失な状態だったらしい。
それをここに来て、自分に倒されて、無理矢理叩き起こされたような状態になり、最近になってようやく覚醒して、自我がはっきりしたからお礼に来た、ということらしい。

「幻想郷の外だと、そんな影響まで出るってんですか？」
「みたいね、私もいつからこうなのか覚えていないけれど、いつの間にかずっと一つのことだけを思っていたのは覚えているわ……私はまだこれだけのことができる、なのにどうして人間（あなたたち）は私を忘れたの？ってね」
まあ、何と言うか、妖怪の意外な事実を知った。
「改めまして、初めまして？凰月鵬（おうづきおおとり）よ」

――――――以後、よろしく。

まあ、とりあえず。

私に喧嘩売ってるとしか思えない、その胸の膨らみのがある時点で、私の敵は決定だってんです。くく。

八十一話　後日談的な話だってんですよ。（後書き）

本当は、鵬はタマちゃんにトラウマを持つ、というのも考えたんですが、鵬の口調と性格を考慮するに、こっちのほうがいいかな?と。

そして、タマちゃん……最後が…。
もう成長しない体に意外とコンプレックス感じてるタマちゃんw

そして弱体化したように思えるタマちゃんですが、自分の能力を自覚すれば前より強かったりするから無問題だったりする。

八十二話　妖怪退治の方法？ひたすら殴ってればいーってんですよ。（前書き）

少々巻き気味というか、急ぎ足でお送りします。
年内にこの小説終らせたいからねえ。原作までの話は、今回の鬼の話と、後はオリジナル二本、それで博麗大結界の話で終わりだから、急げば十月中に原作までいける気がする。なんとなく。

八十二話　妖怪退治の方法？ひたすら殴ってればいーってんですよ。

「……はぁ」

溜息を吐く。その回数は最近特に多くなっている。

理由は分かりきっている。

「どこにいるのよ……梗」

現状の危険性に気づいているのかどうか知らないが、一向に帰って来ない龍神を探して世界のあちこちを回っては、こうして現状を知りに幻想郷へと帰ってくる、そんな日々がもう十年以上続いている。

未だあの式は自身の能力の危険性について自覚していない。だからこそ悩むのだが。

教えて自戒させるか、それともこのまま教えず分からないままでにしておくか。

どちらも問題はあるのだが、危険性は後者のほうがやや高い。

けれど、それでも前者を選べないのは、結局のところ、あの式を梗ほどには信用していないからに過ぎない。

「別に梗のことも無条件に信じているわけでもないのよね」

結局のところ、梗は互いの利が分かっているからこそ、信用できる。敵対すれば、互いに害しか生まないことが分かっているからこそ、自身を裏切ることが無いと思える。

だがあの式が今、梗の代わりをしているのは、梗に頼まれたというその一つに尽きてしまう。

正直、あの式の能力を使えば幻想郷が崩壊する可能性すらある。

しかも本人は無自覚だから、こちらとしては始終冷や冷やしている

のだが、かと言って、それを自覚させてしまえば、あの式はこちらにとって絶対的に切り札を与えてしまうことになる。それもまた一つ間違えば、均衡が崩れてしまうから問題だ。ではあの式を殺すか？これもまた駄目だ。正直、あの龍神の式でなければ絶対に殺している。けれど、あの龍神の式である限り、絶対に殺せない。何より、梗が自身の家族としてしまっている以上、それを殺すことは明確な裏切り行為になる。

「ままならないわね、本当に」

「紫様」

と、その時、襖の向こう側から自身の式の声がした。

「入りなさい」

その言葉と共に、襖を開け、自身の式、八雲藍が部屋へと入ってくる。

「お耳に入れておきたいことが」

表情を見るに、どうにもいい話ではなさそうだった。

「何かしら？」

「実は……」

どうにも頭が痛くなってきた。

「……」

「どうしたんだい？そんな死んだような目をして」

朝起きるとなぜか鬼の屋敷にいて、目の前には伊吹鬼。
「理解できねーんですが、なんで神社で寝たはずの私がここにいるってんですか……？」
「朝の内に私が布団ごと運んだからさ」
「……何故？」
「喧嘩しようや」
朝っぱらから何を言っているのだろう、この酔いどれは。
「顔を洗って出直しやがれってんですよ、この酔っ払い」
「酔ってないって、今朝はまだ四升ほどしか飲んでないよ」

蛇足：一升＝1．8？ちょっと

「普通に呑みすぎじゃねーですか」
「人間と一緒にしないでくれよ。鬼にとって四升なんてほんの一口さ」
「酒くせーんですが」
「酔ってないって」
誰もそんなこときーてねーんですが。やっぱ酔ってんじゃねーですか。
「それで、何でいきなり喧嘩しねーといけねーですか？」
「それがさあ、聞いてよ」
聞いても無いのに愚痴り出す伊吹鬼。

とっても簡単に話しを纏めたところ。
最近の幻想郷での鬼退治の方法に、鬼側は非常に不満を持っているらしい。
鬼は良く言って誠実、悪く言えば愚直だ。だから、罠に嵌めて集団で退治するような最近に人間のやり方に憤るよりむしろ失望して

いるらしい。
　こんな状況では、この地にはもういられない。けれど、ここ以外に行くあても無い。そこで、八雲様に相談したところ、地底（そんなものがあることを初めて知った）にあった地獄がつい最近、場所を移し、旧都が空いているので、そこに移ってはどうか、という話になり、鬼総出で旧都へと引越しを始めたらしい。
　だから、この場所にはもうほとんど鬼は残っておらず。
　だから私をここに連れてきたらしい。

「一番最後だけ意味が分からねーですが……」
「だからさあ、もう地上に上がってくることも無いかもしれないさ、最後に人間とまともな喧嘩がしたいと思ってたら、あんたがいたんだよ」
「私ももう人間じゃねーですが……」
「私からすれば、あんたもまだ人間だよ。多少混ざりものがあるけど、鬼と真正面から喧嘩してくれるのなら、それくらい関係ないさ」
　正直言って、帰りたい。
　けれど。
「……悪くねーですね」
　この鬼は間違いなく幻想郷においての強者で。
　未だ式が剥がれた今の自身がどれだけやれるのか、それを知るいい機会でもある。
「分かったんってんですよ」
「そうこなくっちゃね。ならすぐにでも」
「まだやんねーです」
　機嫌を良くした伊吹鬼が急かそうとするのを押し止める。
「何でさ？」
「……はぁ、お腹減ったってんですよ」

起きたばかり、当然何も食べていなかったお腹が空腹を訴えていた。

鬼の朝食は、意外と普通だった。というか、寧ろ美味しかった。ただ、板の間に直接座ったので、少し足が痛かった。座布団くらい出して欲しい。

「ふぅー。ご馳走様ってんです……ｚｚｚ」

一息吐くと、全身がいい感じに眠気を襲う。

「って、寝るんじゃないよ！！朝飯も食べたし、私と喧嘩しな！！」

「分かってるってんですよ」

仕様がないので、立ち上がる。

「でも今はまだ無理だってんですよ」

「何でだい！？」

「お札とか術符とか何もねーですし」

いきなり連れて来られたのだから、そんなもの持っているわけも無く。

「取りに戻っていいんで？」

一応聞くと、がくりと項垂れたまま、首を縦に振った。

「すぐ戻ってくるから、そんな急かなくてもいーでしょーに」

半分呆れながら、鬼の屋敷を出た。

妖怪の山から博麗神社まで、歩けばけっこうな距離だが、飛べばそれほど長いわけでもなく、準備する時間も含めて、半刻もしないうちに戻ってくることが出来た。

「さあ、早くやるよ！」

帰ってきた途端に元気になった現金な鬼に半目で尋ねる。

「で？どこでやるってんですか？」

まさかこの狭い空間でやるわけでもないだろう。まあ、鬼が本気出せば、この屋敷のどこにいても同じな気がするが。

「外でやろうじゃないか。前とは違う、今度は……本気でいく

よ？」
　馬鹿みたいな量の妖気を体中に漲らせ、伊吹鬼はそう言って拳を握りこんだ。
　最初の一撃で体が消し飛んだかと思った。
　轟音。ただの一撃、握りこんだ拳を突き出しただけ。それだけで、巨大な岩でも掠めて行くような感覚に捉われた。
「それが本気ってやつですか……」
「そうさ……これが最後かもしれない。そして相手は不老不死。なら遠慮する必要も無い。勿論、あんたも遠慮する必要はないよ。天狗には話しをつけてある。山が半壊するくらいなら問題ないさ」
　それは寧ろ、こちらに問題があるのだが、まあどうにでもなるだろう。いざとなれば、八雲様がなんとかしてくれる。
　十年だ。梗様の打った式が剥がれてからそれだけの時間が経った。
「私を人間だって言いやがりましたね」
「そうさ……人間と妖怪の明確な差を教えてやろうか。変化だよ……妖怪は不変、故に進まないし、戻らない。妖怪は不老なんじゃない、時間が進まないだけだ。けれど、人間は進む。どんどんと駆け足で進んでいく。だから生は短い。けれど、短い生の中で外見も、心も、その魂さえ変えてしまう。確かにあんたは外見は変わらない、だが常に前へと進んでいる。その場で足踏みしている私らとは違ってね。だからあんたは人間なのさ。少なくとも、私から見ればね」
　ああ、たしかにそう考えてみれば自分は人間なのかもしれない。
「そーですね。確かに、その場で足踏みなんてしてられねーです」
　今の自分は、足りないものばかりなのだから。
　目を閉じ思い描く、自身の心の中にある泉を。沸いても沸いても

尽きることの無い、泉。
その水は心臓から溢れて全身を駆け巡る。
目を開けば、全身から霊力が溢れた。十年前のあの結界内でのあの感覚。尽きることの無い霊力の源泉。
理屈は知らない。ただ、この十年、同じところにいたわけではないという証明。
この鬼を倒せば、それは確かとなる。

「人間は人間として、人間らしく、鬼退治と行きましょーか」

自分の言葉に、伊吹鬼が嗤う。

「そうさ、それが聞きたかった。やっぱりあんたはいいよ。最高だ」

そして相手もさらに妖気を高め。

同時に地を蹴った。

八十二話　妖怪退治の方法？ひたすら殴ってればいーってんですよ。（後書き）

今回は鬼が幻想郷から去る話です。
実は前回、タマちゃんに負けてちょっと悔しかった萃香。
今回はリベンジとなっております。急かしすぎて、思い落としも多いけどｗｗ

基本的に萃香はタマちゃんのことを認めています。鬼だから、数少ない鬼退治が為せる人間であるタマちゃんのことは割りと好意的。
実力も近しいこともあって、一種、好敵手みたいに思ってたり。

今度は互いに全力。しかも、タマちゃんは力試しみたいな意味もあるので、真正面からのぶつかり合い。さあ、どっちが勝つ？というのが次回です。

八十三話　鬼の居ぬ間になんとやら。（前書き）

まだ微妙にオリ設定が増え続けている……。
なんかそろそろ矛盾が現れそうで怖いな。

八十三話　鬼の居ぬ間になんとやら。

楽しかった。全力でやれる喧嘩が。
嬉しかった。その相手が人間であるということが。
勝手な自論だが、妖怪というのは、須らく心の底では人間を好いているのではないだろうか。
ただ肉を喰らうだけの妖怪もいる、けれどそんな妖怪も必ず人間を狙う。
好いた種族に対する好意の裏返しか、はたまた親愛の表現が違うだけなのか。
少なくとも、鬼という種族は人間を嫌ってはいない。鬼が人間を攫い、人間は鬼退治をする。そんな関係が永遠に続くのだと思っていた。
だから、こんなことになって、鬼はみんな人間に失望した。過去には確かに見事鬼退治を成し遂げる猛者が人間にもいた。だがそんな人間もいつの頃からかいなくなっていた。
そしてこのまま鬼が地上から去れば、鬼退治の法も失われるだろう。
「もうこの先にそんな人間が現れるとも思えないし、あんたが最後なのさ！！」
真っ直ぐ振りぬいた拳が梗の式へと迫る。けれど、慌てることも無く一枚の符を取り出し、呟く。
「木剋土」
その符一枚で、自身の腕から力が抜けていく。威力の半減した拳を打ち払い、逆に空いた腹部に相手の拳がめり込む。

「くぅ！！」
歯を食いしばってその一撃に耐える。同時に腹部に突き刺さったその拳を握り、引き寄せる。
「なっ！？」
ゴチン、という音を立て、互いに額がぶつかる。
弾かれるように互いに仰け反ったが、肉体的には鬼である自身のほうが強い。すぐに持ち直し、未だ仰け反った相手のさらに絶対的な死角の下から突き上げるように掌底を打つ。
「ぐぁ！！！」
持ち直し、戻ってきた顔へ直撃し、体ごと吹き飛んだ。

視界が揺れる。不老不死だからと言って、脳震盪を起されればそんなもの関係無く、動けなくなる。
だがそんなことも言っていられない。あまり攻撃を喰らっていては、後で動けなくなる。
「水侮土」
呟き符を投げる。水行符、通常ならば土克水の理に従い逆にその威力を弱めるだけだが、万物には裏の顔があるものだ、一方通行なものなどどこにも無い。五行とはその最たる例だということ。
水が強すぎると、土の克制を受け付けず、逆に水が土を侮る、相侮の理に従って、符は水気を帯び、鬼を吹き飛ばす。
「……つう、その符厄介だね。鬼とはちょっとばかり相性が悪い」
まともに格闘しても鬼相手では馬鹿を見るだけ、なら相手の本領をわざわざ発揮させてやる必要も無く。
「戦術って言ってもらいてーですね。わざわざ鬼相手に力比べして勝てるわけもねーですし」
「そりゃそうだ。蛮勇と勇気は違う、鬼だってそのくらい知ってるさ」

鬼は別段格闘以外できないわけではない。ただその特性上、格闘が最も強いだけの話だ。鬼に金棒などという言葉もあるが、そうやって武器を持った鬼もいることもまた事実。

寧ろそっちのほうがやり易いんですがね。

武器を持てば、どうしても型が存在する。だが、素手ならば千変万化、幾手にも手筋が生まれる。どうしても予測し辛いものがあるのだ。射程という問題を廃せるのなら、素手というのは非常に凶悪だ。

だがこちらが離れてしまえば、素手というのはひどく脆い。まあ、距離を保てればの話だが。

「こっちもそろそろ行かせてもらいましょーか」

相手を見据え、そして神社が持ってきたソレを取り出す。

「艮為山」

瞬間、突如として地面から草木が生えだし、鬼を絡め取る。

「な、なんだい！！？」

八卦が一つ、艮（ごん）、象徴するのは山。山の中であるこの場所では、力が高まり、自然の一部を急速に成長させ、意のままに操ることも出来る。

そう、八卦だった。

言っておくが、未だ式は剥がれたままだし、突如自分が八卦を使える能力に目覚めたわけでもない。

では、なぜ使えるのか、その答えが以前梗様にもらったこの珠。紋様が陰陽太極図のようだったので、陰陽玉と呼んでいるそれが答えだった。

陰陽玉は何故かは知らないが、梗様の力が篭っている。その力を引き出すことにより、その能力も使えることが出来ることにこの十年で気づいた。

「火行符！！」

火行の意を込めた符を十数枚投げる。それが鬼とそれに絡みついた草木に触れると、激しく燃え上がる。

けれど、一瞬早く、伊吹鬼が霧になって拘束から抜け出す。
「なんだい今のは、中々焦ったよ」
とは言っているが、あのまま燃えても何事も無く来た気がするのだが。
「厄介な能力持ってやがりますね……」
「それはお互い様だろ？」
そう言ってまた体を霧散させた。

とは言ったものの、本当に厄介だ。
さきほどからこちらの行動がどうにも読まれている。
たかだか二十年程度しか生きてない人間なのだから、経験則というのはあり得ないだろう。
ならば恐らくは能力で間違いないだろう。先読みというものがどう言ったものなのかは良く分かっていないが、だがせいぜい読めて数秒先までだろう。もしかすればもっと短い、次の瞬間だけかもしれない。
それだけなら苦も無いのだが、そんなに甘くは無いだろう。
この式は、恐ろしく自身を客観的に評価する。まさか自分のことを他人事のように思っているのではないかと思うほど。
過大には評価しないし、過小にも評価しない。
自身の力量を見極めるのが恐ろしく上手く、同時に他者の力量を見極めるのも上手い。
だからこそ、強い。
つい先ほどまで猛攻をかけて、完全に優勢な状態だったのに、自身が反撃を狙って力をためた瞬間、いともあっさり下がった。
恐らく、苦し紛れに拳を握った程度ならそのまま追撃してきていただろう。その程度ならあの式でも対処出来る。
反撃の意思を固め、窺っていた攻撃の機会がやってきた、と思っ

た途端に引いた。
その場に留まれば対処出来無い一撃が来ることが分かっていたから。そこにそれまでの優勢を引き摺るような隙は一切無い。自身と相手の残りの力を計って、確実にこちらを倒せる時を待っているのだ。
嫌な相手だね、本当に。相性が悪い。
鬼は小手先の技をあまり好まない。がつんと互いに殴り合うようなやり方を好む傾向にある。
だがそれは、鬼の強靭な肉体があって初めて成り立つやり方。
相手は真逆だ。人間の脆い肉体、けれどその差を技術によって乗り越えてくる。
一か八かの大きな攻撃はいらない、しっかりと確実にじわじわとこちらを削ってくる。

ならば!!!!!

「これが私の本気だよ、精々死ぬんじゃないよ?不老不死」

あの式は言った!!!

人間は人間として、人間らしく、鬼退治と行きましょーか。

だから!!!!!

「鬼は鬼として、鬼らしく、それを真っ向から力ずくで捻じ伏せさてもらうよ!!……百万鬼夜行!!!」

密と疎を操る程度の能力。それがあの鬼の能力らしい。
つまるところ、物の密度を操る能力だよ、とは梗様の弁。
密度というものが良く分からないが、要するに形の定まったものから不定形なものまで様々な者や物を萃める能力らしい。
なるほど、と理解する。今目の前のこれがその真骨頂ということか。
轟音を立て、風が吹く。いつぞやの妖怪鳥と違うのは、それが一点に向かって全方向から吹いてくること。
あの周囲の黒い穴に吸い込まれたらどうなるかは知らないが、碌なことにはならないことは確実。
「最悪だってんですよ」
最悪なのは、こちらも這い蹲らないといけないほどのあの吸引力、そして向こうは何の影響も無くこちらに攻撃できること。
たしかにあの場から動かないようだが、それが動けないのか、動かないのか。
恐らくは後者、けれど動けなくとも、さっきから飛んでくる妖力弾。今は結界でなんとか防いでいるが、いつまでも防げるとも思えない。
鬼と人間では地力が違い過ぎる。肉体的なことだけではなく、自身の霊力と相手の妖力の総量が違い過ぎている。
霊力も妖力も神力も区分されてはいるものの、実質的にはどれも等しく魔力だ。密度の違いこそあれ、実質的に差など無い。
実際、神力以外はどれも五十歩百歩でしか無い以上、その総量の違いはかなり大きい。
あの霊力を沸かせる術は集中が必要になる。こんな状態で出来るはずも無い。
「っ！？」
などと考えごとをしていたら、目の前に妖力弾で迫ってきていた。

「くっ……しまっ」
咄嗟に地を蹴って失敗に気づく。宙に投げた体が勢い良くあの鬼とそこに空く真っ黒な穴へと向かった。
不味いってんです！！！
このままではあの穴に引きずり込まれる。けれど相手の萃める力が強すぎて、抗うことも出来無い。
出来ればやりたくなかったんですが、仕方ねーです！！！
「創世……結界！！」

こちらに吸い込まれながら膨れ上がる霊力に、ついに来たと思った。そして、変わりゆく周囲の風景にそれを確信する。
前回の異変の時に見た、世界一つを作り上げるあの結界だ。
「そうさ、これだ。あの時見たこれこそがあんたの本気だ。この状態のあんたと私はやりたかったんだ」
大妖怪に匹敵する鵬を軽々しく打ち倒していたあの妖怪以上の怪物のような姿をずっと覚えていた。
あれと闘えればどれほど楽しい喧嘩になるか、まるで恋でもしたように胸が高鳴っていた。
まさしく一目惚れだ。人間の言う性的な意味とは違う、鬼独特の強者への憧れ。
何よりも、妖怪から見れば、刹那にも等しい時間しか生きていないはずの人間がその境地に辿り着いたということが素晴らしい。
結界が出来上がった瞬間から、自身の技は止められている。だったらもうこんな意味の無い攻撃は止めにしよう。
そして。
「さあ、こっからが本当の喧嘩さ」

心底楽しそうに、哂った。

八十三話　鬼の居ぬ間になんとやら。（後書き）

霊力、妖力、神力の三つは実は二次設定。自分も最近まで知らなかった。

まあ、霊夢の公式の能力に、霊気を操る程度の能力があるので、霊気とか妖気、神気とか言うのはあるのかもしれない。

なので、その三つは単純な密度と僅かな性質の差異があるだけで、本質的には全部魔力ということにしておきました。

というか、もう二話なのにまだ終らないよ、萃香との勝負……。

なんか最近意欲沸いているので、まだ更新速度を維持できそうな気がする。どうなるかは知らないけどｗｗ

そしてこんなところで出てきた伏線、陰陽玉。

陰陽玉がある時とあといくつかの条件が揃うと、今回のように再び、創世結界が使えます。この創世結界は、もうちょい色々設定があるので、次あたりでちゃんと説明したいですね。まだはっきりと文章にしてはいないので、微妙ですがｗ

八十四話　決着。サブタイが短いのは決してネタ切れとかそんなことじゃねーぞ

昔言われたことがある、シリアスとほのぼののバランスがいいと。
どうやって切り替えているか、その日の気分だ！！

本日の一言「主人公がいつも勝つと思うな」

八十四話　決着。サブタイが短いのは決してネタ切れとかそんなことじゃねーぞ

創世結界には、自身以外に必ず必要なものが二つある。
一つは世界を模る八卦を操る能力。
そしてもう一つが、結界の起点、霊脈だ。
極小規模とは言え世界一つを構成するのだ、それこそこの世界自体が持つ力を使わなければ軽々しく個人で出来るようなものではない、それはあの八雲様でも例外ではないだろう。案外梗様辺りなら軽々しく作り出すのかもしれないが。
あの人は人の努力を嘲笑うかのように多彩に物事をこなすが、それは自身の想像することも出来無いほど太古の昔からの積み重ねであって、それを卑怯などと論ずるつもりは全く無い。
さて、話が反れたが、つまるところ創世結界は霊脈の性質の影響を多大に受ける。
霊脈の性質とはそれ即ち、そこに生きるものたちの思いそのものであり、その地に近しいものほど、この結界の法則の影響を受けやすい。
前回は神社で使った故に神社の「神聖」が結界内に満ちていた。だから神の式というその地の神に通じた自分は飛躍的に力が上がり、逆に神と相反する妖怪はその力を封じられていた。
だがここは妖怪の山だ。この地の霊脈で結界を張れば「妖気」が満ち溢れることは分かっていた。
だから、逆の発想だ。「結界内にいる限り妖力はこの結界の維持のために奪われる」それがこの世界の法則。そしてもう一つの法則、

それが「能力はこの世界では使えない」というもの。
能力が使えないということは、相手は霧散して攻撃を避けれないということ、だが同時にずっと使っていた「先読み」の能力はもう使えないということでもある。
先見と記憶を操る程度の能力。それは先を取る程度の能力が変わったものだ。
先見とは、文字通り「先々まで見通す」こと。相手の次の手を読んでいたのはこの能力。
だからこれは。
「賭けだってんですよ」
相手は常に妖力を減らし続けている。霊力と妖力の差異など本当に些細なものでしかないが、それでも差異があるからこそこの結界は霊力には干渉しない。だから、自分は妖力のほうは使えないが、霊力のほうは十全に使える。
弱体化し、能力まで封じてこれでもまだ勝算など三割程度。自身を客観的に見ねば……一つ判断を間違えればそこで負けなのだから。
だから少しずつ勝率を上げていく。絶対に勝つ、あの人の家族として相応しい自分である、そう決めたのだから。

どうやら能力が封じられているらしい。
それに気づいたのはすぐだった。あの技が止まったことに違和感を覚えた、そして能力が使えないことに気づき、その結論に辿り着く。
さらに、さきほど体から僅かながら力が抜けていっている気がしている。
「さて、少し困ったね」
どうやら妖力が少しずつ抜かれているようだ。だが相手の霊力が抜けている様子は無く、それはつまり、時間が経つほどに自身が不

利ということ。
決めるなら短期決戦だが、能力が封じられているのは地味に痛い。
相手はじっとこちらを見つめている。あれは観察だ、今こちらの余力がどれほどか、じっくりと見据えている。
瞬時に足元の小石を蹴り上げ、相手に向かって飛ばす。
一瞬驚きながらも、あっさりと避ける。だが今ので分かった、どうやらあの先読みはもう使えないらしいと。
避けたことよりも寧ろあの表情、来ることが分かっているなら驚きはしない。
ぐっと拳に力を込める。あの予知のような能力が使えないのなら、そこから先は技術と経験と駆け引きが物を言う。
だが、こちらは千年を越える時を生きた大妖怪だ、その全てにおいて負ける気はしなかった。

とでも考えているのだろう。実際その通りである、本当に能力が使えないのなら。
自身はもう一つ、不思議な能力を持っている。空を飛ぶ程度の能力というそれは、ありとあらゆる束縛から抜け出すことが出来る。勿論、この結界の法則からも。
別に騙したわけでも、欺いたわけでもない。自身は一言だって能力が使えないなどと言わなかった。こちらの挙動から相手が誤信しただけだ。
これで勝率がまた僅かに上がる。けれどまだその差を覆すまでには至らない。
だからまだ慎重に行く。けれど、正直間合いを取って相手をじりじりと消耗させていくような戦い方は好むところでは無い。
「はっ、やっぱりあんたならそう来ると思ったよ」

目を閉じ霊力を引き出し、そして全身に漲った霊力をそのままに飛び出せば、相手も分かっていたと飛び出してくる。
「ゆっくりじっくり？めんどーじゃねーですか。そんなことしなくても」
待ちに一手などあの人に教えてもらうことは無かった。あの人に教えてもらったのは。
「攻め落とすことだけだってんです！！！」
「もうこちらの手は読めないってのに、あんたは強気だね！！」
互いに哂う。こうして全力をぶつけ合うことを意外にも楽しいと感じているらしい。
ドスン、とぶつけ合った拳から鈍い音が響く。相手の拳が弾かれ、こちらの拳は潰された。
けれど、蓬莱人の性質により、すぐさま手、骨が皮膚が再生する。
「震為雷！！！」
呟く言葉と共に、目の前の鬼に、雷が飛ぶ。
「ぐぅぅあぁぁぁぁ！！！！！」
至近距離から全身を雷に焼かれ、鬼が叫びを上げる。
「舐めるなぁぁぁぁぁ！！！」
けれど、全身を雷に焼かれながらもこちらに拳を振りぬく。
「木剋土」
だが、能力で分かっていた自分は、それを木行符を持った手で受け止める。
「……ぁ……に！？」
読まれるとは思っていなかった鬼が驚愕するが、すぐに態勢を立て直した。

何故！？おかしい、今のはおかしい。注意していたとしてもおかしい。

得てして攻撃中というものは必ず隙が出来るものだ、なのに今のに反応できたのはおかしい、目と速度に定評のある天狗ならまだしもと言ったところだ、それを人間が？

それはおかしい、いくらなんでも。体が追いつかないはず。

そもそもあの符がおかしい、偶然？そんなわけは無い、あの目は確信を持って出していた。最初から準備していたように、まるで自分の一撃が分かっていたかのように……。

「そういう……ことかい。能力が使えないんじゃない……使えない振りか！！」

「もう気づきやがりましたか……」

騙された、いや最初から聞いても無いし、認めても無い。なら騙したという表現はおかしい、私が勝手に判断を誤っただけ。

「やってくれたね……今のはかなり効いたよ」

木剋土……鬼は分類するなら土行に生きる存在。雷とは即ち木行、見事に狙われた。

しかも今の一発は神力による攻撃だった。つまり、梗の力、最悪だ。

たった一撃で妖力の半分以上が削られた……。

結界を張られる前に大技も出した、残りの妖力は三割と言ったところか。

「不味いね……けど」

ああ、この感じだ。人間相手に追い詰められている、人間が鬼を追い詰めている。楽しくて、嬉しくて、狂喜しそうだ。

ますますこの人間に勝ちたくなる。この人間を前にした時、勝つことへの渇望が一段強くなる。それが何故なのかは分からないが、けれど、言葉の上ではともかく、喧嘩を楽しむでもなく、相手に勝ちたい、と心の底からそう思える相手はこの人間が初めてだった。

振り上げた足が両手で止められる。次の瞬間来る下からの拳を避けるために、すぐさま跳ね除け、相手が振り切った拳を戻すのとあわせて飛び込み足を突き出す。

「ぐっ」

鬼の腹部に当たった蹴りに、鬼が後退する。

妖力が目に見えて減っているのが分かる、後二割と言ったところか。このままやれば、勝てる。

鬼神「狂鬼乱舞」

僅かな慢心、その隙をついて妖力が一瞬高まる。

「ぁっ！」

言葉を口にする暇も無く、鬼の拳が体を打つ。防ぐことも儘ならず、吹き飛ばされる。

「っ……」

無音のまま鬼が追いすがり、腹を打つ。

「ぐぁ！！！」

口から全ての息を漏れ出し、呼吸が苦しい。

ドス、ドス、ドス

拳の三連。体が地に沈む。

油断した、ほんの一瞬だったが、この鬼は見逃さなかった。先を見ることをしなかったたった一回の機会を狙われた。

ドスドス、ドン

後悔してももう遅い、それよりもこの状況は不味い。再生が追いつかない、霊力がどんどん失われていく。

このままでは負ける、けれど倒れた体に圧し掛かられたこの状況では引き剥がすことも出来無い。

仕方ねーです。

自虐っぽいのは嫌いなのだが。

鬼の拳を捌きながら、陰陽玉を握りこみ。
「紅雷！！！」
瞬間、自分と鬼を赤い雷が包み込む。
「あああああぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」
「があぁぁぁぁぁぁ！！！」
さすがの鬼もこれにはたまらず転がり落ちる。
「う……ぁ……」
今のでさらに妖力は減っただろうが、こちらもかなり削られた…
…限界にほど近い。
体が重い……実際には蓬莱人である自分の体がそうなっている
わけではない。単に自分の気力が無いだけの話なのだろうが。
「勝つ……」
想いを言葉にし、気力を振り絞る。
鬼のほうを見ると、さすがに限界なのか、動かない。
今しか無い、さすがにこれ以上長引かせれば、地力の差で負ける。

若い。そう思った。勝負を急いでいる。まあ、自分も似たようなものだが。
さすがに効いた、今のは梗の力、かなりきつかった。
だが、まだ僅かながら余力はある。向こうは不死と言え、人間。その精神的疲労がすでに限界を迎えていることは明らかに重い動作からも見て取れる。
勝負を焦った向こうはこちらの余力が見えていない、そこを気にするほどの余裕ももう無いということか。
霊力はまだ多少あるようだが、それを扱いきれていない、余裕の無さからか、動きが精彩を欠いている。
この分では能力はもう使えていないだろう、永劫にも思えたこの戦いもこれで決着だ。

残り少ない妖力を全て拳に溜める。
そして、向かってきた相手の拳を避け、自分の拳を、振り抜いた。
ドサリ、と目の前に倒れる人間、拳に残る感触。
「私の……勝ちさ……」
そして全身を襲う疲労感、同時に心に宿る充足感を感じながら、
そして意識は途絶えていった。

八十四話　決着。サブタイが短いのは決してネタ切れとかそんなことじゃねーぞ

勝敗、引き分け気味だが、萃香の勝ち。

まあ普通に考えて。
人間が大妖怪、しかも鬼に勝てるわけ無い。
現実は非情なのです。

まあ、まだ原作まで数百年あるし、タマちゃんはまだ２０代くらいですかね、今後に期待ということで。

ところで一つ聞きたいのですが、このまま後６話くらいタマちゃんだけでやってくか、次辺りから梗くんは帰ってきたほうがいいのか、どっちがいいと思います？
帰ってくると、鬼神と梗くんの会話シーンが出ます、帰らないと、梗くんと紫の会話シーンが出ます。どっちでも最終的には問題ないのですが、最近やや書きづらいものがあるので、聞いてみました。
出来れば感想ください。

特話　誕生日って本来、親のほうを労う日らしいねぇ。（前書き）

久々に梗くん書いた気がする。
やっぱ書きやすいなあ。
そして前回のアンケ誰も答えてくれなかったことにちょっと涙目。

特話　誕生日って本来、親のほうを労う日らしいねえ。

「そう言えば今日って、ボクの誕生日だ」
ふとそんなことを言ってみる。
「誕生日ってなんです？」
タマちゃんが不思議そうに聞いてきて、そう言えばこの時代には誕生日って無いんだよねえ、と再認識。
「要するにさ、自分を生まれた日を祝うんだよ」
正直、軽く一億年ちょっと忘れていた自分の言うことではないが。それに正確には生まれた日でなく、創られた日だし。まあ、同じようなものだけど。
「そう言えば、タマちゃんっていつ生まれたの？」
「知らねーです。捨てられてたのを拾われたもんで」
そう言えばそんなこと言っていたな、と思い出す。
「ふーん。じゃあ、タマちゃんも今日を誕生日にしよっか」
「そんな適当にいーんですか？」
「良いんじゃないかな？多分」
どうせ誰にも確認できないだろうしね。
「ふふじゃあ、タマちゃん」
「はい？」
「誕生日おめでとう」
「ぇ……ぁ……はい」
頬が赤らんでる、相変わらずこういう直球な感情表現に弱い子だねえ。だから可愛いんだけど。
「と言っても、何か特別なことするわけでもないけどねえ。後、本

来は毎年祝うのは、そこまで育ててくれた親に感謝する日だからだとか、そういう話もあるみたいだよ」

まあ、所詮縁の知識に過ぎないけれど。

「はあ……そうですか……」

「ボクの場合、親って言えばやっぱり縁になるんだろうねえ」

自称姉らしいけど……寧ろ母親っぽかったよねえ。

もう気が遠くなるほど昔の話なのに、たった十日だけのその日々が。

今でも鮮明に記憶に残る。

「こんにちわ。いや、もうこんばんわかな？」

「……」

「聞こえてる？ボクは雪代縁。キミの名前は、水無月梗だよ」

「……きょう？」

「そう、梗。キミはボクの家族ってことにしておこう。そっくりだしね。まあ、背の低いところまで似ちゃったらご愛嬌ってことにしておいてね？」

「えにし？」

「そうだよ。キミのお姉ちゃん、雪代縁だよ？」

それが彼女、雪代縁との始まりだった。

「ここが今日からキミが住む家だよ」
「……はいおく？」
目の前に佇む古びた建物に、そんな言葉が出た。
「違うよ、廃屋じゃないよ。ボクの育った孤児院。もう……誰もいないけどね」
さて、ボクは見ていなかったけど、その時彼女は寂しそうな顔をしてたんだろうと思う。
外見とは裏腹に、中は意外と片付いていて綺麗だった。
椅子に座って待っているように言われたので、じっと座っているとやがて夕飯を載せたお盆を持って彼女がやってくる。
「色々話したいこともあるけど、その前にご飯でも食べようか」
楽しそうに笑う彼女に、初めての感情が浮かび、自然と微笑んだ。
「……ようやく笑ってくれた」
そんなボクを見て、彼女がまた笑い。
それを見てボクは、楽しいという感情を学んだ。

それから一週間かけて色々なことをした、家の近所を散歩したり、一緒に料理を作ったり、お茶を飲みながらゆっくりとしたり、どれもこれも他の人間からしたら些細なことで……けれど、縁にとってはどれもこれもかけがえない体験だった……らしい。
ホント……終った後に全部気づくなんて……遅すぎる。

九日目の朝。
「ほら、起きなよ、梗」
肩を揺られ、目が覚める。
「……えにし……」
「ふふ……」
柔らかく笑んで、縁がボクの髪を手で梳く。
「おはよう、梗」
「……おはよ……えにし」
朝、そう挨拶するだけのその時間が、とても幸せで。
「ご飯できてるよ」
そう言って縁が笑ってくれることが、とても嬉しくて。

だから、失くしてしまった日々が……今は悲しい。

「ああ……そう言えば、縁の誕生日って一週間前だったね」
縁の記憶によればそうらしい。
十五の誕生日の一週間後、ボクが作られたらしいからねえ。
「ちょっと遅くなったけど……ハッピーバースデイ、縁」

そして、今日のボクの誕生日、キミに最上の感謝を。

おまけ小話

「あの……梗様」
「どうかした？」
「誕生日ってのは、親に感謝する日、でしたよね」
「まあ……そう言われることもあるね」
「あ……あの……」
「？」
「……いえ……何でもねーです」
「ふふ……言ってごらん」
「……産んだ親も知らねーですし……育ててくれた親っていうのなら……巫女様と……その……梗様にも……感謝したほうがいいのかと……」
「そう……ふふ……いいんじゃいかな……だって……水無月の性をあげた時から、キミは家族なんだから」
「……はい……ありがとうございます……梗様」
「照れない照れない……素直に感謝できるって、大切だと思うよ？」
「……そーですね……今度、巫女様のところにも行って来るってんですよ」
「そう……行ってらっしゃい」
「はい」

特話　誕生日って本来、親のほうを労う日らしいねえ。（後書き）

というわけで、作者の誕生日の記念にちょっと書いてみました。
よく言われるけど「誕生日は親に感謝する日」ってどこから来てるんでしょうね？
ウィキで見たけどどこにも書いてないし。

久々に照れたタマちゃん書いた。
／／／とか（照）とかそういうスラングっぽいの使わないから、会話のみだと表現難しいなあ。

八十五話　足りなかった一歩。（前書き）

色々と短い……勘弁。

八十五話　足りなかった一歩。

八十五話　足りなかった一歩。

真っ暗な世界にいた。
と言うとあれだが、単に目を閉じているだけだ。
意識が飛んでいたようだ。直前までの記憶は残っている。忘れたほうが楽だったかもしれないが。
負けた……ってんですね。
絶対に勝つと、そう意気込んだのに……全く持って情けない話だった。
ギリ、と歯を食いしばる、出ないと見っとも無いことになってしまいそうで。
ジャリ、という音に目を開くと、伊吹鬼が立ち上がろうとしていた。
「気がついたのかい？」
「……まあ」
複雑な内心を押し殺すと思わずぶっきらぼうな声が出てしまう。
「私はもう行くよ……もう思い残すこともないしね」
そう言って、立ち去ろうとする鬼に、思わず叫ぶ。
「次は！！」
「うん？」
「次は……負けねーです」
次などあるはずも無いのに、これで最後かもしれないと、この鬼が言ったのに、けれど……。

「勝ち逃げなんて許さねーです、次は絶対、勝たせてもらうってんですよ」

こんなボロボロで言っても説得力も無かったが、けれど鬼はこっちを見てたしかに笑った。

「萃香だよ……伊吹萃香。それが私の名前さ」

唐突な物言い、けれどその意味を汲み取った瞬間、自身も苦笑した。

「……水無月霊だってんです、それが私の名前です」

結局のところ、あの鬼、萃香も。

「「こんな引き分けみたいな（みてーな）終り方は認めない、次ははっきりと決着をつけさせてもらうよ（もらうってんですよ）」」

同じような心境なのだと、そう気づいてしまったから。

悔しさよりも、次は勝つという思いが強くなった。

「もうええのか、萃香？」

妖怪の山頂上付近にある鬼の屋敷、そこに戻ると鬼神がいた。

「うん、いいよ。ありがと、母様。私の我侭聞いてくれて」

そう言うと、鬼神は笑う。

「なあに、良い。わえもあの式に用があったしの」

「そうなのかい？」

「ああ、後で行って来るわ……それより萃香」

「なんだい？」

「どうじゃった？梗の式は」

尋ねられ、萃香は少し考え込む。答えを探してみたが、最初から一つしかなかったことに気づき、苦笑する。

「強かったよ。うん、とんでもなく強かった」
最後の瞬間、もう少し冷静でいられたら、負けていたかもしれない。
「強いて言うなら、若かった、かな？時間、それが足りなかった一歩だね」
あれはもっと強くなる、今よりもさらに……だから。
「私ももっと強くならなきゃね……次こそは、白黒はっきりつけたいから」
笑い……握った拳に力を入れた。

ようやく動くようになってきた体を起し、また霊力を湧き上がらせる。
「とりあえず、これで帰るくらいはできるってんです」
溜息を吐く。とりあえず、自分の今の力は確認できた、それは収穫と言える。
と、その時背後から強大な妖力が近づいてくる。一瞬敵かと思ったが、いつか感じたことのある妖力に、敵意を収める。
「あんただってんですか、鬼神」
「すまんのう、萃香が無茶言いおって。だがまあ、鬼の性じゃろうて、許せ」
「んなことはどうでもいーんですが、そっちは何か用だってんですか？」
鬼たちが地底に移ったのに、その頭の鬼神が残っているなど、何か事情があったとしか思えない。
そしてこの状況で出て来るということは、自分に何か用があるということ。
「ああ、お前さん、梗の式じゃったな？」

「そーですが？」
まあ、元、という言葉がつきますけどね、と心の中で呟く。
「梗の居場所、知らぬか？」
その言葉に無意識に息が詰まった。
「……こっちが聞きてーくらいです」
少し音調の下がった声音で返すと、その機微を察した鬼神が頷く。
「そうか……なら梗に会ったら伝えてくれ。すまん、と」
「……よく分かんねーですけど、了承したってんです」
そう返すと、微笑して鬼神は去っていった。後に残されたのは自分一人。
「何だってんですか？」
良く分からないが、とりあえず。
「帰って寝るってんですよ」
それが最優先だった。

「いっそこのまま、気づかないままなら全部解決するのに」
愚痴ってみたところで、放置できる問題でもない。
「萃香と互角と言ったところかしら、けれどまだ強くなる……ホント、信じられないわね」
あれが本当に人間なのか疑わしくもある。
「当面は気づくことはなさそうね」
けれど……。
「藍」
「……はい」
呼びかけから数秒で、式がやってくる。
「もし兆候が見えたなら……梗の式だろうと関係ないわ、迷わ

ず封印しなさい」
「……分かりました……紫様」
願わくば、彼女が気づく前に梗が帰ってくるように。
そう思わずにはいられなかった。

「というわけで、疲れたってんです」
へとへとになって帰ると、葉乃が慌てていた。どうにも服が血だらけだったらしい。
「だだだ、大丈夫なんですかそれ!?」
「だから私は死なねーんです。というか、死ねないってんです」
もうそれは覚悟したこと。目の前のこの少女ともいつか死に別れる。
だから、今を大切にしないといけない。巫女様の時のように……別れなど、一瞬なのだから。
「とりあえず、霊様は今すぐ湯浴みしてください。染み抜きもしないと、お召し物が着れなくなります」
「それもそーですね」
巫女服だっていくつも予備があるわけでも無いのだから、それも困る。
とりあえず、この後輩との生活をしばらくは楽しもう。どうせそのうちあの人もふらりと帰って来るだろう。
そう考えて……その日々を思い、苦笑した。

八十五話　足りなかった一歩。（後書き）

今のうちに書いておくネタばらし能力設定

先見と記憶を操る程度の能力

Ｈｅｌｌｏ　ｇｏｏｄ，ｂｙｅというゲームの「未来予測演算」というやつが元ネタ。まあ別に参考にした程度で同じものでもないけど。

先見とはつまり未来予測。予知じゃないのがポイント。記憶というのは、過去の事象を指し、記憶の層にまで干渉し、過去の記憶から未来を『予測』する能力。ポイントなのは『予見』でも『予知』でも無く『予測』という点。確定しない未来だからこそ記憶の層に引っかかることも無く、限りなく高確率の予測が可能となる。という設定。

ただし、見通せるのは精々二、三秒。それ以上は情報が足りない。戦闘中で無く、集中できるのなら一週間くらいまでなら見通せる。普通に分からないと思うけど、ラプラスの悪魔という概念が入っている。さらに、あくまで『予測』なので、条件を付け加えた、シュミレートみたいなことも出来る。ついでに言うと、記憶の層を識ることが出来るので、過去のあらゆる『事実』を知ることが出来る。けっこうとんでもない能力。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2707s/

東方鏡蛟紀

2011年10月28日02時29分発行